

ラブライブ!サンシャイン!!アンソロジー『夏
——ついに来た』

鍵のすけ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品はハメで活動されているラ！二次作家さん達が『ラブライブ！サンシャイン!!』のキャラを使って『友情努力勝利』をテーマに書いてもらった一話完結の話を一日一話ペースで投稿していく合同二次創作企画『第二弾』となっております。

様々なサンシャイン!!の世界、ぜひご覧ください！

目次

負けるなヨシコちゃん！ヨハネVS〇	〇〇〇	2
千歌ちゃんの日記帳	—————	49
勝利のみかんをこの手に！友情オレン	—————	57
ジ	—————	77
テストという名の戦い	—————	116
ユビキリ	—————	135
羽根と翼―黒き羽は誰が為に舞う―	190	—————
それは少女の魔法	—————	209
Lets Try!	—————	258
輝きに溶かされて	—————	284
俺と津島の跳躍世界物語	—————	326
折れないハート	—————	338
『俺』と『彼女』の九つのひと時	—————	378
真夏と墮天使	—————	450
ちっぽけな努力の結晶は、おつきなル	—————	477
パイとなつて	—————	513
パンツを手に入れる為に梨子と花丸がテ	—————	513
ニスのお姫様になってしまひ多大な被害	—————	513
をもたらすお話	—————	513

負けるなヨシコちゃん!～ヨハネVS○○○～

蛍光灯が仕事をしていない教室。窓から差し込む柔らかな夕日だけが私たちを照らしていた。

ふふっ、二人だけの世界ね、なんて少しおどけてみたけれど、私の目の前にあるのはピクリとも反応してくれない。しょうがない事だけれど、まるで私が痛い子みたいな気がして納得いかないわね。

「その、ちよつと……いいかしら?」

こんな石のようなのには伝える事を伝えた方が手っ取り早いでしょ。早く本題に入りましょ。

二回程深呼吸をして、視線をまっすぐ相手に向ける。私たちが何も言わないからあたりの音だけがこの教室に響いている。

部活動で頑張ってる人の声、風の唄、悪魔のささやき……までは残念ながら聞こえないけれど、少し緊張している私からすれば、どれも心を落ち着かせる自然音だった。

……よし、今なら言える気がする。

「あなた、よかったらヨハネの……。いえ、私の——っ!?!」

不意に誰かがこの教室に近づいてくるような足音が聞こえて、言いたかった言葉を止めてしまう。ふ、ふふふ……。この墮天使の私がつたそれくらいのも事で動揺してしまふなんてね……。それに隣の教室の扉が開く音がしたからここには来ないじゃない!! はあと肩を落としてため息を吐く。……まあでも、さっきので余計な緊張もどこかへ行つてしまつたわ。今ならきつと言え……つ。

すつと手を伸ばして滑らかな、けれど微かに凹凸を感じるその表面に指を這わせる。そして、ある一点で指を止めて、耳元で囁くように私は告げた。

「……………好きよ、あなたの事。ふふつ」

瞬間、バンツととても大きな音を立てて私の向かいの窓が開く。びっくりして思わず「ひやつ?!」つて変な声が出てしまつたわ……。

誰がやったのかも、開かれた窓の向こうに誰がいるのかも大体予想できるけれど、私は頬が引き攣るのを感じながらそこへ顔を向けた。

「愛がつ、足りないよつつ!!」

窓の向こうには予想通りというか何というか……。険しい表情をした千歌の首から上があった。正確には鎖骨辺りから上なんだけど、そこはどうでもいいわね。

「ミカンへの愛が足りないよ、善子ちゃん!!」

「ええー……」

そう言われても……。というより、たとえどんなにミカンが好きでも、ミカンに告白なんてしないでしょ、普通……。

私は掌の上にある少し小さめのミカンを横目に、こうなった経緯を思い返した。

秋もすっかり深まって少しだけ肌寒くなり始めたこの頃。私は夏の時のように夏風邪をひかないかが少しだけ気になっていた。墮天使でも運が悪ければ風邪をひく。それはこのヨハネが身を持って証明したわ。

とは言っても、風だけはひきたくないわね。私は他の人より少しだけ運が悪いから、風から何かが併発するかもしれないし……。中学生の頃、夏風邪からのインフルエンザと肺炎を併発した時は、流石のヨハネも死ぬかと思ったわ。

落ち葉を吹き上げる風がちよつと古い校舎の窓をカタカタと揺らした。

「寒いわ……」

自分の身体を抱きかかえるようにして、中間服の袖の上から腕をさする。そういえば肌寒いと特に暖かくなるわけでもないのにこうするのは何でなのかしら? ヨハネの生命創造の書(せいぶつのきょうかしよ)には載ってなかったわ。……まあ、どうでも

いいけど。

「それにしても皆遅いじゃない。今日の練習どうするつもり？」

部室の中にはヨハネ一人。話し相手になっしてくれるリトルデーモンもいなくて、正直暇ね。というか同じクラスのはずの花丸とルビイはどこ行ったのよ。

殺風景な部室じゃ、この墮天使である私の暇は中々潰すことはできないわ、まったく……。

腕を伸ばして机に突っ伏してみる。……………机に触れてる頬が冷たいわ。

暫くこんな感じでうだうだと過ごしてみる。こんなだらしない姿、ヨハネのリトルデーモンたちには見せられないわね。

うだうだごろごろ。墮天使の息吹、なんて必殺技っぽい名前のため息。

「……………寂しい」

「ミカンだよツ!!!」

「ひゃえ!!?!」

バンツと勢いよく開けられるドア。ただ、あまりにも勢いが付きすぎてドアが二回程開閉してるのだけど……。

そして三回目となると、必然的に勢いは衰え動きを止める。そしてその向こうからミカンの使者が部室に入ってきた。

「やつほー、善子ちゃん」

「千歌……」

人懐っこい笑みを浮かべて千歌が片手を上げる。

何で何事もなかったかのように入ってくるのよ、とツツコみを入れようとしたけれど、ガサツとビニール袋がこすれる音が聞こえて私は黙った。視線を少し下にずらすと、千歌の左手にはパンパンに膨らんだビニール袋が下がっていた。

勿論それをスルーするような墮天使ではないわ。だから私は、それは何なのか千歌に聞いてみる事にした。

「千歌、その袋はいつたい何なの？」

「あ、これ？ ふふーん、これはとってもいいものだよっ！」

「いいもの?」

そう言われるとなんか期待してしまうわね。さっきまで暇してたわけだからなおさら。

千歌もいつもより笑顔が輝いてるし、心なしかアホ毛も動いてない? これはかなり期待してもいいかもしれないわ!!

「そ、それで、中身は何なのっ?」

「ふっふっふ……。それはねえ——」

催促するように聞くと、そんな反応を待っていたと言わんばかりに笑う。

何か掌の上でワルツを踊らされているような感じはするけれど、ヨハネは心が広いから何も言わないでおくわ。それより早く早く!!

千歌はもつたいぶる様にゆっくりとした動作で袋を漁り、「じゃーん!!」というセルフ効果音と共にそれを掲げた。

掲げられたそれは蛍光灯の光を浴びて淡く光を反射する球体。橙色のボディはわずかな凹凸があつて、頂点にはもぎたてなのか、まだ緑色のへたがあつた。

……………これって、あれよね。

「千歌、それって…………」

頬が引き攣るのが自分でもわかる。それでも私は確認せざるを得ないわけで、墮天使ボイスを震わせながら私は千歌に聞いた。

「ミカン、だよー!」

……………ああ、やっぱり私は運が悪いわ。暇で退屈だった所にいいものつて言われたから期待していたのに、よりもよってミカンだなんて…………。

そんなヨハネの気持ちに気にする気配もない千歌は、嬉々としてビニールから取り出したミカンをテーブルに置いて山を築いている。

「ミカンはねえ、風邪の予防になるんだよ。だから皆で食べて風邪ひかないようにしよ

うと思って持って来たんだ〜」

そう言っている間にもミカンの山は一つ二つと増えていく。というかどれだけ持って来てるのよ。貴女の腕力どうなってるの!?

そして九つの山を完成し終わると、千歌はふうとようやく少し疲れたような表情を浮かべて「さあ!」と私の前に積んだ山を手で示した。

「善子ちゃんも風邪予防に食べよう!」

「ええー……」

そんな事だろうとは思っていたわ。というか皆で食べての下りで、もつと言えばミカンを取り出した時点で何となく予想はできていたわね。ふふつ、こういう嫌な予感だけはヨハネは外したことないのよ! 外れて欲しいとは何度も思ってるけどね!!

だけど私が浴るのは予想が当たっていたからではなく、もつと単純な事からなんだけどね。

「千歌、私ミカンが嫌いなのだけど……」

「……………え?」

突然神々の戦争に巻き込まれて、大切な友人を失ったかのような絶望しきった顔。多分今の千歌の表情はそう表現するのが一番適切ね。……まあ、その前にどうしてそんな絶望した顔してるのよ、とツツコみを入れるべきなのだろうけど。

「ち、千歌?」

暫く反応を待ってみたけれど、何の反応も返さない千歌に流石に心配になる。

一応ヨハネのせいなのだし、大丈夫かなと思つて恐る恐る声を掛ける。

千歌の眼が光輝いたのはその時だった。

「善子ちゃん、人生を棒に振るには早すぎるよ!! だから特訓しようよ!!」

「ええー……………」

色々ツツコみたい。ミカンくらいで人生棒に振つてるつもりは無いし、だから特訓つていう流れが良く分らないわ。そして、それをいたつて真剣な顔で言つてるのにもう一つツツコみを入れたいわね…………。

勿論私はそんなことはしないでいいと断つただけれど、何故か千歌は首を縦に振つてくれなかった。

「私は絶対に善子ちゃんを見捨てたりなんてしないから!!」

「ええー……………」

——で、今に至るわけだけど…………正直今でも何でこうなったのか良く分らないわ。

確かにミカンは風邪の予防に効くつてマ…………お母さんが言つてたし、千歌の風邪をひかないようにつて気遣いは素直に嬉しいのだけど、やっぱり嫌いなものは簡単に好きに

なれないわ。

それに方法がおかしいのよ。何でミカン嫌いがミカンに愛の告白すれば治ると思っただの？ もしその瞬間を誰かに見られてたら、墮天使でも引き籠って二度と顕現しなくなるほどのトラウマを植え付けて余計に嫌いになるわよ。

「うーんやっぱりそう簡単にミカン嫌いが治るなんてことは無かったかあ……。だったら別の方法をとった方がいいのかなあ」

「……まだ続けるの?」

「勿論だよ! これを期に善子ちゃんにもミカンが好きになつてもらいたいからね!!」
「それは難しいんじゃないかしら……」

嫌いなものは好きになれなかったから嫌いなわけだし、わざわざ努力して好きになる必要性も感じないし……。

私の反応に少しだけ残念そうに千歌がはにかんだ。

「そうなんだろうけどね……。でも、やっぱり善子ちゃんにはミカンの事を好きになつてもらいたいんだ」

「どうして?」

窓の外から手を目いっぱい伸ばして、私の手の上に置いていたミカンを掴みとる。

そして、千歌はその手にあるミカンのように明るい笑顔を浮べた。

「善子ちゃんが風邪ひいちゃったら私が心配になるし、寂しいからだよ!」

疑う余地もないほど屈託のない笑顔と言葉。千歌の言葉が私の脳内でリフレインして、何度も何度も響く。

呆然と千歌を見る事しかできない私に気づかないのか、千歌はその後も言葉を続ける。

「ほら、夏に善子ちゃん風邪で一週間くらい休んでたでしょ? その時も心配だったし、よく水をかぶって濡れてるしいつも風邪ひかないか心配なんだよ」

「千歌……」

ふ、ふん。別にすごく嬉しいわけじゃないわ。最近はそうでもないけど、昔は孤立気味だったからこんな風に心配してくれる友達がいなくて千歌の言葉に感動したとかじゃないから!!

……………ヨハネの言動はイタイって言われるけど、千歌も大概よね。まったく。

「だから私にはもうミカンを食べさせることしかできないと思っただよ!!」

まあ、何で其処に至ったのかは結局分からないままね。

別にミカンを食べなくても風邪の予防はできるし、なんなら風邪ひいた時にお見舞い

に来てくれればそれで……。

「善子ちゃん?」

「ひゃ!? な、何でもないわよ! 別に変な事なんて考えてないから!!」

「私何も聞いてないんだけど……」

「うぐ……っ」

くつ、これは誘導尋問だったの? 千歌、貴女この墮天使を罠にはめるなんてなかなかの実力者のようね……!

……でも、まあ、千歌がこういつてくれてるのだし、本当にこれを期にミカン嫌いを克服するのもいいかもしれないわね。それにやっぱり墮天使なのだから弱点は少ない方がいいし、そっちの方がカッコいいわね!!

こうして私は千歌の協力(というより主導)の下、ミカン嫌いを克服することを決意した。

「千歌。そういえば、今日皆はどうしたのよ。部室に来なかったけど……」

「今日は皆用事があるからお休みするって連絡来てたけど?」

「え?」

「え?」

そう言われて携帯を取り出すと、充電切れの為か画面は真っ暗だった。

昨日の決意からアルテミスが上り、アポロが再臨した日の放課後。少し遅れると言っていた花丸とルビィと別れて部室に来た私を待っていたのは、腕組みをした千歌だった。

「さあ、始めるよ!!」

「ええー……」

何を始める気？ とは聞かなくても千歌がやろうとしている事はすぐに理解できたわ。要は昨日の続きをしようって言うんでしょ？ 墮天使はお見通しよ!

という返しをする前に千歌はゴソゴソとスカートのポケットを漁って、親指の長さ位の幅をした細長い紐を私に差し出してくる。

何かと思つてそれを見ると、「ミカン食べ隊」と真ん中にでかかど書かれたハチマキだった。しかも可愛くデフォルメされたミカンの絵が両サイドに描かれていた。

「ええー……」

「これ付けて気合入れてくよ!! A q o u r s ミカン食べ隊結成の時だよ!!」

「部隊って言つても二人じゃない。そしてネーミングセンスが気になるわ……」

何でアイドルグループなのに「隊」なのよ。もつとそれっぽく、『太陽の果実に挑む淑女』みたいな感じでいいじゃない。ヨハネは墮天使だけだ。

渡されたハチマキと千歌を交互に見る。白い布地のハチマキは蛍光灯の光を微量に反射して、千歌は輝く瞳で期待して私を見ている。……………つけるしか、選択肢は無さそうね。

私は一つ大きなため息を吐いて、ハチマキを頭に巻く。流石に“ミカン食べ隊”っていう名前が見えるのは恥ずかしいので前髪で隠す事にする。

「うんうん、よく似合ってるよ。善子ちゃん!」

「ハチマキが似合う堕天使ってなんなのよ……」

そんな堕天使は正直見たくないわね。堕天使といえば清純の象徴である天使が闇に堕ちた存在。小悪魔的なイメージがあるのに、ハチマキつけたら何か天使に戻ろうと頑張ってるイメージがあって嫌だわ。

「それで、何か方法はあるの? この前の様な方法はごめんよ」

「大丈夫、私は何も考えてないから!!」

「ないのに何でそんなに胸を張れるのよ……」

しかも身長割に大きい胸が少し揺れて……べ、別に羨ましくは無いわ。ええ、本当に羨ましいとも狡いだとも思っていないわよ!!

別に何とも思っていないけれど、少しだけ千歌の胸を睨む。私の視線に気づいてないのか千歌は小首を傾げたけれど、すぐに気にするのをやめた。

「私にはないけど、何とかしてくれそうな人には心当たりがあるからだよ」

「それってダイヤに頼んでスパルタ特訓とかじゃないわよね……?」

「あはは、流石にそれはしないよー」

千歌のその言葉に少しだけほつとする。ダイヤに頼んだら多分延々とミカンを食べる羽目になってたかもしれないし……考えただけでもぞつとするわ。

千歌はにっと少し笑い、少し鳥肌が立った私の腕を掴で強引に私を部室から連れ出した。

「それじゃあ善は急げ。さっそく行くよ!!」

「ちよ、ちよつとどこへ行くつていうのよ!!」

「ついでからのお楽しみだよー!」

「ええー!?!」

そんなサプライズ精神いらないわよ! そう叫んでみたけれど、あははと笑う千歌とすれ違う他の生徒たちが驚く声とで私の叫びは無と化した。

そしてあれよそれよの間に、私は千歌たち二年生の教室まで連れてこられていた。

何で教室? と思っただけれど、その疑問は千歌が教室のドアを開けた先に待っていた
答えで理解できた。

「梨子ちゃん、手伝つて!!」

「ち、千歌ちゃん!? いきなりどうしたの!?!」

教室で一人何かを黙々と書いていたリリーが千歌のアポなし訪問に驚いている。とうか協力してもらおうとしているのに何の話も通してなかったのね……。

でも確かに、しつかり者で博識なりリーに知恵を借りるのはいい案かもしれないわね。

「梨子ちゃん、今ちよつといいかな?」

「え、あ、うん。学級日誌ももうちよつとで書き終わるから大丈夫だよ」

「協力して欲しいの!!」

「……………えーつと」

「千歌、ちゃんと主語つけて話しなさい……」

「あれ? 私言葉足りなかった?」

驚くほど足りなかったわよ。私がそう言わずとも、リリーの苦笑いを見て理解し、改めてリリーに頼み込む。

「実は善子ちゃんのミカン嫌いを直したいんだけど、何かいい方法無いか教えて欲しいの」

「あ、だからそのハチマキなんだ」

「ヨハネは恥ずかしくて今すぐ外したいのだけどね……」

「ふふっ。可愛いからいいじゃない」

……そ、そういう問題じゃないのだけど。まあ、可愛くないよりはましなのだけだね。というか、墮天使的には笑ってるリリーの方が可愛いとおも……って、わ、私は何を考えていたのよ!!

頭を左右に振ってさっきの考えを吹き飛ばす。まだ少しだけ頬が熱いわ。

「それで梨子ちゃん。ミカン嫌いを直すいい方法ってないかな？」

「私は物知りって訳じゃないからばっとは思いつかないんだけど……」

うーんと持っていたシャーペンを頬に当てながら考えを巡らすリリー。まあ、いくらリリーの頭が良いって言っても、すぐには出てこないわよね。

そして考え始めて千歌が二回程大きな欠伸をした頃、ようやくリリーがあ、と呟いて提案してくれた。

「“ハロー効果”を使うのはどうかな？」

「ハロー効果？　少し前にCMでやってたあのあいさつの魔法の事？」

ただ千歌の知らないワードだったみたいで、ものすごく純粋な瞳で首を傾げている。私も名前くらい位しか知らないけれど、少なくともあのCMの事ではないというのだけは確かで、私にも分かる事だった。

リリーも千歌に苦笑を浮かべながら、ハロー効果についての説明を始める。

「えつとね、千歌ちゃん。ハロー効果っていうのはあのCMじゃなくて、物事を評価する時に、その評価がある特徴によって変わっちゃうっていう現象の事なの」

「???」

「えーつと、つまり知らない人にも真面目で清潔そうな格好をしてたら好感を持つちゃうような心の動きの事だよ」

「成程!!」

ようやくどういう物なのか理解できたみたいで、千歌は大きく数回頷いた。

私もさつとスマホで検索してみたけど、確かにそんな感じの事が書かれていたわ。よくこんな事を知ってるわね、リリーは。

「それで梨子ちゃん。どうすればいいの?」

「ハロー効果は良くも悪くも働くから細心の注意が必要だけど、取り敢えずミカンの良い所をアピールすればいいかな」

「成程!!」

つまりミカンのもの凄く良い所を前面に押し出して、悪い所を隠してしまおうという事ね。確かに好感を持ってたら多少の事は気にならなくなると言うし、いい案だとは思いうけれど……。

「えつと、リリー多分それって……」

「そうと決まればさっそく実行だね！『ハロー効果で克服大作戦』開始だよっ!!」

「え？ あ、ちよ待ちなさ——」

「レッツ、ゴー!!」

私の言葉を聞かず、ここまで連れてこられた時のように腕を引つ張られていく。チラリと見えたリリーの顔には苦笑と多少の呆れが浮かんでいて、まるで私に「頑張つてね」と苦手克服とは別の意味で言っているような気がした。

「図書室!!」

「それは見れば分かるわ……」

特急千歌エクスプレスの次の目的地は浦の星女学院の図書室だった。

もしやミカンについて調べさせるとかじゃないわよね？ この学校の図書室は割と大きくて蔵書も充実しているけれど、ミカンの事をピンポイントで記載してる文献を探すのはかなりキツイんじゃないかしら。私が占星術の本や暗部ローズ・ピアスの『悪魔の辞典』を探すのにどれだけ苦労した事か……。

そんな視線を千歌に投げつけると、流石に千歌も私の考えている事を理解したのか私の不安を否定してくれた。

「流石にこの中から本を探そうとは言わないよ。私も疲れるし」

「まあそうよね。まだ常識的な判断が出来て良かったわ」

「まるで私が今まで常識的な判断できてなかったみたいない方!」

「ええー……」

「自覚なかったの? あ、でも自覚あれの方がよっぽどよね。寧ろ自覚なくてよかったわ。」

ほっと胸を撫で下ろすと、少しだけ不満そうに千歌が頬を膨らませた。けれどもパツとすぐにさつきまでのやる気にあふれた顔になった。

「それで、本を探さないのならどうして図書室に来たのかしら?」

「それはもちろん花丸ちゃんの知識を頼りに来たんだよ!!」

「あ、納得だわ」

図書室に来た時から薄々予感はしてた。花丸たちも来れない理由が生物の課題の調べものって言ってたから図書室にいるはずだし、ほぼ一〇〇%で会えるわね。因みに私はその課題はとっくに終わってるわ。

……まあその事が少し誇らしく思える反面、終わらせるのをもう少し待って花丸やルビィと一緒にやりたかったと思う自分もいるわ。

「それじゃあさっそく突撃しよう!!」

「ちよ、図書室では静かにしないと——」

「しつれいしまーす……」

「ええー……」

温度差激しすぎじゃない？ つい一秒前までハイテンションだったのに、ほぼ無音でしずしずと入って行つたわ……。大雑把なのか器用なのか分からなくなつてくるわね。

テンションの落差に戸惑いつつも、千歌の後に続いて図書室に入る。

らつら扉と壁を一枚隔てているだけのはずの室内は、放課後の喧騒とは隔離されているかのように静かだった。

聞こえてくるのは紙をめくる音、歩いている音、そして本当に小さな話し声だけ。この室内の静寂は、昨日から今日にかけて疲労した私にはとても心地いいものだった。

きよろきよろと千歌が室内を見回して、花丸を探している。多分ルビイと一緒にいるでしょうから、私はルビイを探すとするわ。

探し始めて一分もたたないうちに、本棚の陰にここ半年で見慣れた赤い尻尾を見つけた。

「千歌、ルビイを見つけたわ。多分花丸も一緒よ」

「でかしたよ、善子ちゃん。さっそくついて行こう」

こっそりと赤い尻尾に近づき、完全に姿を現したルビイの背後をつけていく。これ、ルビイが気づいたら凄く驚くでしょうね……。というか、こっそりついて行く必要があ

るのかしら?」

二冊くらいの本を抱いて歩くルビイの後をつけていくと、窓際の読書スペースに出た。そしてそこには、殆ど予想通りにノートに何か書き込んでいる花丸がいるわね。

「あれ、果南ちゃん?」

「ぴゃあ!?!」

予想外の人物がいたため、千歌が声を漏らす。そしたら当然だけれど、気づいてなかったルビイがびくつと小さく跳ねて驚く。

「ち、千歌さんに善子、ちゃん? い、いつから後ろにいたの?」

「ルビイが此処に戻るくらいによ。驚かせるつもりは無かったのだけどね……」

「う、ううん。ルビイが勝手にビックリしちゃっただけだから、気にしなくていい、よ」

あははと笑うルビイ。そう言ってもらえるのはいいのだけど、どうして元凶の千歌は我関せずみたいな顔で果南と話してるのよ。確かに珍しい組み合わせで気にはなるけど……。

「ねえねえ、何で果南ちゃんが図書室にいるの?」

「まるで私が此処にいちやいけなないみたいなのじゃない?」

「あ、そういう訳じゃないんだよ? ただ、もう部屋に行つてると思つてて」

それには同意見ね。三年生組はいつもこの時間帯には部屋にいるから、千歌の疑問は

もつともだと思うわ。

果南は「あー」と納得しながら、向かいに座ってる花丸に視線を向けた。

「実は部室に向かつてる途中で二人にお願いされちゃってね。課題だつて言うし、手伝つてる所なんだ」

「課題つて?」

「好きな生物の生態とかのレポートすら。マルとルビイちゃんは海洋生物について書くうと思つて話を聞いてた所なんだあ」

「なるほどねー」

ようやくこのメンバーが此処にいる理由に納得いったようで、関心関心と頷く。だけど、果南が「千歌にもこの勤勉さを見習つてほしいね」と言うと、口元が引き攣つた笑いを浮かべた。課題、やってないのね……。

にひひと少し意地の悪い笑いをした後に、果南が逆に私達に問いかけてきた。

「それで、千歌と善子は何で図書室に? とうかそのハチマキは何?」

「そ、それ、ルビイも気になって、ました」

「ミカン食べ隊? つて、図書室は飲食禁止ずら……」

「あ、そうだった! 此処に来た目的を忘れてたよ!!」

「ええー……」

自分がやろうって言った事なのに何で忘れてるのよ。そして図書室では静かにしなさい。

二つの呆れた視線と二つの苦笑を一身に受けつつ、いやーと少し照れながら千歌は頬を掻いた。

「果南ちゃんが此処にいたのに驚いてつい忘れちゃった」

「人のせいにしない」

「あうっ」

デコピンを受けて軽く体を仰け反らせてる。痛くは無いでしようけど、もつとしっかりしてればいいのに……。

「それで、結局目的ってなにずら？」

「実は花丸ちゃんに協力して欲しくて来たんだよ！」

「協力？」

「そう！ 花丸ちゃんの知識を貸して欲しいの!!」

「取り敢えず千歌はまず静かに話しなさい」

果南にそう言われてもう一発デコピンを貰う。今気づいたけど周りの人が結構注目してるわね。しかもスクールアイドルが集まっているからっていう好奇の視線じゃなくて、単純に何を騒いでるのかという居心地の悪い視線。

ルビイもその事に気づいてびくついてるし、少し千歌には落ち着いてもらわないと話もできないわね。

果南は千歌を自分の隣の座らせて完全に千歌が騒がないように監視の体制に入った。私としても、ちゃんと千歌を静止してくれる人がいるというのは話を進めやすいので嬉しいわ。そう思つて私も果南の隣に座る。

「千歌ちゃん、マルはなんの知識を千歌さんに教えればいいはずら？」

「花丸ちゃんにはミカンの良い所とかを教えて欲しいの。私じゃなくて善子ちゃんにだけど」

「え？　で、でも、善子ちゃんは確かミカンが……」

「……まあ、いつまでも嫌いじや墮天使として格好つかないもの」

そう言うのと花丸とルビイは目を大きく見開いて驚く。そして二人で顔を見合わせた後になつこりとその幼い顔に笑みを浮かべて私を見る。

「そういう事なら全力で手伝うよお。友達が頑張るのに手を貸さないわけにはいかないから」

「る、ルビイもマルちゃんみたいにいつぱいは知らないけど、で、できる限りの事はするからっ」

「……ありがとう」

協力してくれることは嬉しいけど、ちょっとだけ照れくさくて小声になってしまおう。顔を逸らせば穏やかな笑いを浮かべる果南がいるし……。もう！ 何よ!! 私がお礼を言うのがそんなにおかしい!? 頬を膨らませてそう視線で果南に訴える。

「ミカンの良い所をアピールかあ……。何かあるかなあ?」

花丸がうーんと腕を組んで考え、ルビイもその隣で人差し指を頬に当て考えてくれている。そして、以外にも先に思い付いたのはルビイの方だった。

「あ、あの、ミカンの良い所かは分からないけど、みかんはずっと前からあったって、お姉ちゃんが言ってた、気がする……。よ?」

「そうなの?」

「う、うん。確か、神話時代? から……」

「神話?!」

思わず声を上げて立ち上がってしまう。だけどすぐに自分の失態に気づいて体を縮ませながら席に着く。けど神話という単語に胸がときめいて反応するのはしようがない事よね?

果南から何か言われるかと思っただけで、以外にも果南はルビイの話に関心を示していた。

「へえー、ミカンってそんな昔からあったんだ」

「は、はい。せ、正確にはその時代の記録に出てくる植物の一つが、ミカンかもしれないという事です……」

「マルもそんな感じの本を読んだことある気がするすら。専門書は難しくても良く分からなかったけど……」

花丸はそういつて苦笑するけれど、正直それは仕方のない事だと思わう。いくら花丸が本が好きつて言つても、あくまで文学少女であつて歴史マニアじゃないんだから。

そんな花丸をしり目に、千歌は果南に自分の疑問をぶつけていた。

「ねえ果南ちゃん。『神話時代』つてどれくらい昔なの？」

「また答えにくい質問をするね。まあ、凄く分かりやすく言えば古事記の内容あたりの時代かなあ」

「いじ………き〜」

「……聖徳太子よりずっと前つて事」

「おお！ 確かにそれは歴史を感じるね!!」

千歌がまた大きな声を出したので、果南にデコピンを二発ほどもらつてた。学習しないのかしら……。

「る、ルビイはこれくらいしか知らないけど、マルちゃんは何か思いついた？」

「そうだなあ……。芥川龍之介の『蜜柑』の話はできるけど、良い所じゃないから、素直

に効能について話すすら」

両手を胸の前でキュツと握って「ずらっ」と意気込む花丸。私的にはさっきの話で、ミカンの見方がだいぶ変わったけれど、ここからもっと変わるかしら？

花丸は小さく息を吸ってゆっくりと話し出した。

「やっぱり一番のセールスポイントはビタミンCの量すら。一日に必要なビタミンCをミカンは二個食べるだけでとれるらしいよ」

「へー、そんなにあるんだあ」

「はい。それにカロチン、ビタミンE、ビタミンDもあるし、シネフィリンっていう栄養素とビタミンCが作用して風邪予防にもなるんだあ」

千歌や親が言った「ミカンを食べたなら風邪ひかない」という話も、あながち嘘という訳ではなかったわけね……。シネフィリンって聞いても今いちピンとこないけど。

皆が自分の話に興味を持ったのが嬉しかったのか、更に嬉々として言葉が続ける。

「善子ちゃんみたいに風邪をひきやすい子は、ひき初めにミカンを黒焼きにして食べる
といいんだよお」

「黒……焼き？」

「皮が黒くなるまで焼いたものすら。果汁を絞って生姜の絞り汁と一緒に飲むのがお勧めだよ。これが意外においしんずらあ……」

「ええー……」

その味を思い出しているのか花丸がうっとりしてゐるわ……。話を聞く限りだとあまりおいしそうには思えないんだけど……まあ、好みは人それぞれよね。

「他にも動脈硬化予防に抗アレルギー作用、発癌抑制作用とかもあるし、多分マルたちが一番関係あるのは疲労回復効果があるって事ずら」

「そ、そんな効果があるの、マルちゃん？」

「うん。少し疲れを感じてる時とかに食べると楽になるらしいずら」

へえという感心した声を皆が漏らし、花丸は照れくさそうに頬を掻いた。

正直花丸とルビィの話は初めて聞くものばかりで面白かったし、これまでにないくらいミカンに興味を持てたわ。それだけでも大きな進展だと思わね。

けど。だけど、私は……。

「……どうしたの？ 善子。浮かない顔じゃない」

「……そんな顔してる？」

「割と」

隣りの果南が目ざとく私の変化に気付く。他の三人も心配そうな顔で私を見ているのを見る限り、私って結構顔に出やすいタイプなのかしら。

今の私の中には少しの悔しさと、四人に対する申し訳なさが渦巻いている。

「……………皆、ごめんなさい」

きつと私があの時千歌の勢いに負けずにちゃんと伝える事が出来たら、もつと違う未来があったのかもしれない。そう、課題をする手を止めて私に協力することの無かったのかもしれないに……。

突然の事に戸惑う四人に向かって、私は遅すぎる真実を話した。

「私、ミカンの味が苦手なの……」

意識を変えてもどうしようもない真実を……。

「まあ味が苦手ならしょうがないよねえ」

「……………そうね」

「ミカンは味が甘かったり酸っぱかったりするから好みの差は出るよねー!」

「……………そうね」

向かいの席に座る千歌が、若干俯いてる私を励ますように明るい声で話しかけてくれる。

結果的にリリーの考えた『ハロー効果で克服大作戦』は失敗。味は意識を変えても変わらないのだから、仕方がないと言えば仕方がなかったのだけれど、やっぱり付き合ってくれた三人には申し訳がないと思うわ……。

「ほら、元氣出して！　そして次の方法を試そうよ!!」

「……そうね」

いつまでも沈んでなんかいられない。三人の時間を無駄にしたと思うのなら尚更よね。

はあと軽くため息を吐いて鬱屈した気持ちを追い出し、渾身の墮天使スマイルを浮かべて私は千歌に問いかけた。

「何で私たちは家庭科調理室にいるのかしら？」

「作戦第二弾だよっ!!」

「ええー……」

場所は家庭科調理室。其処のテーブルに私たちはいた。

何でこんな所にいるのかというと、神のお導き……というわけではないわ。墮天使なのに今更神様に従うわけないじゃない。単純にリリーの二つ目の案『オペラント条件付だけで克服大作戦』を実行するためだ。

リリー曰く、オペラント条件付けとは飼う犬に芸を仕込むときによく使われるあの方法らしいわね。

そこで千歌が考えたのが、ミカンを一口食べるたびに何か私にとってプラスになる事をして食べられるようにしようというものだった。その時に「ミカンを食べるたびに十

字架一個あげればいいの?」と普通に聴いてきたのには驚いたわね。まったく、墮天使は神に反した存在だから十字架はいらないのに……。

このような経緯を経て作戦が始まって此処に来たってわけ。……部屋にいた三人を巻き込んで。

「まったく、どうしてわたくしがこのような事を……」

「まあまあ、同じメンバーのためですし、いいじゃないですか」

「わかってますわよ。もう……」

少し不機嫌そうな顔をしながらも、ダイヤはボウルの中身をかき混ぜ、曜はカラカラと笑ってミカンの缶詰を開けてミカンとシロップとを分ける作業をしている。

「ん、ミカンの good smile! 完成が楽しみね」

そして私の隣に座って何もしないで二人の作業が終わるのを待っている鞠莉。今回はこの三人が千歌によって巻き込まれた哀れな子羊たちね。……事の発端をたどれば私の責任でもあるんだけど。

「ちよつと鞠莉さん? 貴女も作るの手伝ってくださいませんか?」

「あら、これでも私にもちゃんと work があるのよ?」

「人手が足りないんです。ちよつとぐらい融通聞きませんか?」

「ダイヤ、あまり chat していると cook に失敗するわよ」

鞠莉が楽しげな笑みを浮かべる反面、ダイヤは不服そうな顔のまま手元のボウルの身を混ぜる作業に戻った。

「鞠莉さん鞠莉さん。あんまりダイヤさんをからかってたらタルト無になっちゃいますよー」

「あら、それは困るわ。ダイヤ、f i g h tよ。応援してるわ♪」

「本当に調子のいい方ですわね……」

混ぜ終わったボウルを調理台の上に置き、すぐにあらかじめ焼いていたタルト生地に曜が空けた缶詰のミカンを敷き詰めていく。さつきから文句を言いつつも仕方事をしてるあたり、流石ダイヤとしか言いようがないわね……。

ダイヤたちが作ってるタルトが出来上がるまでもう少し時間がかかるだろうから、今の内に聞いてい置きたい事を聞いておくとするわ。

「ねえ、千歌。ミカンを食べるって話だったのに、何でミカン料理を作ってるの？」

此処に連れてこられてからずっと思ってた疑問。別にオペなんとかの方法を使うのなら、普通にミカンだけを食えばいいのだし、いちいちこんな手間のかかる事をする意味が分からないわ。

調理されていくミカンを眺めていた千歌は、突然投げかけられた疑問に「ふえ？」つと変な声を出したが、すぐににんまりと満面の笑みで答えてくれた。

「どうせなら更に美味しく食べたくない?」

「ええー……」

想像してたよりはるかに個人的な理由ね……。見なさい、あの鞠莉でさえ苦笑してるじゃない。ダイヤもあの頃と遜色なくらいの眼で睨んでるし。

「千歌ちゃん、流石にそれは私もどうかと思うなあ……」

「よ、曜ちゃん!? 流石に冗談だつてばあ!!」

わたわたと手を振つて否定する千歌。もし千歌じゃなかったら信じられたけど、日頃の行いのせいで中々信じるのは難しいわね……。

皆が疑惑の視線を向ける中、千歌は自分の落とされかけている評価と立場を引き戻すために早口で弁明する。

「ほ、ほら、ピーマン苦手な子に食べさせるには一手間啜えて味を分からなくさせたりするでしょ? それと同じことができればなーって!!」

「でも、千歌さんのリクエストのミカンタルトはミカンを主体に作ってるのですか?」

「で、でもでも、タルト生地はココア使ってるし……ッ!」

「千歌、ミカンスイーツと合う組み合わせになっただけだよ」

「……………ううゝ!!」

これは千歌の完敗ね。まあ、多分皆も千歌が最初に行ったことは冗談だつて分かつて

てからかつてるんでしようけど。

そして鞠莉が何か言い返したくて唸ってる千歌を見て、クスツと笑う。

「チカはおバカさんねっ♪」

「うう……梨子ちゃん。みんながいじめのよお……」

そして千歌は遂にこの場にはいないはずのリリーに泣きつき始めた。勿論いらないから慰めてくれる人はいないのだけど……。ま、これは昨日からさつきまでの対価として受け取っておきなさい。

楽しい笑い声。放課後の喧騒。窓から差し込む柔らかな光とミカンの甘酸っぱい香りが広がるこの時だけは、これから先の事を忘れる事が出来た。

くすくす、うふふ。あははにふふふ。四つの笑い声が部屋中に広がり、後にえへへという笑い声加わって、タルトが焼き上がるまで私たちは談笑したのだった。

「さ、できましたわ」

だけど無情にも時間とは進むもので、心地よい夢の終わりを告げるオーブンの音が聞こえてダイヤが焼き上がったそれを持つてくる。

ミカン独特の柑橘系の香りは控えめに、ココアと砂糖の甘い匂いが鼻をくすぐる。匂いからミカンっぽさが消えてるからもしかしたら……と思っただけれど、テーブルの上に置かれたタルトと見て私はメデューサの眼を見た時のように固まった。

濃い茶色の生地、真ん中に広がる黄色の海。全部がミカンという訳ではないのでしようけど、九割がたミカンで構成されていた。

「ち、千歌? 千歌はさつきからこれを食べたそうにしてたわよね? 先に食べていいわよ。寧ろ好きだけ食べていいわ」

「本当!?!」

「駄目に決まってるでしょう!?!」

ダイヤに凄い剣幕で怒られてしまったわ……。確かに今回ダイヤはほぼ強制的に私のせいで巻き込まれたし、その人のために作った料理をそう言われると怒りたくなるのは理解できるわ。きつと私だってそうしただろうし。でも……。

「さ、流石に容赦なさすぎじゃないかしら……」

一房食べるのもやつとなのに、こんなミカンの塊みたいなタルトを食べろだなんて中々どうして恐ろしい事を……。

ダイヤは軽く睨むように私を見て、我が子をしかるような口調で話す。

「いいですか、善子さん。貴女がミカンが苦手だというのは聞きましたし、それを克服するために今こうして努力している事も知りました。ですが、些か覚悟が足りないのではなくて?」

「か、覚悟?」

「そうです。見なさい、此処にいる人は貴女の力になりたいと思ってる方々です。勿論わたくしもそうですし、ルビイ、花丸さん、果南さんに梨子さんもそうですよ？」

ですが、と言葉を一度区切って声のトーンを下げた。

「善子さん、わたくしの眼には、まだ千歌さんに連れられて仕方なくやっているという“甘え”があるように見えますが……わたくしの思い違いですか？」

「そ、それは……」

言葉が詰まって何も言い返せない。という事は、自分が気づいていないけどその通りだったという事ね……。言われてみれば、頭の中では千歌に付き合ってるだけっていう考えがあつた気がするわ。

「これだけの苦手な物を食べるのは辛いでしょうし、わたくしだつてすぐに治るとは思つてません。でも善子さん、これくらい食べる覚悟もないのなら、今すぐ辞めて練習した方が有意義だとは思いませんか？」

「そう……ね……」

「だ、ダイヤさん。ちよつと言いきすぎじゃ……」

「千歌さん、甘いだけじゃ何も成長しないのです。それは貴女は分かっているのでは？」
「う……」

庇つてくれた千歌もダイヤに切り捨てられる。正論にぐうの音も出ないとは正にこ

の事ね……。ある意味いい経験になったわ。

改めてタルトを見る。ココア色の生地に囲まれたミカンの海は、ミカンが嫌いな私にとっては荒れ狂う大海に見えなくもない。

きつと食べれば生地の甘さの中に、ミカンの甘酸っぱさが口に広がるのでしょね。ああ、考えるだけでも身震いがしてくるわ。

……。けど、ね。

「……………曜、フォークをとってくれる?」

「……………善子ちゃん、本気?」

「ええ、本気よ。ダイヤに発破掛けられたようで格好はつかないけれど、言われっぱなしというのは墮天使的にマイナスなもの」

誰かにあそこまで言われると、流石に向きにもなりたくなるわ。なんとと言っても私は墮天使なのだからプライドは高く持たなきゃね。それに「ヨハネ」は努力の人なのだから。

曜からフォークを受け取り、鞠莉が切り分けてくれたタルトが私の目の前に置かれた。

「……………」

いざ食べようとしても手が動かない。伸ばしたフォークがミカンの上で時を止めら

れた。

いい加減にしないよ、ヨハネ。たかがミカンごとき、食べて見せなさいよ……ッ!!

「……はむっ。~~~~~」

「おお!!」

意を決して一口サイズに切って口まで運ぶという動作を一秒以内に済ませる。私
がタルトを口に入れた瞬間に曜と千歌の歓声が聞こえて来たけれど、すぐに広がるミカ
ンの味で掻き消えてしまった。

「……う」

ミカン独特の歯ごたえ。ミカンの甘酸っぱさ。香るミカンの風味……。うん、格好よ
く啖呵切ったけれどきついものがあるわ……。

それでも食べたものを粗末にしないというママの言葉を何度も何度も頭で反芻させ
て飲み込む。

「た、食べた……わ……」

ふわつと柔らかいものが私を包み込んだ。

「Nice flight!! 善子、よく食べたわ!!」

「え? ちょ、ま、ふむっ!?!」

隣に座っていた鞠莉の熱いハグ。そしてハグのついでに頭を凄く撫でられ、鞠莉の大

きな胸に顔が埋まって息が苦しくなってくる。

暫く混乱して何もできなかつたけれど、流石に肺の酸素量が足りないと感じてもがき鞠莉から離れる。

「ちよ、ちよつと鞠莉! いきなり何なの!？」

「私の work はミカンを食べたヨシコを褒める事。だから全力で褒めたのよ」

「ええー……」

そういえば自分には仕事があるって言って手伝いを断ってたわね……。十字架の代わりの強化子は鞠莉だったのね。びっくりしたわ。

「でも、さっきのは褒められて嬉しいより先に、善子ちゃんが窒息そうだったけどね」

「アラ、failedした？」

「多分」

曜は苦笑を浮かべながら鞠莉にそう告げた。まあ、確かに嬉しいよりも先に苦しいが来たのは否めないわね……。

曜の忠告を受けて、鞠莉は「そうねえ」と呟いた後に、とても綺麗な微笑みを浮かべ、また私の頭を撫でた。

「よく頑張ったわね。ヨシコ」

頭を撫でる鞠莉の顔は優しく慈しみが感じられて、頭を撫でるその手は昔ママが頭を

撫でてくれたそれとそっくりで……。なんか、嬉しい。

「さ、ヨシ」。その調子でもう一口食べましょう!!」

「え、ええ……」

鞠莉に急かさされるように私は二口目を口にした。やっぱり口に広がるあの味に私は顔をしかめるけれど、撫でられている頭から伝わる優しさが心地いい。

………なんかこんな心地よさがあるなら、ミカンも食べられなくもないかもね。

食べると褒めて撫でられる、というのを何回か繰り返す。相変わらずミカンの味は慣れないままだけれど、食べ始め頃よりはスムーズに食べられるようになった。

そしてそんなやり取りを数十回程繰り返した時に、さっきから黙って見ていたダイヤがぼつりと言葉を漏らした。

「………これ、そもそも最初から失敗してるんじゃないのかしら?」

その言葉はこの場の全員を凍りつかせるのには十分だった。

これまでののが失敗? 嘘よね? 冗談よね? そんな意味を込めて視線をダイヤに送る。

「ダイヤさん、最初から失敗してるってどういう事なんですか?」

千歌が問いかけると、少しだけ言い辛そうな表情でダイヤは告げた。

「そもそもこのオペラント条件付けというのは強化子が無かったら弱化、もしくは消

去という作用が起こるんです」

「じゃ、弱化?」

「消去?」

「そこからですよ……」

ふうとため息を吐いて首を傾げてる千歌と曜に説明を始める。

「弱化というのは怒られたらその行動をあまりしなくなることで、消去とはそもそもプロセスの行為が伴わずその行動自体しなくなる事です」

「へえー。……………つて、ん? その原理で行くと、善子ちゃんがミカンを食べるようになるためには……………」

「ずっと鞠莉さんが隣で褒め続けないといけないという訳ですわ」

成程。確かにそれは作戦としてはかなり失敗ね。これからもずっと鞠莉と一緒にいるわけじゃないのだから、この場合消去が働くという事ね。

全員が顔を見合わせて、何も言えずに顔を俯けた。

「ま、まだまだ諦めるのは早いよ! 他にも方法がないのか探して試そうよ!!」

千歌が暗くなりそうになった雰囲気明るさで吹き飛ばそうと前向きに励ます。

勿論私達もこれくらいで諦めるつもりは無いので頷く。一週間くらいで何とかかなる、そう信じて……………。

「夕日が赤いわね……」

珍しく鮮血のように赤い夕陽を見ながら、私は部室で黄昏ていた。

視界の隅に立っている千歌はらしくもない悲しげな瞳で私を見ている。何か声を掛けようとして口を動かすのは分かるけれど、千歌の声が私の耳には聞こえてこない。

「全部、失敗したのよね……」

「……うん」

ようやく聞こえてきた千歌の声は、その瞳と同じで暗く沈んだ声だった。

あれから一週間、私たちは毎日苦手を克服するために奮闘した。だけどそれは無理難題だったり、逆効果になったり。そして私の不運が発動してミカンが腐つてたり、食べる途中に舌を噛んでその傷口にしみて痛い思いをしたり……散々だったわ。

結局この一週間の成果といえば、私のミカンに対する認識が苦手なオレンジ色の果実から、とても身体によく優秀な苦手な果実に変わっただけ。大した成果とは言えない。結局あの日から特に意識的に少し変わって、我慢すれば食べられるレベルになっただけで克服したという気にはなれなかった。

「もう、諦めたほうがいいのかしらね……」

自然と口から零れ落ちたその言葉は諦めだった。たった一週間、だけど一週間も全力

でやって進歩がないというのなら当然だと思っわ。

そこまで深いわけではない絶望感。克服を始める私を天使と例えるのならば、墮天使した天使の気持ち分かるような気がするわ……。

ふふふ、ふふふと自分でも不気味に感じる笑いを浮かべる。ミカンなんて食べられなくても、一生困る事なんてないもの。風邪だって別の方法で予防すればいいだけなのだから、ミカンなんて……。

「善子ちゃん、それ本当に言ってるの?」

いつの間にか目の前に立っていた千歌は私にそう問いかけてきた。

本気で言ってるのかは分からない。だけど、思わず口から零れた言葉なのだから本震である可能性は高いわね。

何も答えない私のそれを肯定とみなした千歌は、ガツと肩を掴んで絞り出すような声で言った。

「諦めちゃうの? 克服したいって、食べられるようになりたいと思ったその気持ちも!!」

「千歌……」

私だつてできる事なら諦める事なんてしたくない。けど、一週間みっちり頑張つて何もなしじゃ諦めなくなるじゃない……ッ。

「善子ちゃん、善子ちゃんが今凄く悔しいのは分かるよ。あれだけ頑張ったのに結果がついてこないのは誰だって悲しいし、悔しいもん」

「……じゃあどうしろっていうの？ 何もできなかった私に、どうしろっていうのよッ」
思わず口から苦言が出てきてしまう。それでも、千歌はいつくしむような笑顔でこういうのだった。

「簡単だよ。涙拭いて、深呼吸して、また頑張ればいいんだよ。今度は途中で投げ出さないようにして……」

「また、頑張れば……」

暫くその言葉を口の中で反芻し、自分はどうしたいのかを問いかかる。

自分はどうしたい？ 可能性が薄いとしてももっと頑張りたいの？ また不運な事に見舞われるかもしれないの？

考えて考えて考える。そして、ようやく私は飲み込みにくいその言葉を飲み込み領いた。

「……分かったわ。もう一度だけ、頑張ってみるとするわ」

「善子ちゃん……っ!!」

たった一週間で目に見える結果が出なかったからと言って、ここで諦めたら多分私はこれからも中途半端にしか頑張れなくなるでしょうね。だったら、もう少しここで踏ん

張ってみるのが最善ね。

「それじゃあ、もう一回気合入れ直して頑張ろー!!」

「おー!!」

こうしてミカン食べ隊の活動は延長が決定し、私たちは再び試行錯誤を繰り返しながら一ヶ月を過ごした。

「それで、善子ちゃんはミカンを食べられるようになったはずら?」

冬が本格的に始まる一歩手前の寒さが私の火照った体を冷ましてくれる今日、私は風邪をひいて寝込んでいた。

午後になって大分楽になった頃に花丸とルビイがお見舞いに来てくれて、今は二人はベッドの横に座って気にかけてくれている。

「それ、けほけほ、今の私の状況を見れば分かるんじゃないかしら……」

「あ、あはは……。そ、そうだよね」

ルビイが苦笑しながら額のタオルを変えてくれる。ひんやりしてて気持ちいいわ……。……。

結果から言えば私はミカンを食べられるようにはなった。というよりも、飲めるようになったというのが正しいのかもしれないわね。

あの後の一ヶ月で私と千歌はいろんな方法を試したわ。そして最終的に、ミカンジュースなら何とか飲めるようになったというわけ。もつとも、飲めるジュースも限られているのだけど。

「はあ、ジュースでもミカンの栄養がちゃんと摂取出来たらよかったのに……」

「ジュースだからしかたないすら。他の添加物とかも入ってるし、しょうがないよ」

苦笑する花丸とルビィ。まあ、確かにその通りよね。ミカンそのものを食べるよりは栄養分の接種は難しいわね。今日身を持って知ったわ。

ふうと息を吐く。

色々あったけど、一応克服した……という事でいいのかしら？ とても微妙な所だけれど、きつとミカンを口にする事すらできなかつた頃よりは成長してるでしょうね。そう思えば、この一か月の努力もやってよかったと思うわ。

「……ふふっ」

「よ、善子ちゃん？ どうかしたの……？」

「別に、何でもないわ。けほっ」

ただ、ちよつとした達成感を感じてただけよ。こんな達成感はずっ味わえないんだから、しつかり味わっておかないとっ。

体はだるい筈なのにこみ上げてくる笑みを抑えきれないと、花丸が「そうだ」と

手をパンと叩いて鞆を漁りだす。気のせいかしら。ちよつと悪寒が……。

「善子ちゃん、ジュースが飲めるようになったんだよね?」

「え、ええ、まあ……」

「それじゃあ、風邪ひき善子ちゃんにはこれをプレゼントすら」

花丸の鞆から現れたのは青色のタンブラー。見る限りは何の変哲もないものだけど、取り出した瞬間ルビイが小さく悲鳴を上げたのが気になるわ。

私はそのタンブラーからにじみ出る禍々しい雰囲気頬を引きつらせながら、恐る恐る花丸に尋ねる。

「は、花丸。その中身って何なの……?」

「これ? これは風邪の時によく聞く——」

タンブラーのふたをが解放されたその時、その独特のにおいですべてを悟った。

「ミカンの黒焼き汁と生姜汁ミックスジュースすらっ」

飛び切りの笑顔の花丸と、その隣でその液体から自分の身を守るように縮こまって怯えるルビイ。それだけで私はその液体を飲んだ自分の末路を悟る事が出来た。

ああ、墮天使は死んだら何処へ行けるのかしら。天国? 地獄?

やっぱりミカンは苦手だわ。改めてそう思った一ヶ月と一週間でした。

千歌ちゃんの日記帳

はじめまして！わたしの名前は高海^{たかみ}千歌^{ちか}！この春から晴れて浦の星女学院の二年生！今は授業を終えて、家に帰るところ。実はね、今私たちの学校が大変な事になってるの…!!

廃校決定

そう。今日の全校集会でこの浦の星女学院の廃校が決定したという知らせを受けた。もともと沼津の内浦に建つ小さな女子校で、生徒数は100人にも満たないくらいなんだ。周りは一面みかん畑で、天気の良い日は富士山だっけに見える。いいところだと思うんだけどなあ

でも決まったものはしょうがない。大人しく残りの高校生活を楽しんで…いられないよ！

「じゃあ、貴方に何ができるの？」

ふふ…よくぞ聞いてくれました！私、高海千歌の考えた廃校撤回の切り札！名付けて

「スクールアイドル大作戦です！…つてうええええ!?嘘、声でてた!」

驚きながら振り向くと、マイクケースを肩にかけたお姉さんが立っていた。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

話を聞いたところによると、お姉さんは普段はシンガーソングライターとして活動していて、なんと元スクールアイドルなんだって！なんでそんな人が内浦に来たのかいうと……

「浦の星最後の文化祭。そのゲストとして出てくれないかって、校長先生に言われてね」
耳を疑った。さ、さ……

「最後!?嘘でしょ、私まだ二年生だよ?」

「あ、ごめん。正確には「浦の星単独で行う最後の文化祭」かな。来年からは人数が足りなくて、その辺の男子校と合同でやるんだってさ」

「ああ、そういうことか。ビックリしたあ……」

「…ねえ。スクールアイドル、始めるつもり?」

不意にお姉さんが聞いてきた。

「…はい!私がスクールアイドルとして有名になれば、廃校を撤回できるかも……なんて、調子よすぎだよね」

自分で言つててバカじゃないかと思えてきた。A—RISEに始まり、μ、sの影響で爆発的に流行しているスクールアイドル。今やほとんどの高校にアイドル部が存在し、しのぎを削りあっている。まさに「アイドル戦国時代」だ。数年前とは勝手が違いくすぎる。

そんな状況で今さらアイドルを初めて、人気が出て…なんてことはありえない。穂乃果ちゃんにできたことが、私にもできる保証なんてどこにもない。

そもそもμ、sは、人を惹きつける不思議な「なにか」を持った人達が集まってできた奇跡のグループなんだ。なんの取り柄もない私みたいな人がそれを真似たところで、なにかを成し遂げられるとは到底思えない。やつぱり…

『やつぱり辞めた方がいいよね』とか考えてる?」

「…っ…はい」

私の考えなんてお見通しみたい。お姉さんも私がアイドルなんて無理だっと思ってるよね、きつと。

「やりなよ。スクールアイドル」

お姉さんはハッキリと告げた。

「え、うええ!?で、でも、私歌も踊りもヘタだし、μ、sみたいになりたいなーって軽い気持ちだし、そもそもそんな風になれないのわかってるし…その…：廃校、決まっ

ちやっつてるし…私なんかが今さら頑張っても…無理だよ」

「だから、何もしないでだまって見てる。それで本当にいいの?」

「…よくない」

そう答えるのが精一杯だった。

「……………あなたは、わた…μ sや穂乃果ちゃんみたいになりたいって言ったよね。でも心のどこかで、絶対なれるわけないって思ってる」

「でもね、届かないから目指しちゃダメなんて決まりもないんだよ」

お姉さんは淡々と、しかし私の体の奥底に響くような口調で話つづける。

「どんなに無謀でも、とにかく私にやってみる。怖がって立ち止まっていても、何も変わらな
い。喜びも後悔も、希望も絶望も、後から経験すればいいだけの話なんだから」

「まずは手を伸ばすこと!!悩むのはそれからでも十分だつて」

手を伸ばせ、それから悩み、か…

「お姉さん…私、やってみるよ。私なんかがどこまでできるのかわかんないけど」

「…そっか」

お姉さんは優しく微笑んで、踵を返す。

「私、一カ月くらい内浦に住むことになってるんだ。打ち合わせを念入りにしたいらし

くてね。一応先輩だからさ、何かあれば力を貸すよ。…頑張つてね」

「はい！ありがとうございます！！」

お姉さんを見送り、私は帰り道を急いだ。

「よーしーやるぞー!!」

その時の私のところは、世界中の誰よりも輝いていた。

【千歌のスクールアイドル日記】

4月18日（月） 晴れ

今日は元スクールアイドルのお姉さんに会いました。文化祭のゲストに迎えられたらしい…まあ何はともあれ、私のスクールアイドル活動が始まりました。でも、まだ何の準備もしてないんだよね…まずは学校の許可を得て、部活として認めてもらおう。さっそく直談判だ！

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

次の日。スクールアイドルを始めるにあたって、私はまず学校の許可を貰うために生

徒会室へと赴いた。黒澤ダイヤ会長に直談判して、なんとしても認めてもらう！それがスタートラインなんだから。

で、その結果は…

「ダメです！認めません」

「えー!?なんで!!…です、ごさいまするか生徒会長!」

「何故って…当たり前でしょう!いきなりけと生徒会室に入ってきたと思つたら、「アイドル部作ります!」だなんて…!そんなもの認める訳がないじゃありませんか!!」

ダメでした。でもこんなところで躓いてられないの!なんとかしなきゃ…!!

「じ、じゃあいきなりじやなきゃいいの…です、ますか?」

「…」

少しの沈黙のあとに、生徒会長が説明してくれた。

「……………まず、我が校で新たな部活動を設立するには条件があります。1つは部員数の確保。最低でも3人は必要です。そしてもう1つが、その活動における指導者を最低1人はつけること。廃校が決定している以上、お遊びの部活は必要ありませんので」

部員数と指導者か…?とりあえず昨日のお姉さんに頼んでみよう。部員は…まあ…その…集める!よし、そうと決まったらさっそく行動!

「生徒会長!!」

「!?!」

「今日はありがとう!……ごいしました!今度はちゃんと人数揃えてきますので、…じゃあね!…じゃなくて、失礼しまし、しまし、ました!!」

生徒会長さんにお礼を言っ、私は生徒会室を飛び出した。

「ちよつ、高海さん!廊下は走っはいけません!あと敬語はちゃんと使いなさい!!」

4月19日(火) くもり

スクールアイドルへの道のりはまだまだ遠い。部員を集めるにはどうしたらいいんだろう?全てが手探り状態、不安がないといえば嘘になる。でも、今思いつくもので、できることを精一杯やるしかない。まずはひたすら声をかけてみることにした。

☆☆☆☆☆☆☆☆

次の日。

「春から始まるスクールアイドル部でーす!」

もう何回この台詞を発しただろう? 10回? 20回? いや30回は軽く超えていると思う。昨日徹夜で作ったチラシを門の前で配り続けること30分、全然減らない。一年生は小走りで逃げていくし、二年生は見えて見ぬ振り。三年生に至っては陰でコソコソ笑ってるみたい。そんなこんなでもう始業時間。ほとんどのチラシが余ってしまった。

「…まあ、最初はこんなもんだよね。世の中そんなに甘くない! ってね」

不恰好な手描きのチラシを鞆に押し込み、私は自分の教室へと向かった。

4月20日(水) くもりのち雨

チラシ配りをしてみたけど、あんまり意味がなかった気がする。放課後の渡り廊下でチラシが落ちていたのを見て、ちよっぴり心にグサツときた。近くで見ると、何人もの人に踏まれた跡があった。…結構、こたえた。でもこれぐらい当然だとも思ってる。しばらくは部員集めを頑張ってみようと思った。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「梨子ちゃん！梨子ちゃん梨子ちゃん梨子ちゃん！！」

教室に入るやいなや、私は転校生の桜内 梨子ちゃんに勢いよく抱きついた。

「ひゃわあ!! た、高海さん!?!」

クラスで私のことを名字で呼ぶのは梨子ちゃんくらい。名前で呼んでほしいな…

「ねえ梨子ちゃん！スクールアイドルやってみない?」

4月21日（木）雨

昨日と同じようにチラシ配りをした後に、転校生の梨子ちゃんに声をかけてみたけど…ダメでした。アイドル好きみたいだから、イケると思ったんだけどなあ…未だに部員は集まらない。根気よくやるしかないのかな。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「わたしも手伝うよ。千歌ちゃん一人じゃ、危なくて見てられないからさ」

「ようちえあああああ〜ん!!!」

4月22日(金) くもりのち晴れ

曜ちゃんが仲間になった! ようやく希望が見えてきたみたい。あと1人、頑張つて集めるぞー!

…そろそろ、歌と踊りの練習したいな。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「あーあーあーあーあー」

「はいもう一回!」

「あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜」

4月25日(月) くもり

放課後、お姉さんに発声の基本を教えてくださいました。流石シンガーソングライター

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「そういえば二人とも、衣装はどうするつもり？」

「…へ？」

4月27日（水） 晴れのちくもり

今日もひたすら走り込んだ。昨日よりはマシになってると思う。ただの勘だけだね。それより大変なの！衣装の存在を完全に忘れてた！どうしよう…それにまだ部員も揃ってないし…少しずつ、焦りが出てきました。

とりあえずポスターは作った！意味があるかわかんないけど、掲示板に貼っておこうと思う。誰か来ないかな…ってそれより衣装く！

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「あ、あの！掲示板…見て、来ました…く、黒澤ルビイっていいます！」

4月28日（木） くもりのち快晴！

ついに…ついに！部員が3人揃ったー！申請も無事に済ませたし、スクールアイドルとして本格的に活動できるんだ！明日が楽しみ…♪

生徒会長さん、すっごい怖い顔してたな…なんでだろ？

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

5月11日（水）晴れ

ダンスの練習が本格化してきました。何度も転んで、膝が痛いよ…こんな絆創膏だらけの足、女の子らしくないな。これからもっとキツくなるんだから、気合いを入れ直そう。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

5月19日（木）くもり

練習の帰りに、みんなでご飯を食べに行きました。疲れたときの白いごはんって、あんなに美味しいんだなあって思った。衣装もできたし…そろそろ、デビューできるかな？

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

6月22日(水) 晴れ

昨日はホームページに載せる動画を撮りました。何度も何度もNGが出て大変だったけど、なんとか形になった。帰りはいつもの店でごはんを食べて帰った。お姉さんがおかわりしたときに、大和撫子のような綺麗な女の人が入ってきました。その人を見た途端、お姉さんがむせ返ってました。理由を聞くと、地獄のダイエットを思い出しただしい。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「えーつと…これをクリックして、送信…つと」

【新規投稿】

グループ名：浦の星女学院アイドル部

ひとこと：μsに憧れてスクールアイドルを始めました！応援よろしく願いしま

「…」

「…」

曜ちゃんもルビイちゃんも口を開こうとしない。

…何が足りなかったと言われれば、全部足りないのかもしれない。歌も、ダンスも、練習量でいえば他のスクールアイドルの何十分の一だろう。でも…なんで…

…内浦の何がダメなの？実際に見てみないとわからない、素晴らしいものがたくさんあるのに。なんで？田舎だから？田舎だと全部ダメなの？もう…訳わかんないよ。

「もうやだ…」

言いたくないのに、勝手に口が動く。これだけは言っちゃいけない。私たちを、内浦を否定する事になるから。でも…もう………—

「こんなところで何かやったってしょうがないよ。こんな…何もないところ……」

「千歌ちゃん、これ見て」

お姉さんがコメント欄をスクロールする。ああ、まだあるんだ。私たちの罵詈雑言が……ん？

〈ハニーバニー〉「確かに歌も踊りも見るに堪えないものですわ。でもおかしいですわね。彼女たちの踊っている場所に文句をつけている人がいるようですが。ここはアイドルを評価する場所でしょう？この住民の方は頭が悪いのかしら」

〈美人ダイバー〉「内浦ねえ…確かに田舎だけど、結構いいところだと思うよ？海もきれいだし、アイドルのステージにはびったりだと思うけど」

〈マリリー〉「何か惹かれるものを感じるわ！exciting！」

〈ヨハネ〉「女神の聖域を汚すものは地獄の業火に焼かれるがいいわ!!…それはともかく、3人ともやるじゃない。このヨハネの心を震わせるとはね」

〈フラワーサークル〉「一生懸命やっつるのが伝わってくる感じ…自分を表現できる皆さんがとってもキラキラして見えました」

「あと、これも見て」

お姉さんがコメントを指差す。

「…あれ？これって」

へりこピン〜【皆さんの言う通り、歌も踊りもスクールアイドルとしてはまだまだだと思えます。そのことに関して文句があるのなら構いません。でも彼女たちの故郷を、大切な場所をバカにしないでください】

【私はついこの間内浦に来たばかりの高校生です。正直最初はちよつと嫌でした。前に住んでいた秋葉原が懐かしいと感じる時もありました】

これってまさか…

「梨子…ちゃん…?」

【でも、だからといって秋葉原が優れているわけでも、内浦が劣っているわけでもない。それぞれに素晴らしいところがある。そしてここ内浦の「素晴らしいところ」を全力で見せてくれた3人を、私は誇りに思います】

【次も楽しみにしています。頑張ってください！】

「…やめるなら止めはしないよ。ただこれだけは覚えておいて。少なくともここには、あなた達を待っている人がいるって事を」

お姉さんは静かにそう言って、部室を出た。

6月24日（金） どしや降り

私たちのデビューは、こんな結果で終わってしまった。世の中そんなに甘くない。わかってるけど、やっぱり結構きつい…かな。

知らない誰かにけなされるって、想像以上に辛いんだね。

でも、私たちを見てくれる人がいる。楽しみにしてくれている人がいる。

知らない人に応援されるって、想像以上に嬉しいことだった。

だからさ、私決めたんだ。

私たちを待っている人がいるうちは、絶対に折れない！絶対に立ち止まらない！！

きつとこれから先、すつごく辛い思いをしたり、めちやくちや苦しい目にあったりすると思う。

本当のことをいえば、もうこんな事やめてしまいたい。

全部捨てて、ごく普通の高校生に戻れたらどんなにいいか。

でも、私たちはスクールアイドルだから。

一度負けたからって、背負っちゃったもの降ろせない。

私は、*μ's*みたいに輝きたい。

その想いだけは、絶対に変えたくないんだ。

たとえ…届かない星だとしても。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

6月25日(土) 雨のち晴れ

お姉さんを駅まで送って行きました。次に会うときに私たちの成長した姿を絶対に見せる!そう決めたんだ。もうへこんでなんかいられない!そんな私を後押しするかのよう、雨は止みました。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

7月15日(金) くもり

善子ちゃん、花丸ちゃん、果南ちゃんが加わって6人になったアイドル部。メンバーが増えたことで今まで以上に表現力の高いパフォーマンスができそう。練習が増えると共に絆創膏の数も増えていく。腕、脚、肩…家族全員、特に2人のお姉ちゃんには変な誤解をされてるみたい。

8月21日(日) 晴れ

梨子ちゃん 鞠莉ちゃん、ダイヤちゃんが加入!あの生徒会長が!?つてゆうかろ
ビイちゃんのお姉ちゃん!?!みたいな感じで最初はびっくりしたし、ちよつと怖かったけどね…話してみると、すつごく真面目で優しい子なんだ。

9人でカラオケに行つて、みんなとんでもないテンションで歌つてたなあ…ふふつ。

一緒に、苦しいときを乗り越えて。

一緒に、険しい壁を飛び越えて。

そんな仲間と過ごす日々が、ものすごく楽しい。

テンション高い司会が、余計に緊張感を煽ってくる。

「千歌、大丈夫?」

「私たちに出来ることがあれば、なんでも言ってみてね?」

裏方スタッフが声をかけてくれたおかげで、ほんのちよつとだけ緊張が解けた。

「ありがとう、2人とも…よし、そろそろ時間だね!みんな、行こう!」

私たち9人は、舞台袖からステージに出るために歩き出した。

…もしも、誰もいなかったら。

私、もう立ち上がれないかも。

誰か見に来てくれないかな。

せめて5人くらいは——

「…え?」

ワアアアアアア…!!!!

溢れんばかりの歓声が、鼓膜の内側まで響く。

一瞬、自分の目を、耳を全てを疑った。え?この人たちみんな、私たちを見にきたの

『さあさあ皆さまお待ちかねーA q o u r sの皆さんです！、それじゃありーダーの高海千歌さん、何か一言！』

「ええ!?!は、はい…」

司会にマイクを渡される。何言えばいいの〜緊張するう…と、とにかく挨拶だね、挨拶!

「み…」

「み、皆さんはじめました!!!」

………

「あつ………あー!間違えた!、はじめまして!」

しよっぱなから間違えちゃった…恥ずかしい〜

「私たちは、浦の星女学院を代表するスクールアイドル、『Aqours』です！今日は楽しんでいってくださいね！」

『はい、千歌ちゃんありがとう！それじゃあ早速歌ってもらおうか！まずはこの曲「S
tep! ZERO to ONE!」』



9月24日(土) 快晴!

文化祭大成功！お客さんも喜んでくれたみたい。Aqoursとしてのデビューは、最高の形で迎えることが出来た。あと、初期メンバー3人で作ったユニット『CYARON!』としても歌わせてもらいました。私たちの取り柄といえば、元気しかないから

他のスクールアイドルの誰でもない、
私たちだけの：「A q o u r s」だけの輝きを、
世界中のみんなに届けたい。
その夢を叶えるために：
高海千歌、ファイトだよっ！

おしまい

勝利のみかんをこの手に！〜友情オレンジ〜

サ〜……ザバ〜ン……

「曜ちゃん、待ってたよ」

ある海岸で風が吹く中、ジャージを羽織っている私……高海千歌は腕を組んで少し微笑んで言った。

「早いね千歌ちゃん」

そしてその場に到着したジャージを背負っている渡辺曜……曜ちゃんもまた少し微笑んで言った。

「待ち合わせの集合10分前には来ておくべきだつて作者が言ってたよ」

「でもまだ30分前だよ？ 私も人のこと言えないけどさ」

「でも、遅れるよりはマシでしょ？」

「まあそうだけどね。さ、あとは梨子ちゃんだけか」

「そうだね」

私たちは話してふっと笑いあった。

こうなつたのには理由があつた。

それは1ヶ月前のこと……

「うーん、みかん美味しいな」

「そうだね」

「ふふっ、たくさん食べてね」

その日、私と曜ちゃんと同じく浦の星女学院スクールアイドル、Aqoursのメンバー桜内梨子……梨子ちゃんは、梨子ちゃんのいとこが送ってくれたというみかんを梨子ちゃんの家で食べていた。

「でも、その梨子ちゃんのいとこの人、なんでみかんを送ってくれたの?……はむっ」

私はそう言ってみかんを一口食べた。

「この前、Aqoursのことを話したの。もちろん千歌ちゃんたちのこともね。それで仲がいい千歌ちゃんと曜ちゃんがみかん好きなんだって言ったら、いつも私がお世話になってるからよかつたらこれ食べなさいって送ってきたの」

「なるほど、またお礼しないと……はむっ」

曜ちゃんはそう言う口に向かつてみかんを投げて食べた。

「そのいとこの人もよくわかつてるね。千歌が誰よりもみかんを愛してると悟ったからこんなにくさんのみかんを送ってくれたんだよ……はむっ」

私はダンボールにまだ詰まっているみかんを見て、また一つみかんを口に入れた。

「千歌ちゃん何言ってるの？私が誰よりもみかんを愛してるんだよ……はむっ」

曜ちゃんはそう言ってみかんをまた一つ口に入れた。

「私だよ！」

「いや私！」

「はむっ……」

私と曜ちゃんは立ち上がって言い合うと、また一つみかんを食べた。

「ちよつと2人とも〜」

「梨子ちゃんは黙ってて！……はむっ」

「それでも食べるんだね……あはははは……」

私たちは声を合わせて言ってきた一口みかんを食べた。

「よし、ならどつちが真のみかん好きか、1ヶ月後に海岸で決闘だ！」

「望むところだよ！」

「はむっ……」

私たちは決闘だと燃えて、またみかんを食べた。

「じゃ、私は早速特訓してこよう!」

「えっ!?!」

「じゃあ私も」

「えっ、千歌ちゃんまで!?!」

私たちははやく特訓したかったから荷物をまとめた。

「あ、ちゃんと袋にみかんつめなきや……」

「あ、私も私も……」

「あははは……」

私たちがダンボールに入っていたみかんを何個も袋につめ始めると、梨子ちゃんは苦笑いをした。

「あ、梨子ちゃん審判よろしくね〜!」

「えっ、ちよつと待って、なんで私なの〜!?!……行っちゃった……」

そして私と曜ちゃんの世界で一番みかんを愛しているものを決める戦いのための特

訓が始まったのだ!

私は森で、曜ちゃんは海岸で特訓をした。その特訓はキツイものだった。

「……………」

私は森の中で静かに神経を集中させていた。

サツと木の葉が風で揺れたのがわかる。

「っ……………」

そして私は“あの”気配を感じて手のひらを上にして横に出した。

ポン……………」

「うん……………バツチリだね」

手に乗ったのはもちろんみかん。

そしてそのみかんを口に入れた。

ヒュ〜トン……………」

「いたっ!」

くう〜みかんが頭に落ちてきたよ。

そして1ヶ月が過ぎて、冒頭に至るってわけ。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

「あ、梨子ちゃん来た!」

「ご、ごめんっ! 2人とも早いね」

「梨子ちゃん、集合時間の10分前には来るものだって作者も言ってたでしょ?」

曜ちゃんは目を瞑りながら腰に手を当てて人差し指を振って言った。

「ご、ごめん……でも言われた通りみかんは持ってきたよ」

梨子ちゃんは持つていたみかんが入っている袋を見せた。

「おお、これが勝者の証だね!」

「じゃあ、梨子ちゃんも来たことだしそろそろ始めようか!」

「だね!」

そう言つて私と曜ちゃんはかけていたジャージを投げた。

梨子ちゃんはそのジャージを拾つて砂をはらい、腕にかけてくれた。ありがとう梨子ちゃん。

「さ、決めようか……どちらが真のみかん好きかをね！」

「そうだね！ いぎ、勝負！」

私たちはそう言つて戦鬪の構えになった。

「じゃあ、早速……」

そのとき、梨子ちゃんがポケットからあるものを取り出そうとしたけど、私たちの戦いはもう始まつてる！

「てやあ〜！」

ズガン！

「ええ〜!？」

私と曜ちゃんは互いに突進し、右拳をぶつけ合った。

ドカドカドカドカドカドカ……

私たちは何度も拳をぶつけ合った。

「あれ、あれえ〜？」

梨子ちゃんは何故か予想外の展開に驚いていた。

あれ、言わなかったつけ？

「普通にみかん好きを決めるんだったらクイズで勝負なのかなって思つて必死で勉強し

てきたのに……」

梨子ちゃんはそう言ってポケットの単語帳を残念そうに見つめた。

あとから聞いたんだけど、そこにはびつしりとみかんに関するクイズが書かれていたんだって!

「そこだあ〜!」

「ぐはっ……!」

「曜ちゃん!」

私は曜ちゃんの右脇腹に一発を入れた。

曜ちゃんはその衝撃で少し浮いた。

「まだまだ〜!」

私さらには続いて曜ちゃんの左腕を左手で掴みグルグルと回した。

「てやあ〜!」

ピュ〜……ドカン!

「くはっ……!」

私は何度か回して曜ちゃんを堤防に向かって投げた。

曜ちゃんはその衝撃で堤防に練り込んだ。

「千歌ちゃん、やりすぎだって!曜ちゃん、大丈夫?」

梨子ちゃんが曜ちゃんを心配して駆け寄った。

「えへへ、平気だよ……これぐらい！ヨソソ口！！」

曜ちゃんはそう叫んで片腕を練り込んでいる堤防から外し、そしてもう片方も外して残りの部分もすべて外した。

「流石曜ちゃんだね」

私はニタツと笑った。だって楽しいんだもん！

「えへへ、でもまだ本気は出してないよ？」

曜ちゃんはこっちに歩きながら言った。

「それは千歌もだよ」

「そうだよね、じゃあ本気出していくよ〜！」

曜ちゃんはスピードをあげて走ってきた。

そして千歌の周りをずっとまわり続けた。

「これは……くっ、どこから来る……？」

私は構えてどこから攻撃してくるか警戒した。

そして曜ちゃんは隙を狙って突進して攻撃してきてまた回り、攻撃してまた回りを繰り返した。

曜ちゃんの姿を捉えるのも難しいんだ……これ……

それでも曜ちゃんの攻撃の手はどんどんスピードを上がっていった。

「ただっ……くらつてるだけのっ……千歌じゃっ……ないよっ!」

パン!

「っ……!?!」

攻撃をくらいながらもなんとパンチを手で受け止めた。曜ちゃんはそれに驚いてるみたいだった。

「ふっ、これからだよ!」

私は受け止めた逆の手でパンチをした。

パン!

でも、曜ちゃんも私のパンチを手で受け止めた。

「へへっ、なかなかやるね千歌ちゃん」

「曜ちゃんこそ!」

「だけど本当の戦いはこれからだよ!」

「望むところだよ! あ、今のは『曜ちゃんの曜』と『望むとこ……スキあり!』ぐはっ
!」

「ええく!?!」

曜ちゃんは千歌がダジャレの解説をしているところにアッパーをしてきた。もう、今

からが面白いのに〜！

「くっ……！！」

「えっ……千歌ちゃん……？」

梨子ちゃんは目の前の光景に目を丸くした。

「へへっ、やっぱり千歌ちゃんも使えたんだね……舞空術！」

曜ちゃんは鼻下を人差し指で擦って言った。そう、私のは上に飛ばされたけど途中で空中に止まったのだ！

「当たり前だよ。μsに憧れて天下一強いスクールアイドルを決めるラブライブ！を
目指してるんだもん！これぐらい使えて当然だよ！」

「やっぱりそうだよね！」

「ラブライブ！ってそんなんだっけ？」

「じゃ、私も行こうかな……」

曜ちゃんも舞空術を使った。

私たちは空中で向かい合わせになった。

「じゃあ……いくよー！」

「いー！」

ドン！ドン！

ドカバコドカバコドカバコドカバコドカバコドカバコドカバコ……………

私たちは拳と膝をぶつけ合った。

私たちはしばらく拳と膝をぶつけ合うと、一旦距離をとった。

「いくよー!」

シュン……………

「千歌ちゃんが消えた!?!」

「くっ、どこに……………?」

「こつちだよ!」

「ぐはっ……………!」

私は曜ちゃんの後ろに瞬間移動し、首のところを両手を合わせて握って叩いた。

「まだまだ!」

シュン……………

「ぐほっ……………!」

続いて曜ちゃんの腹を膝で蹴った。

「いくよー!覚悟はできた?必殺っ!」

そして私は拳を構えた。その拳はオレンジ色の光を放った。

今だ!

『アイアン・オレンジフィスト』!!」

ドゴォーン!

私が放ったアイアンオレンジフィストが炸裂し、曜ちゃんはその衝撃で吹き飛んだ。

「くっ……………」

曜ちゃんは必死に止まろうとしたけど……

シユン……

「無駄だよ……………曜ちゃん!」

「ぐはっ!」

私はまた首を両手を合わせて握って叩いた。

ピュー……………ドボーン!

「曜ちゃん!」

曜ちゃんはその攻撃で海に落ちた。その衝撃で水柱が起こった。

「これでどうだ!?!」

私は倒したと思って海面の近くまで下がっていった。

「ふっ……………」

ガシッ……

「っ……………しまっ!?!」

「てやあー！」

「ぶくおー！」

曜ちゃんは腹にパンチをしてきた。

ドン！ドン！ドン！ドン！……

そのまま曜ちゃんは何発も膝や拳で間隔をあげながら攻撃してきたんだ。

「やあ〜！」

「ぶくおー！」

「今だ！ひっさーっ！」

曜ちゃんは腹を膝で蹴って私が怯むと少し距離をとった。

すると曜ちゃんが手のひら同士を少し離すとその間に風が集まり、水の球体ができていった。

『ウオーター・オレンジタイフーン！！』

曜ちゃんがそのまま手のひらをこっちに向けてくるとそこから竜巻が起こって私を襲ってきた。

「ぶくくくくくく〜！（うわあ〜！）」

ザバーー!!

「わっ……………」

梨子ちゃんは海岸で海を見ていて、急に海中から伸びてきた竜巻にびっくりしてた。

「かつ……………くはっ!」

私はそのまま飛ばされ海岸に倒れた。

「えっ、千歌ちゃん!」

「ふう……………できたできた」

「曜ちゃん!」

梨子ちゃんは急に飛んできた私と曜ちゃんが海中から歩いて海岸に上ってきたのに驚いた。

「この技術、結構特訓して10回に1回ぐらいしかできなかったんだ。でも成功した。やっぱりみかんへの思いが強いつてことかな?」

「へへへへへ、私の方が……………強いに……………決まってるよ」

私はちよつと苦しかったけど、頑張つて立ち上がった。

「まだやれるんだね……………じゃあ、そろそろトドメをささないとね」

「私だつて……………!」

「はあああああああ!!!」

ズゴオオオオオオオオオ!!

「きゃっ!」

私と曜ちゃんが力を入れると私たちをオーラが覆った。梨子ちゃんは顔を腕で隠した。

「いくよ!いま未来、変えてみたくなったよ!」

私は片手に力を込めて拳を握り、腕を後ろに引いた。そして私の後ろは光り輝いている!

「私だって!空色カーテンオープン!海色ゲートウェルカム!」

曜ちゃんが片手を広げて腕をあげた。すると曜ちゃんの後ろに水族館の水槽が広がった。

「はっ……見える!私には、2人の後ろになにかがあるの見える!」

梨子ちゃんも見えるんだね。

「奥義!!」

私たちがそう叫ぶと私たちを覆っていたオーラはさつきよりも勢いを増した。

「私のみかんは輝いてるスマッシュ!」てやああああああ!!」

私はものすごいスピードで曜に向かってオーラを纏った拳を向けて突進した。

「『オレンジアアクアリウム』!ヨーソロオオオオオオオ!!」

曜ちゃんは私に向かって片手でもう片方の手首を持って前に出し、その手から水のビームが出た。

ズガアアアアアン!!

私の拳と曜ちゃんのビームが当たり、衝撃波が起こった。

「うおおおおおおお!!!」

そして爆風が起こり、当たりはそれで明るく照らされた。

梨子ちゃんが目を恐る恐る開けると、そこには仰向けに倒れている私たちがいたんだ。

「千歌ちゃん! 曜ちゃん!」

梨子ちゃんは心配して私たちの元へ走った。

「えへへへ、曜ちゃんは強いね〜」

「千歌ちゃんこそ、強いよ」

「ははははははっ!」

「よいしよつと、ねえ曜ちゃん」

「ほっ、なに?」

私体が体を起こすと曜ちゃんも体を起こした。

「この勝負はどっちも勝ちつてことにしてさ、もう2人が世界で一番みかん好きつてこ
とでいいんじゃない？」

「へへっ、そうだね」

私たちは見つめあつて笑い合つた。

そして私が右手を出すと曜ちゃんはそれを握つた。

梨子ちゃんはそんな私たちを見てふつと微笑んだ。

でもやっぱり……

「ほら、梨子ちゃんも！」

「そうだよ！」

私たちは梨子ちゃんにこつちに来るようにと手を出した。

「っ……うん！」

そして梨子ちゃんは私たち近づいて、3人で互いに手をつないで笑いあつた。

「私たち、ずっと仲良しだよ！」

「当たり前じゃん！」

「ふふっ、そうだね」

3人の友情はこの出来事によってより硬いものになったんだ!

「お待ちなさい!」

「「っ!」」

でも、こんないい雰囲気をつち壊しにして、ある人影が堤防の上に見えた。

「あんた誰!」

「そっだよ! いい感じだったのにぶち壊しにしないでよ!」

曜ちゃんと私は叫んだ。

「私の名はミセスオレンジ・ナイト！このナイトは騎士ではありません、夜なのです！N i g h tなのです！オレンジ星から来たこの宇宙で一番みかんを愛するもの！ここにみかん好きが起こすパワー、『オレンジ・パワー』を感じたので来てみれば、ただの女でしたか……しかも高校生……」

戦いは見させてもらいました。2人ともすごいパワーでしたね。だがしかし、私には敵いません！」

「違うもん！私たちが一番みかん好きなの！」

「そうだそうだ！」

「あの人怖い……」

「大丈夫だよ梨子ちゃん！」

「私たちがついてる！」

私たち2人は梨子を守るように前に立った。

「ほうほう、友情ごっこですか……ならばその友情とやらでこの私を倒してみなさい！今回は特別に、いきなりフルパワーで相手してあげますよ……はあああああああ！！」

ミセスオレンジ・ナイトが力を入れると、オレンジ色のオーラが勢いよく覆った。

空には人々を不安にさせるような黒い雲がかかった。

「くっ、すごいパワーだね……」

「口だけじゃないってことか……」

千歌と曜ちゃんはミセスオレンジ・ナイトを睨んで言った。

「うう……」

梨子ちゃんは頭を抱えていた。きつと怖いんだ。

「いきますわよ!」

そう言うときセスオレンジ・ナイトは勢いよく私たちに向かってきた。

「曜ちゃん、梨子ちゃんを!」

「わかった!」

「てやあ!」

「くっ!」

ドカーン!

曜ちゃんは梨子ちゃんを遠くに連れていき、千歌はミセスオレンジ・ナイトのパンチを腕をクロスにして防いだ。

「そうでなければ面白くありません!てやあ!てやあ!てやあ!……」

ミセスオレンジ・ナイトはそのまま一方的に攻撃をしてきた。

でも私は反撃できず、ずっと攻撃を防いでいた。

「強い……!!」

「はははははっ! 防いでるだけでは、真のみかん好きにはなれませんよ! てやあ! てやあ! てやあ! ……」

「くっ……!!」

「梨子ちゃん、ここで待っててね」

「曜ちゃん!」

「心配しないで、千歌ちゃんと2人であいつを倒すから……」

「『うちつつちーパンチ』! てやあああああ!!」

「なんですすって!?! ぐほっ……!!」

すると曜ちゃんが勢いよく走ってきて、そのままの勢いでミセスオレンジ・ナイトの頬に『うちつつちーパンチ』をした。そのパンチをしているとき、曜ちゃんとうちつつちーが被つて見えた。

ミセスオレンジ・ナイトは予想外に足が早かったのでそれをまともにくらい、飛ばされた。

「千歌ちゃん、大丈夫?」

「曜ちゃん……うん!」

私たちはそう言ってミセスオレンジ・ナイトを睨んだ。

「この私を……怒らせましたわね……殺してやりますわ……!!かあああああああ……!!」

ミセスオレンジ・ナイトは両人差し指指先に力をためた。

「『デス・オレンジビーム』!」

そしてそれらの指先からオレンジ色のビームが発射され、こつちに向かってきた。

「やばっ……!」

これは……避けられないよ……もう……

そして私と曜ちゃんは誰かに突き飛ばされた。

「えっ……?」

「うっ……!」

その目の前の光景に私たちは目を大きく開いた。

ドサッ……

私たちを突き飛ばしてビームをくらった梨子ちゃんが倒れたんだ。

「梨子ちゃん!」

私たちは立ち上がって梨子ちゃんに駆け寄った。

「2人とも……無事で……よかった……」

「梨子ちゃん、しつかりして！梨子ちゃん！」

曜ちゃんは目に涙を浮かべながら梨子ちゃんを抱き抱えて揺すった。

「えへへへ、私だって……ね……」

そう言つて梨子ちゃんは力尽きたように意識を失つた……

「ちよつと……梨子ちゃん……梨子ちゃん！」

曜ちゃんはずつと必死に梨子ちゃんの名前を呼んだんだけど、返事はない。

「ははははははっ！哀れですわね……さて、次はあなた方の番ですわよ。」

あの”みかん好きではない一般人”のように、殺してあげますわよ」

ザツ……

なんて言つた……あいつ……！

「千歌ちゃん……？」

「くつ……そ、その……その……その一般人は……」

そして私の頭には梨子ちゃんが転校してきたあの日のこと、みんなでAqoursとして活動してきた毎日のことが蘇ってきた。

「あ？」

「その一般人って……梨子ちゃんのことか……梨子ちゃんのことか……!!!」

私がそう叫ぶと千歌をもものすごく大きなオーラが覆った。

「なっ……!?!」

ミセスオレンジ・ナイトは驚きの表情を浮かべた。

「千歌ちゃん……」

曜ちゃんはそんな千歌を見て目を大きく開いていた。

「曜ちゃん、梨子ちゃんのことよろしくね」

そう言っつて私はミセスオレンジ・ナイトの方に歩いた。

「なに……このパワーは……一体お前は……何者なんですの!?!」

「私はただの……みかん好きで……友達が大好きな高校生だ!」

シユン……

ドカーン!

「ぐほっ……!」

私はそう叫んで瞬間移動して、ミセスオレンジ・ナイトの腹にパンチを入れた。

「てやあ!てやあ!てやあ!てやあ!てやあ!てやあ!……!」

私はそのまま何発も何発もパンチを入れた。

曜ちゃんと梨子ちゃんの想いも込めて……

「がはっ……!!」

「ヨーソロオオオオオオオ！」

「っ……!!」

「ぐはあ！」

そして私は右拳に力を集中させ、全力のパンチをミセスオレンジ・ナイトに入れた。

ミセスオレンジ・ナイトはその衝撃で吹っ飛んだ。

「はあ、はあ、はあ、はあ……どうだ！」

私はミセスオレンジ・ナイトを睨んだ。

「くくくくっ……ははははははははっ！そうか！こんなところにいるのか！」スーパーオレン

人「は!!」

「スーパー……オレン人……」

曜ちゃんは聞きなれない単語に困惑した。

でも、わかることがある……

それは……

「あつ、これはね！オレンジと人をかけていて……」

「ダジャレの解説はいいから！」

「スーパーオレン人がまさか地球にいたとは……もはやこの星を壊すしかないようです

ね……」

「もはやこの星の内容全てをを消すつもりなんだね……あつ、いまのは内容とあの人が言った『ないようですね』をかけていて……」

「だからダジャレの解説はいいって!」

「そんな冗談を言ってられるのも今のうちですよ!」

ミセスオレンジ・ナイトはそう言って宙に浮いて、片腕を上にあげた。

そしてパワーをためて頭に大きな球体を作った。

そのとてつもないパワーで海も荒れ、空も荒れた。

「これは……!」

「このままじゃ……地球が……!」

私と曜ちゃんはその球体を見て唾を飲み込んだ。

考えろ……考えろ……あの球体を防ぐ方法を……

あとダジャレも……ついでに……

「そうだ!」

「なに曜ちゃん、ダジャレでも思いついた?」

「こんな状況でダジャレ考えてるのは千歌ちゃんだけだよ!じゃなくて、あの球体を防ぐ方法を思いついたんだって!」

「本当に!? なになに?」

「なら千歌ちゃん、あいつの方を向いて」

「え、うん……」

私は少し困惑したけどミセスオレンジ・ナイトの方を向いた。

「千歌ちゃんに私の力を……!」

そう言つて曜ちゃんは千歌の背中に手を当てた。

そしたらなんだか背中があつたかくなつたんだ。

これつて……曜ちゃんのパワー?

「はっ、力が……!」

「これで……あいつを……倒し……て」

バタン……

「つ……曜ちゃん! 曜ちゃん!」

曜ちゃんは私にパワーを預けて倒れてしまったんだ。

「ふははははっ! どうせこれからみんな死ぬのに、友に力を与えるなんて……なんて無

茶なことよ!」

「曜ちゃん、ありがとう……2人の分まであいつを倒すよ!」

「ふははははっ! これで終わりです!」

「終わりじゃないもん!絶対あなたを倒してみせる!」

「やれるものならやってみなさい!!」

「やってやる!!はあああああああああ!!!」

私は思いつきり力を入れた。

曜ちゃんからもらった力と、梨子ちゃんを殺した怒りも込めて!

「さて、これが防げますかね?

『デス・オレンジボール』!」

そしてミセスオレンジ・ナイトは腕を振り下ろして、その球体は私に向かってきた。

「みんなの想いをこの拳に込める……!!この新たな輝きで、キラキラとした未来を掴み

取る!

『アクア・ジ・オレンジ』!

ヨオオオオオオオソロオオオオオオオオオオ!!!」

ズゴオオオオオオオオオオ!

「くっ……!負けてたまるか……!!!」

「きえええええええええ!!!」

私もミセスオレンジ・ナイトも思いつきり力を入れた。

絶対に負けない!負けない!!負けない!!!

「たああああああああ!!!」

パァーン!

「なにっ……!?!?」

私のパンチで球体が割れて全部がみかんになってあたりに落ちていった。

「まだまだああああああああ!!!」

私はそのままミセスオレンジ・ナイトに向かって突っ込んだ。

「ぐああああああああ!!!」

そして私の拳はミセスオレンジ・ナイトの腹にクリーンヒットし、ミセスオレンジ・ナイトは吹っ飛んでいった。

そして黒かった空も見事な青空に戻った。荒れていた海もいつも通り綺麗な音を立てていた。

「はあ、はあ、はあ、はあ……勝った……」

私は息を切らしながらミセスオレンジ・ナイトが飛んでいった方を見た。

「はっ……梨子ちゃん、曜ちゃん!」

私ははつとして梨子ちゃんと曜ちゃんの方に向かって降りていった。

「曜ちゃん……梨子ちゃん……戻ってきてよ……」

私は涙を流した。

その涙はあるひとつのみかんに当たった。
すると……………

「つ……………みかんが……………光ってる……………!?!」

その涙が落ちたみかんと、その周りの6つの計7つのみかんが光出したんだ。
そしてその光はあたりを包んだ。

『汝の願いは聞き届けた。汝の願いを叶えよう!』

そしてどんどんと光がみかんに吸収されて、その7つのみかんは空に上がって行って
バラバラに飛んでいった。

私はなにが起こったかわからなかった。

でも……………

「ん……………」

「えっ、梨子ちゃん、曜ちゃん!」

私は2人がピクって動いたかと思っただけで声をかけたんだ。

「ん……………千歌……………ちゃん?」

「あれ……………私は……………」

「つ……………やったー!梨子ちゃん、曜ちゃんよかつた〜!」

私は嬉しくて2人に抱きついた。

「そうだ……私あの人の攻撃をくらって……」

「私も、千歌ちゃんに力を全部あげたから……でも、なんで？」

「なんかね、みかんがピカーって光って2人を復活させてくれたんだ！」

「「ええ〜!?!」」

「いやあ〜不思議なこともあるもんだね〜」

「でもこれで万事解決だね！」

「うん！」

「よお〜し！じゃあ地球も救ったことだし、みんなでみかんを食べよう！」

「お〜！」

「やっぱりみかんなんだね……あははは……」

そして私たちは梨子ちゃんの家でみかんを食べることにしたんだ！

一方そのころ……

「だからなんでああいうふうになるんですの!?! 一歩間違えれば地球が壊れていたかもしれませんのよ!?!」

「Sorry……ダイヤ……」

なんと、ミセスオレンジ・ナイトはアーマードスーツで、その正体は同じAqoursのメンバーで、浦の星女学院の生徒会長黒澤ダイヤ……ダイヤさんだったのだ!

そしてミセスオレンジ・ナイトは同じくAqoursのメンバーの小原鞠莉……鞠莉さんが作らせたものだったのだ!

それで、そのときの戦いのことを同じAqoursのメンバーの松浦果南……果南ちゃんに話したら果南ちゃんが一言……

「小原家でしょ……」

「……………つていう劇をしようよ！」

「いやいやいや、なんだかどこかで見ただことあることばっかりだったよ？」

「そうだよ。それにこれ訳分らないよ〜」

「曜ちゃん、梨子ちゃん、それがいいんだよ！訳わかめだからいいんだよ！題名は……『オレンジボール』……うん、完璧！」

あつ、そういえばいまのは、訳分らないとわかめをかけていて……」

「ダジャレの解説はいいから〜」

え、今なにしているかって？

そんなの決まってるよ！文化祭でA q o u r s する出し物の話し合いで、私の案を話してるの！

「つていうかさあ〜、これ絶対○○○○○○○の影響受けてるよね？」

「D r a g o n B o o l e ? 聞いたことはあるよ！」

「それに私はなんですかの!?!アーマードスーツで地球が壊れるつておかしいですわ！それにミセスオレンジ・ナイトつて絶対に○○○○○のパクリですわよね!?!」

「で、でもお姉ちゃんたちは出てるだけマシだよ……ルビイたち1年生組は……出てない訳だし……」

「あ、それじゃあ私たちは何かほかの役があるとか?例えば……木とか?」

「なんですって!?!この墮天使ヨハネを呪い動かぬ者にするってあんまりよ!?!」

ああ、この3人は初登場!

みんなA q o u r s のメンバーで1年生の黒澤ルビイ……ルビイちゃん、国木田花丸……花丸ちゃん、そして津島善子……善子ちゃん。

「でもちゃんと善子ちゃんは出てるよ?」

「ずらあ?」

「え、なにになに!?!」

「善子ちゃん詰め寄りすぎだよ」

梨子ちゃんは善子ちゃんをなだめた。

「えつとね……オレンジボール、七つのみかんの声だよ!」

「声だけ!?!」

善子ちゃんは驚いてズッコケた。

きつと嬉しかったんだね!

「でも私たちはスクールアイドルなんだよ？歌ったり踊ったりはしないの？」

「ああ、そうだった！梨子ちゃんナイス！ならそのシーンを追加して……」

「ちよつとお待ちなさい！なんで途中で歌ったり踊ったりしなくてはなりませんの？それこそ訳がわかりませんわ！」

「あれだよ、ダイヤちゃん……ミセスオレンジ・ナイトは踊りながらデス・オレンジビームをいろんな方向に放つたらいいんだよ！」

「それこそ訳がわかりませんわ！」

「しかもどこかの飲み物のCMで見たことある感じだしね」

「ああ、たしかに……」

「それに私のセリフもPVで言ってたやつだし……」

「だって印象に残ってるんだよ？あの果南ちゃんのシーン」

「絶対それ作者の思ってることだよね」

「うん！」

「だよねえ」

あのヘリコプターを見上げて『小原家でしょ……』って言うあのシーンはいいよね！作者も言ってたよ！うんうん！

「じゃあ決まりだね!早速準備を……」

「やりませんわ!」

「やらない!」

「やらないって!」

「やらないよ!」

「やらないぞら!」

「え〜!徹夜で考えたのに〜!」

ダイヤさんと梨子ちゃんと果南ちゃんとルビイちゃんと花丸ちゃんに反対されてこの劇の案はなくなり、普通にライブをすることになったの。

「あ、そうだ!鞠莉さんの家のチカラを使えばできるよね!ね!」

「Oh!Nice idea!早速……あ……」

「千歌さん……!」

鞠莉さんはスマホを持つと、プルプル震えているダイヤさんを見て止まった。

「は、はい!」

「私が生徒会長である限り……このような劇は……認めませんっ！」

ザアアアアアアアアアアアア!

「うわあ〜ん!〜ごめんなさ〜い!」

ダイヤさんが叫ぶと開いていた窓から強い風が吹いた。

もう……やりたかったのに〜

そういえばこのシーンもなんかデジャヴだね。

テストという名の戦い

ここは静岡県沼津市

海辺の町、内浦にある私立浦の星女学院。

ここで1つの物語が始まろうとしていた。

この物語は、スクールアイドルを結成する1年前のお話……

浦の星女学院 1年生教室

オレンジ色の髪の毛のショートカットでピンク色の瞳の子、高海千歌は教室で担任の先生に注意を受けていた。

「高海さん、次のテストで赤点を1つでもとったら補修ですよ」

「は、はい」

そう、千歌は数々のテストで赤点を量産してきた。ザ○みたいに……
鞆を持ち教室を出て、昇降口に向かった。

「はあく。まずいことになってきたよ」

廊下をとぼとぼと歩く千歌。それも仕方ないだろう。赤点を1つでも取ったらという条件だが、ひどい時には千歌はテストで2つ赤点を取ったりしていたからだ。

昇降口を出ると、クリーム色の髪でショートカット、サファイア色の瞳の子、渡辺曜が待っていた。

「先生なんだって?」

「次のテストで赤点、1つでも取ったら補修だって…」

「ええーヤバイよそれ。しかもお母さんからお小遣い減らされるとか言われてなかったっけ?」

すると千歌は思い出したかのように叫んだ。

「あつー!!忘れてた!」

「忘れてたって…」

ホントに千歌ちゃんは……でも赤点1つでも取ったらって、これは勉強しないと補修になっちゃうね。

「うう〜どうしよう。助けて曜ちゃん」

曜に抱きつく千歌。

「よしよし」

千歌の頭を撫でながら考える曜。

私も教える限界があるし…果南さんも勉強あるし…あつ!

「なら『お兄ちゃん』に頼んでみようよ!」

「いいの?」

「帰って聞いてみようよ!」

2人は走って曜の家に向かった。

お兄ちゃんと呼ばれている人一体誰なのか…

渡辺家

「もうすぐテストか。正直めんどうな」

寝つ転がりながら言う。テーブルの上には数冊の教科書やワーク、ノートが置いてあった。

「ただいまー」

「お邪魔しまーす!」

曜と千歌がリビングにあがると、そこにはだらしなく寝つ転がっている青年の姿があった。

「お兄ちゃん!お願いがあるの」

「なんだ?」

「私に勉強を教えてください!」

と両手を合わせて頼み込んだ。

今千歌ちゃんが頼み込んでる人は私のお兄ちゃんです。見た目はやる気ないけどね

…でも私にはあまあまのお兄ちゃんです。

「待て待て。まずは話を聞かせてくれよ。テレビ見ながら」

「それ聞くきないやつだよ！」

千歌はやる気のない曜の兄に講義するが親父みたいに横になり聞くきはゼロのよう
だ。

「お兄ちゃん！困ってるんだから手伝ってよ」

「でもなく俺もテストあるしなく」

でたお兄ちゃんのめんどくさいところ。こうゆうところがなければいいんだけどな
く。仕方ないこうなったら。

「ねえお兄ちゃん」

「なんだよ」

「お願い…」

すると急に立ち上がった。

「わかった！任せとけ俺がなんとかしてやる!!」

「やったー！明日から頑張ろう!!」

「なに言ってるんだ？今からだぞ」

お兄ちゃんの最後の一言にグダーとし始めた千歌。

やる気になったお兄ちゃんは勉強に関してにはスパルタだから頑張つてね千歌ちゃん！

「どこ行くのかな？」

「えっ…私は自分で勉強出来るし…」

「いやいや。こうなつたら曜も強制参加だ」

「ええー」

こうして私と千歌ちゃんとお兄ちゃんの3人でテストまでの一週間、勉強をする事になったけど、千歌ちゃんがもてばいいけど……

「まずはなに出来ないの？」

「世界史とか国語とか…色々です」

「千歌ちゃん…それ全部だよ」

「まじかく。こりや大変だな」

するとお兄ちゃんは部屋に戻つて数冊の教科書を持つてきた。

あれお兄ちゃんが二年生の時の教科書だ。大掃除の時に捨てたのかと思つてた。

「テストの内容はほとんど暗記だと思うからどんどん覚えていこう」

「暗記なの？」

「数学だつて、公式憶えないと解けない。科学だつて計算あるけど公式もある」

なるほど…さすがお兄ちゃん！勉強毎日してるから知識がすごい！って感心してる場合じゃないか。

「なるほど」

「記憶に定着させるにはある程度期間を置くと整理されて記憶に定着される」

つまり寝る前にやったら次の日の寝る前やると覚えやすくなるということらしい。

「他には青で書くと覚えやすいよ」

「なんか出来る気がしてきた！」

「なら始めるぞ」

テーブルを囲んで黙々と勉強を始めた。

すごいあの千歌ちゃんが集中してる。これなら赤点回避も夢じゃないね！

数分後

「よし！漢字書き終わった！」

「どれどれ…」

ノートにびっしりと漢字が青い文字で書かれていた。曜が横から見ようとすると、少し斜めにしてくれた。

たくさん書いてあるけど…とどこどころ間違ってるのあるけどお兄ちゃん言わないのかな？

「よく頑張ったな千歌」

千歌の頭を優しく撫で始めた。

「えへへ」

「でも、ここところこらへん間違ってるから、少し休憩したら直して見ないでやってみな」
「わかった!」

普段あんなに褒めないのに千歌ちゃんのことには褒めるんだ……。頭まで撫でても
らつていいなあ。

「曜も適度に休憩しろよ。何時間もやっても疲れるだけだから」

「はーい」

集中すると時間が過ぎるのも早く外を見ると空はオレンジ色に染まっていた。

「もう夕方か」

「私そろそろ帰るね」

「そうだね」

千歌は帰る準備をし玄関に向かった。

「また明日学校でね!」

「じゃあね千歌ちゃん」

「じゃあなく寝る前に少しは勉強しろよ」

「うん。じゃあね曜ちゃん！お兄ちゃん！」

千歌が帰り、リビングに戻って片付けを始めた。

「俺やつとくから、曜は休んでな」

「ありがと」

自分の教科書と鞆を持ってじぶんの部屋に向かった。

ドアを開け中に入り、机の上に教科書と鞆を置きベッドに座った。

「疲れた〜」

お兄ちゃんが頭良くて本当に助かったよ。そうじゃなかったら今頃どうなっていたことやら。千歌ちゃんもやる気になってるからなんとかかなりそうだね！あとでお礼言っておかないとね。

夜

曜はお風呂からあがり服を着て、兄の部屋に向かった。

コンコン

「お兄ちゃん入るよ」

「どうぞ〜」

中に入るとお兄ちゃんはベッドの上でアイスを食べていた。

「行儀悪いよお兄ちゃん」

「わーってるよ。なんかようか？」

「お礼言おうと思ってる」

すると食べ終わったアイスの棒をゴミ箱に向かって投げ入れた。

「お礼なら千歌が赤点回避してからにしてくれ、まだ勉強は終わってないんだから」

「うん。お休みお兄ちゃん」

「まだ寝ないけどお休み」

時が経ち休みの日 テストまで残り4日前

ピンポーン

「ん？」

「私でるよ」

「おう。サンキュー」

玄関に行き鍵を開けドアを開けた。

「おは曜ちゃん！」

「おはよう千歌ちゃん…朝から元気だね。おは曜ちゃんって…」

「今のはおはようと曜ちゃんをかけて」

「説明しなくていいから」

千歌の後ろには青い髪でポニーテールの子、松浦果南も来ていた。

「おはよう果南さん」

「おはよう曜ちゃん」

千歌と果南を家の中に入れた。

「おはようお兄ちゃん！」

「おう。あれ？果南も来たのか」

「君一人じゃ大変だと思ってね」

「助かる」

4人でテーブルを囲んで勉強を始めた。

果南さんも来てお兄ちゃんも助かっただろうけど……千歌ちゃんの頭に巻いてある

ハチマキ面白いね。

「千歌ちゃん、そのハチマキ」

「気合いを入れるために作ったの！」

「シンプルだなく。赤点回避って」

「まあ千歌らしいちゃ千歌らしいけどね」

午後

「今日の勉強はここまでにして午後はどっか4人で出掛けるか」

「でも勉強はいいの?」

「ここんとこ千歌も曜も頑張ってるし。勉強ばっかじゃつまないだろ」

で、結局お兄ちゃんんの提案で午後はどこかに出掛けることになったけど……どこに行くんだらう? お兄ちゃんのことだから決めてないと思うけど。

「どこに行くの?」

「えつと……」

果南の質問に言葉が詰まる。

やっぱり決めてなかったパターンだ。

「私、海行きたい!」

「私も千歌ちゃんに賛成!」

元気よく答える2人。

海なら大歓迎! 最近泳いでなかったし。部活もなかったから高飛び込みもやってなかったんだよね。

「果南はいいのか? 海で」

「3人が良いって言うならいいよ」

「よし。なら決まりだな」

行くとわかればすぐに準備準備♪

千歌と果南は一旦家に帰り、海で待ち合わせする事になった。今から行く海は歩いて20分くらいで人通りもあんまりなくはしゃいでも迷惑はかからない。

「千歌達はまだ来てないな」

「だね」

「だねって言いながら泳ぐ準備するなよーって！」

隣に曜の姿はなかった。

バシャーーン！

（はえーよ。飛び込みに行くのはえーよ。いつの間にか隣にいないし）

「あつ！お兄ちゃん！」

「あれ？曜ちゃんは？」

すると海の方を指差した。

「早いね曜ちゃん」

「まあ仕方「私も私も！」ないだろって！人の話聞けよ！」

「まあまあ落ち着いて」

果南の一言で落ち着き、浜辺に向かい歩いた。

「でさっきの話の続きは？」

「曜もテスト期間で部活出来なくてストレス溜まってたんだろう」

「確かに」

浜辺に2人で並んで立っていると、先に海に入っていた2人が何か叫んでいた。

「果南ちゃんも早くおいでよ！」

「お兄ちゃんも！」

「君も呼ばれてるよ」

と言いながら果南は手を差し伸べた。

「いや。俺はいいよ。ゆっくりしたいから」

「そっか」

果南は千歌と曜のもとに向かった。

ポケットから音楽プレーヤーとイヤホンを出してイヤホンをプレーヤーに刺し、イヤホンを耳につけ再生ボタンを押した。

イントロが流れ始めた。

水が来ない浜に寝転がった。

(あくやっぱいいいな。μsの歌は)

今聴いている歌はstart:dash!!

疲れが溜まっていたのかそのまま意識が飛んだ。

「お兄ちゃん起きて！」

「全然起きないね」

お兄ちゃん一回寝るとなかなか起きないんだよね。イヤホンまでして…何聴いてるんだろう。

イヤホンを外し耳につけた。

何だろう？この曲。

「ん？なにしてるんだ？」

「やっと起きた。帰るよお兄ちゃん」

「わかった」

立ち上がり砂をほろつて落とした。

浜からあがり、千歌達とは家が逆方向なので別れた。

「じゃあねー！」

「うん。じゃあね！」

「テスト勉強頑張れよ〜千歌も果南も」

2人は家に向かい歩き始めた。

「楽しかったか？」

唐突に聞いてきた。

「もちろん楽しかった！」

「そっか…なら良かった」

そう言いながら曜の頭に手を乗せた。

顔を見るとたまに見せる優しい笑顔だった。

その日以降も4人で集まり沢山勉強しました。たまにお兄ちゃんがサボるため？かはわからないけど遊んだりしました。確かに勉強ばかりじゃ面白くないもんね。

あれからさらに時は過ぎてテストの返却日

曜の兄は落ち着かない様子だった。

(がらにもなく落ち着かねえ。曜と千歌はまだ帰ってこないのか?)

2人の帰りを今か今かと待っていた。

数分後、玄関が開き2人が帰って来た。

リビングに行くとき……

「テストどうだったんだ?」

「なんと……」

鞆からこそごととテスト用紙を出し広げてみせた。

「赤点ゼロ!目標達成く!」

「おおー!やったな千歌!」

晴れて目標を達成し、喜ぶ3人。

良かった。テストが返って来たときはもうドキドキ、ハラハラだったよ。私も前

回のテストより点数が高くなってたし。

「よし。千歌も赤点なかったし。遊んでこい!!」

「わかった!」

「君は行かないの?」

果南さんに言われそれを言わないでくれよみたいな顔してるけど、あれは単にめんどくさがってるだけだね。

「俺は…その…復習が」

「いいからいいから」

「ちよ! 待て果南!」

こうして千歌ちゃんの赤点回避が成功し私達の戦い(テスト)は終わった。

赤点回避も成功したので遊びました。千歌ちゃんはすごいはいはいでいて、お兄ちゃん果南さんは手を焼いていました。

その日の夜

コンコン

「入っていいか?」

「いいよ」

ドアが開き曜の兄が入って来た。

「どうしたの?」

「ちよつとな」

ベッドに座っていた曜の隣に座わった。するといきなり聞いて来た。

「テストどうだったんだ？」

「前より点数良かったよ」

「そうか」

「お兄ちゃんはどうだったの？」

いつもの感じだとお兄ちゃんいつも90点代なんだよね。私じゃもつと頑張らないとダメだけどさ。

「まあ全部90点代つてところだな」

「さすがお兄ちゃん！」

「ガリ勉だからな」

すると曜の頭に手を置いた。

「よく頑張ったな」

「う、うん。普段あんまり褒めてくれないのに今回はどうして？」

すると急に笑い始めた。

「あはははっ！」

「なんで笑うの!」

「そんなに褒めたことなかったか?」

「うん」

曜の頭を撫でながら答えた。

「そんなつもりはなかったんだけど。がらにあわないから…かな」

「確かに」

「お兄ちゃんは普段から褒めてくれないのはがらじゃないから…か。知らなかったな

」

「まあ、良くやった!」

「ありがとう。お兄ちゃん!」

ユビキリ

—— 黒澤ダイヤ

成績優秀、容姿端麗という四字熟語がよく似合う美人な女子高校生。

地元の静岡県の内浦で有名な旧網元の長女である彼女は、浦の星女学院”の生徒会長を務める三年生だ。

美人なのにプライドが高くて、

本当は人思いで優しいのに、完璧主義者故に中々理解し難い黒澤家の跡取り娘。

“浦の星女学院”でスクールアイドルが結成されて、彼女曰く『破廉恥な活動に不本意』ながらも加入したことで。彼女の周りの雰囲気やら環境やらがほんの少し変わった

気がした。

笑うようになった

照れるようになった

泣くようになった

そして、

今までの彼女とは思えないくらい、キラキラと輝いていた。

あの子が変わったのにはわけがある。

当然同じスクールアイドルとして活動をしている仲間や応援してくれる学校のクラスメート。

最初こそ反対し、『アイドルなんて辞めてしまえ』と激怒していたが、人気が出てきた

り彼女の顔に微笑みが頻繁に見られるようになったことから、父親は『勝手にしろ』と一言投げ捨てて、以降アイドルに一切関与していない。

だが、母親曰く応援はしているらしい…

その母の一言は心の支えとなって今の彼女の心の中に残っている。

そして、

あの子の心の支えとなっている人がここにもう一人いるんだよ…

幼いダイヤとその妹“ルビイ”を見守りつつも、時には喧嘩して、時には絶交までして。

でも結局は仲直りして、すぐに笑い合える親しい私がダイヤの一番近くにいる。ダイ

ヤにとつても、私にとつてもお互いかけがえの無い“親友”として。

その子はいま、”1人で闘っている”

それは誰かの助けによつて助かるような問題ではない、”彼女自身”の命を懸けた闘い。

他者はどうすることもできない。父も母も、当然ダイヤですらも。

だから、ダイヤは今、彼女の眠っている横で手を握りつつ祈っている。

真つ白な空間に私とダイヤの二人きり。痩せこけて、私自身めちやくちや自慢していた青い髪も今はほとんど抜け落ちて頭皮だけが残っている。

おそらく抗がん剤の影響だろう、と医学に関する知識は無知である私はテレビのドキュメンタリーで耳にした数少ない知識でぼんやり考える。

元々私は痩せていたが、今の姿と前に姿を比べると明らかに前に姿のほうが健康体だった。

そう……ダイヤの親友である私は見るに堪えられない可哀想な姿となってベッドの

上で横たわっている。

「しつかりしなさい。貴女はそんなことで倒れるような弱い人間ではありませんでしょう？」

ダイヤの言葉にいつもの覇気が感じられなかった。

完璧主義者である彼女が、ただでさえ自分の高校の危機に何もできなかったのに、今度はたった一人の人間、しかも親友の為に何も出来ないことへの歯痒さと憤りを感じるのは当然なのだろう。

窓際にはミニバスケットに入れて飾られてある色とりどりの花があつた。それは今日ダイヤが私のお見舞いに来る際、近くのフラワーショップで購入したもの。

「さて、私はもう帰りますわ。…… また明日来ます」

ダイヤは横に置いてあった高校のバツクを方に掲げてそばから離れる。
ドアを開けたところどころとベッドで横たわっている私に目を向けて、

「わたくしの傍から離れたら、許しませんからね……」

寝たふりをしていて私に気づかぬまま、ダイヤはこの部屋から立ち去った。

——約束——

枯れる太陽による炎天下の中、陽炎が揺らぐその中で私と私の親友が肩を並べて歩いている。

『え？スクールアイドルをするんだって？あのダイヤが？ちよつとそれは笑えるわ』
『黙りなさい!!わたくしだつてこんな破廉恥なことするつもりはありませんでしたの
に……』

『とかなんとか言つちやつて♪ほんとは楽しみで浮かれてるんでしょ？顔に出てるよ
ダイヤ』

『そ、そんなことはありませんわ！大体千歌ちかさんがわたくしを強引に誘うから仕方なく
引き受けただけですわ』

ダイヤの怒声気味の声になんら堪える素振ちかりを見せない私は、『あーはいはい』と適当
に流してセーラー服をパタパタと扇ぐ。

わずかに見えてしまった水色の下着は扇情的で、隣の人がもし男性だったら間違いな
く意識してしまうだろう。というかダイヤに意識させたいところなんだよね。

だけど隣の相手は女性で“浦の星女学院”の生徒会長で、そういうふしだらなことが
大っ嫌いな“親友”だ。

ダイヤはもちろんそんな私の行為を見逃すはずもない。

『こちらお止めになりなさい！女性として恥ずかしくないのですか！』

『いてっ！もーなんで叩くのかなあ。そんなに暴力ばかり振るつているとカレシできないよ〜？』

『今はそんなこと関係ないですわ！貴女も“茶道”の名家の一人娘として恥ずかしくないのですかとわたくしは聞いていますの』

ダイヤから叩かれたところはいつものピンポイント地点。いつかその部分だけ禿げるんじゃないかな？と摩りながら思う。ついでに乱れた青い髪をそつと整える。

『いーの！私は私なんだから。家に束縛されて生きるダイヤモンドちゃんと違って、わたくしはフリーダムに生きたいですの』

キリツとキメ顔でダイヤの声真似をすると同時に何処からかピシリと亀裂の走った音が聞こえた。

やってしまった、と思った時には時すでに遅し。

ダイヤに顔を向けると、

『貴女…… 少しお仕置が必要みたいですね』

『あ、はは…… はは。ほ、ほら？ダイヤちゃんスクールアイドルなんですよ？怒っちゃダメだよ？笑顔、スマイル。ね？』

夏。

どこかの田舎の、潮風を浴びながらすすく育つどこかのミカン畑通りで、女の子の叫び声が轟いたそう。

黒澤ダイヤは先日、自分が在学する学院のスクールアイドル“*Aqours*”に加入した。

学院の生徒の誰しもが加入するとは思わなかったし、当然ダイヤ本人も自分がスクールアイドルなんて考えられなかった。

だけど、“A q o u r s”の生みの親である高海千歌《ちか》が強引に誘ったこともそうであるが、ダイヤのことをよくわかつている私もダイヤをスクールアイドルの道へと歩ませたのである。

『私ね、』

ミカン畑の畦道あぜみちをそのまま右に曲がり、小さな商店街に差し掛かったところで私は口を開く。

『なんですの?』と先を歩いていたダイヤが振り向いた先には、いつもより肌白いと感じる私の笑みが残っていた。

『最近のダイヤ、よく笑うようになったね。これもやっぱり“彼女達”の影響かな?』

私の発言に対し、ダイヤはふつ、と笑みを浮かべる。

口の下にある特徴的なホクロが僅かばかり上がると同時に青色のアパタイトのよう

か。

『いてて…で、でもね。私はすごく楽しみなんだよ?』

『なにがですか? 貴女が?』

『うん。ダイヤがフリフリな衣装着て心から笑ってますよー、楽しんでますよーって姿を見るのが。だって…今まで頑張ってきたんだもん。アイドルをやってもバチなんて当たらないよ。』

エメラルドの瞳。

母親が我が子に向けるようなソレは、ダイヤを昔から…。それこそ”本当の姉妹”のように共に育ってきたからこそ、ダイヤの本質を知っているからこそ向けることができる。

”いつもより”体調がすぐれないけど、それ以外はいつも通り。

『……なんて言いませうか。貴女がそう言うのとわたくしがこうなる事を見透かしていたように聞こえますわ。』

『当たり前でしょ？何年……ダイヤの”親友”してると思ってるのよ』

こういう時の私はダイヤより優位に立てる。

いつもは自由奔放で、事ある事にダイヤにちよつかいを出したり、さらに付け足すとかなりいい加減で淑女とは思えない立ち振る舞い。

ダイヤは何度も私の立ち振る舞いを注意した事もあった。

同じ立場の人間として。

生徒会長として。

…… たった一人の親友として。

だけど、結局最後の最後はいつも私に指摘されて、なんか立場が逆転してしまう。

ダイヤの誇り高いプライドも、私の前では無形も当然。

そんな彼女の顔はいつも悔しくもあるけど、嬉しくもある顔だった。

ダイヤにそう言ってくれる人がいなかったからではない。

多分きつと“私”だから。

幼少期から心身共に成長してきた“私”だからこそ、ダイヤは嬉しく思っている…
といいなあ。

『さて、何年でしようね？わたくしは貴女の事を1度も“親友”だなんて思った事はありませんよ？』

『あ！ひどーい！せつかく人が……心配したり、応援してるって、いうのに！』

嘘。

いつもの意地。

ホントは心から感謝をしているんでしょ？

『ありがとう』って言いたいのも事実でしょ？

今は出来なくても、いつかはダイヤの口から聞きたいなあ。

『まー、いつか……』

言葉にしないかわりに、私は小さく微笑む。それを見たダイヤも呆れたように、
小さく微笑む。

何も言わなくても、何を考えているのか伝わってしまう関係。それが私とダイヤの
関係。

それが…… 私達の絆。

『だ、ダイヤはこれから…… 練習?』

『もちろんですわ。本番まで1ヶ月しか無いですもの。足踏みしてる暇はなくてよ?』

本番……ダイヤが指す本番というのはスクールアイドルの頂点を決める、数年前から開催されている大会「ラブライブ!」のこと。

選別の方法は至ってシンプルで、第1回ラブライブ!同様、人気投票による上位20組決めだ。

”A q u o u r s” もギリギリの順位でその上に乗っかり、本戦に駒を進める事ができたのである。

ダイヤは自分の腕時計を見る。練習までそんなに時間が無いからここから走らないと間に合わないと判断したらしい。

『これでは、ここでお別れですわ。』

『う、うん……練習、頑張つてね?』

『ところで、先程から具合悪そうに見えるのですが体調はよろしくて?』

体調のよろしくない私の顔をまじまじと見つめる。

朝から妙に熱っぽいし、息切れや動悸が激しい。夏とはいえ異常な程の汗。

体調が悪いのは私も知ってるし、もちろんダイヤからすれば一目瞭然だ。

『だ、大丈夫……昨日から風邪引いてるし、家はすぐそこだから帰って寝るつもりだし』

『そう……無理をなさってはいけませんよ。着替えて薬飲んでしつかり睡眠を確保すること。よろしくて?』

『いえす、まーい……ふれんど』

回れ右をしてそのまま背を向けた私は頭上にピースを掲げて帰路へ向かう。ダイヤにこんな私の姿を見せたくない。今のダイヤは仲間とともに大きな目標に向かって進もうとしている。そこに……病弱の私が入るスキはないんだよ……

私の後姿を見ているダイヤは何を考えているだろうなあ。

『大丈夫かしら』と、心配しつつもどうしてもラブライブ!に向けての練習に頭が優先順位をつけていそうだなあ。

私としてはそつちのほうが都合がいいんだけどね。

キュツ、キュツ、キュツと3年間履き続けたローファアのすり減った足音がやけに耳に残り、それがダイヤが去っていく証拠で十分だった。

本当に今のダイヤにとつて今の私は気にする程の対象じゃなかったらしい。それでいいような、ちよつぴり寂しいような

でも、彼女の今の頭の中には……………

『……………
ラブライブ！絶対優勝してみせますわ』

完璧主義者のダイヤの眼前にはもはやそれしか無かった。
だから彼女は大切なことを失ってしまうことがある。
例えば………。

ダイヤが自分の言動に人生で一番後悔したのは、その日の夕方、親友の母親から緊急の連絡が入った時だった。

正直、ダイヤはこの時の記憶をはっきり覚えていない。

珍しく動揺してた彼女は受話器を手から落とすくらい、何かに怯えていたのだから……



『もぐもぐもぐ……、全くなにそんな青ざめた顔してるのよダイヤモンドちゃんはく』

『あ、貴女が急に倒れたって連絡を受けたからですわ！だからあれほど自分の体調管理はしつたかりなさいと——』

『あつはは……でも、ごめんね？私も今回はちよつとヤバイなって思つたんだよ？』

今朝少しだけ体調が回復した私は、次にダイヤと話ができたのは私が倒れて搬送されてから2日後の土曜日のことだった。

たくさんの点滴を打たれ、何故か見慣れない毛糸の帽子を被った私の哀れな姿を見て、ダイヤはどう思っているかな？

倒れて点滴を打つのは私にとって幾度もあつた話だ。

だけど、今の私はいつものテンションには心からなれないし弱弱しく、頼りげのない姿だと思う。

——私は元から病弱だ。

そんなことは小さな頃から一緒のダイヤにはわかりきっている。だからどうしても無理させられない。

ダイヤもそのことが分かっていたからこそ、注意したはずなのに……

『大体、貴女はどうして呑気にリンゴなんて食べてるのですか!?病人でしょう?』

『んー?もち!お腹すいたからに決まっていますことよ?』

『病人だつて事を自覚持ちなさい!』

病人相手に本当はこうやって怒鳴り声を撒き散らしたくないのに、私がこうだから怒っている。ダイヤは心配性だ。妹に対してもこうだし、今では“Agours”のメンバーの事も心配しなければならぬ対象として根付いている。

当然目の前でウサギの形をしたりんごを齧っている私も同じだ。

だけど、こうしていつもの態度で過ごされると拍子抜けしてしまうのではないか?

『まったく……貴女という人は……』

呆れているダイヤはこの先の言葉が出てこなかった。

自分の責任かもしれないときつと先日から自分を責めていたのに私がこういう態度だからなんとも拍子抜けしてしまう。

『ねえダイヤ?』

『はあ……なんですの?』

私の呼びかけと同時に部屋全体の空気が冷たくなった。

私の目はさつきまでのおふぎけの色を失い、どんより淀んだ瞳の色をしていた。

ダイヤは多分あの話を聞いている。

『……もう、聞いてるんでしょ?』

いつもより少し薄い唇の奥から発せられる質問が、ダイヤの隠していた気持ちを通してくる。

ダイヤの目の前の私が倒れたワケ、私の体を蝕んでいる細菌やウイルスの名前。知っているからこそ、私の前では知らないふりをしようか決めていくのに……

『……なにをですの？』

『私の体の異常』

『なんのことでしよう。わたくしはまだ聞かされて——』

『左手で髪をかき上げる癖をなんとかしようね』

この空気が嫌だから私はいつものノリで茶化す。ダイヤは目を逸らす。ダイヤは信じたくない事実だっただろう。

簡単に言うとなら血液の“種”となる物質がある造血幹細胞ぞうけつかんさいぼうが、骨髄のなかで分化・増殖

を繰り返して成熟した血球に成長してゆく過程に異常が起こる病気が、私の体を蝕んでいることがわかり、その発症原因は不明ということだ。

初めにそれを私のお母さんから聞かされたときは何を言っているのか理解できていなかった、と聞いている。

自分の口からこの事を言うのは少々辛いものがあつた。だけどやっぱり伝えるべきなのだろう。

(あんなこと……残りは長くないなんて聞かされたところでダイヤは受け入れないだろうなあ)

頭で理解はできていても、どうしても心が拒否反応を起こしている。私も……彼女も

だけど、自分の腕についている点滴を目の当たりにしても、無理して元気でいようとする心とは裏腹に、私を侵す病の存在を認めざるを得なかつた。

目を背けるな、現実を見ろ。

『……どうしようも、ないのですの?』

『まーねー!だから今を楽しまなきゃ!もつたいないよ〜』

『どうして……どうして貴女はそう樂觀的ですか?怖くないですか?』

『だってさ……今からビビッてめめめしてたつて残りの人生損するだけじゃない』

樂觀的過ぎて、自分自身が本当に不治の病にかかっていることが嘘のように思えてくる。

『8月中旬』

『……はい?』

『私の残りの余命、だそうだよ』

唐突な私の宣言に思わずダイヤは、らしからぬリアクションをとってしまったが、言葉の意味は理解できている。

つまりは、私がダイヤの前からいなくなるということだ。

流石のダイヤもそれには我慢ならなかったようで、

『な…… なっ、どうにかならないのですか？わたくしは嫌ですわ!!そんなこと、認めません!!』

『嫌だなんて言わないでよお…… 私だつて実は怖いんだよ？でもさ、ダイヤが今目標に向かつて必死に頑張っているんだよ？私も必死に頑張らなきゃね？それに……』

シヤリシヤリと、口の中に頬張っていたリングを飲み込んでから一呼吸置いた後にダイヤの手を握りながら言葉を紡ぎだす。

僅かに湿っていたその手は心なしか、細く小さくなっているような気がした。

『ダイヤちゃんのアイドルっぽいひらひらフリフリの衣装を本戦で見れるまで死ねないし♪ダイヤちゃんの衣装かぁ。なんだかんだ言つて一度も見たことないもんね』

『そ、そんなわたくしの破廉恥な姿をわざわざ見に来なくてもいいんです！貴女はまず

自分の病気を治してからにしてください！」

『ふあゝい！私頑張つちやうよく！おリンゴさんの力今に見てなさいよく！もぐつ』

なんとも気の抜ける返事にダイヤはため息を零す。

でも、自分がいつどうなるのかわからないのにこうして能天気におリンゴを食べ、ダイヤの可愛らしい衣装を見るまで死ねないとか、私らしいんじゃないかな？

もしかすると半ば死に対する意地かもしれないけど、それでも今この一秒一秒を楽しんで生きたいと願う私を見て、ダイヤに何かしらの影響を与えてくれればいいなあ。

だからダイヤも、これ以上追及しないようにした。

そう、普段通りに……

☆★☆☆

容態は更に悪化していた。

目が覚めるとべつとりした汗をかいていて、もうその時点で自分の体が異常を期していることに気付いた。

私は気怠さの感じる体を起こし、そしてそつと帽子を脱いでミニテーブルに置いてある鏡を自分に向ける。

：　　もう私の頭に、自慢の髪が殆ど残っていないなかった。入院の次の日から少しずつ投与していた抗がん剤が私の体の中の悪政細胞を殺すと同時に、こうして大きな爪痕を残していた。

悲しいけど、こうするしか他に道が無かった。不治の病とはそういうものだ。現代の

化学療法ですら直せない病の事を指すのだから。

本当は無駄な抵抗はやめてさっさと遠くへ逝ってしまいたいのが私の本音だ。

当然このことは両親にもダイヤにも言っていない。言ったら悲しむと思ったからだ。

だけど、こんな私にもまだ生きていたい理由ができた。

ムリしてまでもしたいことができた。

枕元に置いてあるペットボトルのキャップを外し、中身を口に含もうとしたところで

『あら？起きてたのかしら？』

学校帰りのダイヤが姿を現した。咄嗟の判断で帽子を深く被る。

彼女の片手にはビニール袋があり、『お土産かな？』と内心ワクワクである。

『今起きたところだよ。ところでそれは？果物かな？』

『これはみんなからの差し入れですわ。早く元気になって、と伝言を預かってますわ』
『やったー。何かな何かなく』

ダイヤから袋を受け取った私は、すぐさま中を覗く。ミカンや、イチゴ、バナナやプリンが入っていた。殆どがダイヤの友達の“Acours”のメンバーの好物が入っていたけど、その中のバナナは私の大好物の果物で、きつとダイヤが選んでくれたんだろうと……親友の何気ない優しさに思わず涙が出そうだった。

『貴方……また少し痩せましたわね』

『まあね〜正直病院の食事美味しくないし、どちらかと言うと果物が食べたいんだよね』
『食べてはいけませんとは言いませんが、食べ過ぎには注意してくださいな』

ダイヤの警告を無視して早速バナナを一口。人工の練り物のようなネットリした口ざわりと、果物とは思えないような強い甘み。立ち上る南国の香りが口いっぱい広が

る。

『んん〜!! やつぱりバナナは最高だね! バナナに出会えてよかった!』
『言ってる傍から貴女は...』

ダイヤは窓際の丸椅子に座り、その傍らにカバンを置く。

彼女の背景には窓があつて、そこから見えるのは中庭にあるベンチの日陰の役割を果たす松林。

彼女はその松林を見つめて、口を開く。

『あと一週間で本番ですわ』

『ダイヤは楽しみ?』

『そうですわね... 楽しみの中に、緊張もありますわ』

『私も... ダイヤのフリフリ衣装見るまで死ねないよ』

『またそんな冗談はよしなさい』

『冗談じゃないよ。私には... あまり時間がないんだから』

別に話すつもりはなかったんだけど、無意識に時間がないことを愚痴ってしまった。

やっぱり心のどこかで自分が眠ってしまふことが怖がっているんだ。

思い返せばそうだよ。

毎晩、この日眠ってしまつたら二度と目を覚まさないんじゃないのか、と怯え枕を濡らして苦しんでいたことを。

だからこうして平常心を装わないと自制心を保てなくなるのではないかと。

本当は……死にたくないんだ。

すつと。

ダイヤはいきなり立ち上がって何を思ったのか窓に向かつて歩み寄る。

私に背を向けたまま、彼女はこう言った。

『……絶対に見なさい』

『へ?』

『絶対にわたくしのアイドル姿……その目に焼き付けなさい。焼き付ける前にここからいなくなるなんて、わたくし許しませんから』

それはただの命令かと思った。

いつも私をこき使うような、そんな意味を持つて言っているだけなのかと。

数秒して私は気づき、はっと顔を上げる。ダイヤはそれでも尚、背を向けたまままだからどんな表情をしているのかわからない。

でもそれが、ダイヤなりの“励ましの”言葉と“いなくならないで”という縋りつくような願望なんだ。

不器用だけど……きっと他者が聞いたら自分勝手だと言って不快になるような言葉だけ。

——その言葉がとても嬉しかった。

『もちろん見逃すはずがないよ！まーダイヤにそんなこと言われちゃったら死んでも死

にきれないし、ラブライブ！終わった後にダイヤのことを弄り回すことができないのも、悔いが残りそうだしね〜♪』

『ふふつ、せいぜいわたくしの姿とダンス……舞いや歌声に魅了されるといいですよ！きつと終わった後なんて言葉が出ないくらい泣き崩れるはずですから』

何故か“ダンス”を“舞い”に言い換えたのか、それはまあ置いといて。

平常運転の親友を前にして私は、ほっこりした気分になった。

ふと、幼少期の頃の私たちの姿が脳内に浮かんできた。

それはどっちが算数のテストで100点を採れるか。小学生であるあるの勝負をしている風景。

そして、負けたほうが勝った人の言うことをなんでも一つ言うことを聞く。そして約束のユビキリをしている姿。

あの時はダイヤが勝って、その時お願いした内容は……

『ねえダイヤ』

ダイヤが私の方に振り替える。

『なんですの？』

『ユビキリ、しようよ』

『指切り：ふふつ、何年振りでしょうね。貴女と指切りするなんて』

恥ずかしそうにその綺麗な髪をかき分けながら、ゆっくり右手の小指を差し出す。

私も右手の小指を差し出す。

『なにしていますの。左手の小指でしょう？』

『ははっ、流石ダイヤモンド。そういうところ大好きよ♪』

『いいから早くなさい。それとわたくしはダ・イ・ヤですわ』

数十年ぶりのダイヤとのユビキリ。

お互い成長したけれど、それ以外は何も変わっていない。

あの時の光景が、また鮮明によみがえる。

『絶対見て、弄り回すからね？』

『ラブライブ！で優勝して、絶対わたくしの虜にさせてあげますわ』

指切りげんまん嘘ついたらなんでも一つ聞きましよう♪

—— 指切った

く
☆
★
☆
く

遂にその時は訪れた。

先日抗がん剤の最終投与を終え、副作用の影響でボロボロになった皮膚は今まで細菌と戦ってきた証として、私の体に刻まれる。

抗がん剤の投与することで結果的に辛く苦しい状態になるだけなのに私は敢えてその道を選択した。

理由は簡単。

『初めまして!! 私たちは静岡県代表のスクールアイドル、“A q o u r s”です!! みなさん、盛り上がってますか?!!』

私は高熱に苦しみながら、彼女たちが……ダイヤが輝いている姿を病室から見守っていた

正直、ご飯もあまり食べていないし、好物の果物もこしばらく口にしていない。

微かな意識の中で聞いた、お母さんとドクターが会話していた内容。

『検査結果を見ると急激に悪くなっています。下血も酷く貧血状態です。体中に血栓も出ています。出来るだけのことはしますが、ここ数日です』と。

なんとなく、今日が最期のような気がしてる。

でも、私はまだやらなければならぬことがあるんだよ。

『私は伝説のスクールアイドル、“μs”にずっと憧れていました！アイドルになるなんて、田舎に住んでいる私たちなんかには、どうせありえない遠い世界の事なんだって、やる前から諦めていました。けど…けど“μs”は教えてくれたんです！前へ一歩進むための勇気というものを！』

そういえば千歌ちゃんはずっと“μs”に憧れていたなあ。

あの人達みたいにキラキラ輝きたい、あんな風になりたいって。その夢が叶った今、千歌ちゃんはどんな気分なのかなあ。

『——それでは皆さん聞いてください！私たちの初めての曲を!!』

簡単な前振りをしてから、彼女たちは始める。

“Aqours”のラブライブ！を。

『ふふっ… 可愛い、笑顔だよ、ダイヤ』

ひゅー、ひゅーとまるで喘息患者のような呼吸音がする。

私は細くなった腕でスマホを掴み、ふらふらと不安定な手つきで次々とアプリをインストールしていく。そして消せないアプリは一つにまとめ、とあるアプリだけわかりやすく残しておく。

『ねえ… ダイヤ』

画面の向こう側で笑顔を振りまいている親友に向けて言葉を向ける。

頭の賢い私の親友

生真面目な私の親友

人に気持ちを伝えるのが苦手な、私の親友

人一倍の優しさを持った、私の親友

『ダイヤに……………伝えたいことがあるんだ』



——あの子はわたくしの前から姿を消した。

わたくし達が病院に駆け付けた時には、既に一つのベッドを取り囲むようにして数人の大人が佇んでいました。ドクターは目を瞑って申し訳なさそうに、50前後の女性はベッドで眠っている女の子の手を握りしめながら泣き崩れ、その肩にそつと手を置く男性の姿もある。あの子の両親ですわ。

しとしと、雨が降っている。

それがわたくしの服だけでなく、心も濡らしているような気がして何も持っていない左手で胸をきゅつと掴む。

——もう、あの子の声を聴くことができない。

——笑顔を見ることができない

——怒ることもできない

——指切りもできない

不自然にも、この光景を目の前にして一切涙はこぼれそうになかった。

どうしてなのかわたくしにもわかりません。ただ、あの日……もしかするとわたくしはあの子がこうなることを予期していたのかもしれないわ。

わたくしはあの子の元へ歩み寄り、枕もとにあの子が大好きだったバナナを置く。
今はゆっくり夢の中にいる彼女の寝顔は、とても安らかな笑顔でした。

「お姉ちゃん……」

一緒に来たわたくしの妹の“ルビィ”は涙目でわたくしを呼ぶ。

ルビィもよくお世話になっていましたわ。あの子にいつも茶化されて、涙目になって逃げまわるルビィを執拗に追いかけるあの子との光景。

かなり子供っぽい性格に対していつもわたくしは注意していましたけど、それでもあの子は好きですし、時折見せる大人びた雰囲気もわたくしは思慕していました。

「ねえ……わたくし、どうでした？しっぴかり踊れていましたか？」

……早く、感想を聞かせなさい。

いつものように笑いながら弄ってみなさいよ。

『ぶぶつ。ダイヤモンドちゃん可愛い』って。

『名家の長女があひらひら露出度高い衣装で破廉恥なことやって、ほんとはそうい

うのに興味あつたんだね』つて。

わたくしのこと、言つてみなさいよ。

約束…… 果たしなさい。

どのくらい時間が経過したでしょう。

ふと気が付いた時には佇んでいたドクターは消え、あの子の両親も、ルビイもどこかにいなくなっていました。

わたくしと、貴女の二人きりの空間。

それが今まで当たり前だと思っていました。

ふと、テーブル置かれているあの子のスマホに目が留まりました。

彼女のスマホはお気に入りの色である黄緑色で配色されていて、内浦で有名な水族館のマスコットキャラクター“うちっちー”のストラップをつけていました。

それは中学生の時、あの子のお母様に連れられて三人で水族館に行った思い出のストラップですわ。

その可愛らしいスマホを手に取り、電源を入れる。

何故かパスワード画面が表示されず、ホーム画面に映し出されたのはわたくしを下のアングルから撮った制服姿の写真。いつの間に撮ったのでしょうか、という疑問よりもわたくしの下着がしっかりと撮られているところに怒りが沸いてきましたわ……

どうしてこんな時までこの子に怒りを覚えなくてはならないのでしょうか。

もしかすると、和ませようとしてこの画像にしているのかもしれないが……きつとそれは考えすぎでしょう。

そして気になるのは如何にも見てくださいと言わんばかりの“ボイスメツセージアプリ”。その他はすべて一つのボックスにまとめられていて、これだけ忘れていたなんて考えられません。

アプリを起動すると、『黒澤ダイヤ』と名前の記録のみ

もう、それだけで十分でした。

嬉しくて……ずっとあの子の一番の親友として過ごせたことが嬉しくて。悩んでいたわたくしの背中を押してくれたことが本当に嬉しくて。

あの子の笑顔が、大好きでしたから。

もう二度と、あの子と会えなくても

ずっとわたくしの中にあの子は生き続ける。

だから……

「わたくしのことは何でもお見通しなのですわね。少しは嫌そうな顔でもみたかったですわ。絶対わたくしに追いついて来なさいよ？ ずっと待ってますわ。貴女が隣に来るのを……それと、”ずっとわたくしの親友でいなさい”。拒否権は……ありませんのよ。」

わたくしは、初めて涙を流した。

少し、肌寒い風が病室の中を吹き抜ける。

もうすぐ、夏が終わる。

『——君のこころは輝いてるかい♪胸に聞いたくら』 Yes』と答えるさ♪：： どう？結構上手でしょ？ダイヤがたまに私に聞かせてくれるから歌詞覚えちゃったんだよね！今度カラオケ行った時にはデュエットしようよ！ダイヤの歌声透き通ってて綺麗なだよね。さっきのラブライブ”を見ててもダイヤの歌声はつきりわかったんだよ？凄いいね！流石ダイヤの親友。衣装もバリバリに可愛かったし、なんかダイヤらしくないな。って思ったんだ！淑女系アイドル？それで売名していけばモテモテなんじゃない？ま、もちろんダイヤファン一号は私だけだね。「わたくし以外を見つめるなんて、許しませんわ」なんてさ。きゃあ〜♪ダイヤちゃん大胆〜！

：： 本当はもつと弄ったり、実は直接会って伝えたかったんだけどね。なんとなく、もう私間に合わないような気がしてるんだ。だからこうして、ボイスメッセージを残すことにした。だから、ごめん。

ダイヤと仲良くなってから多分1：： 2年？性格正反対なのによくここまで長く付き合えたなって感慨深いよ。

いつも怒られてばかりだったけど、ダイヤが怒っているときの顔も好きだし、怒声も

好きだから全然苦じゃなかったんだ。言っておくけど私はレズじゃないからね？あくまで“Like”としての好きだから！ダイヤがその気なら、私はそれでも構わないけどね。

つて言うのと絶対ダイヤ真っ赤になるからどんな顔してるのか目に浮かぶよ

それくらい、私の中でダイヤと過ごした時間って大きなものなんだ。

ダイヤの中でも、そのくらい私が大きな存在になっていたらすごく嬉しいな。もうその答えを聞けないのは残念だけど。

でも答えを知らないままでいるのって、なんかそれはそれで面白くていいなあ。向こうでも答え探しに夢中で時間とか忘れてそうだし。

：　あまり長くしゃべっていても退屈になるだろうからそろそろ区切ろう。

あの“約束”は、ダイヤの勝ちだけど、どんな命令をしてくるのか大体想像できちゃうから！

私は君がアイドルとしてこれからの活動を楽しんでいけるように、私はずつとずつと応援してるね。ううん、それだけじゃない。今後たくさんの障害がやってきてもダイヤなら絶対乗り越えられる！一番の親友である私のお墨付きだから心配しなさんな！！

でも、やつぱりしばらくダイヤの声が聴けなくなるのはさみしいなあ。今度いつ聴けるのかな？十年後？百年後？

きつとそんなに月日がたつてもダイヤはダイヤのような気がするんだ。

プライドが高くて、完璧主義で、曲がったこと・中途半端なことが大嫌いな生真面目なところ。

そして……

人一倍の優しさをもつてるところ。

だから、自分に自信をもって私の前を歩いてほしいな。生徒会長がふらふら寄り道してたらみんな不安がるから。

いつか追いつく。

もう一度、ダイヤの隣に追いつけるようにするから！だから……！

その時まで。

バイ
バイ
バイ
♪

┌

羽根と翼―黒き羽は誰が為に舞う―

——アポイント トゥエンティワン 2 1 1 2 0、マツチポイントです

——サービスオーバー トゥエンティワン 2 1 A、L、デユースです

——サービスオーバー トゥエンティワン 2 1 2 1、マツチポイントです

デユースに持ち込んだままでは良かったが……食い下がってもまた離される。ここで粘らないと応援してくれたアイツ等に示しがつかないな……なんとしてもあと二点取らなければ！

とまあ意気込んだわけだが、甘く上げてしまった羽根をコートの際にスマツシユで叩き込まれ……

——アポイント トゥエンティスリー 2 3 1 2 1、ゲームセット！

俺の敗北が決定した。勝てば全国への切符が手に入るといふ試合で負けてしまった……まだ来年があるとは言えどもツラいな。なまじあと一步のところまで行けたことが、敗北の実感を助長しているのがまた何とも言えない。

こうして高校生活をバドミントンにつき込んだ、俺の高二の夏が終わった。

時は戦国でもなければ争いも無い平和な昼下がり。梅雨明けも近づき暑くなってきたこの時期になると、去年の試合を思い出してしまふ。あと一歩、というところで悔しい思いをした…。全国大会という夢の舞台のほんの少し手前まで届いていたのにな。

「なーに辛気くさい顔してるのよ。まだ学校は半分しか終わってないのに、今からそんなんじや午後の授業大変よ？」

「やかましい喜子。せっかくの昼休みを浪費していいのか？ 駄天使なら布教して信者でも増やしてろ。なかなか名案だと思うんだがどう思うよ」

「浪費か有意義かなんて私が決めることだからほつときなさいよ。：そ・れ・に！私のことはヨハネって呼びなさいっていつつも言ってるでしょ!?!しかも堕天使の漢字おかしかった気がするし!!」

こいつは俺の幼馴染…。というよりは腐れ縁で繋がってる津島善子だ。何かと時

間を見つけては話しかけてくる。バドミントンしか取り柄のないような奴に会いに来るとはよほどの物好きらしい。

だが物好きだと思う反面、居てくれて助かるというのも本音だ。なにせ毎回俺の試合を見に来ては必死になって応援してくれるのだ。選手にとつて”声援を受ける”ことはとてもやる気が出る。あいつの声はよく通るからな、さすがはスクールアイドルといったところか。

「お前は善子、呼び方は変えるつもりないぞ？ぶっちゃけ恥ずかしいし。なにがヨハネだ」

「う、うううるさいわねっ！墮天使なんだから相應しい名前にしただけじゃないの！！文句ある!？」

「分かったから叫ぶな。。。っとそうだ、何しに来たんだ？昼休みは同じ部活の1年といるだろうに。ケンカでもしたか？もしくはお前の趣味に合わないやつ溜まりに溜まった鬱憤が噴き出たとか、どうだ近いだろ」

墮天使、とか言ってる時点で痛い子確定である。クラスで孤立してたとしても不思議じゃない。てかしてそう。ああなんてかわいそうな善子ちゃん。。。。

「なにがケンカよ！なにが鬱憤よ！まずクラスで話してるのは基本ルビイと花丸だけだからトラブルなんて起きないわよ!!それに、墮天使である私が人の子と不和を起こすわけないじゃない。だってヨハネにはこの魅力があるんだからね」

「自分で友達いないって宣言してるようなもんだろ… やっぱアホだな、駄天使だな。まあいい、そのルビイと花丸って子はどうしたよ」

「教室の窓から外を見ていたら、一人でいるのを見つけてね。今日は別行動よ」

友人関係が築けているようで何よりだ。仲の悪いやつとアイドルするとか地獄だろう。

「それで？こんなところに一人で何してるのよ？」

「あん？… まあ考え事だ。俺にだって人のいないところで考えたいことはある」

「ふーん。ま、どうせ去年の夏を思い出してへこんでたとかそんなだろうし」

「なぜ分かった…？」

「顔に出ているのよ。このヨハネに隠し事なんて無駄よ、ム・ダ。どんだけ貴方を見てきたと思ってるの？そんなこと悩み事はお見通しなんだから！」

あの後、俺は妙に気恥ずかしくなつてその場を立ち去つた。善子が何やらほえていたが知らん。あいつにかまうよりも、去年のリベンジを果たす為に練習したほうが有意義だろう。他人にかまけている暇はないのだ。

そうしてヤツから逃げおおせた後はまっすぐに自分の教室に戻つた。昼休みも終わりそうだったからな。部活ばかりに身を入れて、学業をおろそかにしてはいけない。二年生^いの成績も来年の受験に響く可能性もあるが故に、俺は文武両道を志している。

「あ、帰ってきた！もう、お昼いつしよに食べようつて誘つたのに〜」

「すまん、少し一人で考えたいことがあつたんだよ。自分の目標を再認識してた」

「それは仕方ないけどさ……君がいないと寂しいの！」

教室に入るなり声をかけてきたのは高海千歌^{たかみちか}。話し方からにじみ出ているようにやたら元気なヤツだ。あと、いつもはそばに二人ほどいるんだが……どこ行つた？

そう思つて教室を見渡してみたが、どこにもいない。千歌とその二人を含めた三人は休み時間や放課後、下校にいたるまでずっといつしよにいるんだがな。確か善子と同じでスクールアイドルやつてるらしい。こいつが、あの伝説グループともいわれるスクールアイドル”μ、s”のファンだつてのは知つてたが……まさか自らアイドルになるとは思わなかつた。

スクールアイドル”μ、s”——秋葉原にほど近い『音ノ木坂学院』出身。第一回ラブライブでは地方大会を棄権。しかし、第二回ではそれまで全国最強だったグループ”A—R—I—S—E”を東京大会にて下し大金星をあげる。最強を倒したものが最強に成り代わるのは必然、彼女らは見事全国制覇を成し遂げたのだ。

だが、彼女らの”伝説”はまだ終わらない。

開催が検討された第三回ラブライブ。開催されること自体は何ら不思議ではない。そこまで人気を誇るのだ、スクールアイドルというものは。そう、開催は普通だ。問題は、何処で開催されるかということ……

——アキバドームでのラブライブ開催——

ドームの貸し切りなんて簡単に出来ることではない。そこで運営は考えた。海外に

まで”スクールアイドル”が広がれば、それは世間に対して無視できない影響力をもつ、と。ならばどうするか？優勝者の力を借りた。

——μ, sの世界進出——

その反響は凄まじいものだった。それはμ, sの進退を脅かしてしまうほどに。もともと彼女らは第二回ラブライブをもって解散する予定だったらしい。だが恐ろしい程に有名になってしまった。…当然ファンは続けてほしいと願った。それは身勝手な要求、彼女らは聞く耳をもつ必要はない。程なく決断は下された。

——μ, sのラストライブ——

全国からスクールアイドルを集め、大規模なイベントを行ったあとしばらくして開かれる最後の舞台^{ステージ}。多くのファンが解散を惜しみながらも魅せられた。こうして彼女らの物語は終わりを告げたが、物語は人によって語り継がれるものだ。

語り継がれることで物語は伝説となる。こうしてμ, sの伝説は広く知れ渡ることになるのだった。

「どうしたの？急に黙って…もしかして千歌といっしょにいるのは嫌、だったり」

「ん、そんなことはないさ。伝説を思い返していたんだ」

「よかった。…もし嫌われてたらすごいヘコんでたよ」

「それはよろしくない……元氣という唯一の取柄を奪ってしまったら、千歌には何も残らないもんな」

「なにをー！そんなことないもん！何か残るって……残る、よね？」

さあな。少なくとも仲良し二人なら何かしら見つけ出してくれるだろう……多分。さて、こいつと話していたらいい感じに時間も潰れた。気合いを入れ直して午後の授業も頑張りますかね！

昼の授業も終わり、部活に精を出す時間だ。昼間にアレを思い出してしまったから非常にやる気に満ち溢れている。今日は居残りで自主練でもするかな……。

「フツ！フツ！フツ！ハイヤツ！——あーしんどい」

自主練といつてもバドミントンで一人で出来ることなんて多くはない。多人数、せめてもう一人くらい手伝ってくれるヤツが欲しいものだ……。

そう独り言つものの返ってくるのは痛いほどの深閑。俺以外に誰もいない体育館はとでも広く感じる。そんな折、俺の荒い息遣いのみが響く静寂しじまを切り裂くが如き轟音が体育館中に鳴り渡る。いやまあ轟音は大きすぎだが。

何事か、と音のした方向に振り向いてみると人影が見えた。その影はこちらに近づいてきたが距離があるために顔までは判別できない。やっと識別できるほどに近くなり、その人物の顔を見たときたん驚いてしまった。

「え、ちよつ何でお前がここに!？」

「なによ、来たらいけないの? 居残りしてらつて聞いたから見た来たの……この心優しい墮天使ヨハネに泣いて感謝してもいいのよ?」

「何しに来たとか心優しい墮天使つて何なんだとかお前に泣いて感謝することは生涯ありえんとか言いたいことは山ほどあるし、質問がかぶるが言うぞ……何でお前がここに?」

「何でもなにもさつき言つたとおりだけど。残つてらつて聞いたから来てみた、それだ

けよ。それに、バドミントンも久しぶりにやりたかったしね。テニスと違って壁打ちとか出来ないから相手いるでしょ？仕方ないからこのヨハネが付き合つてあげる。というかそのつもりで来たんだけど……嬉しい？ううん、嬉しいに決まつてるわ！嬉しいと言いなさい!!」

……予想の斜め上の回答が返つてきてフリーズしかけた。言い方こそ偉そうだが、善意であることが感じ取れる。正直こんなことを言われるとは思つていなかったからなると言おうか困惑しているし、善子の言うことに同調するようで悔しいが——嬉しかった。

確かにこいつの言うとおり練習相手が出てきたというのもあるが、わざわざ”俺のために”来てくれたつてのが本当にうれしい……。まあ絶対に口には出さないが。チヨロ口と思われても癪だし、調子に乗られるのもウザったいからな。

加えてこいつはそこそこに上手い。俺が勧めたというか巻き込んだところ、意外にも筋がよかった。それからちよくちよく教えたり試合もどきをしたりと、気づけば結構な腕になっていたのだ。出来るヤツと打ち合うことだけでも練習にはなる。

「あー……まあぶつちやけ嬉しいよ。俺も相手が欲しかったんだ、ちようどいいタイミ

ングで来たよホント。んじゃ早速やるか？」

「ふふん、スクールアイドルになつてちよつとは体力ついたんだから！これまでのようにはいかないわ！」

「そうかそうか…。じゃあ走らせるかな。それとも、そのちっちゃい背丈を攻めるか。悩む」

「ちっちゃい言うな！確かに男のあなたから見たら小さいかもしれないけど！周りの身長もたいして変わらないから平均よ平均!!」

「分かった分かっただから叫ぶな…。よし、善子もからかったし練習するか！俺は必ず優勝するんだ、その為によく頼むぞ」

「ここまですつと応援してきたのは誰だと思ってるの？私も東京行きたいんだから、優勝くらいしてもらわないと困るもの。そして東京で私のカンパをたくさん作るの！このヨハネの魅力の前にたくさんのリトルデーモンが傳くのとて…。はあくス・テ・キ」

叶いもしない妄想に沈んでるバカは放つてコートに入る。それを見て慌てて走ってくる駄天使。じゃんけんの結果、俺からのサーブになった。

行こうか、手加減はしない。

先制したのは少年。どうやらこの少年はフォアハンドでのロングサーブが苦手なように、バックハンドサーブを主に使う。少年がバックハンドで構えたとき駄天……墮天使の少女が前に来たところにバックでのロングサーブを打ち込んだのだ。前に来たのにもかかわらず後ろに打たれてしまったては拾えなかったようだ。もう少し足が速ければ……やめておこう。

少年の得点が続き5―0、六回目のサーブだったが低めに狙いすぎた所為でネットにかかってしまった。これで5―1。この試合初めての少女のサーブだ。

フォアハンドサーブが苦手な少年とは逆に、少女のサーブはフォアオンリーだ。彼女の高く深いサーブは打った後にホームポジションに戻ることを可能とし、たとえスマッシュを打ち込まれてもあらゆる方向に対して素早く反応できる。そうやって反応したスマッシュをネット際アに落とすことビで対処。少年はコートの後ろから前へのダッシュを強要されたが一步届かなかった。5―2だ。

先程と同じく高く深く上がったサーブを少年がスマッシュ。打った直後にヘアピンを警戒したのか前に出てきた少年だったが、床ドと平行の速イい球が顔の横を通った。バドミントンのプロ選手のスマッシュは時速300kmに及ぶらしい。少年はプロではないとは雖も男だ、スマッシュは速い。その返球は力を入れずとも速いものになるのは当

然だ。その証拠に向かいの少女は特に力を入れた様子もなかった。自分の力が跳ね返ってきた形での失点、5—3。

その後も取り取られを繰り返して20—19。少年が取れば勝利、少女が取ればデュースという場面。サーブは少年、しかし緊張からか疲労からかは分からないが痛恨のサーブミス。奇しくも去年の夏と同じ状況だ。20—20、デュースは二点連続でポイント出来た者の勝利となる。

つまらないミスでデュースにもつれこんでしまった。なんか、俺の知らないうちに強くなってやがる……。とんだ誤算だった。しかし同時に喜ばしい。拮抗しているヤツとの試合は楽しいし特訓にもなるから。

「まさかお前が……。ここまで強くなってるとはな……。嬉しいぜ」

「案外楽しかったし……。うちの部活でも流行ったり流行らなかつたり……。してたから」

「なんだ、バテバテじゃねーか……。辛いんだつたら……。さつさと降参したらどうだ？」
「うるさい……。そっちだつて今にも死にそうじゃない……。このヨハネに屈しなさい」

よ」

二人とも疲れに疲れていた。俺だつて早いところ休みたいさ……だが女に負けるのは許容できん！それに純粹に勝ちたいんだよ！

「ツラア!!!」

「くう……！」

気合一閃。雄たけびと共に打ち出した羽根はコートの上のライン上に叩き付けられた。自分でも渾身のスマッシュだったと思う。これであと1点取れば俺の勝ちだ！何としてもぶんどつてやらあ!!

「このまま負けてやるもんか!! っけえ!!!」

「おまつ、どうやったらそんな細い腕で拾えない速さのスマッシュ打てんだよ!？」

「気合いとこの魅力ね!!」

「やかましいわ!」

— 2 1 — 2 1 —

「シャアッ!!」

「そんな声出しといてカットはズルくない!?」

「騙されるほうが悪いんだよアホめ!」

— 2 2 — 2 1 —

「これで決めてやるわ!!」

「ジャス・テイ・ス・レイ破滅覆す正義の光!!!」

「はあ!!? ネットインとかマジありえねー!」

「これも実力のうちよ!」

「うるせえ! そして、なによりも許せないのは… 中二技にやられたことだ」

「誰が中二よ!」

— 2 2 — 2 2 —

「そろそろケリをつける！」

「イツチマイナー!!」

「きやあ! 乙女の顔を狙うなんて卑怯じゃない! 墮天使であるこの私を怒らせるとどうなるか?..」

「ハハハ、ナンノコトヤラ.. それと乙女とかいう寝言は寝てから言えよ」

「ヨハネは乙女よ! この外道!!」

—— 23 — 22 ——

「行くぞ、いい加減これで最後にしてやる」

さすがにバテバテでこれ以上動けん。それに相手は違えどデューズでの接戦から負けた、なんて経験は一回でいいしこれからもしない。しっかしここまで白熱した試合になるなんて思ってたかった。10点取られればいいほうかとか勝手に予測してたし、こんなに強くなつてるとは計算外だった。

こんなにも熱い試合を提供してくれた善子に感謝の念を抱きながら、ラストにすると決めたサーブを打ち放った——

体育館を二人で片づけてからの帰り道、せつかくだったので善子と帰ることになった。試合にはしつかりと勝ってきた。試合の後は二人して疲れすぎて動けなかったりしたが、今日はあまりにも充実した居残り練習だったな。

「それにしても、お前強かったな。マジで負けるかと思った」

「…まあちよこちよこ練習したり素振りとかやってたし。あーでも悔しいわね…でも打ってる姿はかっこよかった」

「はあ？どうした急に。そんなこと言ったらお前だって可愛かったぞ？特に点数取られてへこんでるところとか」

「か、かわっ!?!…それよりも！このヨハネに勝ったんだからしつかりと優勝してきなさいよ？勝ったらヨハネのリトルデーモン第一号にしてあげるわ！」

「そんな称号はいらん。だがまあ…優勝は必ずつかんで来る！期待していてくれや」

「それでこそ私が見込んだ男ね」
「偉そうに……」

しかし、なんというか……こいつに応援されるといふのは悪くないな。自分はそんなにチヨロくないと思っていたが、どうやら違つたらしい。さつき可愛いとか言つてたし。

「そうだ善子」

「だからヨハネだつて言つてるじゃない……なによ」

「お前に言いたいことがある。でも今じゃない。俺が優勝したあとで、だ」

「どうしたの改まつて……まあ聞いてあげるけど。その代わりというか、自分で条件決めたんだから——優勝してくること！」

言われるまでもない。ここまできたら引き下がれん。だから……もうちよい待つてろ、ド肝ぬいてやるから覚悟しとけ！

スクールアイドル”Aqours”のメンバーである津島善子、彼女の部屋にはある写真が飾られている。その写真はとある少年の部屋にあるものと全く同じものだが、写真には二つの人影があつた。

——全国大会優勝の優勝旗を掲げているユニフォーム姿の少年——

——その少年の空いている腕に抱き着くアイドル衣装の少女——

恰好は違うものの胸に抱く気持ちは寸分の違いなく同じだ。少年は少女に、少女は少年に惜しめない労いを送る。少年には優勝したこと、少女には成功したことへの称賛を。

二人の顔には翳りなど微塵もない、これ以上ないほどの満面の笑みを浮かべていた。

それは少女の魔法

私、津島善子……じゃなかった。

私——墮天使ヨハネは、目の前の状況が理解することが出来なかった。

気付いたら、私は地元の沼津にある公園に居た。子供の頃、よく遊んでいた場所だったわ。

『REDAY』
準備
 『AQUA』
告げる

千歌ちゃんと曜が公園の広場で向かい合いながら、二人はそう唱えた。

あの……千歌ちゃんに、曜。なに二人ともそんな凄いカツコ良い呪文唱えてるの？

なんて羨ま……じゃない、いつからあなた達は魔法を使えるようになったのかしら？
 子供のお遊び。きっと私の真似をしているのね。

あなた達では魔法なんて使えないわ。それが自分達が一番よく知っているのでしょ
 う？

『Moderato!!?』

『Squirt!!?』

二人が続けて詠唱を唱えた瞬間、二人から何かオーラののようなモノが噴き出した。

千歌ちゃんの身体が弾けるようにその場から飛び出す。あの……千歌ちゃん、それどう見ても普通の人の動きじゃないんだけど……

それと曜、手から水の弾丸みたいなもの出てるんだけど……

あつ、私……夢見てるんだ。あの子達が魔法なんて使えるはずないもん。

頬を思い切り掴み、そして捻る。

え、待つて……すっごい痛いんだけど。

アレ? 夢じゃない? 私、遂にパラレルワールドとか並列世界に行けたの?

「くっ……流石、曜ちゃん! 勝たせてくれないね!」

「まだまだ! 半人前の千歌ちゃんに負けないよ!」

激しく拳を打つ千歌ちゃんに、それを躲して身体から水を飛ばす曜が楽しげに話をす

る。

えっ……すつつつごく羨ま……じゃない。楽しそうなのだけど。

何故か離れた場所でベンチに座って、二人を私が眺めている。なんでここに私がいるのかすごい不思議なのだけど、私はとりあえず目の前で戦っている二人を眺めることにした。

別に考えるのをやめたわけじゃないわ。目の前で起きてることに、頭が追いつかないからでもなくて。

そう！ 私は二人の魔法を見てあげてるのよ！

まだ一人前じゃない二人を私が見てあげてる。きつとそうに違いないわ！

『AQUA——』
告げ

曜が千歌に水の弾丸を飛ばしながら、呟いた。

そして曜が右手を強く握りしめると、彼女はそれを自分の顔の前で掲げた。

『
Somet^水hing^はBy^我Wh^のich^一Wat^部er^とCon^なtr^りols^そEver^しyth^てing^我』
|
部

Water is filled in the atmosphere.
世にこの水は溢れ、全世界に精霊が溢れている。
 Water is filled in the world.
故に、この場で我は願う。我に力を貸したまえ。我の友よ、現れよ。
 At this place.
水を司るモノよ、我の力となせ。
 Aspirit of Water appears!!?』

曜……ヤバイよ。なにそんなペラペラと呪文唱えてるの？

私、そんなカッコ良い呪文知らないわ。ねえ……曜、どこからそんな呪文覚えてきたの？

「準備オツケー！ 千歌ちゃん！ 行くよーッ！」

「かかってこーい！」

曜が呪文を唱えて、顔の前に掲げていた手を大きく振り払う。

そして曜が手を振り払うと、彼女の周りに青い光が吹き荒れたわ。

青い光が曜の周りを回る。そして光は気がつくくと水のようなモノになって、曜の背後へと集まっていった。

集まっていく水。それが全てを集まると、次の瞬間——それは違うものとなってい

た。

「ウンディーネ、行くよ！」

曜の背後に現れたのは、青い肌の青い髪を持った女の人でした。まるで水で出来てるみたいなそんな人に見てたわ。

と言うか、その人……曜の背後で浮いてるのだけど。

うん、やっぱり夢なのね。これ。

とりあえず起きないと。私は頬を掴むと、思い切り捻った。

「痛い……」

駄目よ、ヨハネ。そんなことじゃ立派な堕天使になれないわ。

私はそう何度も自分に言い聞かせると、深く深く深呼吸をした。

二人がなんで戦ってるか正直不思議でならないけど、私はとりあえず見守ることにした。

別に二人の間に入ったら、自分の身が危ないとかそんなことを思ってるわけじゃない

の。

ただ二人の実力がどんなものか見極めてるだけよ！

「やっぱり曜ちゃん出してきたね！ なら私も！」

千歌ちゃんが曜の背後にいる人を見て、どこか気合いを入れていたわ。

『RE準AD備Y——M加o速d開e始r始a始t始o始!!?』

千歌ちゃんが両手を握りしめて、身構えると——今度は彼女の身体から激しく赤い光が噴き出していた。

『DR駆IV動E——P三r三e三s三t三i三s三s三i三m三o!!?』

「お、千歌ちゃん。それ出してくる？」

「やっぱり私と言ったらこれだから！」

ニツコリと笑う千歌ちゃんと曜。

そんな二人を私は気がつくど、無心になって見ていた。
うん……考えるのやめた。なんだか色々ついていけないの。

「あつ、善子ちゃん」

そんな時、ふと誰かが私のことを呼んだ。

声のする方に私が振り向くと、私はその人の名前を思わず言っていた。

「ルビィ?」

「こんなところで一人でなにしてるの?」

ルビィの質問に私が千歌ちゃんと曜がいる方へ指を向けると、ルビィは納得したように頷いたわ。

「千歌さんと曜さん、またやってるんだね」

「いっしょっ!」

私が思わずルビイに訊く。それにルビイは少し不思議そんな表情を作った。

「あれ？ 確か善子ちゃんが二人の魔法の練習見てるって自分で言っただけじゃなかった？」

「へっ!?？」

え!?? 私ってそういうポジションだったの!??

曜とか「あんなの」出してるとだよ!

千歌ちゃんとかなんかカッコ良い呪文唱えて戦ってるんだよ!

私ってあの二人よりすごい立ち位置じゃない!

「あ、そうだったわ! ちょっとブーツとしてたから!」

「大丈夫? 体調悪いなら帰った方が良くないんじや?」

「大丈夫よ! このヨハネが体調が悪くなるなんてないわ!」

ルビイが苦笑いする。しかし私はそんなことを気にも止めず、ただその場を誤魔化すので精一杯だった。

なんか私って……すごいポジションらしい。

嬉しいのか悲しいのかわからないけど、なんとなくこの状況は良くないことは分かった。

『DRIVE——Agitate!!?』

なんか千歌ちゃんが唱えてるし……ねえ、あなたの手から当然のように炎出てるけど、あなたそれどうやってるの？

そんなことを思うのもつかの間、気がつくのと千歌ちゃんと曜の背後に居た青い人がぶつかり合っていた。

小さな爆発が起きる。それと同時に、私とルビィに思い切り風が吹いた。

「わっ……!」

思わず、私は顔を覆っていた。だって目が開けられないんだもの。

そして爆風が止まると、千歌ちゃんが仰向けに倒れていた。

「む——! 負けたあ——!」

「いえい！ 私勝ちー！」

大の字で倒れる千歌ちゃんと嬉しそうに飛び跳ねる曜。心なしか曜の後ろにいる青い人も喜んでいような気がした。

ダメ……やっぱりついていけない。ごめんなさい、私ってそんなに適応力高くなかったみたいだわ。

「善子ちゃん！ 今日の私達はとうだった？」

私がそんなことを思いながら黄昏ていると、千歌ちゃんが私の元に走ってきた。

「えっ……そ、そうね！ 良い感じだったわよ！」

「おお、久々に高評価を貰ったよ〜！」

その場凌ぎで私が千歌ちゃんに返す。

そんな私の言葉に、千歌ちゃんは嬉しそうに笑顔を作った。

久々に、つて……私ってどれだけ厳しい人だったの？

と言うか、さっきの二人の練習見てあげてるってどれだけ私は強かったのよ……

「ねえねえ！ 善子ちゃん！ 次は私と勝負しようよ！」

「おお、挑戦するんだね。千歌ちゃん」

「今度こそ善子ちゃんに勝ってみせる！」

千歌ちゃんの話に曜が驚いた表情を見せる。

私へ向かって燃えるような視線で見つめる千歌ちゃんに、私は背筋に変な汗が出てくるのを感じた。

「い、いや……今日は遠慮しておこうかしら？」

咄嗟に出た言葉だったわ。

不思議と私の声が震えているのが自分でもわかった。そんな私に千歌ちゃんは「えー！」と口を尖らせていた。

「善子ちゃん！ 良いでしょー！！？」 さっき今日は調子良いって言ってたし、今日は魔

力の流れが良いから二人相手で組手するって言ってたでしょ!?!?」

何を余計なことを言っているの!?!? 少し前の私っ!?!?

私の顔が引き攣る。なんとかしてこの場から逃げる方法はないかと、頭の中をフルで動かす。

「あれ? そう言えばさつきからリトが居ないけど、どこ行つたの?」

そんな時、曜が周りを見渡しながらそう私に訊いてきた。

「……リトって誰?」

聞き覚えのない名前に私は曜に訊き返す。

私の質問に、曜はコトリと首を傾げていた。

「誰も何も、善子ちゃんの守護精霊じゃん。リトルデーモンのリト、いつも喜子ちゃんの周りに居るでしょ?」

「あ、そうだったわね！　ボーツとしてたわ！　リトなら散歩してるんじゃないかしら？」

私が適当なことを言って誤魔化す。

リトルデーモン？　そんなのが私の周りにいるの!?!?

え、めっちゃ見たいんだけど……なんて羨ましいことしてたのよ、私!?!?

そんな会話もつかの間、千歌ちゃんがしつこく試合をしようと言いつつ、周りが勝負してあげなよってという雰囲気になってしまい。

「よおーし！　喜子ちゃん！　いっくよー！」

そして私と千歌ちゃんは、勝負をすることになった。

公園の広場で私と千歌ちゃんが少し離れて向かい合う。

やる気満々な千歌ちゃんだったが、私は顔から汗が出るのが止まらなかった。

「……ヤバイ」

どうしよう……私、魔法なんて使えない。

もう認めます。私は厨二病です。あなた達みたいに魔法は使えません。

墮天使ヨハネとか言つててごめんなさい。神様、許してくれるなら今すぐ夢から覚めてください。

何か心の中で崩れ落ちるのを感じながら、私は目を閉じて願つたわ。

でも、それも虚しく……私は夢から覚めることはなかった。

あ、やっぱり私つて並行世界にでも行つたんだ。これから異世界にでも行つてくれた方が良かったのに……

『準備開始 READY——加速開始 M o d e r a t o !!? 』

私が目を閉じた後すぐに、千歌ちゃんの声が聞こえた。

私が目を閉じたのが何かの準備と思つたのかもしれない。全然違うのに……

「ん？ 善子ちゃんから魔力の流れが見えない？」

曜の声が聞こえる。

いや、流れも何も私は魔力なんて持ってません。だって使えないもの！

『DRIVE——Agitaato!!?』

そして千歌ちゃんがそう唱えた。

あれ？ それってさつき手から炎出してたやつじゃないかしら!!??

もしかしてソレで私に殴りかかってくるの!!??

私が慌てて目を開けると、千歌ちゃんはもう既に私に向かって全力疾走していた。直に見るとめっちゃ千歌ちゃん走るの速くないかしら!!??

って、もう私の目の前にいるし！

「先手必勝——！」

千歌ちゃんが私に拳を振りかざす。

その瞬間、私には千歌ちゃんの動きが遅く見えた。

そして私が生きてきた今までの数々の思い出が、脳裏を駆け巡った。

あ、これ……よく漫画とかにあるやつだわ。

完全にこれって、死ぬ前に出てくる走馬灯じゃないかしら？

「ごめんなさい！ 私にはむりいー！」

このままだとほぼ確実に私は文字通り炭になる。それを自覚すると、私は両膝を地面に付いて頭を力一杯下げていた。

「…………へ？」

千歌ちゃんが素っ頓狂な声をあげた。

私の頭上で激しい風と共に何かが止まる音が聞こえる。

これ千歌ちゃんの拳に間違いないわ。人の拳ってこんな風が出るのね……………きつと当たってたら死んでた。

「よ、善子ちゃん？ どうしたの？」

千歌ちゃんの声が聞こえる。

もう誤魔化するのなんて無理。多分これ以上誤魔化すと私の命がない。それだけは確かにわかったわ。

「じ、実は——」

だから私は頭を上げると、目の前にいる千歌ちゃんに声を震わせながら正直に話すことにした。



「魔法が使えない!?」

私の話を聞いて、三人が声を揃えた。

私は三人に見られながら、ただ頷くしか出来なかった。

「はい……そうです」

「……魔法に関する記憶が無くなってる？ いや、どっちかっていうと改竄されたつてのが正しいかも？」

「いや、私からすればみんなが変にしか見えない」

曜の話に私が即答する。

私を知るみんなはさつきみたいに魔法なんて使えないわ。

私が変わ、ではなく私にしたらみんながおかしいとしか思えない。

「だからリトが居なくなっただんだ……善子ちゃんに魔力を扱うことが出来なくなってるなら、魔力の塊であるリトルデーモンは召喚出来ないから」

「でも私と曜ちゃんが練習する前は普通に魔法使ってた？ 私と曜ちゃんの勝負は五分も掛からなかったよ？ その間に善子ちゃんに魔法の干渉があったら流石の私達でも気付くよ？」

曜の推察に千歌ちゃんが答える。

それに曜が悩む素振りを見せると、彼女は私をチラリと見た。

「善子ちゃん、いつから私達を見たの……と言うより、いつからベンチに座っていたと自覚したの？」

「そのこと自体、私は知らないの。いつの間にか気付いたらベンチに座ってたから」

私が素直に返事をする。曜はそれに「まいったな」と言うと、顔を顰めていたわ。

そして曜は頭を雑に搔くと、私……と言うより千歌ちゃんとルビイを見て言った。

「うーん。ダイヤさんに相談しよう。流石にこれは私達の手に負えない」

千歌ちゃんとルビイが頷く。しかし私は思わず曜に聞き返した。

「待って、なんでそこでダイヤが出てくるの？」

私の質問に、曜は一瞬目を大きくするがすぐに納得したように苦笑いしていた。

「ダイヤさんは私達のリーダーだから、スクールアイドル部改め——野外活動部の」

そうやって、曜は歩き出した。

千歌ちゃんもルビィがそれについて行く。

「え、え？ どういうことなの!?？」

ついていけない私だったが三人が先を歩いて行くのに、私は慌てて彼女達を追い掛けるしかなかった。



「参ったわ……善子さんが、魔法を使えないなんて……」

ダイヤが私を見て、眉を寄せながら口を引き攣らせた。

先程、私と曜達の四人が居た公園とは場所が変わり、今は学校のスクールアイドル部の部室に私達は居た。

「果南さん、次の満月まで後何日だったかしら？」

「あと二週間だよ」

ダイヤが隣にいる果南に訊くと、彼女は即答した。

「二週間……間に合うかしら？」

「え、ダイヤさん。もしかして……？」

ダイヤの呟きに、梨子が顔を強張らせる。

そんな梨子にダイヤは「やるしかないでしょう」と答えていた。

「え、え？ どういうこと？」

意味のわからない会話に、私はダイヤに質問する。

それにダイヤは頭を抱えると、澁々説明してくれた。

ダイヤ曰く、私達の街に七月から毎月の満月の深夜一二時に魔物が襲ってくると言っ

ていた。

それに対抗するため、ダイヤさんをはじめとするスクールアイドル部のメンバーが戦うことになっているんだって。

魔法を使えるのは、ごく少数の人達だけ。その中で力のあるメンバーが集まったのが、私達のスクールアイドルAqoursのメンバーだったらしい。

なにそれ……一体なんでそうなったの？

頭が追いつかない私が内心でそう思う。

いや、魔法使えるのはまだ良いわ。でもね、力のあるメンバーが私達の九人つて変だと思わないの!!?

そんな私の考えも、ダイヤの前では関係なかった。

ダイヤはこの場にいる全員を見渡すと、私をキリツと見つめながら——こう告げた。

「次の満月までに善子さんが戦えるようにしましょう」

「ええっ!!? 本気!!?」

ダイヤの話に、私は思わず叫んだ。

しかしダイヤはそんな私を真剣な眼差しで見つめると、彼女は「本気よ」と答えてい

た。

「善子さんは……前のあなたは私達の大切な戦力でしたの。それと同じ、またはある程度の実力を付けてもらいますわ！」

「……冗談？」

声が震えているのが、自分でもわかった。

え……私に千歌ちゃんや曜みたいなこと出来るようにさせるの？

いや、魔法が使えるなんて正直飛び跳ねそうなくらい嬉しいわよ。でもね、さっきの話聞いてる限り、もしかしたら死ぬかもしれないってことでしょ？

「無理無理！ 二週間でなんとかなるわけないじゃない！」

私は叫んだ。しかしダイヤはただジッと私を見つめているだけ。

そんな時、千歌ちゃんが私の跪く私の隣に近づいてきた。

「大丈夫だよ！ 善子ちゃん！」

千歌ちゃんが私に優しく微笑む。

私はその表情を見ると、胸が落ち着くような、そんな気がした。

千歌ちゃん……やっぱりあなたは分かってくれるのね。

唯一の救いと言える千歌ちゃんに、私は心から感謝した。

ダイヤに何か言ってくれる。私はそう思っていたからだ。

「今日から特訓だよ！ 善子ちゃん！」

「……………え？」

しかし千歌ちゃんの口から出た言葉は、私の予想とは違っていた。

えっと……この子、なに言ってるの？

そんなやる気に満ちた目で見つめられても困るのだけど……

「大丈夫！ きつとなるとかなる！」

千歌ちゃんが私に追い打ちを掛ける。

やめてください。千歌ちゃん、そんな目で私を見ないで。

「……諦めなよ、善子ちゃん。やるしかない」

そんな私に、曜が諭すような声色で言った。

私が周りを見渡すと、全員が私に頑張れと言っているような目を向けていた。

「そんなあ……」

逃げ場がない。それを私が理解すると、私は思い切り肩の力を抜いていた。

二週間。今日から始まる特訓の日々が来ると知った瞬間、私は泣きたくなった。



そしてあつという間に、二週間が経った。

学校の授業以外を全て魔法の習得に注ぎ、周りのみんなからは鬼のように指導される日々が脳裏をよぎる。

思い出したくもない。唯一嬉しかった瞬間は、今の私が初めて魔法を使った瞬間くらいだ。

それからというもの、ダイヤからは鬼教官みたいな訓練させられるわ。曜の精霊を倒すまで戦えとか、高速で動く千歌ちゃんに一撃入れるなどの無理難題を強制された。

……全部やったわよ。何回か死にそうになっただけど。

言い出したらキリがないからこれ以上は言わないけど、もうあんな日々は懲り懲りだと心の底から思ったんだから。

そうして、今日がダイヤの言っていた満月の夜だった。

「あれから結局、本当に魔法が使えるとは思ってなかったわ……」

夜の公園で私が肩を落とす。

そんな時、私の横でパタパタと何かが飛びながら、私の肩に乗った。

「リト……慰めてくれるの?」

私の肩に乗っていたのは、私の召喚した悪魔のリトルデーモンことリトだった。

何故か私の魔法はこの子が居ないと活用されにくいらしい。それを私はダイヤから聞いていた。

小さなデフォルメされた悪魔みたいな姿のリトが私の頭を小さな手で撫でてくれる。

「ありがとう、リト」

本当、可愛いわね……その優しきで涙が出てきそうだわ。

そんな時、私の隣に千歌ちゃんが近づいて来た。

私とリトを交互に見ながら、千歌ちゃんは心配そうな表情を見せた。

「善子ちゃん? 大丈夫?」

「大丈夫じゃないわよ……」

これからのことを考えると気が重い。それが私の本心だったから。しかし私の答えを聞くと、千歌ちゃんはサムズアップして笑顔を作った。

「私達が居るから大丈夫だよ！」

「千歌ちゃんは呑気ね……」

これから魔物と戦うっていうのに、なんで千歌ちゃんはこんなに気楽なのかしら？

私がそれを聞くと、千歌ちゃんは「みんなと一緒にだから！」と即答してたわ。

千歌ちゃんらしいわね……本当に。

「そろそろ、十二時よ……みんな、準備おつけー？」

私がそう思っていると、曜がそう切り出した。

私が返事をする前に、みんなは揃って「おつけー！」と返していた。

そして時計が深夜の十二時になった瞬間、それは起きた。

——その瞬間、空気が震えた

次に何かのうめき声が響く。みんなが周りを見渡すが、声の主は何処にもいない。ふと、私が見た瞬間——背筋が凍った。

「う、うえ……」

たどたどしく、私は空に指を向けた。

みんなが揃って上を向く。そしてみんなが空にいるソレを見た途端、顔を強張らせた。

「……一番不味いのが来たわ」

そう、ダイヤが呟いた。私はその言葉の意図に気づくこともなく、私はただ空にいるソレを見ているだけだった。

鷹と牛が合わさったような化物が、空にいた。

頭部が牛、そして胴体が鳥と漫画の中でしか見ないようなその姿に私は目を大きくして見つめていた。

そしてソレから放たれる威圧感に、私は身体が竦んでいた。

『AQUA——Barret!!?』

誰よりも先に動いたのは、曜だった。

曜が唱えた瞬間、彼女の手から激しく水の弾丸が数え切れないくらい放たれる。

それを化物は大きく飛んで躲すと、今度は私達に向かつて飛んでいた。

思い切りぶつかる勢いで飛ぶ化物に、私は腰が抜けそうになる。

しかしそれよりも先に、私達の前に飛び出したのは——ルビイだった。

『RUBY——Diamond!!?』

ルビイが唱える。そしてそれと同時に、彼女の前から白い花が咲き乱れた。化物とルビイが出した花びらが衝突する。

「きやあああ！」

そして次の瞬間、ルビイの身体が弾き飛ばされた。

『READY——Moderato!!?』

ルビイの身体が吹き飛ばされた時、そう唱える声が聞こえた。

私の目が追いつかない速度で千歌ちゃんが吹き飛ばるルビイを抱えると、地面に足を引
きずらせながら急停止していた。

「ルビイちゃん!?? 大丈夫!??」

「大丈夫です……でも私の絶対防御の盾——SnowDiamondの花びらが四枚も
無くなりました」

ルビイに声を掛ける千歌ちゃんに、ルビイが辛そうな表情で答えた。

ルビイは確か、防御の魔法を使うと言っていたわ。

白い八枚の大きな花びらが攻撃を自動的に守ってくれる彼女だけの魔法——

Snow^純Diamond^白の^花名^弁前^弁だった。

一枚砕くのに、千歌ちゃんが全力で力を込めないと壊せないほどの強度つて曜が言っていたからかなり強い筈なのに……あの化物は突進するだけでそれを四枚も砕いていた。

「千歌さんはルビイを連れて一度退避！ 私と梨子は応戦！ 他のみんなは隙があれば攻撃！」

『了解ッ！』

ダイヤが叫ぶと、みんなはそれぞれの行動をしていた。

千歌ちゃんがルビイを抱えて後方に下がり、曜は私の前に来ると私を守るように前に立っていた。

「善子ちゃん！ 大丈夫!?？」

「だ、大丈夫よ！」

真剣な声で確認する曜に、私は反射的にすぐに返事をしていった。

『BLOOM——Grandioso!!?』
咲き誇れ 貫きなさい

梨子が唱えると、彼女の周りから桜色の光を纏った木の枝が化物に向かつていった。

『TRUTH——Tempest!!?』
秘え 退魔の風

続けて、ダイヤが唱える。そうすると今度はダイヤの手から黒い竜巻が化物に向かつていった。

「□ ■ □ ■ □ —— !!?」

しかし梨子とダイヤの放った魔法が化物に向かうなか、化物が叫んだ。

そして二人の魔法が化物にぶつくと、その瞬間——大きな爆発が起きた。

激しく吹き荒れる風のなか、みんなが化物に目を向ける。

そして風が止み、化物が姿を現すと——みんなが息を飲んだ。

「……効いてない!?」

私の前にいた曜が声を震わせていた。

姿を現した化物は、無傷だった。強いて言うなら、羽に少し傷がある程度の些細なものの程度。

「止まらないで！ 全員で攻撃するわよ！」

みんなの時間が止まるなか、ダイヤだけがそう叫んだ。

それを機に、みんながハッと意識を取り戻していた。

ダイヤが化物に向かって走る。それに続いて、残りのみんながそれぞれ呪文を唱えながらダイヤに続いた。

「善子ちゃん……私も行くから」

私の前にいた曜がそう言った。

「え……」

思わず、私は声が出ていた。

しかしそんな私を曜が一瞥すると、彼女は首を横に振っていた。

「私も行かないといけない。多分、全員で行かないとみんな危ないから」

「で、でも……」

「ごめん。善子ちゃんは逃げて良いよ。あとは私達でなんとかする。あんなのが来るなんて思わなかった……善子ちゃんには無理だよ。だから……逃げて」

そう言って、曜が走り出した。

私が「待つて！」と叫んでも、曜は前を向いて走り出していた。

そんな曜の背中を、私はただ見ているだけしか出来なかった。

そして、その場から逃げることも出来ずに……私は、みんなが戦う姿を見ているだけしか出来なかった。

「み、みんな……」

そして数分にも満たない間に、みんなが傷ついていくのを私は直に見ていた。

吹き飛ばされて倒れる果南。肩に深い傷を負った花丸。頭に傷が出来て目が見えない梨子が悔しそうに顔を歪めていた。

このままだと……みんなが……

しかしそれでもダイヤと曜、そして千歌ちゃんが化物と戦っていた。

あんなに傷だらけになって、それでも必死にみんな戦っていた。

「私……なんでここに居るのかしら？」

そんな時、私の口からそんな言葉が出ていた。

なんのために、あんなに練習したのかしら？

みんなと協力して魔物を倒すって話だったのに、なんで私は何もしてないの？

震える身体が、化物が怖いと言っている。だけど、私も戦わないといけないのに、なんで？

気がつくのと、私は唇を噛んでいた。悔しい、ただそれしか私の頭になかった。

何かしないと、じゃないとみんなが――

「え……?」

その時——私の横を小さな影が飛んでいた。

小さなデフォルメされた可愛い悪魔。それは私の召喚したリトルデーモンのリトだった。

「リト?」

リトが私の周りを飛び回る。そしてリトは自分の持っていた槍を化物に向けていた。

「戦うの……? あんなに強いのに?」

私の問いに、リトは胸を張っていた。

任せろ、そう言っているのが不思議と私には分かった。

そしてリトが持っている槍を私に一度向けると、今度はソレを化物と向けていた。

「……一緒に戦う?」

リトの言いたいことを言葉にすると、リトは満足そうに頷いていた。

「で、出来ないわ……私なんか……」

私が拒否するが、リトは首を横に振っていた。

そしてリトが私の手元に近づくと、リトは私の手にそつと触れた。

——その瞬間、私の脳裏に色々なことが蘇った。

この二週間、頑張ってきたこと。みんなと一緒に特訓していたこと。

そしてこの世界の私のことをこの瞬間——私は理解した。

「……うん。リト、一緒に頑張ろ」

不思議と、力が湧いてくるような錯覚がした。

さつきまで怖かったのに、どうしてか今は誇らしいと思えたから。

リトが嬉しそうに悪魔の翼を羽ばたかせた。そして私の周りを飛び回ると、リトは私の前に背を向けて止まった。

さあ、命令してくれ。そう言っているのが、何故か私には分かってしまった。

「……わかったわ」

私は頷く。そして座り込んでいた状態から起き上がると、私は深く深呼吸をした。そして目の前にいるリトと先にいる化物を目で見つめながら——私は、唱えた。

『DEMON——The FolloweR Who Can Follow Me.
 Show Me The Power Now. Your Power Is For This.
 Because My Power Is You.
 Tsutomu Who Emanate Is The Power Of The Destruction
 That At The End Of This World!!?』

自然と言葉が出てきた。誰にも教わっていないすごく長い呪文なのに、何故がスラス

ラと唱えていた。

そして私の身体から黒い光が吹き出ると、それがリトへと流れ込んで行った。

私の黒い光を浴びたリトが、構える。そして次の瞬間——リトの姿が変化した。

先程まで小さかったリトが、いつの間にか黒い騎士に変わっていた。

そしてリトが化物の方を見ると、リトが手に持つ槍を構えていた。

さつきまでの可愛い槍とは違い、今持っている槍は赤黒く光る鋭い槍だった。

リトが構え、そうして槍を振りかぶると——リトはその槍を化物に向かって投げた。

——瞬間、リトの投げた槍を中心に竜巻が起きた

激しく吹き荒れる暴風。そう言うのが正しかった。

それ以外に言葉がないくらい、空気を切り裂いてリトの投げた槍が化物に向かっていった。

そして数秒もしない時間で、その槍は化物に突き刺さっていた。

多分、化物は避けるなんて出来なかったに違いないわ。

あまりに速くて、反応すら出来なかったと思う。

リトの身体から黒い光が吹き出る。そして吹き出た黒い光が止まると、いつの間にかリトが元の可愛い悪魔の姿に戻っていた。

「……お疲れ様、ありがとう」

小さくなったリトに、私が小さく感謝する。

そんな私の言葉が聞こえていたらしく、リトは嬉しそうに私の周りを飛び回っていた。

「善子ちゃん、お疲れ様」

そんな時、曜がそう私に言った。

私は首を横に振ると、リトを見ながら答えた。

「全部、リトのお陰。私は何もしてないわ」

「リトの手柄は主人の手柄。そうでしょ？ リト？」

いつの間にか曜の隣にいた千歌ちゃんがそう言うと、リトが何度も頷いていた。

「そっか、なら良いかな。それで」

「うんうん。それで良い」

「なんて千歌ちゃんが誇らしげ？」

満足そうに頷く千歌ちゃんに、曜が苦笑いする。

そんな二人に私が思わず笑うが、私はすぐに周りを見渡した。

「あ！ みんなは!?？」

さっきの戦いで怪我をしたみんなを思い出した私が声を大きくする。

それに曜が頷くと、ある場所を指差した。

私がおの方を向くと、そのでは怪我をしたみんなを手当てするルビイの姿があった。

「ルビイは治療の魔法使えるんだよ。だから大丈夫」

「良かった……」

私が安心して、肩の力を落とす。

そしてその瞬間、私は足の力が抜けて地面に崩れ落ちた。

あれ……力が抜けて、立てない？

「善子ちゃん!?」

倒れた私を千歌ちゃんと曜が抱き抱えてくれる。

二人に抱えられていることに不思議と安堵した私は、思わず笑っていた。

「なんか安心しちゃって、力抜けちゃったわ」

「なんだ……心配したよ、もう!」

私の言葉に、二人が顔を見合わせると揃って笑っていた。

これで戦いはおしまい。そう思うと、私はなんだか眠くなっていた。

「千歌ちゃん、曜。なんだか眠くなってきたわ」

私がそう言うと、曜は嬉しそうに頷いた。

「お疲れ様、ゆっくり休んで」

「うん。おやすみ」

曜の言葉に安心した私は目を閉じると、そのまま深い眠りについた。

『まあ、初めてにしては上出来ね。あとは私に任せなさい』

眠る時、そんな声が私の頭に響いた。

なんのことも分からない。だけどどこかで聞いた声だと思いながら、私は薄れる意識を、そっと手放した。



外が騒がしい。そう思うと、私は目を開けた。

「ん……？」

目を開けると、私は身体を起き上がらせながら目を擦った。

そして私を見渡すと、私が今居るのは誰も居ない教室だった。

あれ……？　なんで私、自分の机で寝てたんだっけ？

なんだか急に眠たくなって、それで机で寝ちやつたんだっただかしら？

でも、なんだか変な夢を見ていた気がするわ。

魔法とかの漫画みたいな夢を見ていた気が……つて。

「あ……夢だったの？」

寝惚けた意識が覚めると、私はそう呟いていた。

え……今までの夢だったの？

さつきまでの出来事が脳裏に蘇る。そして今までのことを思い出して、私は今までのことが夢なんだと理解するのに少しだけ時間が掛かった。

「妙に現実味が溢れてたわ……」

しみじみと、私が眩く。

「善子ちゃん！ 練習するよ〜！」

そんな時、教室の外から千歌ちゃんが顔を出していた。

練習着に着替えている千歌ちゃんが私に向かって叫ぶ。

それを見て私が時計を確認すると、時間はもう練習が始まつてる時間だった。

「ごめんなさい！ わかったわ、すぐ行く〜！」

「早くね〜！」

私の返事を聞いた千歌ちゃんが走り去っていった。

私が慌てて荷物を片付ける。そして教室からみんなが待つ練習場に向かう時——ふ

と、妙な言葉が頭を過ぎった。

私は立ち止まると、人指し指を立て——小さく呟いた。

『DEMON——Friend』
命 ず る 召 喚

夢で覚えた。一番最初の呪文。

なんとなく私がそう呟くと、私は自分で自分の言葉に笑っていた。

「やっぱり……夢よね」

笑いながら、私は教室から出て行く。

変な夢を見て、少し変な気分になったみたい。

「今日も墮天使ヨハネは頑張るわよー！」

思わず、私はそう叫んだ。

うん。これがいつもの私だ。

そう思いながら、私はみんなが待つ練習場に向かって走って行った。

そして、私が立ち去った後——私は知ることもなかった。
誰も居ない教室の一角に、黒い光が仄かに灯ったことを。

Lets Try!

——俺は、英語が大嫌いだ。

中学以来、俺は英語が嫌いになって、ずっと避けてきた。

その分、英語の勉強も殆どしてなかったし、当然英語は上手くない。

だから英語を教えるとか、絶対無理だ。

それなのに、人生ってやつはどうも簡単に苦手なものを避けさせてはくれないらしい。

「お願いだよお兄ちゃん、勉強得意でしょ!？」

赤点の付いたテスト用紙を堂々と見せながら俺に教えを乞うこの少女は、俺の妹の千歌だ。

千歌は俺より3歳下の、高校2年生。

対する俺は、大学1年生。

だから、高校の勉強を教えるくらい簡単なことなのだが……

「よりもよって、英語か……」

千歌が両手で広げている赤点テストの数枚の内一つは、科目が英語だった。他の教科なら、そこそこ勉強できる俺には教えることができなくはない。

だが、英語だけは、無理だ。

「すまん、英語だけは苦手なんだ……他の教科なら見れるが……」

「ええっ、でも高校レベルの英語だよ？」

「それが無理なんだって」

「それで大学入れたの？」

「英語以外は結構できるからな」

それ以上は何も言えなくなった千歌は、渋々引き下がって英語以外の教科で妥協した。

しかし、他の教科と比べると、返されたテストの中では英語の点数が一番低かった。英語に関して誰かに手伝ってもらわないといけないのは確かだ。

千歌の友達に英語が得意な人がいればいいのだが……。

俺にはどうしようもできないので、千歌の英語勉強には本格的な他力本願姿勢で、力になるつもりもなれる自信も全くなかった。

翌日、俺と千歌は店の買い出しを兼ねた買い物に出掛けた。

兄妹二人一緒に出掛けるなんて、他のところじゃ中々聞かない話だとよく言われるが、俺達はそんなこともなくむしろ割と頻繁に一緒に出掛ける。

しかし、今日はちよつとした事件が起こったのだった。

それは商店街への道中のハプニングだった。

「Excuse me, can you tell me the way to go to the station?」

後ろから、深い男性の声であまりに聴き慣れない、本場の英語が聞こえた。

振り向くと、170はある俺の背丈を軽く越えた、黒髪のデカイお兄さんが俺達を見て立っていた。

ついでに、俺の肩に手が置かれている。

「おおお兄ちゃんどうしよう、なんて言ってたのか全然わからない！だ、ダジャレでも言えばいいのかな!？」

「おおおちおち落ち着け、まず日本語が通じない時点でダジャレで和むことは不可能だ」

落ち着けとは言ったものの、俺も今の英語は全く聞き取れなかった。

日本の学校で教える様な、日本語のカタカナ英語や、それっぽくしようと取って付けた様な素人アクセントの英語とは訳が違う。

言うならば「トマト」でも「トメイトウ」でも無い、本物の「Tomato」だ。舌が完全にアメリカ国産だ。

単語をゆっくり言ってくれるならまだしも、文章で滑らかに喋って来られるともうお手上げだ。聞き慣れた者にしか通じはしない。

だがそんな俺の迷惑を知ったこっちゃんやないとばかりに、外国人のお兄さんは先程言ったことを繰り返しながら、直射日光を妨げ俺達に近づいた。

当然、二度目を聞いたところでわかる筈もない。

仕方ない、ここはこんな時のためにたつた一文だけ間違えずに言える様に練習を重ねた秘技、『アイキャントスピークイングリッシュ』でこの場を切り抜けるしかない……！
そう覚悟した時。

「Hello, do you need any help?」

救いの手が、金髪のお兄さんに差し伸べられた。

振り向くと、そこには金髪青目の、やたらとオシヤレをした少女がいた。

歳は……千歌と同じ、高校生くらいだろうか。

髪が一部輪状に結ばれており、少し印象的に思えた。

頭の上に浮いているわけではないが、救いの手を差し伸べた天使の輪つか、なんて、誰に伝えるわけでもないジョークを思いつく。

「ま、鞠莉さん!?!」

「なんだ、知り合いか?」

千歌が空気も読まず大声で叫ぶと、鞠莉と呼ばれた少女もニツコリとしてこちらに手を振った。

彼女の発言に反応して、外国人が助かったとでも言いたそうな表情を浮かべる。

「Oh, yes I do! Can you please tell me the way to go to the station?」

「Of course! You make a left turn over there, and——」

鞠莉は、驚いたことにといふべきか、やはりといふべきか、金髪のお兄さんと同レベルの所謂ネイティブな英語の使い手だった。

「Thank you very much!」

「You're very welcome! バイ!」

話し終えた様で、お兄さんは手を振りながらこの場を離れた。

鞠莉は笑顔で手を振り返している。

しばらく手を振ったあと、彼女はこちらへ振り向いた。

「ハローチカツチ、たまたまチカツチを見かけたらあのBig guyが困ってそうだったから声をかけたの」

やはり千歌の知り合いか。

千歌がさん付けするってことは、先輩、つまり高校3年生だろうか？

隣で立っている千歌を見ると、鞠莉を見るその目は輝いていた。

不思議と、嫌な予感がする。

千歌がたまらず踏み出したのと同時に、俺は予感的中したことを悟った。

「鞠莉さん、私達に英語を教えて！お願い！」

「……ホワッツ？」

そう、千歌の思いつきはいつも奇抜で突然で、それでいて千歌はその思いつきに対する行動が速い。

慣れない人は当然、そうなる。

……ん？ちよつと待てよ、今、私『達』って言ったかコイツ？

「……おい」

「何？ほら、お兄ちゃんも教えを乞うんだから一緒にお願いしてよ！」

「はああ!?何で俺が!?!」

「だってお兄ちゃん英語できないじゃん!あ、鞠莉さん、教えてくれる代わりに、何か奢ったり、言うこと聞くから!お兄ちゃんが!」

「だから何で俺が!?!」

俺達が騒いでいる横で、鞠莉は少し唾然としてから、突然笑い出した。

「貴方達 So funny ね!チカツチ、この人は誰?」

「私のお兄ちゃんです!お望みとあらば奢らせるから英語を教えてください!!」

「Oh、お兄さんでしたか、初めまして!Nice to meet you! そうだねえ……Okay、教えてあげる!」

「あ、どうも初めまして、妹がお世話になってますーすいませんね突然こんな無茶苦茶、別に真面目に受け取らなくても……って、へ?」

つい断られる前提で話していたが、さつき、「いいよ」って……

「だから、私がTeachしてあげるよ！見返りは……Hmm、そうね、後で決めようかしら」

「よしっ、でいーる、だねー！」

見返りを後で決めるなんてかなり不公平……などと言う前に、千歌と鞠莉ががっしりと握手を交わしていた。

二人ともにやりと笑って満足気にお互いを見つめていた。

鞠莉は時間を代償に何か見返りを後で求めることができるが、千歌は代償を「俺の奢り」とか言いやがってお陰か、損は無いとばかりに躊躇なく踏み込んだのだろう。

俺の財布の未来の安全を祈りながら、俺はその交渉現場を見届けた。

握手を解くと、鞠莉は俺達の前に出て両手を広げた。

「さ、て、じゃあ、早、速、始、め、ま、し、よ、う、か！
 Lets start our studying！」

……え、今から？

「それじゃあ、テスト採点をやっていくね」

「ドキドキワクワク」

「死んだ……………」

英語の『実力テスト』。

それが、家に帰って早々やらされたことだった。

——千歌だけでなく、何故か俺まで。

曰く、教えるにしてもどこから始めればいいのかわからないから、テストで実力を知るのが第一歩だとか。

鞠莉がネットで見つけた問題集を幾つかプリントして解くことになったのだ。

千歌は手を組んで祈ってる辺りまでもな点数ではなさそうだ。

俺はというと、さっぱりわからなかった。

序盤の簡単な英単語問題は幾つかわかるものがあつたが、あとはうろ覚えの英語の知識で無茶苦茶なことを書くしかできなかつた。

英語嫌いの度が逸脱している自覚ならある、俺は英語が大嫌いだ。

だから高校を卒業したと同時に英語の文法エトセトラはすっかり忘れてしまつてい
る。

鼻歌を歌いながら採点する鞠莉に、おやつの5個目のみかんに手を伸ばそうとする千歌に、我が家のみかんが無くなつてしまふ前に千歌を阻止する俺。

大変シユールな光景ではあるが、それも数分で終わりを迎えた。

「F i n i s h e d ! ……えーと……ホワツツ……?」

採点を終えた鞠莉は、顔が引きつっていた。

「ええつと、じゃあまず、チカツチから……」

千歌の元に返されたテスト用紙に赤ペンで書かれた数字は、『17点』。

数字の下に小さく『Elementary English』と書かれており、可愛

らしい泣き顔のイラストがあった。

次に、俺の元に無言でテスト用紙が返された。
点数は……

「じゆう、にてん……」

顔が引きつるのも納得が行く。

俺の点数は、高校生で、しかも赤点をよく取るレベルの千歌より低かったのだ。

「だ、大丈夫よお兄さん、勉強は今からでも遅くは……Late is better than neverよ！」

「何て言ったのかはわからないけど、気にしてないよ。俺、ずっと英語を避けてきたからなあ、丁度良い機会だ」

そろそろ逃げるのも止めにしたものだ。

ちよっぴり、苦手科目ってやつを克服したくなつた。

「それじゃあお兄さん、まずとってもEasyなことを訊くけど」

「おう、小学生英語なら任せろ」

「…『鉛筆』を英語で言ってみて？」

しばらく言葉を処理するのに時間がかかり、きよとんとする。

鉛筆？今この子鉛筆って言った？

確かに簡単ではあるけど……

「流石にそれは舐めすぎじゃないかな」

「ほらほら、なんでもいいからLets try!」

いつの間に手に取っていたみかんを剥こうとする千歌からみかんを取り上げつつ、俺はドヤ顔で言い放った。

「ペンだ!」

「チカッチ、この人本当にCollege Student? Really?」

「お兄ちゃん流石にそれは……」

間違っていたらしい。

日本語のペンと英語のペンは意味が違うという話をどこかで聞いたのだが……

「お兄ちゃん、ペンはペン、鉛筆はペンシルだよ！ペンで出汁を取って——」

「ペン汁、じゃねえから」

「てへっ、ダジャレ先読みされちゃった」

いつものやり取りをする俺達を見て、鞠莉はふと思い出したかの様に言った。

「そういえば、お兄さんって、何でそんなに英語が嫌いななの？Trauma？」

「ほんと、ただ苦手ってだけにしてはやけに避けたがるよね」

二人にここまで心配されるレベルの英語嫌いの自覚はなかったが、確かに良い思い出は無い。

むしろ、悪い思い出がたくさんだ。

「そうだな、まだ千歌にも話してなかったな」

そう、あれはおよそ6年も前のことだった。

当時中学生2年生だった俺は――

「あ、そういうのはいらないや」

「Yep、同感ね」

「仕方ないだろ!？」

当時中学2年生だった俺は、英語を学んでいたことに少しだけ、誇りを感じていた。

初めて日本語以外の言語を学び、それで他人と会話するのに使える様になるかと思うとやる気も出ていた。

が、今思うとそれはただの傲りだった。

中学レベルの英語で、まともな会話が出来る筈が無いのだ。

「えっ、お兄ちゃんまさか」

友達と英語で会話を試みるも、「くだらない」と日本語で言われてしまう。

勢いの付いた俺は本当の英会話したさに、道を尋ねる外国人がいなかったから、逆にこつちから探しに行ったのだ。

「お兄ちゃんってひよつとしてバカ？」

「Idiot……？」

道に迷っていたらしい外国人を見つけることには成功した。

しかし、やはり本場英語は次元が違った。

会話以前に、俺はそのネイティブ英語を聞き取ることができなかつたのだ。

パニックに陥った俺はなんとか聞き取れた単語を繋げて、自分の中で文章にした。

そこから導いた俺の返事は駅への道だったが、実際聞かれたのは学校への道。

しかも発音が日本語寄りすぎて聞き取ってもらえず、たまたま通りかかった英語の先生に大笑いされてしまったのだ。

更に先生は外国人旅行者に事情を説明し、旅行者にも笑われる始末。

俺はそこから逃げ、そして英語からも逃げたのだった……。

「と、いう話だ」

「バカだね」

「ええ、とーつてもStupid^{馬鹿}だね」

なんか凄い蔑まれてしまった。

「お兄ちゃんって勉強はできるけどそれ以外が本当に頭悪いよねー、メンタル弱いし」

「ねえなんで俺デイスられてるの？」

千歌は時々さらつと、息を吐くかの様に毒を吐くので、慣れていてもかなりダメージが大きい。

「まず中学レベルの英語と本場英語のレベルの違いをわかっていない時点でもう駄目よね」

鞠莉の罵倒も始まってしまった。

「何が駄目なんだ、俺にとつては挑戦だったんだよ……」

「あら？ 挑戦に失敗してトラウマになるのなら、挑戦なんてしなればいいんじゃない？」

「うぐつつ」

「いい？ Challengeっていうのはね、Success成そのものよりも、通Process程に意味があるの。本場英語に通じなかつたと知つたら、本場英語と同レベルに上げる方法を探せばよかつたのよ、『本場英語を通して』」

そう言い終えると鞠莉はテーブルに置かれたテスト用紙を拾い上げ、片方の手を俺に差し出した。

「私が、お兄さんがこのテストで高校Graduate卒レベルの点数が取れるようにTeachするわ！」

不敵な笑みを浮かべた鞠莉があまりにも美しいものだから、見惚れてしまつても仕方

がないのかもしれない。

俺は差し伸べられた手を掴み、本当に意味での『挑戦』を口にした。

「いや、その先に行く。英検2級、取ってやる」

そして、特訓の日々が始まった。

俺は大学生で基本的に暇なのだが、千歌と鞠莉は学校と部活がある。

何やらアイドルをやっているらしく、俺はあまり興味が無いのだが今度ライブをやるから見ると千歌と鞠莉がうるさいので今度観に行くつもりではある。

とまあ、それは置いといて。

平日は二人共放課後もそんなに時間が無いので、千歌が鞠莉から課題をもらってきて、二人別々で解くというルーチンだ。

そして、鞠莉が家に来るのは週末。

彼女が家庭教師のごとく、俺達がその一週間でわからなかったことを説明してくれる。

修行というものはやはり、いつだって辛いものだ。
時には血反吐も吐いた。(※吐いただけ)

「ホワツツ!? どんだけトラウマなのよ!?!」

「あの時、旅行者の、金髪美人のお姉さんにめっちゃ笑われたのがすごい恥ずかしくて……」

「Idiot!!」

千歌は幻覚すら見た。

「みかんが…… たくさん…… うへへ……」

「チカツチしつかり!」

「みかんなんてどこにもねえぞ!!」

教える方すらも、疲労に飲まれていた。

「チカツチに教えるの、So hard……うう、胃薬取ってくる」

「お大事になー」

「お手数かけますうー、お兄ちゃんチョップは痛いっ」

そんな修行が、2ヶ月ほど続いたある日。

千歌が、80点のテスト用紙持ち帰ってきた。

科目は勿論、英語。

こいつはやる気になって打ち込めばそれなりの成果を出せる奴だから、別段驚きはしなかった。

「やったぜ、ブイ！」

「Congratulation^{おめでと}!あとはお兄さんの番ね」

テスト用紙をドヤ顔で見せる千歌と、その隣に鞠莉が我が家の玄関で立っていた。

「やっぱり、リスニングはScary?」

「まあ、そうだな……怖いっていうか、どうしても緊張してしまう」

失敗の経験が、未だに俺を呪っていることに、鞠莉は気付いていたみたいだ。

「じゃあこうしましょう」

鞠莉は俺の両手を掴み、手を引かれて椅子に座らされた。

鞠莉も向かいに座り、千歌はいつの間にもかんを片手に俺の隣に座っていた。

「えっ、ちよっ」

「Hello, Nice to meet you!」

そう言われて、鞠莉の意図に気が付いた。

『本場レベルの英語』の相手との、英会話。

確かに、トラウマを乗り越える一歩になりそうな体験ではある。

今のは、『こんにちはは、会えて嬉しいよ!』の筈。

なら返しは簡単だ。

「Hello!……ッ!?!」

「Hm? What's wrong?」

途端に心臓の動悸が激しくなり、汗が止まらなくなっていた。

予想以上に、英語からの逃走は俺に深く根付いてしまっていたらしい。

いや、英語そのものというよりは、『英会話』から逃げていた。

だけど、今回こそ俺は――

「I'm fine... thanks...」

心配そうにする鞠莉になんとか笑顔を向け、胸を抑える手を退ける。

俺はこの教科書通りの挨拶と会話の進め方をしてくれる鞠莉に対する、適切な返しを知っている。

知識は足りているんだ。

後は俺の、心の問題であつて。

「So, how are you today?」

少しだけ、深呼吸。

返しは勿論。

「I m fine! How about you?」

「で、できた……俺、英語で、会話……」

「C o n g r a t u l a t i o n s ! 発音も N o t s o b a d だったわ」

割と頻繁に本場の英語聞いてれば、発音も多少なりともマシになるものだ。

「やっぱり、問題はお兄さんの心だったのよ、S o f t なメンタルだから」

その点は否定できない。

「でも、これで全科目私に教えられるよねお兄ちゃん！」

「そうだけど、英語教えてもらうなら鞠莉の方が全然上手いだろ」
「それもそっかー」

そう言った千歌は座っている姿勢を崩し、顎をテーブルに乗せてだらだらとみかんを食べていた。

今日は特別、みかんをひたすら剥いて食べる千歌は許すことにしようか。
そこで、ふと思いい出したことがあった。

「なあ鞠莉、こんな大きなことをしてもらったんだ、お礼くらいさせてくれないか？」
「H m m ? いいわよ別に、見返りは後で考えるとか言ったけど」

ニツと歯を見せて笑う彼女を見て、少し時間が止まった様な気さえした。

「今は十分Greatなものをもらってるからいらないわ！これからよろしくね！」

英語が少しわかるようになって、この時鞠莉がもらったものは、幾ら考えても俺にはわからなかった。

だけど一つ確かにわかったことは、もう英語は嫌いじゃないってことだ。

「さて、机の上の Studying と同じくらい Speaking も大事だから、今度は旅行者に道案内でもさせようかな」

「すいません、それはちよつと……」

「Why? もう少し勉強すれば、英会話も問題無いと思うわよ?」

「言い忘れていたけど、俺は……」

超が付くほど、人見知りなんだ。

——鼻に剥いたみかん詰め込まれそうになった。

輝きに溶かされて

夢を見ていた。

満員の観客で埋め尽くされた水泳場。高さ10メートルの飛び込み台の上で私は一人、期待の視線を向ける観客を見下ろしている。

自身に向けられる大きな期待、集中できない。雑念を振り払うかのように、私はかぶりを振った。

飛び込みの先端に両足をしっかりと着けて立つ。下を見る。波紋一つ立っていない真つさらで綺麗な水面。

準備は万全、の筈だった。とてつもなく大きな恐怖が、今になって波となり押し寄せらる。まるで津波に飲み込まれるような恐怖。怖くなんかない筈だったのに、一步後ろに退いてしまいうそになる。

思わず飛び退いてしまいうそな恐怖を押し殺し、今度はただ前だけを見据える。

大丈夫。失敗なんてしない。きっと成功する。成功のイメージはある。だから、きっと、大丈夫。

——いきます！

右手を高く突き上げた宣誓。視界に入っていないのに、観客の視線が、期待が、より大きくなって私に襲いかかってくる。

しかし、もう止まらない。

膝を折り、反動をつけ、私は飛んだ。

10メートルの高さから跳び、空中を回転技で翔び、華麗に水面に飛び込む。

筈だった。

全身が水面に叩きつけられる。体験した事のない衝撃が襲う。私を優しく包み込んでくれる筈の水が、凶器となって牙を剥いた。

水面に叩きつけられた身体が水中に沈んでいく。浮上しようと身体を動かそうとするが、思うように動かない。

身体は確実に沈んでいるのに、意識は沈むどころかハッキリとしていた。とてつもない衝撃が襲い、全身は力を失っている。なのに、意識はハッキリとしている。不思議な感覚。

このままどこまでも沈んでいってしまいうさだ。沈みきった先で、私はどうなってしまうのだろうか。もしかしたら泡となって、水の中に消え去るのかもしれない。そんな非現実を想像していた。

そう、非現実。この瞬間は紛れもない非現実だ。

私は知っている。今私に起こった出来事は。高飛び込みの入水に失敗し、おそらく大怪我を負ってしまったであろう出来事は。

全て、夢なのだ。

夢を見ていた。

夢はそこで幕を閉じた。

高く昇った夏の突き刺さるような日差しが、窓から途絶える事なく差し込んでいる。冷房が回っているとはいえ、教室の中は暑かった。

私が浦の星女学院（つら）に入学して早くも三ヶ月。この学校で初めて迎える夏が到来していた。

夏の暑さに絶賛辟易中の私は、眠るように机の上に突つ伏していた。机の上は少しだけ冷んやりとしていて、このまま眠ってしまいたくなる。

だけど私はどうしても、このまま眠る気分にはなれなかった。

理由は、ここ一週間近くほぼ毎日のように見ている悪夢。高飛び込みの大会で失敗し、大怪我を負ってしまう夢。

偶然見ていたテレビのニュースで、高飛び込みの選手が入水に失敗し大怪我をした事を知った。自分もいつかこうなってしまうんじゃないかという漠然とした恐怖を抱いた。

そんな状態になってから一度だけ高飛び込みの練習を行ったが、飛び込む事が出来ず

にコーチにはこっぴどく怒られた。

一月後には高飛び込みの大会が控えているというのに、この調子ではコーチが怒るのも当然だ。

嫌な事を思い出して、私は机により深く身体を預ける。そんな私の頭上から、浦の星に入学して以来、最もよく聞いた声で呼びかけられる。

「曜ちゃんどうしたの？ 最近元気ないよ？」

私を心配するようなその声に身体を起こそうかと思っただけど、面倒だったので顔だけを動かして声をかけてきた人物を視界に入れる。

「なんだ、千歌ちゃんかあ」

「むうっ……なんだかんだと聞かれたら、答えてあげるのが私だよ！ 曜ちゃんの友達の高海千歌だよ！ ピッチピチの15歳JKだよ！」

高海千歌^{たかみちか}。私のクラスメイトであり、比較的仲の良い友達。いつも元気で明るく可愛

くて、みかんが大の好物で、時々出るダジャレが玉に瑕な、そんな女の子。

「ロケット団的な自己紹介ありがとう」

「みかん畑の破壊を防ぐため！ みかん畑の平和を守るためー！ ってね！」

「あはは、千歌ちゃんは本当にみかんが好きだね」

「みかんは完全食だよ！ アルミ缶の上にあるみかんこそ最強だよ！ そうだ曜ちゃん先生、みかんはおやつに入りますか!?!」

「みかんもバナナもおやつに入らないよ」

「バナナはいらないかなあ」

ナチュラルにいられないと言われるバナナが可哀想だと思ってしまう。私はみかんも好きだし、バナナも好きなんだけどなあ。

千歌ちゃんとの、いつもと変わらないやり取り。変わったものがあるとするれば、それはここ一週間で見えない恐怖に凍りついてしまった私の心。夏の暑さを以ってしても、この凍結した心を溶かす事は出来ずにいる。

「それで、どうしたの？ 今日はいつもより元気ないよ？ 輝いてないよ？ イマドキのJKは毎日キラキラ輝いてないとダメなんだよ？」

ふざけたようにそう言いながら、再び心配そうに見つめられる。千歌ちゃんは一見アホの子っぽく見えるけど、いや実際アホの子なんだけど、本当は周りに気を配れる良い子なんだって事を私は知っている。

さつきまでのやり取りも、氷のように固まった私の心を溶かすための行動。それは私も理解していた。

私はどこかで期待していたのだ。太陽のような眩しさと温もりを持つ千歌ちゃんが、奥底まで凍ってしまった私の心を溶かし切ってくれる事を。

だけど、実際は。

「何でもないよ、気にしないで」

その温もりで表面を少し溶かす事はあっても、より深くまで溶かしてくれる事は無

かった。

「曜ちゃん……もしかして……」

私の悩みは今のところ誰にも相談していない。それなのに千歌ちゃんは自信ありげな、どこか確信めいた表情をしていた。

「女の子の日?!」

「ちっ、違うから! そうじゃないよ!」

「ありや、違っちゃった。あつ、千歌だけに!」

昼休みの教室で恥ずかしげもなく堂々と女の子の日とか言う千歌ちゃん。その言葉を、顔を熱くなるのを感じつつ否定する。その後千歌ちゃんは誤魔化すようにダジャレを言ったけど、ヒヤダルコ並みのその寒さで顔の熱が引く事はなかった。

ここ浦の星女学院は女子高だ。千歌ちゃんの発言も女子高だから良かったものの、いや良くないけど、共学の学校でそんな事を言われた日には、恥ずかしくて内浦湾の藻屑

になつてしまいそうだ。

今も恥ずかしすぎて、穴があつたら入りたいし、海があつたら飛び込みた――

「……」

「曜ちゃん？」

「……」

「もしもし、曜ちゃん？」

「……」

「――曜ちゃんッ！」

「あ、ごめん。ボーツとしてた」

自分で考えていた事なのに、思考がフリーズしていた。その思考の果てに迎える結末を想像して頭痛がした。私の心はもう手遅れなほど凍り固まってしまったのだと、絶望した。

「もー、急に黙っちゃうから心配したんだよ！」

「ごめんごめん、でも大丈夫だから。心配かけてごめんね、千歌ちゃん」

「ほんとに？ 曜ちゃんほんとに大丈夫？」

「大丈夫だよ。千歌ちゃんは心配性だなあ」

本当は大丈夫じゃないのかもしれない。ついさつき、私はもう手遅れなのかもしれないと感じてしまったから。だから友達に嘘をついてまで、心配する友達を安心させようとしている。そんな気がした。

これは私自身の問題。千歌ちゃんには関係ないのだ。千歌ちゃんは友達だけど、友達だからこそ、余計な心配はかけたくない。そう思うのは、友達なら当然だと思う。

「でも、私のせいだよね……」

「うん？ 千歌ちゃんのせいじゃないよ？」

「でも、だって、曜ちゃんが急に黙っちゃったのって……」

急に黙ってしまったのは思考がフリーズしてしまったから。私の心が手遅れなほど

凍っているのだと自覚したから。だけど千歌ちゃんは、そんな私の心情を知っている筈がない。

だけど千歌ちゃんには、私が黙ってしまった原因に心当たりがあるらしい。そして千歌ちゃんはまたしてもその言葉を、恥ずかしげもなく堂々と云ってのけた。

「女の子の日って言った事、怒ってるからだよね」

違う、そうじゃない。

放課後。主に千歌ちゃんのせいで、今日の私は女の子の日だとクラスメイト全員に認識された日の放課後。諦めて今日一日はその設定で過ごしたという、そんな放課後。

不思議と一人になりたい気分だった私は、教室で千歌ちゃんと交わっていた雑談を理由をつけて切り上げ、屋上に向かっていた。

屋上へと続く階段を最後まで上りきり、重たい扉を開けた先に待っていたのは、誰一人として存在しない開放的な空間。

一步、また一步と足を踏み入れていく。今この場所には私一人。まるで世界に自分一人だけが取り残されたような、そんな気分になる。

屋上の端までやって来て、手すりに両手を掛ける。ふと上を見上げると、青と白の綺麗なコントラスト。普段から何気なく見ているそれは、いつもより距離が近かった。

どれだけの時間を空を見る事に費やしたか分からない程に、気が付けばずっと上を向けていた首に疲れを感じた。

上空を見上げるのをやめ、今度は視線を下に向ける。見えるのは、楽しそうに談笑しながら下校している人の集団。屋上から見下ろす彼女達の姿は、とても小さく見えた。

小さな群れはゆっくりと、しかし着実に同じ方向へと進んで行く。それはまるで、海面に現れる波のようで。

それは私を自然と、高飛び込みの世界へと誘いざなった。飛び込み台に一步引いて立たっている私。眼下には、波紋を打つ水面。

怖い。

怖い、怖い、怖い、怖い、怖い。

それだけ。ただそれを想像しただけで、巨大な恐怖が大波となって押し寄せてきた。

足が竦む。慄く。震える。

立たってられない。そんな恐怖に手すりを掴む両手の力が自然と強くなる。そうする事でしか、地に足をつけるといふ当たり前のような行動を維持する事が出来た。

想像しただけでこのザマだ。実際の飛び込み台に立たった時には、きつとこれ以上の恐怖が押し寄せるのだろう。

こんなんじゃ、ダメだ。

ここでこの恐怖に打ち勝たなければ、私はきつとダメになる。もう高飛び込みが出来なくなる。そんな予感がした。

だから。

だから私は、柵の上部を掴んでいた両手にグツと押し込むような力を込め、その柵を乗り越えようと片足を上げた。

「ダメええええええええ!!!!」

そんな悲痛な叫びと共に、足音も聞こえた。足音のテンポは早く、そして段々と大きくなっていく。その人物は駆け足で向かってきているようだ。

片足を上げた状態のまま静止して、私は声と足音の主を確かめようと後ろを振り向いた。

真つ先に目に飛び込んできたのは、鮮やかなオレンジ色。それを認識した時には、そ

のオレンジ色の持ち主に私の胸を両手で抱きかかえられていた。

次の瞬間にやって来たのは、ふわりとした浮遊感。私は持ち上げるようにして、その人物と共に屋上に倒れた。その行動には、私をその場から引き剥がそうという、固い決意を感じて。

胸の奥で凍っていた何かが少し溶けたような、そんな気がした。

「はあ、はあ……良かった、曜ちゃんが無事で。あいたたた……」

私の横で地面に打ちつけた頭を手で押さえながらも、ホツと安堵したような表情をその人物は、高海千歌ちゃんは見せていた。

そんな突然現れたと思いきや私を抱えて倒れこんだ友達の行動に、私は理解が追いつかず、ただ目を大きくして驚くしかなかった。

「ダメだよ曜ちゃん！ そりゃあ人生色んな悩みとかあるだろうけど……それでも、生きてたら楽しい事も沢山あるよ！ だから、悩みがあるんだつたらずは私に相談して！ 私達——友達でしょ！」

千歌ちゃんは、目に涙を浮かべながら何かを訴えかけていた。けど私には、千歌ちゃんが私に何を訴えているのかよく分からなくて。

「えっと、千歌ちゃん。よく分からないけど、泣かないで」

でもその言葉には、不思議と温もりが籠っていて。私の凍り付いた心に、しつかりと届いた。理由はよく分からないけど、私の為に涙する友達の姿に、心打たれない筈がなかった。

「だって……曜ちゃんが自殺して、いなくなっちゃうの想像したら……ううっ、良かったよおおおおお!!」

堰を切ったように大粒の涙を流して泣きじやくる千歌ちゃん。そんな友達を私は自分の胸に抱き寄せ、頭を撫でて落ち着かせる。私の胸で赤子のように泣きじやくる千歌ちゃんを、こんなにも愛おしいと思ったことはなかった。

でも、千歌ちゃんはどうやら一つ盛大な勘違いをしている。その勘違いを正そうと、

私は千歌ちゃんに優しく話しかけた。

「あのね千歌ちゃん。一つ言っておくけど、私は自殺しようとしてた訳じゃないよ？」
「ふえ？」

今までの大泣きが嘘だったかのように千歌ちゃんはピツタリと泣き止み、素つ頓狂な声を上げる。

「え、違うの？」

「うん」

「柵を超えようとしてたのに？」

「あれは……確かに紛らわしかったと思うけど、そういう事じゃないの」
「ううっ……恥ずかしい……」

自分の勘違いをようやく理解した千歌ちゃんは、顔を真っ赤にして恥ずかしかった。抱きしめている千歌ちゃんを、私は両腕でグツとより強く抱き寄せる。

「でも、千歌ちゃんの想いは届いたよ。ありがとう」

「……………うん」

「ねえ、千歌ちゃん。私ね、悩みがあるんだ。聞いてくれる？」

千歌ちゃんがコクリと頷く。私は今まで隠し通してきた悩みを、初めて千歌ちゃんに告白した。

高飛び込みには、大怪我の危険があるという事。もしかしたら、自分がそうなってしまふんじゃないかという事。それを想像すると、怖くて高飛び込みが出来なくなつた事。そんな小さな悩み事を包み隠さず、全てを千歌ちゃんに話す。

私が話している途中、千歌ちゃんは何度も何度も強く頷きながら、親身に話を聞いてくれた。

やがて私の話が全て終わると、千歌ちゃんは私に一つ質問をしてきた。

「それって、高所恐怖症？」

「ううん、ちよつと違うかな。高い所が怖いっていうより、高い所から水の中に飛び込む

のが怖いって感じ」

私の返した答えに、千歌ちゃんは悩ましそうに首を捻りながらうくと唸っている。次は私が、今まで誰にも聞けなかった事を千歌ちゃんに聞いてみる。今まで他の人には決して聞けなかった事。だけど千歌ちゃんなら、千歌ちゃんだからこそ聞けるような、そんな気がする。

「ねえ千歌ちゃん。私、どうしたらいいと思う？」

自分ではどうにも判断できない。だから千歌ちゃんに答えを求める。高飛び込みについてよく知らない千歌ちゃんだからこそ。

息を吞んで千歌ちゃんの言葉を待つ。どんな答えが返ってこようと、受け入れる覚悟は出来ている。

やがて、千歌ちゃんがその口を開いた。

「私には……分らないかな」

……それはそうだ。高飛び込みの経験が無い千歌ちゃんには、その恐怖を想像する事は難しいだろう。

「でも私は、曜ちゃんが怪我しちゃうのは……嫌かな」

そう言われて、少しホツとする。やっぱり怪我をするのは——あれ？　なんで私、ホツとしてるんだろう？　私はそういう言葉が欲しかったのだろうか。分からない、自分の心なのに。それ程までに、私の心はとっくに凍りきってしまったていて。

「でも、それでも！　今の曜ちゃんは……もつと嫌かな」

「……どうして？」

怪我をすること以上に、今の私が嫌だと千歌ちゃんは言う。その理由が知りたくて、私は千歌ちゃんに尋ねた。

「だって、今の曜ちゃん——輝いていないから」

真つ直ぐと、一面と向かって、躊躇う事なく、千歌ちゃんは言った。

「輝いて、いない？」

「うん。最近の曜ちゃん、全然輝いていないよ」

それは、私の心が恐怖で凍りきってしまったからだろうか。千歌ちゃんの温もりで少し溶けたような気はしていたけど、それでも完全には溶かされていない。一度氷になっってしまったものは、そう簡単に溶け切らない。

「ねえ曜ちゃん。今度の日曜日って暇？」

唐突に話題を変える千歌ちゃん。どういう意図があつて聞いてきたのかは分からないけど、嘘をつく理由もないので正直に答える。

「今のところは何も無いけど……」

「暇なんだね！　じゃあさ——」

千歌ちゃんは得意気な表情で、自信満々に顔を輝かせて言った。

「デートしよっか？」

日曜日。今まで生きてきた中でこれ程ドキドキした気持ちで迎えた事はない、そんな日曜日。今日は人生で初めてのデートである。

近所の駅前。私はそこで腕時計を何度も確認しながら待ちぼうけていた。うだるような夏の日差しが容赦なく降り注ぎ、私はかなり汗ばんでいた。日焼け止めをしてきて

正解だった。

「曜ちゃん！ ごめーん！」

遠くから待ち人の声が聞こえる。アスファルトから立ち上る陽炎でぼんやりとしか見えないその姿が、徐々に鮮明になっていく。

程なくしてその人が待っていた私のもとに辿り着き、パチンと両手を合わせて頭を下げた。

「ごめん曜ちゃん……待たせちゃったよね？」

「ううん、私も今来たところだよ」

謝る千歌ちゃんに私は優しい嘘をつく。いや、それも嘘だ。本当はそんなベタなやり取りに憧れていて、やってみたかっただけ。勿論、その事を千歌ちゃんに言うつもりは無い。

「それじゃあ行こっか？ あ、ちゃんと水着持ってきた？」

「持ってきたよ。ねえ千歌ちゃん、どこに行くか教えてくれないの?」

「うん! デートプランはこの高海千歌にお任せあれ!」

今日のデートについて、千歌ちゃんは私に何も教えてくれない。私が知っている事といえば、この時間にここで待ち合わせをした事と、水着を持参する事ぐらいだ。

まあ水着を持参したという事は、水着が必要になるような場所に行くという事なんだろう。プールとか海水浴場とか、そんな所だと推測する。

「それじゃあ行つくよー! 出発進行ー!」

「お、おー……」

いつも以上にテンションの高い千歌ちゃんと、緊張のあまりぎこちない私。そんな対照的な私達の、記念すべき初デート。

「いらつしやーい！　こんにちは、お二人さん」

ダイビング用のウェットスーツを着た見知った女性の、活気の良いハツラツとした声に私達は出迎えられた。予想外の場所に連れてこられて、私はパチクリと瞬きを何度も繰り返した。だけど、目の前に広がるその光景は現実で。

「果南ちゃんやつほー！」

「やつほー千歌。曜も、やつほー」

「や、やつほー……」

千歌ちゃんに連れられやって来たのはダイビングショップ。陽気に挨拶をする彼女は松浦果南^{まつうらかなん}。このダイビングショップは、果南さんの祖父が経営している。

果南さんは私と同じ浦の星女学院に通う、一つ年上の先輩だ。果南さんと千歌ちゃんは幼馴染で、千歌ちゃんと友達の方はこれまで何度か果南さんに会った事がある。例えるならば、友達の子達のような関係。

「えっと……千歌ちゃん？」

「ん？ どうしたの？」

「え、これ、デート？」

「あら、千歌と曜ってデートだったの!? もしかして私って邪魔だったりする？」

「もー! からかわないでよ!」

「それで、どうなの千歌ちゃん!」

慌てるように言う千歌ちゃんを見て、果南さんはニヒルな笑みを浮かべている。状況が今ひとつ分かっていない私は、発起人である千歌ちゃんに説明を求める。混乱しすぎて言葉になっていないけれど、それだけ私は現状を理解出来ていなかった。

「デートだよ! 曜ちゃんとダイビングしたいなーって、ずっと前から思ってたんだ!

だから、ダイビングデート!」

「ああ、そういう事……」

二人きりでデートするのだと思いついていた私が馬鹿みたいだ。変に緊張して、変に浮かれていて、恥ずかしい。

「千歌。曜に謝りなさい」

「えー、なんでー？」

「デートって言って曜を連れてきたんでしょ？ 簡単に言うと、千歌は曜を騙したのよ」

「あつ……そうだよね。ごめんね曜ちゃん」

果南さんに諭されて、千歌ちゃんはようやくその事実私に謝った。申し訳なさそうに、しゅんとした表情で。

千歌ちゃんがそんな顔をしている事が、何故か私まで罪悪感に駆られしまう。千歌ちゃんに悲しい顔は似合わない。太陽のようにいつもキラキラと輝いている千歌ちゃんが、私は好きだから。

「うん、許してあげる」

「曜ちゃん……ありがとー！」

「ちよつ千歌ちゃん急に抱きつかないで！ まだ心の準備が……！」

千歌ちゃんに飛びつくように抱きつかれ、私は慌てふためいてしまう。当たってるから！ お互い当たってるから！

「はいはい。イチヤつくのも程々にして、二人ともこれに着替えてきてね」

どこか冷めた表情をした果南さんに、ダイビング用のウエットスーツをそれぞれ手渡される。

「曜ちゃん、着替えに行こっ！」

「う、うん」

「ごゆっくりー」

今度はどこかからかうような言葉を果南さんに浴びせられながら、私は千歌ちゃんと一緒に更衣室へと向かった。

更衣室で千歌ちゃんが隠しも恥ずかしがりもせず堂々と、服を脱ぎ水着に着替えその

上にウエットスーツを着て。

普段は女の子の裸を見る事も見せる事にも恥ずかしさを微塵も感じない私が、この時ばかりは恥ずかしがって。それを見た千歌ちゃんに服を剥ぎ取られ思わず悲鳴を上げたり。着慣れている競泳水着じゃなくて可愛らしいビキニを持ってきた事を千歌ちゃんからかわれたり。

何だかんだありながらも、私も水着に着替えその上からウエットスーツを着て。

私達が着替え終えるのを待っていた果南さんと三人で早速、ダイビングをして海中の世界を堪能していた。

今私達が行っているのはスキューバダイビングと呼ばれるもの。専用の大きな水中ゴーグル、フィン、他にもグローブ等様々な道具が必要だが、まず思い浮かべるのは空気の入ったタンク。ここから供給される空気で呼吸をしながら行うのがスキューバダイビングで、深い水深で長時間楽しむ事が出来る。

果南さんの趣味はダイビングなんだけど、普段主に行っているのはスキンダイビングと呼ばれているらしい。必要な道具はゴーグル、フィン、シュノーケルのみ。

スキューバダイビングとは違い空気タンクを使わないので、私のような初心者だと潜れてせいぜい5メートル程度らしい。ちなみに経験者の果南さんは20メートルは潜れると言っていた。果南さん凄い。

そんな説明とスキューバダイビングの簡単なレクチャーを、ダイビングライセンスを取得している果南さんから受け、私達はダイビングを楽しんでいる。

今私達が行っているのは、果南さんの店が提供している初心者向けのダイビングツアーで、水深20メートル程度までの簡単なものらしい。

それでも、私や千歌ちゃんのような初心者は、ライセンス所持者同伴でないと海に潜る事は許されない。

それと、今回ダイビングに使用している道具は、果南さんのお店からレンタルしている物だ。因みに料金は今回はツアー料金も含めて特別に無料^{タダ}にしてもらっている。何でも初デートのお祝いとかか。

実は果南さんにくっそり本当の金額を教えてもらったのだけど、高校生の私が軽く出せるような値段ではなくて、これから暫くは果南さんに頭が上がりなと思うた。

ちよんちよん、と果南さんにグロブ越しの人差し指で二の腕を突かれる。視線を向けると、果南さんは人差し指で左前方を見るように促してきた。

その方向に目を向けると、小さな魚達が群れを成して泳いでいた。こんなにも間近で魚の群れを見られた事に、感動するなど言う方が無理な話だった。

隣にいる千歌ちゃんも、ゴーグル越しに見える目が大きく見開いていて、感動している様子だった。

ちよんちよん、と再び果南さんに二の腕を突かれる。今度は首にぶら下げていた専用のデジタルカメラを手にとって、ニツコリと微笑んでみせる。写真を撮ろうという合図だ。

千歌ちゃんはウンウンと首を大きく縦に振り、果南さんの提案に賛同する。そんな千歌ちゃんを見て、私もコクリと頷いた。

私と千歌ちゃんは水中を移動して横に並ぶ。慣れない水中に千歌ちゃんとの距離が少し離れてしまったが、千歌ちゃんが私の左手をとって、優しく引き寄せてくれた。

それを見た果南さんは、聖母のような優しい笑みを浮かべている。そして片手でカメラを構えながら、もう片方の手の指を三つ立てる。それが秒単位で一本、また一本と折

られていき。

私と千歌ちゃんはそれぞれ空いた手でピースを作り、果南さんに写真を撮ってもらった。海の中で写真を撮るなんて初めての事で、それを千歌ちゃんと一緒に出来た事を嬉しく思う。

千歌ちゃんとのツーショット写真を果南さんに撮ってもらった。すると千歌ちゃんが私と手を繋いだまま、左指を三本立てて果南さんに何やら合図を送り始めた。

その仕草だけで果南さんは千歌ちゃんの伝えていた事を汲み取ったのか、水中を器用に泳ぎながら空いていた私の右隣にやって来た。そして、私の右手が果南さんの左手と繋がれる。

左手には、千歌ちゃんの右手。

右手には、果南さんの左手。

グローブ越しに伝わる二人の掌の温もりが、私を優しく包み込んでくれる。

果南さんは自撮り写真を撮るように、右手を伸ばしてカメラをこちらに向ける。そして私達に目で合図を送り、カメラのシャッターを切った。

撮った写真を確認すると、私達三人の姿がキツチリと写り込んでいた。それを見て、三人で笑い合う。そんな楽しい時間。

それから三十分程、私達はダイビングを楽しんだ。楽しかった時間はあつという間に過ぎていき、果南さんに終わりを告げられた時にはもつと潜っていたかったと率直な欲求が湧いた。

初めてのダイビング。初めての深い海の中。何もかもが初めての出来事で、最高に輝かしいものだった。

「んんーっ！ ダイビング、楽しかった！」

ダイビングを終えた私達は、果南さんの店を後にして帰路についている。ダイビングの時に撮影した写真はこれから現像して、後日学校で手渡す事を果南さんは約束してくれた。

ここまですてくれる果南さんには、いくら感謝してもし足りない。後日きちんとした形で何かお礼をしなければ。

そんな決意を固めながら、千歌ちゃんと二人で並んで歩く帰り道。鮮やかなオレンジ色に照らされ、幻想的な雰囲気が漂う。初めてダイビング。深い海の中という未知の世界を体験した事が、この場の非現実さに拍車をかけていた。

両手を広げて大きくグーツと背伸びをしながら、私は隣を歩く千歌ちゃんに今日の感想を述べた。

「曜ちゃんが楽しんでくれて良かったよ！ デートは大成功だね！」

「うん！ ありがとう、千歌ちゃん！」

その後も今日の思い出を話しながら、夕日に見守られた私達は歩みを進めていく。会話が弾み、時間の流れが早く感じる。気が付けば私達は、お互いの別れ道である交差点

に辿り着いていた。

私達は示し合わせていたかののように、そこで自然と足を止めていた。先程まで続いていた会話も、ここに来て無くなっていた。

「ねえ、曜ちゃん」

先に口を開いたのは、千歌ちゃんだった。

「ダイビング、楽しかったよね？」

「うん、今まで生きてきた中で一番楽しかったかも！」

それは、嘘偽り無い私の本心。今日という一日は、本当に今まで生きてきた中で最高に楽しく、濃密な一日だった。

「水の中、怖くなかった？」

「全っ然！ もう夢中になって潜ってたよ！ もう少し潜っていたい位だった！」

海の中という世界に、私はすっかり魅了されていた。今度はお小遣いを貯めて一人で果南さんの店を訪れようと、そう思うくらい今日のダイビングは楽しかった。そこに恐怖なんて感情は微塵も存在しなかった。

「じゃあ、もう大丈夫かな？」

——え、何が？

そう言葉を返すよりも早く、私は千歌ちゃんの言わんとしている事を理解してしまった。

千歌ちゃんは私の悩んでいた事を解決しようと、今日のデートを計画してくれたのだと。

高飛び込みで水の中に飛び込むのが怖いと吐き出した私の為に、水への恐怖を取り除いてあげようと画策した結果が今日のデートなんだと。

今の言葉だけで、たったその一言だけで、私はその事実を痛感させられた。

「うん……うん……！　ありがとう、千歌ちゃん……もう、大丈夫だよ……！」

千歌ちゃんへの感謝を伝える言葉は、自分でも気付かないうちに震えていた。気付かないうちに、頬に熱いモノが伝っていた。

そんな私を千歌ちゃんは何も言わず、そつと優しく抱きしめてくれた。千歌ちゃんの温もりが直に伝わる。胸に熱い何かが流れ込んでくる感覚。

それは、凍りついていた私の心を急速に溶かしているようで。

氷が溶ける事で生じた液体が込み上げてきて、瞳から零れ落ちているような。

そんな気がした。

夢に見た光景だった。

だけど、今は夢ではない現実。

満員の観客で埋め尽くされた水泳場。高さ10メートルの飛び込み台の上で私は一人、期待の視線を向ける観客を見下ろしている。今日は、高飛び込み大会当日だった。自身に向けられる大きな期待。大丈夫、集中できている。千歌ちゃんとのデートから一月程経った今日まで、私はそれまでの恐怖を払拭しようと高飛び込みの練習を積み重ねてきた。

飛び込みの先端に両足をしっかりと着けて立つ。下を見る。波紋一つ立っていない真っさらで綺麗な水面。

準備は万全。今日まで積み重ねた練習のおかげで、今まで感じていた恐怖は殆ど無くなった。それでも、ほんの僅かに恐怖は残っている。一度覚えてしまった恐怖は中々消え去らない。でも以前と比べれば、格段に恐怖は薄くなった。

前を見据える。大丈夫、小さくなつた恐怖は、友達の力を借りれば埋められる程の大きさだ。千歌ちゃんと果南さんと体験したダイビングが、私に力を貸してくれる。

無意識に両手を強く握りしめていた。左右それぞれの手に、ふと温もりが流れ込んでくる。その温もりの正体を、私は知っている。

左手には、千歌ちゃんの右手。

右手には、果南さんの左手。

ダイビングの時に覚えたそれぞれの温もり。

大丈夫。二人がいれば、三人なら、怖くない。

「いきますー！」

右手を高く突き上げた宣誓。高く掲げた右手をその後どうするべきか、私は迷っていた。

これから私は、輝くための一步を踏み出す。そう思うとこの右手をそのまま素直に下ろすのは、何だか勿体無い気がした。

ふと、私の好きな言葉を思い出した。

恐怖が芽生えてから今まで、すっかりその言葉を口に出していなかった。私の元気の源となっていた言葉の筈なのに。

ならば今ここで、再度宣誓しよう。

全力全開。

——輝きに憧れた私は。

全身全霊。

——輝く私でいたいから。

全速全進。

——輝きに向かって。

「ヨースロー！」

俺と津島の跳躍世界物語

津島善：ヨハネの月曜の朝は早い。

4時半に起床。眠い目を擦りながら朝の支度をする。

もちろん月曜日は学校である。朝食は後で済ませるため、先に学校用の身支度をする。顔を洗い、寝癖を直し、歯を磨き、制服を着ると、彼女は足早に家を出た。向かう先は：コンビニである。

鼻歌交じりに彼女は一冊の雑誌を取った。立ち読みか：と思われたが、彼女はそれ在意気揚々とカゴに入れ、いつも飲んでるお気に入りの午〇の紅茶のストレートを手に取りレジへ向かうのだった。

「私の1日に勝手なナレーション入れるのやめてくれる？」

「仕方ないだろ：月曜の朝は行動一緒なんだから。」

俺と津島は幼馴染みだ。住んでる場所が近いので、寄るコンビニも自然と同じになる。

「：お前、女子高生にもなってまだそれ買ってるのかよ。」

「いいの！私の中の週刊ネクロノミコンと言っても過言では無いわ。」

そんな冒読的な書物が毎週発行されてたまるかと思いつつ、朝からこのテンションなのかと思いつつ。

俺達は、二人揃ってジャ○プを買った。



「ジャ○プってやつぱりこう…私達の心に眠る何かをついてくるわよね。」

朝5時を少し過ぎた頃、俺と津島は津島の家でジャ○プを読んでいる。俺もこいつもジャ○プは月曜に読むものだと思っているので土曜日に買うことはしない。毎週の早起きを楽しみのひとつにしている。

「最近はどう、王道的なファンタジーは薄れてきたよなあ。」

「それでも燃えさせてくれるのが少年誌のいい所よ。」

「んーわかる。」

話もよそにジャ○プを読み進める。うむ、今週も面白いなあ。

週刊少年誌の良いところは人間の心の隅に必ずある憧れを毎週具現化してくれるところにあると思う。月刊誌と違い話の流れがスムーズであるところもプラスだろう。最も、月刊誌が500円くであるが週刊誌は300円程度である故、月でかかる費用は週刊誌の方が多し。だが、それを感じさせない作家陣の織り成す物語には感服せざるを得ない。コンビニの雑誌棚にジャ○プの字があるだけで心が踊る、そんな魔力があると思う。

そんなことを考えながら、俺と津島は黙々と読み進めた。

ひとしきり読み終えた時には時刻は6時半になろうとしていた。ふと、津島が口を開ける。

「さっきの話だけど……本当にファンタジー減ったわね。少年誌に限らず、漫画や小説に

置いてても。」

「そうだな…例えファンタジー世界であっても、なんとなく科学的な裏付けがしてあったり、夢に思い描いた世界とは少し違ったものになってるわな。」

「はあー、ジャ○プにも増えないかしらね。」

ため息と共に雑誌を閉じる。脳内世界が膨れ上がってる津島にとつては確かに、最近の漫画は物足りなく映るかもしれない。

「かといって、面白くないわけじゃないんだけどな。」

「そうなのよねー、なんとも歯がゆいわね。」

「でも最近また新連載始まったじゃん。たく○んとバツの日常○魔帳とか。」

略してたくバツ。地獄と人間界、鬼と人間が主なテーマのファンタジーものだ。主人公は鬼に取り憑かれているものの、コントロールできるためその力で奮闘する…的な。

「たくバツねー、この手のものは面白んだけど…やっぱり今の連載陣には劣ってしまいうわよね。連載してきた地力が違うもの。仕方ないことだけだね。」

「悪くないとは思うんだけどなあ。」

「たくバツ…鬼といえば鬼○の刃もあるわね。」

舞台は大正日本。家族を鬼に皆殺しにされた主人公は、唯一生き残ったが凶暴な鬼になつてしまった妹を元に戻す為、また家族を殺した鬼を倒す為に旅立つ、といった話

「妖怪ものがふたつあるのはなー。両方とも打ち切りの匂いするし…。」
「確かにするけど、両方とも今は面白いわ。それでいいじゃない。」

漫画…商業誌で連載する以上つきまとう打ち切りの闇。かつて、様々な作家陣がこの闇と共に伝説を作ってきたと言っても過言ではない。また、特にジャ○プは有名所が大きすぎるため、新規参入が難しいのが現状だ。最も、それでも売れる作品は売れるのだから、ある意味本物の才能を発掘するには適した場とも言える。

「私的にはやっぱりブラック○ローバーを推してるわ。」

主人公は孤児院で育った魔力皆無の人間。反対に幼馴染みは天才的な魔力の持ち主のため、一流の魔法軍団に入る。一番下の魔法軍団に入った主人公だが、魔法を無効化する能力と鍛え続けた筋力で奮闘していく…というものだ。

「あれはなんというか…：設定がありふれてないか？」

「だからこそ、素直に楽しめるというか…：入れるというか。」

「そんなもんかね。」

「そんなもんよ。」

津島と話しているところいうジャ○プ談義は尽きない。毎週新しい情報が更新されるからこそ、毎週新しい話題が生まれる。コミュニケーションツールとしても優秀だから非の打ちどころが見当たらない。

「やっぱ…最近で俺が好きなのは左○くんはサモナーかな。」

ギャグ枠である。カス虫呼ばわりされることもある主人公が悪魔を召喚し、ヒロインや周りの人がその悪魔に翻弄されつつ生み出すギャグ漫画だ。パロディネタも多く、ネットでも話題性が高い。パロディに冠しては賛否両論あるようだが、俺は好きだ。

「あなた齊○楠雄も好きだものね。」

「ギャグ漫画を週刊で生み出すのは並々ならぬセンスや努力が必要だからな。」

「最近の連載陣もいいけど、やっぱり古株や中堅の内容も輝いてるわよね。」

「俺は古株ならBLEACH、中堅ならそれこそ斉○楠雄かなあ。」

「私はワー○ドトリガーとかヒ○アカが好きね。」

ジャ○プという誌面において、この古参の面々…ジャ○プという雑誌を今の地位まで上げた立役者とも言えるだろう。

そして中堅の方々。雑誌や漫画が売れなくなっている印刷物の危機的状況な現代において、ジャ○プを支えているのはこの中堅の影響は大きいだろう。

かといって新規参入者が嫌煙される訳では無い。面白ければ、読まれる限りは誌面に乗り続けるのだ。個人のスキルだけが誌面を飾る唯一のものとも言える。それさえあれば、誰しもが栄光を手にすることができるのだ。

「友情、努力、勝利。ね…」

「なに神妙な顔して。また難しい事考えてんの?」

「いや、そういうわけじゃないんだけどさ…。」

過去に、このジャップを舞台にした漫画があった。所謂漫画マンガである。ふとそのことを思い出した。作家は仕事として書き続けなければならぬ。だがそれ以前に、自分の中の、脳内物語をその手で漫画として生み出しているのだ。その過程は、仕事だからで続けられるものじゃない。夢やロマンが溢れているんじゃないか…そう思える。

「友情・努力・勝利ってのは、人間に須らく与えられてるんだろな。」

「どういう事?」

「人の数だけ物語がある。人生は連載漫画と同じだ。毎日違う出来事が起きて、主人公である自分が物語を紡いでいく。」

「…そうね。」

「こうして雑誌を手にとって読んでいる今の俺らにも、これを作る編集者も、書いてる作家にも、友情・努力・勝利の人生があるんだよな。そう思うと、感慨深いよなあって。」

「…なるほど。私にも、あなたにもそれはあるのね。」

「そういうこと。」

「…私の友情・努力・勝利ねえ。」

「お前はまさに、だよな。」

「どういう事?」

「なんだ、気づいてないというか、まあこんなことはこうして話してみないとわからないのが現実っちゃ現実か。」

「Aqoursの面々と過ごしてる今のお前には、今までとは比にならない友情が芽生えたはず。」

「同じ1年の国木田さんとか黒澤さんを始め、上級生とも仲良くなってる津島の輪は、俺からしたら羨ましいものだ。」

「今は努力して、ラブライブで頑張ろうって、最近家でも踊りの練習してんだろ?おばさんから聞いたよ。」

「決して広い門ではないのがラブライブだ。Aqoursのように結成してまもない間で優勝するのはそう簡単なことではない。Aqoursの力になる為に、津島は日々努力している。それを俺も、おばさんも、皆知ってる。」

「お前の物語の局面は、ラブライブにおける勝利なんだろう?それだけじゃない。それから先は、さらに多くの戦いがあるかもしれない。その時にきつと、今の経験が勝利の後押しになる。」

「バレーは6人で強い方が強いとジャップの漫画にもあった。ラブライブもきつと、みんな強い方が強いのだろう。であれば、あれほどの個性をひとつにしたAqours

は、きつと勝利を掴み取ることだろう。

「お前の跳躍物語は、まだまだこれから…なんじゃない？」
ジャップストリー

キョトンときた顔で津島は聞いていたが、やがて少し笑って言った。

「フフツ…そんな、打ち切り漫画のアオリみたいに言わないで欲しいわね。ヨハネの伝説は…終わらないわ。」

「それでこそ津島だな。」

「ヨハネ！」

「はいはい…つと、もう時間だ。津島、準備しろよ！」

「うそ、そんなに!?!」

時計を見ると時刻は7時過ぎ。準備も含めるとなかなかの時間だ。

「じゃ、いつもの時間にバス停で！」

「ああ、うん。」

言うやいなや飛び出す。朝飯食ったらすぐ出ないとなあ…。

飛び出していったのを見て、なんとなくポーツとしてしまう。さつき言われたこともそうだが、バーつと言ってバーつと消えていく嵐のような人だ。

「跳躍物語か…。」

友情・努力・勝利。今私はその最中にいる。ラブライブ、Aqours。私の物語は、ここに来てから途端に盛り上がりを見せた。

私の物語…当然のように言うけど、案外難しいかもしれない。普通に生きて、普通に終えるなら、ありふれた物語に埋まってしまう。

今の私は、輝けるチャンスがある。センターカラーのチャンスだ。ものにしなければならぬ。

「…なんて、漫画の読みすぎかな？」

雑誌を机に置く。床に彼が置いていったもうひとつの雑誌があった。彼は慌てた時は周りが見えなくなる。よく知っている。幼馴染みだから。

「…つと、急がなきゃ。」

慌てて私もカバンを持ってリビングに降りる。朝ごはんを食べねば1日のテンションが持たない。A q o u r sとしても、スタミナをつけるために朝ごはんは欠かせない。

「私の物語は、まだまだこれからだ！」

「何言ってるの善子、ご飯食べちゃいなさい。」

「はーいー！」

今日も私の物語は、続く。

折れないハート

「まだですわ！ 今回の試験で最低でも片手で数えられる順位になっていただけかなくては到底わたくし私の伴侶など務まりませんわ！」

「ひえ〜！」

「ひえ〜！ じゃありません！ 泣き叫ぶ暇があつたら方程式を解きなさい！」

狭いアパートメントの部屋に、男の悲鳴とガミガミ一人で姦しい女性の声が響き渡っていた。まあ男の方は俺なんですけどね。これ時間が時間だつたら完璧に壁ドン案件だよ。

現在は夕刻、短い針はもうすぐ七を指すかというところ。あと少しで春とはいえ、まだ肌寒さを残すし太陽は定期よりも早く退勤する。

「会ちよ……あゝ、ダイヤさん」

「なんですの？」

「そろそろ、帰った方が良くないですかね。ご両親心配するんじゃないですか？ 自由登校期間に入った娘が朝から出かけて夜まで帰ってこないとか確実に危ない話ですよ」
「そう言う与会……ダイヤさんはまるで般若と能面の中間くらいの形相で俺を見つめ

ていた。そこから読み取れるのは、私を追い返して勉強をサボタージュするつもりですわね……という意思の籠った顔だった。

「大丈夫です、ちゃんと勉強はしますから！ とにかく会つダイヤさんのご家族には良い印象を残しておきたいんですよ！ ただでさえルビイちゃんには一言も口を利いてもらえないんですから！」

ここらでちよつと誠実で紳士な男を演出しておかないと後々絶対不利になる。まあそれを言ったら学力が伴わなければ意味ありませんっていうダイヤさんの意見が尤もすぎて刺さるんですが、辛い。

彼女の妹のルビイちゃん、何度か会長時代のダイヤさんにアタックしていた頃、何度か顔を合わせたことがある。外堀を埋める意味で彼女に接近した瞬間、まるで同極の磁石のように近づくだけ後退されてあえなく撃沈、とても辛い。

ダイヤさんの外堀を埋めるなら失礼だけどルビイちゃんしかいなかったからだ。残りはご両親だけ、とかハードルが淡島ホテル並にデカい。

まあ、それでもダイヤさんだけでも俺を認めてくれたっていうのは、嬉しい誤算だった。しかし、それにより埋めるはずだった外堀がそのままでありこれからそこを埋めていかねばならない、これがとにかく辛い。

外堀を後から埋めるというわけで、つまり黒澤家の人間を言い方はあれだけど懐柔す

るなり説得するなりして認めてもらわなければならぬわけ。

で、認めてもらおうにも俺の学力低すぎでまずそこから変わらなくちゃいけない。でも学力など一朝一夕で手に入るものじゃないのはもはや当たり前で……

「まあ、そこまで言うのなら……ただし、私が帰った後もきちんと勉強を続けること！ 良いですわね!!」

「分かってますって、俺だつて会長に恥かかせたくはないですから。ちゃんと釣り合う男になってみせます」

「よろしい、それと……いつまで間違えるつもりですか？ 私のことはダイヤ、と名前で呼ぶように言つたはずですよ。もう会長ではありませんから、不適切ですよ」

「尽力します……とほほ」

どうやら俺が彼女に釣り合うようになるにはもう少しの努力が必要らしい。前途多難だけど、頑張ってみますかね。なんせ惚れた女のためですから。

と俺が人知れず静かに決意を固めたところで、ダイヤさんは自分の荷物を纏めていた。手伝おうとしたけれど、そもそもダイヤさんは己の荷物を出先でも理路整然と纏めてあったので、そもそもその荷物を鞆に入れるだけで終わってしまった。

「あら……？」

ダイヤさんが荷物を纏め終える、その直前に一枚のプリントを手にとつてそれに目を

通していた、ような気がする。それから周囲を見渡していた。

「どうしました？ いえ、ペンが一本だけ見当たらずで、探していただけます？」

「任せてください。この部屋で探し物するのだけはダイヤさんより得意ですから！」

「綺麗にしておけば問題無いのですわ」

ごもつとも、正論というナイフが容赦なくサクサク俺に刺さる。しかしテーブルの下には無いし、机の上には俺の勉強道具しかない。その中に混ざってるかな、と思ったけどそういうわけでもないし。

「あ、ありましたわ。すみませんわね」

「なら良かったです」

ダイヤさんはさっそくさささと荷物を纏めて玄関へ向かった。俺もジャケットとネックウオーマーくらい装備して表へ向かった。

「何してますの？」

「なに、つて送るに決まってるじゃないですか。もう真つ暗ですよ、こんな中ダイヤさん一人で帰すような男じゃありませんっていうアピールです」

「言わなければかつこよかった……じゃなくて、誠実に見えましたのに。ことごとくあなたは残念な人ですわ」

溜息を吐かれてしまった。ダイヤさんはどんな顔しても可愛いから、俺もいろんな顔

させたくありませんって。

「うわー手が冷たい。なんでここまで防寒しておいて手袋持ってこなかったし、迂闊」
「ほんつとうに迂闊で残念ですわね！ ほら、手を出しなさい！」

むすつとした顔でダイヤさんが俺に向かってそう言った。手を差し出すと片方だけ手袋を貸してくれるらしい、と思いきやまずサイズが合わなかったのでダイヤさんがさらにむすつとする、可愛い。

「じゃあ、しようがないから手を繋いであげるわ……」

「え、あ、はい……ありがとうございます、暖かいお気遣いどうも」

ダイヤさんは片方の手袋を外したまま、俺の手をやや包み込むみたいに握ってくれた。それだけで体温がグイッと上がる気がした。見ればダイヤさんの横顔がどこか朱く……

「手、暖かいですね」

「あなたの手も程々に暖かいですわよ」

程々らしい。緊張して、手汗噴出しそうなくらいになってるのは内緒だ。せつかくだから、ダイヤさんの手の柔らかさとか温度とかしつかり楽しんでおこう。ああふにふにしているなあ、細いのに骨ばってるわけじゃなくて本当に綺麗な手だ。

そんな具合に、彼女の手の感覚を楽しんでいたらすぐに立派な門が見えてきた。

「あつという間でしたね、じゃあまた明日です」

「少しくらい会う頻度を下げて、勉強に費やしなさいな」

「燃料補給しないと乗り物は動かないんですよ」

「ようは私があなたのエンジンですね、わかりましたわ」

小さく手を振ってくれるダイヤさんに大きく手を振り返して俺は門が閉じるまで見送った。心なしか、一人になった途端気温がぐんと下がった気がする。

さあ、帰って勉強しよう。俺は冷たくなる前に、掌にはあくつと息を吐いて擦り合わせる少し早足で家に戻った。



「試験前に授業参観やるか、普通？」

ぼやく同級生に心中で同意を示す。授業参観と言っても、高校生になった身だ。まさか見に来る親もないだろう。どんだけ親馬鹿なんだ。

と、思いきやどうやら名札をつけ、ボードに授業内容などを書き連ねている人がいた。

どうやら他所の学校の先生らしく、所謂研究授業も兼ねているようだった。なるほど、それなら納得だ。

「まあ、それで俺らが真面目に授業受けるかは別だよな、母ちゃんこないし」

「それな、俺も別に保護者が見に来るわけ——」

ないし、と呟こうとしたときだ。見目麗しい美女が廊下から教室に入ってきた。スーツやちよっぴりタイトな女性用スーツの中では飛び切り浮いた、クリーム色のセーラー服。青緑色のタイがきつちりと胸元で整えられており、ともすれば肌の白さも合わせて制服見本のマネキンのようであった。

「あつたわ、保護者きたわ。ごめん俺真面目に授業受けるから」

「は？ どうしたんだよお前」

友人が俺に食い下がるがそれどころではない。俺はびしつと背筋を伸ばし授業へ臨む態度を姿勢で示した。

視線を感じる。ああ、こんなたくさんの生徒がいる中、先生の授業法を学ぼうにも授業すら始まっていないこの状況で、俺にのみビビシと向けられている視線。ペンケースの中にスマホを隠しちらりと確認する。

バリバリこつち見てるゝ、超見てるゝ射殺さんばかりにこつち見てるゝスマホで窺ってるの完璧にバレてるゝ。

観念して俺は振り返るとダイヤさんに向かって恐る恐る手を振ってみた。すると向こうも微笑を浮かべながら小さく手を振ってきた、天使かよ。

「おいあれお前の知り合いかよ……紹介しろ」

「ええい授業に集中すると言っただろうが……それともなにか、紹介したら放つといってくれるのか？」

「ああいいぜギブ&テイクだ、さあ早く教えろ……!」

「だが断る」

誰が教えるものか貴様俺のミューズでヴィーナスだぞ。ああ生まれてこの方授業参観にろくな思い出が無かったけどこんな嬉しいものだ。今分かりました。

こうして良いトコ見せてバッチリアピール授業参観が始まったわけだが、解を求められれば挙手するのは俺のみ。まるで俺だけ小学生に戻ったみたいだった。ちなみに問題はずんでのところで凡ミス。

誰が言ったか、世界を救うのがエアロスミスならば足元を掬うのがケアレスミス。出来れば世界のついでに俺も救ってください。

昼休みになると俺はダイヤさんを探してそこら辺を走り回ったけれど、どこへ行っただのかまったく見つからなかった。もしかすると帰ってしまったのかもしれない。肩を落として教室へ戻った。

午後の授業はまるで別人のように生気を失くした俺を逆に心配した友人たちの助けもあり、なんとか授業を乗り越えた。

さて、とりあえずイレギュラーはあつたけど今日もあそこへ向かおう。

「お待たせしました」

「別に待ってませんわ、今来たところですよ」

「その割にはひまを持って余していたように見えますけど……：……いだいだいですずびばぜん」

いつもの待ち合わせ場所に彼女はいた。近所の浜だ、俺とダイヤさんの家の中間くらいにあつて俺が学校から帰るとき必ず通りかかることからここでの待ち合わせがデフォルトになっていた。

「海を見ていましたわ」

「そりゃあここに立ったら海しか目に入らないでしょうね」

「……厳密には波を見ていましたわっ」

少しムツとしたのか訂正するダイヤさん。俺は彼女の視線を追って、いつもよりも少し勢いの強い波を見た。急にやってきては、すぐ引き返す。

「少し前の私とあなたみたいだと思いましたわ」

少々、ロマンスが過ぎる気がしたものの彼女の声の柔らかさは完全に波に俺たちを重

ねていた。ただの、寄せてはすぐに引つ込む水の動きが、少し前の俺たちに似ているそうだった。

言われてみれば、浜へどうしても上がりた水が、勢いをつけては寄せてくる。しかし後数尺届かず、すぐごと引き下がっていくのにすぐにまた勢いよく、さつきよりも強く浜へと押し寄せる。

「私は、しつこい男は嫌いどころか眼中には入れませんの」

「かなり耳が痛いです」

「最後まで聞きなさいな、あなたは最初こそしつこいと思っていましたけれど、今思えば諦めが悪かったというべきですわね。まあ同じ手法でアプローチするものだから、しつこいと思われても仕方ないですわよ」

「言葉を飾るのが苦手なもので、あはは……」

苦笑いで場を濁す。どうも、ダイヤさんに真摯に褒められたり認められたりするってことに慣れていない。それこそ、結構な年月かけてアタックし続けてきたわけだし、ともしればしつこいというダイヤさんの言い分は尤もだろう。

「とにかく、私はもうあなた以外の殿方に微塵も興味が無いの。みんな同じ顔に見えるますわ」

「お見合いで相当褒められたんですね」

「ええ、見た目だけね」

俺と彼女の關係に転機が訪れたのは確か、ダイヤさんがお家の事情でお見合いをし始めた頃だっただろうか。実は内心気が気ではなかったんだけど、好きな女の頑張りを否定するわけにも行かずしばらくは様子見していた。

……のだが、しばらくするとダイヤさんは不機嫌と不健康が服を着て歩いてるみたいな感じになっていた。それは彼女のお見合いが上手くいかなかったからだ、理由は単純に彼女から見て自分に見合う男がいなかったから。

「誰一人として、黒澤ダイヤという人を見てくれる人はいませんでしたわ。でも、確かに私みたいなのに興味と思慕を抱くのは決まってあなたくらいでしたわ」

「見る目がある、ってことでもいいですかね？」

「あなたが見つけた原石はホンモノですわ、手放さないようになさいな」

そう言って、頬を小突かれた。そっちを向くと、夕日に照らされたダイヤさんが口の端を珍しくニツと持ち上げながら俺のことを見つめ上げていた。

「さあ、帰って勉強あるのみ。ですわ、あなたの千里の道はまだ踏み出し始めたばかりですわよ！」

「そうですね、今日は文系でお願いします先生」

「文系は得意科目じゃない、ひたすら理数あるのみですわ」

それはとても辛い。波打ち際に別れを告げ、帰路についた。またしても、おっかなびっくり手を繋ぎながら。

「もう無理です、知恵熱で北極の氷が溶けます勘弁してください」

「……………まあ、確かに今日のノルマは越えましたし及第点ですわね」

さすが黒澤ダイヤ先生、今日俺が凡ミスした場所をしっかりと把握していた。隣にいた別の学校の教師陣に負けず劣らず取っていたメモはこのためだったのか。

「こうも連日知識と方程式の解き方を詰め込んでいると、この努力が実るのか心配になってきましたね」

「そんな心意気ではダメですわ、私のことを黒澤の家から奪い取るくらいの気概を持ちなさい。思うに、あなたは立ち向かう困難に対しての見返りをまったく把握してませんわね？」

「正直住む世界が違うもんで、どうにも…………」

中流家庭で生きてきた俺が上流も上流の家の人間に釣り合うようになってどんなことが起こるのかなんかさっぱりですよ。ダイヤさんと添い遂げるといふ約束を果たすことが出来る、くらいしか思いつかない。

「あなたも黒澤の家に迎え入れられ、いずれは次期当主ということにもなりえますのよ」

「うわーすげえ突飛な話になってきた……先生、もう少し身近な報酬について提示してくれた方が分かり易いです」

「む、そういうものですか?」

「そういうもんです、馬もゴールより目先にニンジン吊るしての方が速く走るってマリーさんが言っていました」

嘘だけだね。ダイヤさんと好き合うようになってからというもの、よく鞠莉さんや果南さんにからかわれる。特に鞠莉さん、親父まがいのセクハラとかしてくるもん、俺に。しかしどうやら真に受けたらしいダイヤさんは、顎に細く白い指を当てて口をもごもごさせながら悩んでいるみたいだった。しかし思いついたのか、顔をパアツと輝かせて手を打った、可愛すぎかよ。

「そうですわね、そういうえば恋人らしいことを一つもしてませんし……ここで何かしら、あなたにしてさしあげますわ」

「そ、それは本当っすか……!?!」

血が躍った。心臓が跳ねた。目が血走った。どれを取っても今の俺の歓喜を表現できるものではないだろう。強いて言うなら、パブロフの犬。

「ええ、そうですわね……じゃあ手始めに、耳かきでどうでしょう? 偶然目に耳かき棒が映ったからです」

「全然構わないです、むしろお願いします。そうですね、恋人としても段階踏まないですよね……！」

「わ、わかりましたから少し落ち着きなさいっ！ 少し目が怖いですわよ……」

これが落ちて着いていられますでしょうか、いいや無理。

知恵熱を凌駕するほどの熱気が頭に上る。頭に完全に血が上っている。血の循環が幾分か早まったのを体で感じる。俺の身体に迸る衝動、それは喜びの感情。

耳かきも嬉しい、嬉しいがもっと嬉しいのは、ダイヤさんが俺と恋人っぽいことしたって思ってくれていることだ。

「……でやらなきゃもったいねーって」

そう言ってノートに走らせたシャーペンの芯は当然の如くへし折れた。

「我ながら、眠れる獅子を起こしてしまった気分ですわ」

「地獄の番犬並に手強いんで、よろしくお願い致します」

こうして、テストに向けてのデッドヒートが始まるのであった。しかし、気分は星を取った配管工の髭兄弟のようだった。立ちふさがる障害など全て叩き壊していくくらいの勢いだ。

目標が出来たからか、俺の頭脳は先ほどとは比べ物にならない理解力を示し、カラツカラのスポンジの如く知識方程式を吸い込んでいった。

これは、いける。そう確信せざるを得なかった。



そして、あつという間に一週間という時間が過ぎ去りました。彼は日に日に元気が高まりすぎて、逆にこつちが不安になるほどでした。耳かきの秘めたるポテンシャルは計り知れませんか……

しかし彼は高揚すればするほど周囲が見えなくなる悪癖がありますから、私が程々にリードして差し上げなければなりません。それがまた楽しいんですけれどね。

後は結果待ちという状況、私たちは彼の部屋で小さな打ち上げを行っていた。と言ってもウーロン茶で乾杯する程度の些細なものですけどね。彼はかなり疲れているのか、笑みを浮かべても眉は下がりがかかっていた。

部屋の隅、私に見せないようにと配慮がされているけれど結局見えてしまっている眠気覚ましの薬や栄養ドリンクの姿がいくつも確認できた。それを見て確信した。

彼は少なくともテスト期間中、睡眠時間を減らしてまで勉強した。その上、無理を押し

してまで私との時間を作ろうとしている。今日くらい休めばいいのに、こう言っではなんですが本当に馬鹿ですわ。

けれど、それほど本気だったということでしょうし、求められるのは案外気持ちの良いいことでしたから大目に見ましよう。

「ふあ……んん、すいません。欠伸なんかしちゃって、退屈ではないんですけどね」

「眠いのなら、無理はなさらなくてもいいのですけど」

「げげ、見抜かれていますか。へへへ、ちよつと気合い入れて勉強しすぎましたね」

そう言っただけでまた欠伸を漏らし、ぐつと伸びをする彼。私の視界にはこれでもかと思える存在感を放つあの棒の姿が映っていた。私はそれに手を伸ばすと、居住まいを直し膝の上をぼんぼんと叩いた。

目をぱちぱちさせる彼は小学生の男の子のようで、少しだけ、ほんつの少しだけ可愛いと思っただけでしたわ。なんだか彼と好き合っただけというもの、私までどうかしてしまっただけかもしれないわね。

「本当にいいんですか？」

「頑張ったご褒美は誰にも与えられないべきですわ」

実際恥ずかしさが爆発しそうだったので、彼の首が変な音を鳴らす勢いで頭を腿に下ろした。すると、彼の髪が肌を撫でて一気に落ち着かなくなっていました。このま

までは脈拍が彼に悟られてしまいそうで……は、恥ずかしいことこの上ありませんわ！
私はこんな恥ずかしいことを殿方にしてあげると言ったの！？ 無知で無謀で無用心
すぎますわ！！

「あの、無理は……」

「してませんわっ！ あなたは黙って私の奉仕を受けていなさい！ わかった!？」

「イ、イエスマム!!」

「よろしい、タオルで視界を塞ぎますわよ。い、いいですわね……?」

彼の目を薄手のタオルで塞ぐ。すると、彼は語感の一つが禁じられたせいか寝相を正すような、そんな動きを繰り返すようになりました。やはり、視界を塞がれるのは不安なかしら。

「——じゃあ、始めますわよ……」

「うひい……」

「変な声出さないでくださいます?」

耳元で囁いてみると、彼はまるで石のように硬くなりながら反応した。視界が無い状態で耳に訪れる衝撃は通常の数倍のようですわね。

手に取った耳かき棒をそつと彼の耳の穴の中へと進ませる。カリカリと耳腔を優しく引つかくと、彼の身体はピクンピクンと触るたびに小さく跳ねる。ペンライトを使つ

て照らしてみると、やけに綺麗なのがわかった。

耳垢が特に見当たらなかった、もしかして自分で掃除した後だったりするのかしら

……

「掃除するところ、特に見当たりませんわね……」

「汚れてるところ見せたくないですからね」

「その気持ちをもう少しこのお部屋に向けてほしいものですね……」

もつとも前よりかはずいぶんとマシになっているので……なにぶん狭いお部屋ですから、荷物が増えても片付ける場所が無いというのは仕方ないことだとは思いますが……

僅かに取れた耳垢もティッシュに包んで片付ける。次に、ウェットティッシュを使って耳の周りを擦る。耳の周りを重点的に拭き取ると、私は彼の耳に口を近づけた。そして――

「ふうく……」

「うひゃあ……」

さっきのことから耳は弱いと思ってましたが、全身が弛緩するほどの衝撃だったみたい。その反応が面白くて、思わず微笑んでしまう。

「じゃあ、もう一回しますわね」

そう告げてから、じたばたと動こうとする彼の耳にもう一度口を近づけていく。そして、私が唇を窄めたまさにその瞬間でした。

ピンポーン、と彼の家のインターホンが鳴った。

「あ、お客さ——」

んっ、という音が皮膚で伝わってきた。私が現状を理解するまでに、数回のインターホンが鳴り響いた。

起き上がろうとした彼の唇が、自分の唇にぶつかっていた。私はともかく、彼にとつては衝撃かもしれない。なにせ視界が塞がっている状態でつい起き上がったら、何かがぶつかったのだから。

しかしムードなど皆無、さらに彼は急いで起き上がらないといけないと思っていたらしくほぼ頭突きのような速度でぶつかってきたし、すぐ起き上がってしまった。私が恥ずかしさと痛さとあと緋い交ぜになった何かで悶えてることに目もくれず玄関に向かつていった。

「はい……って、あつ、ちよつと！」

来訪者は、彼を振り切って入ってきた。土足のまま、不躰に。

それが彼の知り合いだったら、まだ良かった。しかし、自分の身内ともなると話は別

ですわ。

「お父様……」

「最近、帰りが遅いからと家の者を尾けさせてみれば逢引か。いつからそんなに悪い娘になった？」

厳しくも温厚だった父が他者に対し無礼を犯してでも連れ戻すという気迫を持つていた。私はお父さんに対して、言い訳することは出来ない。

何度も設定してくれたお見合いを破談にしたり、最近に至ってはお見合いの相手と顔を合わせることをすらしようとしないから。顔に泥を塗り続けた娘が、男と逢引しているともなればこの表情は当たり前ですわね。

「今日のところは、大人しく帰ります……それでよろしいですか？」

「いいや、私は紹介もされていらない男との交際など絶対に認めない。尤も、お前が紹介したいと言ってもお前に見合う男でなければならぬ」

「お言葉ですが、彼こそ私が見初めた殿方ですわ。お父様、いくらなんでも横暴が過ぎます！」

「いつもなら私もお前の意見を尊重するだろう、ただ今回に限ってはお前の人生がかかっている。さらに言えば我が黒澤の家の未来もな。こればかりは私も折れるつもりは毛頭ない」

ダメだ、気がつけば彼を庇おうと牙を剥き始める。それではお父様の思うつぼだとかかっていても、仮にも思慕しあっている相手をまるで少しも眼中に無いように扱うなんて……

「君は、どこかの御曹司かな。それとも、有名な弁護士や医者の子かな」

思った矢先だった。お父さんは彼に対して、静かな笑みを浮かべて尋ねた。まるで、そうあるのが当たり前だと言わんばかりの笑みだった。

「あ……いえ、僕はごく普通の一般家庭の生まれと育ちで、親族も特に高給取りだったりしませんしビッグな人間はいません」

「なんと、それで私の娘を誑かしてみせたのか、ひよつとして催眠術でも嗜んでいるのかな」

「お父様!!」

我慢出来なかった。彼が馬鹿にされたことも、もちろん。ただ今は、それ以上に父親が人を明確に貶したことが何よりもショックだったし受け入れがたかった。

「今日は大人しく帰ると、そう言ったつもりですが……」

「……わかった、下で車を待たせている。荷物を纏めなさい」

「はい……」

そう言ってお父さんは一足先に出ていった。私は、少し頭を掻き乱しそうになって踏

みとどまった。今、一番むしゃくしゃしているのは彼のはずだ。私を取り乱すわけには
いかない。

「ごめんなさいね、また……来る、から……」

彼は静かに頷いた。けど、表情に元気は無かった。力の無い笑み、まさに落とされた
鳥のようだった。生まれについては、もはや誰であろうと覆すことなど出来ないのだか
ら。

私は、家を出る前に数週だけ迷った。けれど、どうしても外にいるであろう父の圧力
を感じて行動を起こすことは出来なかった。

生まれが違っても、彼は私を見つけてくれただろう。

せめて、私が黒澤の人間でなければ、こんなにも非道な運命の悪戯は無かったのに。



嵐が過ぎ去ったようだ。元から汚い部屋だったけど、荒れているように見える。

俺の内側には、焦りと諦観の二律背反な感情が緋い交ぜになり心が焼かれたり、冷え

切ったりと忙しく風邪を引くかと思った。

部屋の中心で座ってたただ黄昏していると、インターホンではなくドアがドンドンとやや乱雑に叩かれた。しかし出る元気も無かった俺はそれを無視しようとした。

が、どうにも今日の来訪者はみんな容赦なく、ドアを蹴破って突入してきた。

「無事!？」

「いやなにしてくれてんの!? ああドア!!」

「ワオ……既に荒れきった後だネ……間に合わなかったか」

「間に合ってますから、まだ暴れてませんからこれが素ですからっていかいきなりなんでですか二人とも」

来訪者っていうか侵入者っていうか闖入者は、松浦果南さんと小原鞠莉さんの二人だった。ダイヤさんと隠れて交際するようになってから、よく話すようになって友達とは言いい合えるくらい仲だと思ふ。

「ダイヤから様子を見に行つてほしいって連絡が来て、ダイヤもダイヤでなんかボロボロみたいな感じで気になってさ」

「それで来てみたら、まさにハリケーン? サイクロンって感じ」

ダイヤさんが……あの人は、本当にやさしいな。俺のこと、想ってくれてるみたいだ。けど……

「そうですか、大丈夫なんで帰って大丈夫ですよ。ドア、直さないと」
「大丈夫そうには見えないんですけど？ 鏡、見た？」

……薄々勘付いてはいた、ただ二人の顔を見るに俺の顔は今相当見苦しいことになっているらしい。

「どうするの、ダイヤ取られちゃってもいいの？」

鞠莉さんの一言が鋭く胸をえぐる。果南さんが鞠莉さんを窘めるものの、思ってることは一緒らしかった。

「そりゃ、取られたくないですよ。ただ、どうすればあのお父さんを納得させられるか分からないんですよ。ステータスって大事なんだって改めて思い知らされました。努力で覆せない数字ってあるんですよ」

俺がどれだけ今から頑張ったところで、ダイヤさんのお父さんが言っていた「御曹司」や「有名弁護士や医者の子」にはなれない。どこまで頑張っても一般家庭の人間であるという生まれの問題は変えられない。

だけど黒澤家が求めているのは、やっぱりそういう人間なんだ。

「あのね、ダイヤからのメッセージはあなたの様子を見に行つてほしいってだけじゃなかったんだ」

「そうそう、相変わらずダイヤはダイヤって感じだったわ」

二人は立て続けにそんなことを言っていた。そして果南さんは、スマートフォン画面を見せてきた。そこには、ダイヤさんからのメッセージと思われる一行の文。

メッセージという割には、感情が見えてこない。当然か、なぜならこれは……

「住所、ですな」

「ちなみに、ワタシのにはこんな文字列が送られてきてね」

鞠莉さんのスマホの画面には、数字とアルファベットの文字列。一瞬郵便番号かとも思ったけど、数字が少なすぎる。

「ただどこれもすぐにピンと来た。そしてダイヤさんが俺に何を求めているのかも。」

「ここまで言われてるのに、諦めちゃうの？ そんなの、誰よりダイヤが求めてないよ」

「もし諦めちゃうんなら、それも一つの結果。だけど、ダイヤの友達としてそれは認められないかな」

諦めてしまうのは誰でも出来る。ダイヤさんを手に入れることが出来る人間は、そこそこの力さえあれば出来るはずだ。

でも、ダイヤさんの心を手に入れられるのは……きつと俺しかいない。結局、どうなっても俺の結論はこの方向に向かうよう運命は決まっているのかもしれない。

「わかりました。俺、やります。ダイヤさんを取り返してみせます。だって、まだ片方やってもらって、無いですから」

——耳かき。



あれから、数日が経った。結局私は彼の部屋に荷物を置いてきてしまい、登校しようにも出来なかつたので今日まで部屋に閉じこもっていた。

ルビイが何度か心配して部屋を訪ねてきたけれど、入れたりはしなかつた。その後ろに父の存在があると思っていたから、それもありますけどとにかく誰も入れたくなかつた。

そして今日、幾度目かの正装に着替えて私は車に乗っていた。隣には、私と同じような華々しいドレスを着ていた。お父様もお母様もまた、網元らしい服で着飾っていた。少し前まで誇りだったことが、今では足枷に思えてならない。好きな人と自由に想い合うことすら出来ないのだから、足枷という表現はこれ以上無いくらいだろう。

「ついでに」

お父様の一言で私はハツとした。私より先にルビイが車を降りるくらいには、私の気

は別に逸れていた。遅れてヒールをアスファルトにつける。目に入るのは見知らぬホテル。わざわざ隣町へ来てまで、かなり慎重な場所選びをしたのだとわかってしまう。

けれど、私が親友に託したメッセージが届いているのなら。彼ならば……

「今回は会食とちよつとした顔合わせの席だ。だからといって、先方に失礼の無いようにな」

「……はっ」

失礼の無いように、そう言われても私はまだ笑顔の仮面をつけることが出来ずにいた。ルビイが心配して眉を寄せていた。姉がこんなことではいけない、そう思っているもやはり割り切ることは出来なかった。

ロビーで受付を済ませる。わざわざ会場を貸しきつてまで、会食を行うなんて。お父様の本気を垣間見、同時に歯噛みしてしまいそうでしたわ。

「お姉ちゃん、本当にいいの……?」

「ひとまずは、お父様の気の済むまで、待つしかありませんもの……っ」

ルビイの悲しそうな顔が胸に刺さる。私が欲しているものは、妹をこんな顔にさせてまで得たいものなのですか、と自分に問う。しかし、彼とルビイを天秤にかけることなんて、とてもじゃないけれど出来ない。

スタッフの方が私たちを引率し、一つの扉を指して言った。

「先方の方、もう既にお待ちです。どうぞ中へ」

「なんと、ずいぶんとお早い……待たせてはいけない、さあ入ろう」

お父様が、その絢爛な扉に手をかけた。さあ私も覚悟を決めなければ、彼を捨てる覚悟でもなければかの殿方と添い遂げる覚悟でもありません。

それは、私の強さを確かめるための覚悟——！

「——お待ちしておりました」

そう言いながら、先方の男性は立ち上がった。尤も、私もルビイもお父様も度肝を抜かれた。唯一、お母様だけが首を傾げていた。

「な……」

「なんで……?」

ルビイが目を白黒させる。当然だ、確かに、私はヒントを残した。ここへと繋がる、ヒントを確かに散りばめた。けれど、まさか……

「初めまして、お母様。お父様は数日ぶりでございますね。ルビイちゃんも久しぶり」

まだ啞然としてお父様とルビイに声をかけたものの、やはり二人からは反応が無い。お母様だけは顔見知りだったのなどどこかずれたことを言っていた。

「ダイヤさん、迎えに来ました……ですかね。一番しつくりくるのは」

彼は、やっぱりどこまでも破天荒だ。さらに言えばこちらの予測など完全にアテにならないくらい、ええそうですね。ぶつ飛んだ行動を選ぶ。

「……ぶつ、くすくす……お父様お母様、改めて紹介致しますわ。ルビイはもう知っているわね?」

私にしてやったり、という笑みで告げた言葉にお父様はじとりと汗を垂らしお母様は微笑み、ルビイもニツコリと花丸笑顔で彼を見つめた。

「私が認めた、日本一の男ですわ。今日まで、幾度と無く悩んでまいりましたが、やはり彼以外に私の伴侶は考えられません!!」

だから私も、今までに無いほど力に満ちた言葉でそう宣言した。それでも、それでもまだ受け入れられないというお父様は、なんと私を一旦視界の外へ置き、ゆつくりと彼に歩み寄った。

「今日、ダイヤと見合いをするはずだった方はどこだね……?」

「二つ上の階にいらつしやいます」

「ツ……なら話は早い。みんな移動するぞ、これ以上彼の相手は——」

してられない、そう言おうとしたのでしよう。けどそれも、彼が慌てて止めた。

「あーあー! 待つてください! 邪魔したらまずいですよ、あつちはもう始まつてる

んですから！」

「始まつてるだど!? いったい何がだね！」

「ですから！ お見合いですつて!!」

それは、私も驚くことになった。終始首を傾げているお母様はどこまでも蚊帳の外だった。しかし、数日前と違い彼がお父様を手玉に取っている。私と添い遂げる気があるのなら程々しておきなさいと言いたいところですが先日のリベンジくらいはさせあげろべきですわ。

彼はテーブルの上の端末の電源を入れると、誰かと通話を始めるらしかった。と思いきや、端末を耳から離しスピーカーへ切り替えた。

『Ready!? オウ、すごいわもつと聞かせていただけろ?』

『あはは、とてもお話上手ですね、あれよあれよと話題が溢れてきますよ。ええもちろん、こんな与太話でよければいくらでも』

端末の向こうから楽しそうに談笑する声が聞こえてくる。その声の内、女性の方には聞き覚えがあつた。忘れられるはずもない、親友の声ですわ。

「鞠莉さん……ありがとう」

小さく、そう感謝を述べる。その様子を聞いて、お父様は歩みを止めた。私とルビィは彼に元へと近づき、振り返ってお父様と対峙した。眉が異常なまでに寄っていて、こ

れ以上無いほどの怒りと困惑を示していた。

「君は……ダイヤの、娘の将来をふいにする気なのかね……」

お父様は低い声音を維持しながら、そう言った。私は、またしてもムツとしてしまつたけれど彼とルビイが止めてくれたおかげで口を開かずに済んだ。

「確かに、俺では彼女に不釣り合いかもしれない。けれど、だからつてやる前から諦めたくはないんです」

「そんなことなら誰であつても言える。そこで、本当に釣り合いが取れるようになり幸せをつかめる人間こそが成功者なのだ！　そういう人物こそがダイヤの人生のパートナーに相応しいのだと、君は思うことが出来ないかね！」

「出来ませんッ!!」

ビリッ、空気が揺れた。私たちだけの空間にしては些か広いこの空間を余すところなく揺らす彼の咆哮にお父様はたじろいだ。

「確かに、ダイヤさんはそれで一生幸せになれるかもしれませんが。そう思つたら、それも悪くない。好きな女が一生幸せならそつちが良い、そうも思いますけど……この手で、幸せにしてみせたいんです。そのためなら、俺はお義父さんからダイヤさんを勝ち取つ

てみせます」

「それがダメだと私は言っているんだ。破綻していると、私がそう言っているのが、君たちには分からないのかね!!」

「分かったらそれでおしまいなんです!! 俺には、お義父さんが求めているような、家の力が無い。これからだって未知数です。ステータスが無い人間は、諦めるしかない。そんなの理不尽すぎます、だから俺はその理不尽を覆してでも彼女と添い遂げます——
——約束だから!!」

彼の一言一言には、この数日かけて培った意思の力が宿っていた。私は、彼の素直でド直球な言葉がただただ純粋に嬉しかった。

そんな彼に対し、汗を拭いたお父様は少し意地悪そうな笑みを浮かべて問うた。

「なら、いくら積みめば君は諦める?」

「っ、お父さん!?!」

ルビイが声を荒らげた。これには、さすがに私も、お母様も驚かざるを得なかった。ただ、お父様と彼だけが粛々と佇んでいた。

「手始めに100万だ。ここから君の好きな額を言いたまえ、私もそれで手打ちにする。遠慮せずに言ってみるがいい」

誰だ、この男は。

気分が悪い、目の前がグルグルする。すると高いヒールが災いして、体がぐらついた。そして、ヒールが抜け体勢を崩してしまった。

しかし、彼がすかさず手を出して私を支えてくれた。いつもなら軽口で場を和ませたりするのだろう、でも今は今までに無いほど真面目な顔でお父様と対峙していた。

「うーん……100万、か……」

「ええっ!? どうしたの!?!」

ルビイがまたしても悲鳴のような声を上げた。彼が、そんなことを口にしたからだ。お父様の口元がゆつくりと持ち上がる。

「好きな額だ、遠慮することはない」

「そうですね、じゃあ……」

——「お金はいりません」

……少し、ホツとしてしまいました。ここで、彼が好きな額で手を打てば、私たちの関係は終わっていた。もちろん彼はそんなこと分かっていたから断つたのだろう。

「確かに、それぐらいのお金あればしばらく遊びも暮らしも困りません」

「そうだろう、だのに君はなぜ拒む。この金で新しいガールフレンドを見つけられるくらい造作も無いだろう。家系や学歴に関してはともかく、君は容姿に恵まれている。捨てた身とはならないはずだ」

「あ、そうですか……？　　なんか、照れるなあ」

「照れてる場合ですよ!?　　籠絡されかけてるんですよ!」

先ほどまでの尖った雰囲気と打って変わりいつもみたいなヘラヘラした彼に戻っていたので、頬を引っ張って気合いを入れさせる。

「いで、いでででで!!　　つつー……いや、まあかつこつけていたのはあるんですけどね。確かに、俺みたいな、それこそあんなボロアパートに住んでる身としては100万を越えるお金は確かに魅力の塊です。だけど、ダイヤさんは100万じゃ買えない。もちろんそれ以上の値でも。それどころか、ダイヤさんはお金で買えない。それは、あなたが一番良く分かっているでしょう?」

彼の言葉を受けて、お父様は押し黙った。そして、ようやく気付いたらしい。

愛する娘に値をつけて、天秤にかけさせた。それはすなわち、娘を売買するということになんら変わりがない。その外道とも呼べる行いに、お父様はようやく気がついた。

「……私は、君たちぐらいの年の頃、それはもう偉大な野望や野心があった。しかし大人

になるうちに気付くのだ、そんなこと子供の戯言に過ぎなかった、自分は甘かったと辛酸を舐めさせられる」

お父様の独白は、先ほどまでの鬼気としたものがなかった。一人の男が生きてきた中で、思い知った苦悩や苦難を物語っていた。

「だから、どれほど愛が深くとも勝ち得ない理不尽が必ず存在する。そんな理不尽から、娘を守るために手を尽くすことを君は間違いだと糾弾するかね」

「しません、俺がお義父さんでも同じことをしたんじゃないかって、思います。だけど、俺はお義父さんの言う、立ちはだかる理不尽を背負ってでもダイヤさんのことを愛していきたいんです」

その返答には、まだお父様に負けないという意思が満ちていた。後もう一押しで、勝てる。私の目には戦況がそう見えていた。

「わ、私ね……お父さん以外の男の人がどうしても怖かった。正直言うと、お兄さんも少し怖かった。けどね、お姉ちゃんのために全力だっという姿勢が、とつてもとつてもかっこいいなって。そこは、ルビイの密かな憧れなんです……えへへ、言っちゃった」
少し頬を朱に染めるルビイ。お母様はいつものお父様未満の厳格さを納めてあらあらと笑っていた。それを見て、お父様はさらに顔を気まずそうにする。

畳み掛けるなら、今しかない。

「お父様……一先ず、ありがとうございます。私を想つての行動の数々、その想いを汲み取ることが出来ず申し訳ありませんわ……」

深々と頭を下げる。すると隣で彼も頭を下げた。私は顔を上げると、偽りの無い本心を持つて喉を奮わせた。

「確かに、お父様の敷いてくださったレールは私にとってこれ以上無いほどの安寧の道。けれど、その安寧は私だけのもの。私は、一人で幸せな世界に隔離されるよりも、愛する人とあらゆる苦しみや逆境の中を進み捜し求めた先にある、与えられたのではない本当の幸せが欲しいのです……いいえ、掴み取ってみせますわ、彼と二人で」

だから、再び私は頭を下げる。先の言葉を汲み取った彼も、私と共に頭を下げた。

「私たちの、結婚をお許しください。お父様」

私たちの、全力を以ての説得に対し、お父様は最後まで苦虫を噛み潰したかのような顔をしていただけ、

「——許す、その代わり、絶対に幸せになりなさい。いいね？」

最後には、子供の頃から見せてくれた厳格な中にある父の優しさを含んだ笑みを以て頷いてくれました。



「はあ〜……疲れた」

「ええ、そうですね……特にあなたは頑張りましたものね」

数時間後、私は家にて正装を解きその辺にあった私服を身に纏い彼の家へと走った。そこには、果南と鞠莉さんがいました。二人とも、よく私のメツセージを彼につなげてくれましたね、とお礼を言おうとした矢先なぜか果南さんはウエイトレスのようなかわいらしいヒラヒラの服を着ていた。

「鞠莉とお坊ちゃんの手ブールにいろいろ運んだの、実は私なんだよ？ 雰囲気は怪しくなるたびに場を濁すために乱入してすごい大変だったんだから！」

「そうそう！ 果南ってば危ないってタイミグで必ずヘルプに入ってくれて、もうエクスレント！ 果南ってば実はこういう仕事の方が向いてるんじゃない？」

「いやいや、出来ればもうしたくないよ〜」

二人とも、私たちと同じくらいに疲れているみたいでした。鞠莉さんは相手の方と若干意気投合しかけたらしいけれど、どうも相手の方が自分語りの長い人だったらしく、果南が私たちの決着がついた頃に合図して鞠莉さんは離席するふりをしてそのまま帰ってきたみたい。

だからか、鞠莉さんもお嬢様のような煌びやかなドレスを纏っておりこの部屋の密度に大いに貢献していた。不本意極まりないでしょうけど。

「にしても、熱々ねえ?」

「ほーんと、お邪魔かな?」

鞠莉さんと果南が口々に言う。というのも、私は先日の続きとばかりに彼に膝枕をして耳かきの続きを行っていました。といっても、彼はきっちり掃除し終えてるせいで私ができることは耳かき棒で彼の耳をマッサージする程度なのですけど。

「じゃあ果南エスコートしてくれない? どこか別に落ち着ける場所にも」
「はいはいお嬢様、こちらへどうぞ。じゃあね二人とも、末永くお幸せに〜」

「よ、余計な一言ですわ! ちょっと果南てば! ……もう」

タイトなメイドとお嬢様が部屋からいなくなり、あつという間に彼の部屋で二人つきりになった。沈黙が部屋を支配する。が、やがてどちらともなく口を開いた。

「ダイヤさん、本当にいい友達を持ってますね」

「ええ、私の数ある自慢の一つですから」

「あの二人がいなかったら、俺はきつとお義父さんに屈していたと思うんですよ」

ドアは壊されたけど、と彼がなにやらぶつぶつ呟いていた。私からのメッセージを迅速かつ、しつかり咀嚼し解釈できる人間などルビイを含む身内以外ではあの二人しかいませんもの。

「友情に、救われたんですね俺たち」

「けど、お父様を説き伏せたのはひとえにあなたの頑張り、努力ですわ」

そして、勝ち取った。二人で歩む未来を。

「そういうえば、もうお父様のお許しも出たことですし……あげちゃっても、いいわよね……?」

「はい?」

首を捻った彼の目を見据え、私の最大の喜びを浮かべた顔を近づけていく。ちゅつと触れた唇は、こないだみたいなの乱雑なぶつかり方はしない。

「これから、忙しくなりますわよ。旦那様?」

「え、あ、えと……はい、お嫁様？」

これから二人で歩く道は、茨も茨。光の見えない闇夜の航海。

けれど、彼となら、二人の愛で照らしあげたのなら、その航海に間違いなんかありませんわ。

『俺』と『彼女』の九つのひと時

「チカたちの間には競争心が足りないんだよ！」
「いきなりどうしたんだよ千歌……」

ある休日の自宅。

突如朝っぱらから押しかけてきて、俺の部屋でなにやらギャーと騒いだのは、幼馴染
兼自称第一婦人である「高海千歌」。

俺に彼女を含めた九人の想い人がいるのは、大体彼女が発端と言うか、元凶というか。
十人の関係がこじれていないのも大体コイツのおかげなのだからあまり文句が言え
るものでもないんだが。

まあそんな千歌が実家である旅館の手伝いをほっぽってまで、俺の家まで朝からやつ
てくるというのはよっぽどのことだと思っだろう。

俺も最初の頃は思ってた、まあそんなことも無かったのだが。

別に親御さんたちには『千歌は危なっかしいからまあ面倒見てくれて助かるわ』みた
いな認識をされているし、問題はないのだろう。

いや、保護者じゃねーよ俺は、恋人だよ。

「ちがうよ！ 旦那様だよ！」

「さらりと心を読むんじゃねーってばよ。それで、今度はどうしたんだ」

千歌は俺の問いに、ウンウンとうなずきながら、俺の机をバンと強くたたく。

おいこら、その机いつもお前ともう二人が叩いてるから、軋んでいるんだぞ。

そろそろ買い替えなきゃななって思ったけどさ、この調子だと買い替えて一年もしないうちにゴミに出さなきゃならん気がするんだが。

「最近チカたちと君の間にマンネリ感が蔓延してるんだよ！」

「マンネリ感……？」

「そう！ あ、今のはね、マンネリと蔓延の響きをちよつと似せて——」

「あ、言わんでいい。大体わかったから今のは」

「ぶー、今のはいい出来だとおもうんだけど……」

なんとなくでわかってほしいのだが、この千歌はダジャレやそれに関係するギャグな

どがお好きで、暇さえあればそれを会話の中に盛り込もうとしてくるのだ。

今回のはまだいい、本当にひどい時なんて台風の日、『フィートすこいから布団が吹っ飛んじやって歩いてる人の頭に降ってつちやうね』とかみたいなもんを持つてくるのだから。

「それで、マンネリってどういうことだ？」

「ほら、私たちって十人みんな仲良くやってるでしょ？」

「まあそうだな、よくこじれないで仲良くできてるなあって思うよ」
「でも最近さ、なんか刺激足りないと思わないかな」

何を言っているのだろうコイツは。

刺激……個人的に言わせてもらうならもう毎日が刺激なんだが。

カナと海に潜って新しい魚とかを見つけたり

マリーのレッスンで乗馬について学んだり

ダイヤに帝王学について教わったり

梨子に教えてもらいながらピアノを弾いたり

曜と一緒に船の模型組み立てたり

ルビィと一緒にアイドルのDVD見てたり

マルと交換日記をしたり

ヨツコと一緒に謎解き型のゲームで盛り上がりたり

そして目の前のこいつと旅館の手伝いをしてたり……

ここまでいろいろなことをしていて刺激がないだなんてどういうことだろうか。

「あのね、そうじゃないんだよね」

「む……じゃあどういふことだ？」

「それって君が感じる刺激であって、チカたちの間ではいつも通りって感じだね、互いにあんまり刺激になってないんだよ！」

互いの刺激……？

俺たちの関係性がいつも通り……？

……ああ、でも確かに。

やっていることは前々から、恋人同士になる前から変わらない。

俺にとっては新しいものに触れられるだけで刺激的なんだが……

「君のその反応を善子ちゃん聞いたらきつと『幻想の世界にうんぬんかんぬん』とか言ってるよだね」

「せめて最後まで言いきれよ。中途半端に止めたらヨツコが多分、かわいそうだよ」

「とにかく！ チカたちはもう少し互いに刺激を与えあうようなことをするべきだと思います！ みんな幸せになってまさに喜劇のように……あ、今のは刺激と喜劇のニュアンスを似せてだね——」

「おまえ喜劇の意味分かってんのかよ」

しかもコイツ今、ヨツコについての話を無視しおったぞ。

「まあそれは別に良いんだがさ……なにかすることって計画あるの？」

「ふっふっふ……よくぞ聞いてくれました！」

何やら不適そうな笑いを浮かべる千歌。

大体コイツがこういう顔をするときはろくでもないことが待っている。

本音を言うならば休日だし寝ていたい。

あとお前ははよ家の手伝いに行け。

「手伝わたらお姉ちゃんたちに追い出されるもん！」

「お前それ自分に非有るかかってかんがえてみたことない？」

「だあかあらあ！ そんなことより！ 続き！」

『つうづうきい！』と騒いで机をバンバン叩きはじめる千歌を諫め話の続きを促す。

このままだとただでさえ耐久値がダダ下がりな机さんがマジでお亡くなりになってしまう。

そろそろバキツと音を立ててくれやがりそうなくらいボロボロになってる気がする。最近金具部分の折り曲げが上手くないかないし。

「チカは考えたのです！ そろそろ長期休みが来るでしょ？」

「そうだな、一応俺の通うところと浦の星の休みは互いに公立だから同じなはずだし」

「なので！ チカたち全員で君の時間を一人一日ずつ貰って、デートをしたいと思っています！ 長期だけにまさに好機！……どう、今少しラップ口調も混ぜてみたんだけど！」

「あー、はいはい、凄いいい」

……なるほど、ギャグもそうだがよくわからん。

千歌のいう言葉にしぼし理解を試みる、意外とあっさり答えは出た。

つまりは、俺が九人の彼女達それぞれと、一日ずつデートをして、九人は互いに自分の経験を打ち明け合うということ。

そうすれば九人互いが互いに刺激を与えあうことになり、俺はまあ彼女達とこれまで通り一緒に過ごせばいいので問題なし。

なるほど、千歌にしては考えたものだ。

「だが、俺がデートプランを考えると、皆そろって同じ内容になってしまう懸念があるのだが？」

「そこも問題なし！ 今回デートプランを考えるのはチカたちです！」

「……なるほど、いつもと同じ経験にならないように気を付けることは？」

「いつもやつてることの禁止！」

そりやまたえらくざつくりしたもので。

まあこれも千歌の考えたこととしてはかなり上出来だ。

いつもやつてることをしてたって刺激も何も有ったものじゃないだろう。

珍しく恋愛ゲームをやっていたヨッコがデートの重要性について目覚めたっぽい雰囲気を出してた頃もあったし、そんな感じなんだろう。

まあ、いつものことを禁止しなかったら特にカナとダイヤ、そしてヨッコとは何にも変わらないひと時になっていそうだし。

いや、俺としては全然ダイビングも勉強もゲームも楽しめるからいいんだけどね。

「それで、この事はもうみんなに話したのか？」

「……………」

「…………おまえさ、次の練習の時にその話しときな？」

「はい！ わかりました!!」

そんなわけで長期休み一日目。

割と千歌の提案は八人の恋人たちにも受け入れられたらしく。

『今まで君に頼りっぱなしだったからね。自分でデートプランを考えるって新鮮なことできて、いいと思ったよ』

と、カナが話していたのはつい最近の話。

千歌曰く『デートは待ち合わせから始まるんだよ!』というところで、俺は駅前で本日のデート相手と待ち合わせをしていた。

そう、待ち合わせ場所と時間も、その日の相手の指定なのだ。

「はあ……はあ……ごめんなさい、待たせましたか?」

「いや、大丈夫だよ。あまり待つて無いから」

「もう……そこは嘘でもいいので『今来たところ』って言ってほしかったかなあつて……」

「ごめんごめん、今日はよろしくね梨子」

「はい、よろしくお願ひします!」

息を少し荒げる程度の速度で走ってやってきた本日のお相手は【さくらうちりこ桜内梨子】。

東京にある音ノ木坂学院と言うところから浦の星女学院へ転校してきて、そして暴走気味な千歌に誘われてAoursに加入した子だ。

穏やかで清楚な雰囲気と違わずピアノが上手く、絵も綺麗。

でもファンシーなイラストを描くと、それにどこか狂気さを感じてしまうのが玉に瑕

な子。

そんな彼女が作ってきたデートプランとは何だろうか？

「えつと……今日はですね、駅前の映画館で今、映画をやっている……」

「ああ、それってもしかしてついこないだ公開した作品？」

「うん、花丸ちゃんがお薦めしてくれた作者さんの本が原作の映画で、さらに私の好きな作曲家の人が音楽を手掛けているって聞いて」

「そっか、結構ニュースになってたから興味もあつただけど、それは音楽も楽しみだね。上映時間はいつ位かな？」

事前に調べていたのか、梨子はスケジュール帳を取り出す。

梨子らしい桜色のシンプルなそれには、千歌から押し付けられていたカエルのシールが貼られていてとても愛らしい。

よく見るとヨッコからプレゼントされてたシールも貼つてある、律儀な子だなあ。

「二時過ぎだからまだ時間は大丈夫です」

「そっか、それじゃあ先にお昼でも食べようか」

「あ、あの、駅前の喫茶店でお薦めのところがあるから、そこに行きましよう?」

なるほど、昼食についても彼女たち自身で用意したり、計画しているのか。

そんなわけで昼ごはんを取りながら梨子に映画の後について聞いてみたところ、映画の後は歩いて商店街を通り、後はあまり考えていないとのこと。

『それなら商店街で色々あるし、近くで美術展もやっているそうだし、そこに行くのもいいかもしれない』と、提案をするだけしてみても映画館へと向かう。

「梨子はポップコーンどうする?」

「私は……さつき食べたばかりだし、お腹は空いていないかな……」

「それもそうか、そう考えたら俺も全部食べきれなさそうだし、やめておこうかな」

そして映画を見終えて外へ出る。

いやあ、梨子が好きな作曲家だけあって音楽がよかった。

俺はその道のプロでもないし、そういう知識に詳しいわけではないけれども、映画の内容に違和感を感じさせない、それでいて主張しすぎなくて、でも存在感はあって……

上手く言えないけど、とてもいい音楽でストーリーだったと思う。

「梨子、さっきの映画そんなに感動したのかい、涙が止まってないよ?」

「最後の、主人公と……ヒロインの、やり取りに……感動、しちゃって……」

「そっか。確かに良い終わり方だったよね。今度マルにその原作を借してもらわないとね」

梨子とのデートはその後、商店街にあるケーキ屋に二人で入り、映画の感想で盛り上がった。

ついでのなのだが、彼女が好きな作曲家の今までリリースされたサウンドトラックなどが家に在るらしく、次会うときに貸してくれるとのこと。

最後は最近足りなくなってきたという彼女の画材道具の買い物に付き合い、この日のデートは終わった。

今度また絵を見せてもらおう。

「また……一緒に映画を見たいです!」

凜、とした黒く長い綺麗な髪を風に揺らせながら、自慢気にたたずむ少女が俺を見る。対して彼女の瞳に映る今の俺は、死んだ魚のような目をしているのだろうか。

そんなくだらないことを考えながら、俺は目の前の彼女の言葉へたつた一言情けない声でツツコミを入れることしかできなかつた。

「これこそが、わたくしが行きついたデートの王道——つり橋ですわ!」
「……なんでやねん」

翌日、朝も終わりといった昼前に、突如家へ押しかけてきた黒塗りの高級車に拉致された俺は、『暫定日本一長いつり橋』である三島スカイウォークへと来ていた。

……高級車つてあたりで大体察してもらえると嬉しいのだが、今回のお相手は「黒澤くろさわダイヤ」。

沼津市内浦における元網元の一つである黒澤家、その家系の次期当主で、現浦の星女学院生徒会長たるその少女はいわゆるポンコツ。

出会った最初の頃はすごく厳格で堅苦しく、ちよつと接しづらいけど自分の家に誇りを持っていて、それに恥じない人間であろうとひたむきに努力を続ける一種の天才——

だったのに。

だが彼女は弾けた。なぜ今はこうなってしまったのか、それは俺にも、妹であるルビイにもわからない。

「わたくし、今回デートプランを自分で用意しなければならぬと聞き、調査しましたの」

「ふむふむ、まあ妥当だよな。みんな悩むだろうし」

「そしてわたくしはある雑誌を読みましたわ」

「ほう、それとつり橋に何か関係があるのか？」

俺の問いに、ドヤ顔を隠せないダイヤは胸を張って声を挙げた。

「殿方は、『つり橋効果』というものに弱いということ、わたくしは知ったのです！」
「……まさか」

「そう、そのまさかですわ。つり橋効果とはつり橋で起こる物、さらにわたくしは丁度この日本一長いつり橋があることにも気づきましたの！」

……みなさん、これが黒澤ダイヤのポンコツ具合です、お納めください。

つり橋効果について解説するとだ、『不安や恐怖を強く感じている時に出会った人に
対し、恋愛感情を持ちやすくなる効果のこと』。

どっかの国の学者さんが実際につり橋を使って、それから証明された理論だからこう
呼ばれているが、別につり橋である必要性はない。

さらに言えばこの理論は恋愛関係にない男女を引き合わせるために使われたりする
ことが多く、俺とダイヤのような恋人関係の間柄には専ら意味があるとは思えない。

そしてここからが重要なのだが、俺は高所恐怖症だ。

つり橋とか恐怖感がマックスになるからダメ……あつ、もうなんか脚震えでした。

「さあ、行きますわよ。ドキドキ感というものに身を任せればきつと今回の課題である
刺激的な体験になることにちがいませんわ！」

「さてつ、それは違う意味でのドキドキ——あつ待つて待つてほんとまって
やアアアアア!!!」

この後、めちやくちや気持ち悪さと恐怖感で吐きかけた。

ダイヤが予約を済ませていた老舗鰻屋でのうな重の味なんて全く分からなかった。

刺激的過ぎてほんともうわけがわからなかった。

おつきの人がいつでも吐けるように準備してくれていたのが嬉しかった反面情けなかったです。

あ、背中さすってくれてありがとうございます。

「おかしいですわね、本の通りならばつり橋の時に彼はわたくしに抱き着いてもいいはずなのに……」

「昨日は……お姉ちゃんがご迷惑をおかけしました！」

「いいよいよ、体調は万全、何も問題がないから」

「でもでも……お姉ちゃんが迷惑かけちゃったからルビィがあやまらなくちゃいけないですしー！」

「大丈夫、気にしてないって。だから今日は楽しもう。ね？」

翌日。一晩死んだようにぐっすり眠ったおかげか元気全開な俺は再び駅前に来てい

た。

カナや曜に『その回復力があればどんな運動をしても平気……』と失礼なことを言われている身体だが、今回に関してはそんな身体で良かったと心底思っている。

そんな俺に対して目の前の少女は平身低頭せんばかりに謝り倒してくるのは、先日のお相手だった黒澤ダイヤの妹であり、これまた俺の彼女でもある【黒澤ルビィ】。

紅いツインテールを揺らす彼女は小動物みたいとA q o u r sメンバーの中でも好評で、マスコットのような立ち位置に座している子である。

「それで、今日は何処に行く?」

「あ……あの、その、えと……おっお洋服を見に行きたくて!」

「洋服か……確か静岡駅あたりに大きなデパートができたって話題になってたっけ……」

「そう! そこっ、そこに行きたくて!」

こうして考えるプランが同じになるのはうれしいものである。

静岡まではここからだとして少し遠くて時間がかかってしまうが、折角のデートだし、電車でゆったりとした時間も乙なものである。

と、駅まで向かうとルビイはバッグの中から二枚の切符を取り出した。

「あの……お父さんとお母さんが『遠いから新幹線を使いなさい』って……」

「えっ、指定席じゃないかこれ。いいのかこんなの貰って……」

「『いつもお世話になってる礼』だって……」

「……まあ、ありがたく心遣いを受け取らせてもらおうよ」

そんなわけで新幹線に乗るために隣の三島市まで移動、昼飯の駅弁を選んで新幹線で静岡まで行くことに。

食べながら話すのは新曲の衣装について。

まあ俺から語れることはないから基本的に相槌うっただけだったりするんだけどね。

そんなわけで静岡駅。

無料シャトルバスがあるらしいのでそれに乗ってショッピングモールへ。

「ひっ人が多い……」

「離れないようにしなくちゃね、気を付けてルビイ」

ルビイは男性恐怖症だ。

いや、正確に言えば症状とかよりも単に男性免疫というか、男性に対する心構えが育っていないというのか。

少し前までは男と言えば父親以外知らなかったような子だったのだが、今では俺とこうして出かけられるようになるほど成長した。

ちなみに俺と話せているのに『元』ではないのは、未だに俺以外の男性には免疫が全くないのと、俺とですらまだ手を繋いだりは難しいから。

ルビイの親友でもあるマルから聞いたのだが、彼女の目下の目標は俺と長時間手を繋ぐことらしい。

「あつあの……その……」

「ん、大丈夫だぞ？　ちゃんとみているからさ」

「いえ……あの……そうじゃなくて……」

いつも以上に強張る顔のルビイ。

その眼が向けられているのは……俺の手。

そうか、ルビイはここで頑張って克服しようっていうのか。

「ほい」

「あつ……」

「出来るとここまでやってみよう、ただ走ってどこかに行くのだけはダメだからな」

「あ、ありがとう……ございますー！」

「いたいいたい、爪入ってるからもう一回お願い！」

結局ルビイの挑戦は三十分ももつことはなく、彼女は恐怖感が限界を超えたのか気絶をしてしまった。

何処からかついてきていたおっきの人の手伝いもあつて大事に至らず、肝心の洋服探しはまたの機会に流れてしまったのであった。

余談だが、ルビイが気絶している間に、彼女に似合いそうな服を一着見つけたのでこっそり買つて、帰り際にプレゼントしたら泣かれてしまった。

自分だけ受け取つてばかりなのが申し訳ないだとかいろいろ言つてたけど、正直俺との関係でそういうのを律儀に悩まれても、俺としては困ることしかないしなあというところで、次回以降のデートに持ち越してもらふことになった。

「次はちやんと……手、繋いで歩けたらいいなあ……」

朝、早くから今日の相手と共に向かったのはかの有名なFランド。

そのチケット売り場にてその相手は深く深く、まるで今の雨空のようにどんよりとした空気を漂わせている。

「うう……なんで天気予報では晴れだったのに……!」

「まあまあ、これが駄天使ヨッコの真骨頂だからな。そう気を落とすな」

「だからヨッコじゃなくてヨハネっ! あとなんか堕天使の響きが違うわよっ!」

そう、今日のお相手は【津島善子^{つしまよしこ}】。

小さな不幸が積み重なったことで堕天使を自称するようになってしまった子で、その名前は【ヨハネ】。

そのためか善子と呼ぶと大体ツツコミを入れつつ訂正してくる。でも俺は【ヨッコ】と呼び続けている。

趣味はゲームで、好きなものはチョコと苺。逆にみかんが嫌い、千歌とはそこらへん相性が悪いらしい。

「うう……せつかくのデートなのに……こういう時にまで不幸が訪れなくていいじゃない……」

「雨でもデートはできるもんだぞ。と言うかお前さ、なんでジェットコースター苦手なの……選んだよ」

「……ここら辺だとここしかないんだから仕方ないじゃない！ 本当ならゲームセンターとか行きたかったけど、ダメって言われたし！」

まあいつもやっていることが禁止だからな、それは仕方がない。
後今回は雨が降っていると行ってもそこまで酷いものじゃない。

小雨位の降りなのだから気を付けていれば十分遊べるだろう。

「と、言うわけだ。折角だしお化け屋敷とかでも行ってみるか？」

「おっお化け屋敷ですって!？」

「……もしかしてそっちも怖いのか？」

「あああああなたってまさか知らないの!？」

めっちゃくちゃビビった振る舞いをするヨッコを見ながら俺は考え込む。

はて、このFランドのお化け屋敷とはそこまでやばいものなのだろうか。

あいにくとCMで見たことがあるのがジェットコースターなどの絶叫マシン系だけだったりするのであんまりわからない。

ただお化け屋敷好きだから行ってみたいんだけどなあ……

「ううっ……だつ大丈夫よ、この堕天使ヨハネにとって幽霊など恐るるに足らぬ幻影

……我が伴侶ルシファアの願いをかなえることに怖れなどないわ!」

「戦慄っておっそろしい名前付いてんだなこのお化け屋敷」

「無視しないでよっ!」

めっちゃヨッコの顔が青ざめていて震えているのだが、まだ挑んでもないところ。

途中でリタイアもできるし、無理はさせないようにはしたいとも思っている。

幸いヨッコは絶叫くらいで済む子だ、これがダイヤだったら走って逃走して迷ってな
んて目に合いそうなこと間違いない。

ほんと来てくれたのがヨッコで良かったと思ってる。

「かつ感謝されるほどでもないわ……行きましよう、襲い来る亡霊なんてこのヨハネが操る漆黒の炎で——」

「あ、大人二人で。よし、逝くぞヨッコ！」

「響きがおかしいって言ってるじゃない！ それとヨハネだつてばあ！」

意気揚々と半涙目のヨッコを連れていって、1/3も踏破する前にリタイヤする情けない結果だったのは誰かさんの予想通りだと思う。

言い訳をするならば、このお化け屋敷は俺の想像をはるかに超える恐怖だったことだ。

ヨッコがへたり込んでしまつて、それを支えるために頑張つたのだが正直俺のほうもへたり込みたくて仕方がなかった。

寝る前に恐怖感がやばくて明かりをつけっぱなしで寝たのは内緒にしたい。

「こっ怖かったけど……かつ、彼が抱きしめてくれて……少し落ち着いたかも……こういうのなんていうんだったかしら……怪我の功名？」

翌日、今はまたもや静岡市側へと向かう電車の中。

あまり眠れなかった俺は隠せないほど大きなあくびをしてみました。

「すごいあくび。話は聞いたよ、お化け屋敷すごく怖かったんだって？」

「ああ……ヨッココより……俺がビビってたかも……」

「それで眠れなかったんだね」

『見栄を張るところは昔つからだね』と俺の隣で笑うのは幼馴染の一人でもある【渡辺わたなべ曜よう】。

定期船の船長が親父さんで、海が大好きな水泳少女。

一時期梨子のことで千歌とギクシヤクしてたこともあるが、今はもうそんなの関係なしに仲がいいみたいだ。

そんな彼女が自身の太ももを数度叩く。

なんの合図か一瞬戸惑った俺の頭を直後グツと引き寄せてくるからに、きつとこれは

膝枕なんだろう。

頭だけはしっかり動いているが眠気でボーっとしてた分抵抗もできず、なすすべなく曜に体を預けてしまう。

「じゃあ少し寝ていよつか。折角鈍行列車使ってるんだし、時間はたくさんあるよ」

「ん……ん。ごめん」

「いいよいいよ。寧ろ今我慢して起きちゃって後で寝られる方が嫌だもん」

そっか。という言葉も出せないくらい口が重く感じる。

どうやら思った以上に眠気はマツハらしい。

ありがたく膝を借りて、しばし眠ることにしようと思う……

そんなこんなで静岡についた俺たち二人。

実は今日の目的はショッピングではない、SLに乗るためにここに来たのだ。

どうやら曜の父さんが常連の人からSL乗車の優先チケットだかをもたらしたらしく、使用期限が近かったということもあって曜に譲渡、俺と一緒に乗ってくるように勧められたらしい。

普段は船ばかりに乗っている曜は、こうしてSLに乗るどころか見るのも初めてらしく、珍しいものを見たとばかりに目を輝かせている。

乗車時間まではまだまだ余裕がある、少しゆっくりと眺めていても問題はないだろう。

そうして乗車した俺たち、昼ご飯もまだだということとで駅弁も購入してあるので何も問題は無い。

「わあー！ 景色がきれい！」

「内浦の景色とはまた違うものが視れるなあ……」

「こっちにもこんな列車があればいいのになあ……あ、でも船の方が私は好きだよ！」
「何に張り合ってたんだか、全く」

曜のはしやぎように苦笑しつつ、俺も窓の外を眺める。

いや、しかし本当にいい景色だ。

走る列車に流れていく緑と青と白の風景は美しい以外の言葉が出てこない。

そんないい気分で駅弁を開けようとしたその時――

「うわあ、つり橋の下を走るんだね！ 見て見て、つり橋の下に線路！」

「つり橋……？ つり橋……デート……食事……うつ、頭が……！」

「ちよつと、頭を抑えてどうしたの？ ……つて、ああ、ダイヤさんとの日がまだトラウマなんだね……」

身体が震えて、いうことを聞いてくれない。

よつほどなトラウマによる体の異常ははつり橋の下を走り過ぎてから少しの間続いた。

「あつ見て見て！ あの橋の方！」

「今度はなんだ？ ……なんだあの集団、自転車？」

「すごいよ！ SLの横を走って追い抜こうとしてるんだね！」

なんかアイドルっぽいんだが芋っぽさそうな感じのある五人と、どう見てもアスリートにしか見えない人の合わせて六人が自転車にまたがって橋の脇に待機していたかと思えば。

突如SLが橋を渡り始めたたとたんにその内の一人が追従するかのように自転車を走

らせる。

カメラがあることから見てこれはテレビの撮影だろうか、一体何の企画の撮影なんだ、ドラマだとかそういうのにはとてもじゃないが見えないし。

あ、結局追いつけなかったぞあの人。

「私ねあの人たち見たことあるんだ」

「えっ、どこで!?!」

「三津海水浴場。なんかね、『自転車で海のどこまで走れるか』とかいう看板掲げて、海の上を自転車で走ってたよ」

自転車で海の上を走る!?! いや、今のご時世プラスチック板とかそういうのを浮かべてやることはできるとは聞いた。

だから不可能ではないのだろう、しかしそれを曜が視かけていたとは……

「すぐくずぶぬれだったけど楽しそうだったよ。変な人たちだなあって思ってたけど」

「正直その認識と警戒は正しいと思うぞ。後で調べてみるかな、ご当地アイドルとかこういうことやってそうだし」

「案外大物アイドルかもしれないけどね」

「まさかあ……でもどつかで見たことあるのは確かだからあり得ないとは言い切れないのか……？」

その後、帰った俺たちが先ほどのアイドルっぽい人たちを調べてみると、大物も大物。最近ではアイドルと言うよりもバラエティや農家の仕事を多く行っていることで話題の超大手事務所排出アイドルユニットだった。

意外な瞬間に立ち会ったと二人して顔を見合わせてアホ面したのはまた別の話。

「寝顔可愛かったなあ、ふふっ、船以外に乗って景色を眺めるのも楽しかったから、また行きたいなあ」

一日一人のデート作戦もいよいよより返し。

俺は今日のお相手に連れられて伊豆の高級温泉に訪れていた。

結局は一庶民に過ぎない俺からすればこういうところにはかなり緊張を感じてしま

うのだが、折角来たのだし楽しんでみたいところでもある。

「ジャーン！ 今日のはあ、これまでのDateでお疲れなDarlingにマリーがServiceしてあげちゃう！」

「おお、なるほど、それで温泉宿かあ」

「もちろんここは小原グループの旅館だからMoneyにも気を使わなくていいの！」
「わーすごいなあ小原グループ……」

本日のお相手は【小原鞠莉^{おはらまり}】ことマリー。

日本全国どころか世界の一部都市にまで展開しているホテル&旅館のチェーンカンパニーである小原グループ（鞠莉曰く）、その一人娘である。

カンパニーの正式名称は確かもつと複雑だったはずだが、マリー曰く『複雑だと覚えるのがDifficultyでしょ？』となつてAoursの中では小原グループという名義で定着している。

「Darlingとの時間は本当ならOne Nightほしかつただけどお……Rulerだものね、仕方がないから夜になつたらへりで送っていく話になつていの！」

「わざわざありがとう、ならば、また別の機会にでも行こうよ。今度は泊りありでさ」
「次のデートのお誘い？ とつても *Attractive* じゃない！」

ワイワイとはしゃぐマリリーに微笑まじさを感じながら、二人で食事処へと出る。

ここ数日いろんなものを食べているが、梨子とヨッコ以外の三人には奢られてばかりで、なんとというか情けなさがマツハ。

今日も例にもれず、お高めの食事処でマリリーに良い値段のイセエビ料理を奢ってもらうことになった……

「なあマリリー」

「んー *Delicious!* …… *Darling* は食べないの？」

「いや、いただくよ。だけどさ……ここ数日ずっと奢ってもらいつばなしでどうなのかなあ……」

イセエビをほおばりながら、マリリーはプクーと不機嫌をあらわにする。

器用だな、そして頬が柔らかそうだなあ。

「もう、変なことばっかりにDeliccateなんだから」

「変なことつていうけどさ……なんというか気になるんだよね」

「私たちは普段Darlingにいろんなものをもらっているんだから、これくらいのPresentなんて当たり前なの！」

『だからそんなSmallerな悩みはどこかにポイ！』と彼女に窘められ、食べることを勧められる。

腑に墜ちないところもなくはないが、彼女達からすればお金よりも大事なものをもらっているらしいし、彼女たち自身が気にするなど言っているのだ、納得してやるのがいいのだろう。

しかし、イセエビとか初めて食べたと思うんだが、なんというか、あまりわかんないけどおいしい。

「フツツ、Happyな顔をしてる。そんなに気にいったのかしら？」

「美味しいはジャステイス、なんか悩みがどうでもよくなった」

「そうね、DeliciousなDishはJusticeよね！」

美味しい昼食に舌鼓を打ち、しばしマリーと二人で伊豆観光と称して歩き回った後、本題の温泉宿ならでわな露天風呂へ。

流石に混浴することはないのか、マリーは俺に先に入浴することを促した。

……いや、まあ俺もマリーもまだ清い体だからなあ。

健全なおつきあいであるべきだよな、残念とは思ってないぞ、ほんとだぞ。

「ああああ……いい湯だあ……」

貸切風呂ということもあって少し小ぢんまりとはしているが、ここから見える景色はやはり絶景。

少し日が暮れているだけあって夕陽に照らされた水辺は輝いていて、内浦でも、静岡でも見られなかった絶景に心を奪われそうになる。

いや、ほんと綺麗。超綺麗なんですよこれ。

「すっかり脱力しちゃってえ、ここの温泉がそんなに気に行ったのね!」
「!?!?!」

いつの間にかマリーが温泉に入ってきていた。

なんということだろう、普段なら誰かが後ろに来たときには気付いたというのに、温泉が気持ちよすぎて全く勘が働かなかったぞ。

「ねえDarling、アナタの背中洗ってあげるわ」

「えっと、マリー、とりあえず一つ確認してもいい？」

「?……クスツ、No problem! ちゃんとBeachwearは着ているから!」

「そっか、じゃあ……お願いしようかな」

マリーの言葉に安心し、湯船の中でタオルを腰に巻いて、彼女の用意した椅子に座る。マリーの方へと視線を向けると、彼女は確かに水着を着ていて、白い純白な、いたずらっ子とかのようで実は一番純粋なマリーらしい、そんな彼女の魅力を最大限に見せるビキニだ。

俺はほっと一息ついて背中を伸ばし、彼女が洗いやすいように体の位置を整えた。

——いや、待って。

「ねえマリー」

「もう、EgoisticなDarling、今度は何？」

「俺ちよつと脱衣所に戻っていい？ 俺バスタオル一枚だからすごく恥ずかしいんだけど」

彼女とは言え女子の前でバスタオルすらないとか恥ずかしさがマツハ過ぎてマリーの顔が視れない。

誰か俺の為に水着のズボンを恵んでくれないだろうか……？

「だからNo problemよ！ マリーは寧ろAll OK！」

「ゴメンネ！ 俺にとってはオールノットオーケーなんだなあこれが！」

こちとら君を含めた九人と未だ清い関係だから今踏み出すわけにはいかんのぞ！

そうだ、般若心経を唱えよう。マルから教えてもらった仏法魂で煮立ち始めた欲望を鎮めるのじゃ！

「もう、そんなに抵抗するならマリーにだってIdeaがあるんだからねっ！」

彼女の声に一拍遅れ、俺の背中に衝撃が走る。

——マリーに抱き着かれたんだ。

「うわっふ!?!」

「フフフ……Darlingが細かいことを気にならなくなるほどギューつてハグしてあげちゃう!」

「アワワワワワ」

柔らかいスベスベなものが背中にミツチリイイ!

あれ、さてよ、このままもう思考をほうきはじめていいのではないだろうか、そうすればながれにみをまかせて……

「だ……Darling? 鼻血、鼻血!」

「あ……う」

「キヤー! Darlingが倒れたあ! Medic、Medic!!」

その後、目を覚ますと既にそこはヘリの中で、マリーは隣でスヤスヤと眠っていた。どうやら俺はマリーと混浴中、背中を流してもらう直前のあの瞬間で気絶してしまっただけらしい。

免疫なさすぎでしょ俺……でもいいのか？　これがオチとしては最上の結果なのでは？

……いや、惜しいことをしたなあ。

……うん、マリーの胸、背中では感じなかったけど、すごく柔らかかったです。

「Darlingってば、本当にChickenなんだから……うう、折角マリーがあそこまでServiceしたのに……」

「鎌倉と言えはお寺、マルらしいチョイスだなあ」

「えつと……オラ、今まで興味があつたのに行けなかったから……先輩も歴史が好きなので……その、ダメですか？」

「ダメなもんか、鎌倉って確かに一回くらい行ってみて良かったからさ」

俺が今日訪れたのは神奈川県鎌倉。

言わずと知れた高名な神社仏閣が多く揃っている都市。

鎌倉幕府は聞いたことがあるだろう、そこだ。

そんな場所をデート地に残るのは「くにきだはなまる国木田花丸」。

地元のお寺のご住職、その御孫さんである。

本が好きで、偉人伝だとか、歴史書にも興味が強い子だから、鎌倉に来たのだろう。

「それじゃあ、どこからまわろっか」

「すぐそこに円覚寺があるすら、そこから明月院に行って、鎌倉五山の第一位建長寺をまわらずら」

「おお、円覚寺と建長寺は有名な場所だっけ、前に鎌倉について調べた時にも名前出たっけなあ」

円覚寺と建長寺と言えば鎌倉時代の文化について調べると大体名前が出てくる。

文化というよりも、それに関係した建築物紹介のところだけだ。

マルも鎌倉初体験だし、王道の場所をめぐるルートを選んだのだろうか。

「その後で東慶寺、浄智寺、鶴岡八幡宮をまわるつもりすら。お昼は……えっと、未定……かな」

「じゃあ、歩きながらで良い頃合いになったら見つけたところに入ろうか」

「そうしましょう！ エへへ、憧れの鎌倉に先輩と来れるなんて夢みたいすらあ……」

幸せで頬がゆるゆるなマルを見てみると、幸せを通り越して悟りを得られそうな領域に自分が向かいつつあることを知る。

マルの幸せそうな顔は天使、間違いない、これは世界の心理だ、素晴らしい。

「あああ……もう、なんともいえないすらあ……」

「ああ……なんか、なんか圧倒される……まだ入り口だつて言うのに……」

「先輩ももう立派な信徒すら……この素晴らしさがわかるなんて、やっぱり一緒に来てよかつたすらあ！」

「ああマル、泣かないで落ち着いて深呼吸しよう、まだ入り口だから、せめて中に入つてから泣いてほしいなあ！」

そうして盛り上がり、二人で土産屋や小さな景色に寄り道をしつつも、鎌倉仏閣巡りデートを続けているとお腹がすく。

まあ歩いているし、健康的だから当然のことか。

「鎌倉っ、マジエンジエー！」

「……どうしたのその歌？」

「鎌倉に行くって言ったら千歌ちゃんに教えてくれた歌ずら」

「あいつ何教えてんだ……？」

千歌の教えるもんは相変わらずよくわからんなど思いつつ、お昼を探し始めた俺達。偶然すぐ近くにあったので、いかにも老舗な感じのお蕎麦屋さんで一服することに。美味しい笹蕎麦に舌鼓をうっていると、店員らしきお婆さんに突如話しかけられた。

「その若いお二人さんは学生さんかい？」

「ええ、はい」

「あたしと旦那の若いときみたいに仲睦まじいわねえ」

「えつと……その……ありがとうございます……？」

突如若い頃について語りだすお婆さん。

はてさて、俺たち二人はそこまで仲睦まじくイチャイチャしているように見えるのだろうか。

いや、確かに否定できなさそうな感じではあることに間違いはない。

幸せですって感じのオーラを振りまいているんじゃないかって自分でも少し気になつてたところだ。

まあ実際幸せなのだから間違つてはいない、けど周りは黄にしている様子無かつたしきつとこれはわかる人にはわかるオーラなのかもしれない。

お婆さんのお相手はマルの方が上手なために、最初の生返事以外は全部マルが話し相手になつている。

普段から祖父であるご住職や、近所のお爺さんお婆さんたちと混ざつてゲートボールをすることとかもあるマルだからこそ、お婆さんとの会話はとてもスムーズだ。

これがマルの魅力の一つであり、マルにしかない魅力でもあると、俺は思っている。

「……あらあら、ごめんなさいねえ、お嬢ちゃんが聞き上手なもんで、つつい話し込んでしまったよ」

「いえいえ、マルも色々なお話を聞けて楽しかったので！」

「彼氏とのでえと邪魔して悪いねえ、お詫びに代金半額したげるから、また来てちょうだいね」

「……ありがとうございます、御座います」

また鎌倉に来る理由ができたなど、店を出た後マルと二人で笑う。

美味しい料理と人情味溢れる店員さんに触れた今日のデートは、ここ数日ドタバタとしていた俺にとってもほっこりと和む、そんな日だった。

「次はオラと先輩とルビィちゃんと三人で……でもでも、やっぱり先輩と二人だけで来るのも捨てがたいはず……うう、なやむずらあ……」

「メイド喫茶に行こう！」

「いや、どこのだよ」

マルと鎌倉へ行った翌日。

朝早く、それも始発電車もまだ動いていない時間に押しかけてきた千歌はそうだった。

幸いにもこの町の朝は早く、港などに出向く人も多いために近所迷惑になる確率はかなり低い。

だとしても早すぎないだろうか。

前日に連絡が来なかつたらきつと怒ること間違いなし。

ちなみにだが、前にもこんな時間に千歌がきたことあるので、梨子にそれを話したところ苦笑いで『ご愁傷さま……?』と同情されたのはまた別の話だ。

「メイド喫茶と言ったら一つしかないよ!」

「……もしかして、秋葉原か?」

「そうだよ! 東京の秋葉原! 梨子ちゃんの前に通っていた音ノ木坂があるところ!」

……なるほど、どうやら千歌は、憧れのμ'sの聖地へと行きたいようだ。

あのグループの聖地で且つメイド喫茶とは……

「【ことりちゃん】がいたって言われているあのメイド喫茶だよ！」

「……あれって確か都市伝説に近い噂じゃなかったか？」

「それが本当だったんだよ！ それが発覚してから、そのメイド喫茶は整理券がないと入場できないんだって」

μsの一人、【南ことり】がバイトしていたと噂だったメイド喫茶で間違いない様だった。

とうるかマジかよ、整理券が配布型って場合、今から行かないとソレもらえなさそうなんだけど……

もしかして千歌がこんな時間に来たのは整理券がほしいからか……？

「えつと……えーとね……そうだね！ うん、そうだね！」

「おい、今完全に視線が泳いでただろう。正直に言ってみ」

「あんまり考えていませんでした！」

よーしお仕置きだ。

千歌のこめかみをぐりぐりと拳で押してやると『ギャー!』と悲鳴を上げる。

まあ、何も考えていないってことは俺に会いたいが為にここまで速く起きたのだろうから、許してやることもやぶさかではない。

千歌を弄るのもほどほどにし、ベッドから降りて、彼女を部屋の外へ追いやる。

「着替えるから外に出てろ」

「えー、別に知らない仲じゃないから隠さなくていいよ?」

「そういうことを女の子が言わない」

言葉に反してすんなりと部屋を出る千歌。

扉を閉め、さっさと着替え、荷物をもってリビングへ出る。

財布の中身ももちろん確認した。

ここ九日にわたるデートの為に小遣いなどもろもろを前借したことで財布も分厚いのだが、実は梨子とヨッコの時以外俺がお金を使うことが一切なくほとんど減っていない。

……俺の彼女にそれなりの金持ちが多すぎて困る。

「あ、そういえば朝ごはんどうする？」

「あー、俺は別に何でもいいが……確かまだご飯が残ってる、お茶づけとかでもするかな？」

「わーい！　じゃあチカは鮭茶漬け！」

「はいはい、少し待ってろ待ってろ」

そうして茶漬けをかつこむと丁度良い頃合い。

始発電車に乗り込める時間なので千歌を連れていざ東京。

スマホの便利さの恩恵にあずかりつつ、三時間かけて東京秋葉原へと到着した。

「わあー！　すごいね、ここがあのかのμsの本拠地！」

「おい、そこライバル校とか言われているUTX学院の前だぞ」

「違うよそうじゃないよ、ここが聖地！　憧れの聖地なんだよ！　ハッ！　そうだ、ここに来た証拠としてこの辺にA q o u r sの旗を設置しよう！　ちなみに今のは聖地と設置をかけてみたよ！　旗とかないけどね！」

旗持ってきてきたらすぐさま止めてるところだから持つて無くてよかったわ。

とりあえず喧しいから少し静かにしなさい。
今何時だと思っているのでしょうかこの娘は、朝の九時ですよ。

「あつ……えへへ、ごめんなさい」

「それと、先の目的は整理券だろ？早くいかないと」

「そうだった、売り切れる前に急げー！」

なんとか整理券を獲得した俺たち。

時間は昼間少し過ぎたあたり、だいたいおやつ前だ。

まだまだ時間があるし、折角だということで音ノ木坂学院の前と、あのμ□sの一人【東條希】が巫女をしていたという話がある神田明神へと寄ってみることに。

今日は世間的にも休日だということがあって人が多いと思っただが、まだ朝早いためかほとんどいない。

そんな神田明神でμ□sの痕跡一つ一つに大喜びする千歌。

元氣いっぱい体力も有り余っているんだろうが、ここではしゃいで帰りに動けなくなる困るものだ。

「そんな柔な体してないよ！」

「そういつて昔からおぶわれたりしてるのはだれでしょうねー」

「うぐつ……きをつけます……」

よろしい。

そうしてしばし神田明神を堪能した後、UTX学院スクールアイドルである現A—R ISEのライブ映像が流れるというところで、UTX学園前に来てみた。

俺たちがついたときにはすでにライブ映像が流れていた。

いつも千歌に薦められてμsの映像は見ていたのだが、それとは違うグループのライブ映像

……だが、なんだろうか、何かが足りないって感じてしまう。

「ほええ……これが東京の……。実力はおよそ53万といったところかな……！あ、今のは実力と、かの有名な龍の玉を7つ集めるマンガの戦闘力をかけてみたっ！」

「……うーん……」

「……どうしたの？ ツッコミもしてくれないなんて……」

千歌が何かを言っているが、なんとなくでしか耳に入ってこない……

なんだろうか、何かに縛られてるって気がする。

なんか……なんか、楽しそうじゃない。

「おーい！」

「うあつ！ なっなんだよ、驚かせるなって……」

「なんか集中していたから、何だろうって」

「ああ……」

ああ、わかった。

いつも千歌たちAqoursの楽しそうな雰囲気慣れ親しんでいるからか、違和感を感じたんだ。

でも……千歌はμ'sに憧れている。それはもしかしたらこのテレビに映っている人たちのような結末を迎える可能性もあるのだろう。

……やめておこう。折角のデートなんだ、そういうことを考えても仕方がない。

「何でもないさ、俺の気のせいだよ」

「そっか……………ねえ」

「なんだ」

「チカはね、μ×sの穂乃果ちゃんに憧れてるけど、だからといってA q o u r sらしさを失ってまで、μ×sに憧れたくはないよ？」

俺の考えを見透かしたかのように、彼女は俺にそう告げる。

それはこの場では俺にしか届かない、俺にしか通じない言葉で……

……千歌は俺の思っていた以上に強くて、たくましい子だったことを再認識した。

「わあー！ スクールアイドルのグッズがいっぱいだあー！」

「おお…………ルビィとか連れてきたらきつとすごい喜びようだったろうなあ…………」

「これはここ限定のμ sグッズがあるに違いない！ 突撃ー！」

「アツ、ちよつと待ってっ……………まあ、好きにさせてやるか」

あの後、メイド喫茶を体感し、千歌がまた感動でトリップしたりと色々あったが無事に退店。

なんというか、あの噂だけで人気になったわけではなく、元からあの店がすごいのだ

ろうなということも感じさせられた瞬間だった。

そして俺たちは秋葉原にあるスクールアイドルグッズを取りそろえた店へ入る。千歌はμ'sのグッズなどに興味津々だったが、俺の目的はたった一つだけだ。

——Aqoursのグッズはあるのだろうか、ということだ。

「……ないな」

「お客様、どのスクールアイドルグッズをお探しですか？」

「ああ、いえ、お構いなく」

「かしこまりました、ごゆっくりご覧ください」

やはり、まだデビューしたばかりのスクールアイドルだからだろうか……

少し気落ちするが、仕方がないことかもしれない。より一層、宣伝にも力を入れなければな……

そう強く気合いを入れ、店を出て、そこで千歌と落ち合おうと思った矢先——
あった、あったのだ。Aqoursのグッズスペースがほんのちよつとだけ。

九人がスクールアイドルとして活動している証明がそこにあったのだ。

「君、A q o u r s のファンなの？」

「あ、え？」

「ああ、ごめんね、えらく熱心な目でグッズを見ているからさ、つつい同志かと思ってしまった」

グッズを見ている俺に、一人の男性が話しかけてきた。

同志、という言葉から見て、この人はA q o u r s のファンなんだろう……

「ええ、まあ。最近スクールアイドルに興味持って、そこで知ったので」

「そっかあ……ああ、僕はね、あのμ s を結成時から応援してたんだ」

「はあ……？」

「うん、いきなりでごめんね。それでさ、μ s が解散前に無名だったスクールアイドルたちを集めて一つのステージをしたんだけど、知ってる？」

知ってるも何も、千歌がそれについて語ってたこともあるからわかる。

千歌はたびたび、μ s に感銘を受けたその時から俺たちに語ってたんだし。

Y e s の意味を込めて軽くうなずくと、男性は微笑み語り続けた。

——この人、笑顔がめっちゃイケメンなだけだ。

「その時に、僕は衝撃を受けたんだ。初めてμ'sと、当時絶対王者としても話題だったA—RISE以外のスクールアイドルをしっかりとみて、輝かしく感じたんだ」

「なるほど……」

「それでね、あの時のような衝撃を、久々に僕は感じたんだ、このAquoursに」

語り続ける彼の顔は幼い子供のように無邪気で、とつても楽しそうで。

「まだうまく語れるほどの言葉を持ち合わせていないけど、きっとこの子たちは大きくなる。輝きが確かにあるって、僕はそう思った。だから、この子たちのファンになったんだ」

「……ありがとうございます」

「……？　なんで君が感謝するかはわからないけど、同志は歓迎するよ。一緒に彼女たちを応援しよう！」

ああ、見てくれる人はいたんだ。

嬉しい。嬉しい。

俺のことじゃないのに、実際に歌ってるのは、踊ってるのは彼女達だったのに。まるで自分のことの様に涙が出て来そうになる。

「ああ、ごめんね！ 僕行かなきゃいけないところがあつたんだ！ それじゃあね、また会おう同志よ！」

嵐のような人だった。

でも、幸いだったかもしれない。情けない顔を見せなくて済んだのだから。急ぎ足で店の外に出て、千歌にメールを送る。

——さて、千歌が出てくるまでに少しでも情けない顔を引き締めないとな。

そう決意して見上げた空は、ついさっきまでと打って変わって、雲一つない澄みわたるような空だった。

「ムッズのグッズとかいろいろ買えてよかったあ……あとは、彼がチカたち以上に悩んでるんだから、もつと頑張っていけないと！ 高海千歌、ファイトだよっ！ チカも頑張るチカ！なんちって〜！」

千歌との秋葉原デートから帰ってきたその夜。

俺のトークアプリに一件のメッセージが送られてきた。

送り主はカナこと【松浦果南^{まつうらかなん}】。

海が好きで、ダイビングショップを営むお爺さんと一緒に暮らしていて、暇があればだいたい海に潜っている感じの人。

彼女は俺と曜、そして千歌の幼馴染で、A q o u r s の中でも苦労人のような存在。

そして、皆のお姉さんみたいな立場なので、困った時にはカナに相談したりするのがデフォルトみたいなどころがある。

……最近の時折胃薬を持っているところも見えるから気遣ってやらねばならんのだが……

そんな彼女はこのデート企画の最終番手。

内容もきつと明日の待ち合わせについてだろうと思ひ、画面を見たところ……

『明日は好きな時間まで寝ていいよ（*▽』

『あ、でも夕方まで寝てるのは勘弁してね（――〴〵）』

『じゃ、また明日ねノシ』

「……んー、デート……するんだよね？」

肝心の待ち合わせ場所については何も書いていない。

いや、そりゃあそうか。俺が起きる時間については不透明。

好きに寝てていいと言ったが場所を指定してしまった場合、実質的な時間指定となる可能性もある。

昔幼馴染三人でカナのサブライズバスデーをやるうとして、実は気付いてたけど気付かないふりに徹していたほど、勘がいい彼女のことだ。そこまで考えていたのだから。

「ん……まあ、カナの気遣いにありがたく乗っておこうかな」

正直ここ数日、内浦の外に出ることしかないので疲れているのは否めない。

今日とかは千歌が早朝から家に来ていて少し寝足りないし。

はつきり言つてカナの気遣いは心に優しい。

ゆつくり寝よう、起きてからカナに連絡を取ればいいや……

「……………ん、ああ……………何時だ……………」

目を覚ますと空は既に日が昇っていた。

いや、当然だろう。昨日の千歌がやってきた時間の時点で既にうつつすら明るかった。

まあ、とりあえず昼前だろうとは思う。なぜなら、俺の部屋に西日が当たらないようになっているから。

まあそんなことはいい。目が覚めたのだ、とりあえずリビングまで行き、食事の確認をしなければ……

カナからの連絡はないし、もうお昼時っぽいし、昼飯を取らねばならない。

「あ、思ったより早く起きたね。と言うよりも二度寝からようやくお目覚めって言ったほうがいいかな？」

「……………なんでいるんだ」

「やだなあ、今日は私の番だよ？ それとも、昔からお互いの家に通ってた私がいることが、そんなにおかしいの？」

違う、そうじゃない。

色々と驚きで頭が回ってないんだ。

と言うか二度寝って何だ、二度寝してたのか俺。

「してたよー？ 一回起きてトイレに行つて、水呑んで部屋に戻つて寝ただけ……
時間は確か八時だったかな」

「俺記憶がないくらい寝ぼけてたのか……てかカナもそんな時間に来てたなら起こして
よかつたのに」

「それじゃあ昨日送ったメッセージの意味ないでしょ？ 私も最初からこのつもりだつ
たからいいの。お昼はどう？ お爺ちゃんからおすそ分けて魚もあるから海鮮丼とか
でもする？」

「あー……じゃあ、おねがい」

「任せて、活きの良い子が取れたらしいから気合い入れて捌いちゃうよ」

カナの調理をテーブルに座つて待つように言われたのでテレビでも戯れに点けてみ
る。

テレビでやってるのは偶然にも曜とSLに乗ってた時見かけた超大型アイドルグループのバラエティだった。

自転車の蛇行だけでどこまで走れるのかって企画をやってたが……よくもまあアイドルがこういうことをやるもんだなあ。

「出来たよー。醤油とわさびはいつもの量でいいよね」

「あ、よろしく」

「はいはい……はいお待たせー」

「おお、いい色だなこの魚……」

「でしよでしよ、お爺ちゃんが『こんなにいいものどれんのは数年ぶりじゃのお！』ってはいやいでんだ」

『召し上がれ』と勧められ、まずは一口……うまい、魚の脂がいい感じに乗ってて、身が引き締まってて旨い。

そんな美味しさに満足している俺をカナはニコニコと眺める。

……はて、カナは食べないのだろうか？

「いやいや、実はもう軽く済ませてるんだよね。だからそれは君だけの分だよ」

「ん、そうか。じゃあ、遠慮なく」

「あ、ご飯粒ついてるよ」

カナはナチュラルに、俺の口元についているらしいご飯粒をキスするように取る。

カナはこういうことを平然と行つて、さらに余裕たつぷりな感じだからちよつとプライドと言うかそんなもんがだんだんと急降下する……

多分 *A q o u r s* のメンバーで『尊敬できる人物を一人だけ挙げるなら』と言われたら間違いなく彼女を推す。それくらいお姉さんなのだ。

「もう、あまり取り乱さないでよ、恥ずかしいからさ」

「どの口がそれを言うか。全然恥ずかしそうじゃないじゃんか」

「ふふ、まあね、好きな人に行っていることが恥ずかしいって、思うことはないよ」

「……ほんとずるいぞカナ」

自然な気持ちでこういうことを言われるとずるい。

顔が熱くなるし、なんかもうカナの顔をまっすぐ見れない。

「……それでさ、今日この後って何かあるのか？」

「んーん、なーんにも。今日のデートはこうしてのーんびり過ごすことだよ？」

「……あれ、いつもやってることは禁止って縛りは？」

「あーあれね、千歌が私の禁止事項は『海』って限定しちゃったからさ、じゃあ海以外なら何でもいいんだねって確認も取ったんだ」

ずるい。さすがカナずるい。

ニタニタと悪だくみをするような笑顔を浮かべるカナは話を続ける。

「君ってばこの八日間ずうつと外に出てたでしょ？」

「まあ、みんなよく考えてくれたなあって思ったよ」

「だから今日はご褒美もかねてかな。ゆっくり休んで、明日からも頑張る？」

……やはりカナには敵わない。

俺自身はあまり疲れている感じはしていないのだが、カナから見て今の俺はだいぶ疲れたようにも感じるのだろう。

まあ、八日間連続でひっきりなしに外へ出続けている相手にはそういう印象も抱くものだ。

きつと俺が逆の立場でもそう感じるだろう。

「あとね、私こうやって二人きりで君と過ごしたかったんだ。いつもだったら千歌も曜もいるから、二人きりっていう機会も少ないしね」

「カナ……」

「夫婦みたい。私たちが結婚したらこんな生活っていうのもよさそうだね」

仕事に疲れた俺をカナが癒してくれる生活か……すごくいいぞ。

カナが出迎えてくれて『ご飯にする？ それともお風呂？』とか言ってくれる日々

……

「なーにを想像しているんだか。でも、そんな生活もいいでしょ？」

「はい、いいと思います！」

「即答されるとちよつと照れるね……」

そしてカナの目的通り、彼女と一緒に掃除洗濯の家事を行い、ゆったり過ごした。そして時刻も夕方、そろそろ陽が沈み始める頃合いになると、カナが突如身支度を整え始めた。

「ほーら、行こう?」

「えっ何処に」

「いつも通りの恰好で大丈夫、懐かしいところだから」

懐かしいところ……きつと俺たち四人の思い出の場所。

たくさん思い出のある内浦の地、彼女はそこからどこに行くというのだろうか。期待に胸を膨らませ、外出の準備を整え、カナと共に家を出る。

家を出て向かったのは山側。

しばし歩いて、着いたのは内浦の景色が見渡せる一番高いスポットだった。

「懐かしいよね」

「そうだなあ、昔はよくここに登ってたよな。千歌が」

「そうだね、いつも登ってたよね。千歌が」

二人で顔を見合わせてクスクスと笑う。

俺たちの間では千歌がいつも何かの起点だったし、今でもそれは変わっていない。

だからこそ俺たちの思い出にはいつも千歌がいる。

……カナの言う通り、俺達が二人きりで思い出を作るってことは、確かに珍しいのかも。

「ねえ、昔の約束覚えてるかな？」

「……でした約束か？……いくつかあったな」

「ふふつ、そういえばそうだったっけ。私は一つしか覚えてなかったなあ」

確か、『ずっと一緒』とか子供らしい約束ばかりだったけど……

頬をかきながらカナに告げると、彼女は少し頬を膨らませる。

「もう、私はすっかり覚えているのに。『皆君のお嫁さんだよ』って」

「……あつ！ それした！ その約束した！」

「まったく……ちよつとくらいロマンチックにさせてほしかったなあ」

俺たちがしたその約束。

幼い頃男女で仲がいいとたまーにある『大きくなったら〇〇と結婚する!』的な約束。

この場所で、千歌と曜とカナは俺とそう約束した。

ただ……

「あの時は大変だったなあ」

「そうだね、私もだけど、三人とも譲らなかつたし」

『私が彼のお嫁さんになるの!』

きっかけは三人が引き合わない大喧嘩、あの時が多分、一番俺たちの関係が壊れる危機だったかもしれない。

俺が止めようにも止められず、『君は黙つてて!』と有無を言わずに争いが激化したあの時。

「あんどきはほんとやばかつた。いつ殴りあいしてもおかしくなかつたし」

「君が突き飛ばされてなかつたらきつと本当に殴りあいしてたとは思うけどね……」

喧嘩の結末は、俺が三人の間に割って入り、三人が俺を『邪魔!』と言つて突き飛ばしたこと。

派手に飛ばされた俺をみて正気に戻ったのか、三人はおろおろとしてたっけなあ。

「あの時『みんな仲良く!』つて君が泣きながら言わなかったらどうなつてたんだろね」「なんでそこまで覚えてんだよ、恥ずかしいじゃん」

「あの時だよ? 私たちが君を共有しようつて、君に共有されようつて話になったのは」

——俺は泣いて、怒つて、三人にこういった。

『みんな仲良くしろっ! 喧嘩するならお嫁さんとかいらぬ!』

ここまでだったらまだ三人が謝つて仲直りするだけで終わるだろう。

だが、子供の頃の俺は何をどうしたのか、こんなことを続けた。

『いつそのこと、俺が全員結婚してやる!』

「君のおかげで、A q o u r s のみんなが君を好きになつても困らなかつた」

「……なあ、カナ、もしかしてこの俺たち九人の関係つて……」

「そ、君があの時叫んだ【約束】。アレがあるから、私たちはこうして仲良くなったんだよっ。」

千歌が最初に言い出したこの九人の関係。

彼女はあまり喧嘩とか嫌うから、そういう理由でみんな仲良くなつてほしいという感じだったのだろう——とずっと思ってた。

なるほど、そっか、千歌は、曜は、カナは、俺との約束をずっと覚えていたのか……

「でもまさか、私たち三人どころかあの男性恐怖症なルビィどころか堅物なダイヤまで落とすっちゃうなんてねえ」

「いや……あの、カナ、ちよつと怒ってない？」

「べつつにいい、今回のデート企画が君とゆつくりすごせる時間がそろそろ欲しいなつて思ってたから、千歌にそそのかしたわけじゃあないよっ？」

笑顔の確信犯ここに極まる。

つまり俺が幼馴染の君達にかまつてあげる時間が減ったからやきもきしてたわけですね！

それと俺が節操なしに見られてますね！ いや状況的に否定できないんだけど！

「……まあ、でも、君を巡ってぎくしゃくするより、こうやって仲良くできてる方が私は好きだな」

「そうだな、俺も喧嘩してるより仲がいいほうが好きだ」

「だからありがとう。今日ここに連れてきたのは、それは言いたかったから」

夕陽に照らされたカナの顔は、珍しく赤く、紅くなっていた。

「さて、それじゃあデートの最後に……と」

「おい、カナ、どうして俺の腕を縛るんだ？」

「どうしてって……まだ私の独占時間は終わっていないでしょ？」

家に帰った俺を待っていたのはカナからの唐突の拘束。

キョトンとした表情をしながら俺の腕を巧みに縛っていくカナ。

いや、お爺さん心配しない？ 大事な孫娘を幼馴染とは言えども男の家に遅くまでい

させるのは心配しないの？

「大丈夫、お爺ちゃんには『決めてこい』って応援されたから」

「何をどう応援されたのか気になったんだが」

「それはもちろん君とのs——」

「あーあー！ 聞こえなーい！ 俺は何も聞いてなーい！」

カナが俺を寝室に追いやりながらとんでもないことを言つてのける。

と云うか俺の両親は何処だよ、なんでもう夜遅いのに帰つてこないんだよ！

「あ、お義父さんお義母さんからも『責任は取らせる』って言つてもらつたから。まあむしろ私をとる側なんだけど」

「千歌ー！ 曜ー！ っつそのこと誰でもいい、助けてえええ！」

「こーら、騒がないの。大丈夫天井のシミを数えていれば終わるって鞠莉から借りた雑誌にはあつたんだから……ああ、緊張してきたなあ」

「それは絶対俺が言う側！ 今の現状は俺が言われる側——イテッ！」

カナは俺をベッドに付き倒し、一度深く深呼吸をする。

あつ、だめだ、これ詰んだやつだ。

「まあまあ、細かいことは気にしないで……」

「これから起こることはどう見ても細かくないよ、重大だよ！」

「私にとつてもこの瞬間は大事だよ。初めてのキスは千歌に、混浴は曜に譲っちゃったけど、今度こそは譲れないから」

「千歌のほうは言い逃れできないけど曜のほうは弁解させてほしいかなあ！」

混浴と言うより事故だから、偶然の産物だから！

そんな俺の叫びを意に介さずゆっくり、ゆっくりとベッドに歩み寄ってくるカナ。

ああ、マリーとのデートの日ではまだ『清い交際で』とか言っていましたけど、そんな関係では俺たち居られなくなってしまふようです。

「大丈夫、私も……初めてだから」

「あの、震えてるならやっぱやめな——」

……カナの決意には、勝てなかったよ

後日、カナとの事案が千歌を通じてメンバー全員にバレ、一騒動起こったのはまたいつかの話にしたい。

「もうお爺ちゃん！ 『孫はまだか』 って言うけど私まだ高校生だよ！ せめて彼が卒業するまで待ってってば！」

真夏と墮天使

『では、各地のお天気です。まだ7月も始まったばかりですが、非常に暑い日が続いていきますね。特に山梨や静岡などの関東南部あたりでは、観測史上最高の気温を——』
冷蔵庫に住みたい。

最大出力であるはずなのだが、長年使っているオンボロ扇風機から送られてくるのはなんとも頼りない微風。それを正面で受けながら、僕はそんな馬鹿なことを考えていた。

誰か前世で悪いことでもしたのかと思うほどの連日の猛暑。熱中症で担ぎ込まれる人はここ数年でも最多で、「節電なんてとりあえずいいから冷房をつけろ！」と国が言う始末。それっぽい言葉を使うのであれば、「未曾有の暑さ」ってやつになるのかもしれない。

もつとも、日々の生活費をバイト代でどうにかやりくりしている貧乏学生の僕には、エアコンなどというブルジョワな家電とは縁がないわけで、こうして熱風を浴びてどうにか我慢しているという次第だ。

ただ理由も無く垂れ流しているテレビからの音声をなんとなく拾ってみる。この暑

さのおかげで、実に数年ぶりに飲食店の売り上げが上がったらしい。そりゃこんだけ暑かったらビール一杯でも飲みたくなるだろう。僕はまだ未成年なのでお酒は飲めないけど、机の上に置いてあるグラスは、食べたアイスの棒で観葉植物みたいになっている。酷暑のおかげで、冷たいもの意外身体が受け付けないからだ。

「……あつい」

今日何度目になるのかわからない独り言。言つて気温が下がるわけでもないのに、どうしても口を突いて出てしまう。「痛い」とか「眠い」とか「おなかすいた」とか、人はどうしてたまに無意味なことをつぶやいてしまうのだろうか。

にしても、本当に、

「あつい……」

カランと、さつき作ったカフェオレの氷が溶ける。ホットならブラック一択だけど、アイスコーヒーは砂糖と牛乳をこたま入れてキンキンにしたのを飲みたい派だ。甘苦いなんともいえない感覚を楽しみながら、網戸の向こう、雲ひとつ無い紺碧の空をぼんやりと見上げる。

『お出かけの際は十分に注意して、また水分補給をこまめに行い、体調管理はしっかりと行つてくださいね!』

どこまでも続く深い青に、意識が吸い込まれそうになる。

夏、猛暑、青い空

こんな日にこんな景色を見たとき、決まってあの時のことを思い出す。

あの日も今日みたいに晴天で、溶けそうなくらい暑かった。

そして僕は、地上に墮ちた天使に出会った。

『真夏と墮天使』

その日は、僕が今まで経験したことが無いくらいの暑さだった。気持ちとしては、小さい頃親に連れて行ってもらった温泉に併設されていたサウナと同じくらい気分だった。

中学生最後の夏休み、気分転換にと自転車を外へと駆り出したのはいいけれど、海沿いを漕ぎ出して10分で、家を出てきたことを早くも後悔した。Tシャツは汗を吸って、服を着たままプールに入ったかのように。刻一刻と失われる水分と涼しさ欲しさに、僕はどこかに避難しようと考えた。

額の汗を腕で拭いながら、そうして更に漕ぐこと10分あまり、商業施設が集まった建物にどうにかこうにか逃げ込んだ。自動ドアが開くと、心地良い冷気がふわりと迎えてくれた。その大元を辿るかのように、僕は奥へ奥へと吸い込まれていった。

この建物は4階建てになっていて、それぞれの階にあるものが全く違っている。1階は飲食店やセレクトショップが立ち並ぶショッピングエリアだが、2階は丸々駐車場になっていて。週末ともなると家族連れや若者グループでとても盛り上がる場所であるはずなのだが、夏休みであるはずの今日に限ってほとんど誰もいない状態だ。あまりにも暑いので、みんな出歩く気すらなくなってしまっているからだと思う。

この建物へはたまに友達と来る程度なのだが、それは4階のシネコンで映画を観るためだ。買い物に来たわけでもない、映画を観に来たわけでもない。そうして僕は、自然と3階へと脚が向いた。

クレールゲーム、プリクラ、大きなメダルゲーム、賑やかなBGM。俗に言う、「ゲームセンター」と呼ばれている場所だ。

ここも普段はカップルなどで賑わっているはずなのだが、1階同様がらんとしている。筐体から流れて来る音声が無駄に店内に響いている。それらをものめずらしく眺めながら、僕はフロアの奥へと更に足を進めた。

ゲームセンターにはあまり行くほうではない。ゲームが得意というわけでもなく、沢

山遊べるほどお金を持っていくわけでもなく、なんとなく怖そうなイメージがあったからだ。

最新のアーケードゲームの迫力や美しさに目を丸くしながら歩いていた僕は、あるコーナーの一角へと辿り着いた。

和太鼓やギター、ドラムセットを模した筐体。見た目が洗濯機のような筐体。たくさんボタンがついた筐体など、そこにはとても個性的でユニークな形の機械が立ち並んでいる。

これは確か、いわゆる――

「音楽ゲーム、つてやつ?」

体感ゲームとも言われるそのゲーム群は、様々な形はあれど、全てにおいて「リズムに合わせてボタンを叩いたり、デバイスを操作したり、身体を動かしたりする」という軸がメインとなって作られている。

以前友達の家で太鼓を叩くゲームをしたとき、あまりのリズム感の無さに友達に笑われて以来、この手のゲームには若干の苦手意識があった。

箱が積み重なっているような形のゲームの画面を眺めながら、ちよつと面白そうだななんてことを考えていたら――

『――』

前方——今見ている筐体の真後ろから、パチパチと何かを叩くような音が聞こえてきた。

誰かが、今まさにゲームをプレイしている。

「どんな人がやっているのだろう。興味本位で、後ろに回りこんだ。」

先程見ていたゲームよりも、遥かに大きな筐体。側面にはスピーカーがついており、大きな画面の下には放送室の機材のようなつまみが付いている。丁度机くらいの高さから伸びている地面と水平な天板には、鍵盤とターンテーブルのようなお皿が付いていた。それをピアノでも弾くかのように軽快に叩き、画面を一心に見つめていたのは——

僕と同じくらいの年の、とても可愛い女の子だった。

ゴスロリ調、とても言うのだろうか。一昔前の西洋で着られていたかのようなレースが多くあしらわれたワンピース。ごつめのブーツは底がとても厚くて、10センチは身長が増えているんじゃないかと思う。

長い濡れ羽色の髪は頭の左側でシニヨンに結び上げられていて、そこに刺してある黒い羽の髪飾りがとても印象的だ。

あまりにも現実とかけ離れすぎていて、僕は一瞬幻覚か何かでも見ているんじゃない

かという気分になった。

こんな暑い日に、女の子が、ひとりで、こんな格好をして、ゲームセンターにいらだなんて。

彼女の容姿の可憐さもあって、暑さのせいでおかしくなってしまうのかと思っただけだ。

後ろで唾然としている僕のことなど露知らず、女の子は黙々と鍵盤を叩いている。画面の上から山のように降ってくる白と青と赤の棒。それを涼しい顔で、平然と、正確に捌いている。何をしているのか全くわからなかったが、素人目からしてみてもこの女の子がかなり上手いことは明らかだった。

曲が終わり、結果が画面に表示される。僕にはさっぱりわからなかったが、Aが3つ並んでいるあたり、いい結果であることに間違いはないだろう。

女の子は満足げに頷きながら画面を携帯で撮影した後、台から降りてくるりところちらを向いた。

その瞬間、ずっと彼女を見つめていた僕と、ふっと目が合う。

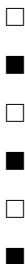
透き通った、マゼンダ色の瞳。

1秒にも満たない時間だったはずだけれど、僕にはその一瞬が、永遠にも引き伸ばされたかのような感覚に襲われた。

女の子は、ふいと僕から視線を逸らし、別の場所へと行ってしまった。僕は彼女の背中を目で追いながら、しばらくそこから動くことができなかった。

真夏のゲームセンターで起きた、刹那の邂逅。

これが、僕と彼女の最初の出会いだった。



その2日後、僕は再びあのゲームセンターへと足を運んでいた。

理由は自分でもよくわからない。単純に暇だったのもあるし、どこか遊びにいこうと思っていたからでもある。

でもそれ以上に――

あの日見たことが本当に幻ではなかったのだと確かめるためだ

――なんて、建前を自分で作ったりしていた。

この間ほどではないにしろ今日もお日様はご機嫌で、その陽気さを惜しむことなく僕らに分け与えてくれている。お願いだから、少しは休んでもらいたいものだ。日本全

国、ダムの水がもうほとんど残っていないらしい。いくらなんでも働きすぎだろう。

そんなことを考えているうちに、例の建物に到着していた。駐輪場に乗り付けて、鍵をかける。こんな暑い日に外出なんて、普通に考えれば進んで行きたくなるようなものではない。でもどういうわけか、その時の僕は妙に気分が高揚していた。

すると3階に上がり、再びあの音楽ゲームが立ち並ぶエリアへとやってきた。果たして――

「……そりゃそうだよね」

誰も居ないコーナーを見ながら、自嘲気味に呟いた。

もしかしたら本当に幻の類だったのかもしれない。

「……………折角だし、1回やってみるか」

ここまでわざわざ足を運んでおいて、何もせずに帰るというのも味気ない。試しに僕も一度やってみることにした。

「……………ここにお金を入れればいいのか」

1Pと2Pとも言うのだろうか、鍵盤の塊が左右に分かれているその中心にコインの投入口がある。僕は財布から硬貨をつまむと、ドキドキしながら放り込んだ。

『』

派手な効果音と共にゲームが始まった。僕は未知なる領域へと足を踏み入れたような心地で、心拍数が段々と上がっていくのがわかる。

チュートリアルと言うらしい、初めて遊ぶ人のための簡単な説明があった後、唐突に画面が切り替わった。実際に選曲して遊んでみるというわけらしい。

しかし――

「知ってる曲が、ひとつもない……」

後になってから知ったことなのだが、このゲームに限って、一般にアーティストやグループ等の曲、いわゆる「著作権」と呼ばれる曲は全く入っていなかったのだ。ゲームを配給している大元の会社の楽曲製作チームが、書き下ろして収録しているらしい。

でも、そんなことを初めてやる僕が知っているはずもなく――

「……………なにこれ」

選曲時間ギリギリで苦し紛れに選んだ曲が、ありえないくらい難しかった。

目で追えない

指が追いつかない
わけがわからない——

『Stage Failed!!』

気が付いたら、曲は既に終わっていた。僕はただ、呆然と画面を見つめたまま動くことができなかった。

地を這ったままのグラフのようなものが、より一層物悲しさを覚えさせる。

……これが本当に楽しいのか？

ものの数分で100円が溶けたことに薄ら寒さを覚えながら、僕は未だに忘我の淵にあつた。

「——何やってるの?」

突然後ろから声をかけられたことにより、ようやく意識が現実を引き戻された。

「次やりたいんだけど、どいてくれない? 連コはルール違反よ」

「……あ、はい。すみませ——」

聞きなれない単語に首をかしげつつ、いそいそと振り返ると、

そこには、一昨日の女の子が立っていた。

「……あら、あなたこないだも確か……」

「あ……」

あまりにも突然すぎる再会に、言葉が詰まる。

「……あなた、もしかして初心者？」

まさかあんな暑い日に自分以外でゲームセンターに行く人が居るとは思わなかったのだろう。どうやら覚えていてくれたらしい彼女が、髪をさらりと揺らして尋ねてきた。

「え!? あ、うん……」

「そうよね。チュートリアルからいきなり灰譜面なんておかしいと思ったもの。」

「……いいわ。私が少し教えてあげる」

謎の単語を口走りながら、目の前の少女がふふんと得意げにポーズを取る。

夢でも見ているのではないだろうか。

先日の幻さんと、どうやら今から一緒にゲームをすることになったらしい。



「ちゃんとカードは作った方がいいわ。これがないと、スコアやデータが保存されないの」

「ここを押しながらお皿回してみて。そうそう。これで、スクロールする速さを変えられるの」

「押す場所と指はある程度固定させた方がいいの。フリーでも出来る人はいるけど、そこはもう才能の世界ね」

「もつと上手になりたい？ そうね……そしたら、この曲なんかがいいと思う。」

……え？ 難しい？ 文句言わないのっ！

「へえ！ アレをクリアできるようになったの!? すごいじゃない！」

まあ、私にはまだまだ遠く及ばないけどね！」

真夏の邂逅から数ヶ月、僕は暇を見つけてはゲームセンターへと足を運んでいた。

遊んでいると、必ずと言っていいほど彼女がいた。勉強は大丈夫なのかと聞いたところ、「成績は優秀である」とのこと、何ともうらやましい限りだ。かく言う僕も人のことを言える立場ではないのだけれど。

もともと何かに熱中するような性格ではなかった僕が、ここまで何かにのめり込むの

は珍しかった。上達していくうちに、段々と楽しくなってきたからかもしれない。

……いや、もつと他に理由があるのかもしれないけど。

そしてこれもゲームを始めてから知ったことではあるのだが、この界限、お互いのことを名前ではなく自分で付けた名前——通称「プレイヤーネーム」と呼ばれる名前で呼び合っているのだ。本名をもじったものをつけている人もいるが、中には数字や記号だけの人もいてかなりめちゃくちゃだったりする。

要は、あだ名しか知らないのだ。

今までそんな文化とは無縁の環境に居た僕にとつてはかなりの衝撃だった。

そして、僕にゲームを教えてくれた女の子——「ヨハネ」もまた、本当の名前を知らずに友達になった。

ちなみに、僕の名前は内緒だ。

本格的に音楽ゲームをやり始めてからわかったことだが、やはり彼女はものすごく上手かった。僕が手も足も出ないような譜面を軽々とやってのけるし、僕が出来る曲のスコアも圧倒的に高い。

「そっちの学校はどう？」

「あ、あんな場所、この人を超越した存在である私には不要よ……ふっ」

プレー待ちの椅子に座り、近況を報告しあう僕とヨハネ。いつしか、僕らは高校生に

なっていた。

お互い受験を乗り越えて、入学式が終わって間もないこのごろ。僕も彼女も、ここへ来るのは結構久々だ。久々と言っても僕らの感覚で間が開いたなと思うだけで、大体一週間くらいなのだが。

何でも彼女は高校デビューを派手に失敗したらしく、学校に行きにくくなってしまっているらしい。

強がってはいるものの、内心はどうしたものかと思っっているに違いない。

「幼馴染だっけ？も同じ学校にいたんでしょ？誰だっけ、あのお寺の……」

「よ、ヨハネが人間だった頃の話はいいのっ！」

手をパタパタさせて抗議するヨハネ。「墮天使」という設定なのだそうだが、これがまたなんともコメントに困るもので、みんなは生温い目で彼女を見守っている。

「あなたの癖に生意気よ！この人を超えた墮天使のヨハネに向かってよくもそんなプライベートなことを軽々しく……」

「まあまあ……」

そのあたりの話題は非常にデリケートであるらしい。何か別のことを話さないと……

「そ、そう言えば前からずっと思ってたんだけど、ヨハネのPN（プレイヤーネーム）っ

て『JOHANE』じゃん？あれってたぶん普通に読むと『ヨハン』なんだけど……」

「——っ、うるさい!!」

「しょうがないじゃない6文字しか入らないんだから！仕様に文句言いなさいよ！」

ヨハネはヨハネなのっ！」

そうなのだ。このゲーム、6文字までしか登録することができないのだ。ヨハネ、と書きたいのであれば本当は「JOHANE」にならなくてはいけないのだ。そこは仕様上仕方なく、彼女の中でもかなり葛藤があつたに違いない。

「——っ、に、人間風情が生意気なのよ！」

何で学業成績は優秀なのにこうなってしまったのだろうか。頭の良さをこじらせるところなってしまうのだろうか。

「と、ところで『ヨハネ』ってさ、どこから取ってきたの？」

ぴくつと、彼女の動きが止まった。

「よ、ヨハネは魂の名前で、由来も何も無くヨハネはヨハ——」

「本当は……」

「本当も嘘もないもん！ヨハネはヨハネなのっ！」

手足をバタバタさせて抗議する様は、まるで子供のようだ。とても同級生には見ええない。

「そ、もしたら、ヨハネのスコアをどれかひとつでも抜いたら教えてくれる？」

「いいじゃない！人間風情が、このヨハネに適うと思つたら大間違いよ！」

よし、言質は取つた。あとは自分との戦いだ。

いつものポーズを取り、ずびしと指を突きつけてくる彼女を見ながら、僕は心の中で静かに闘志を燃やしていた。

それからは、自分に出来る精一杯のことをやった。

動画を見漁つたり、自分が得意な譜面を研究したり、彼女のスコアと近いものはどれかと見比べてみたり、色々と手は尽くしてやった。

経験値には圧倒的な差がある。しかも、僕にはさほどゲームのセンスもない。使えるお金も限られている。そんな中、どうしてここまで必死だったのか、自分でもよくわからない。

ほんと、どうしてこんなにムキになつてるんだろう。

そして、あの約束から2ヶ月程、ようやく運命の日が訪れた。

最初にゲームセンターに足を踏み入れてから実に9ヶ月あまり、長いようで短かつた。

今日僕は、ここで、彼女を超える――

相変わらず、人が少ない音楽ゲームのコーナー。彼女はまだ来ていなかった。

といつても、ヨハネは最近はあまりゲームセンターに来なくなっていた。友達の助けで無事に学校に通えるようになり、部活のようなものに精を出しているのだそう。

でも、最後に会ったとき、今日来られたら行くという話をしていたのでもしかしたら目の前で抜かしてやれるかもしれない。

筐体の前で、大きく深呼吸をする。財布の中のカードをリーダーにかざし、暗証番号を入力してお金を入れる。

曲を選ぶのも、難易度を選ぶのも慣れたものだ。

人生初のプレーを思い出して、自分でも笑ってしまう。

滑らかな手つきで皿を回してカーソルを合わせ、一瞬の間の後ボタンを押した。

――
練習もした。研究もした。イメージもした。

あとは、緊張と自分自身との戦いだ。

このゲームは、今のスコアがどれくらいか、このままのペースだと最後はどのくらいになるのか、プレー中にリアルタイムで表示される。

今の僕のベストスコアは、彼女のそれに肉薄しつつある。中盤の難所を越えれば、僕

の勝ちだ。

曲が始まる。最初は稼ぎどころだ。ここを落としてしまつては後半に取り返すことができない。

リズムカルに、素早く、性格に、鍵盤を叩く。

曲が進むにつれて、画面中央のスコアがゆつくりと上昇していく。自分の中ではまずの出来、だがこのままでは、彼女のベストには追いつけない。

集中しろ、大事なものは――

「(平常心、だ)」

音楽ゲームにおいて最も重要なことは、「心を常に落ち着かせておくこと」だったりする。

良いスコアが出そうになったとき、初めてクリアできそうになったとき、人はわけもなく緊張して力がこもってしまい、実力を発揮することができなくなる。

考えるな。意識するな。落ちてくるものをただ叩け。

普段はあがり症ですぐ跳ねる僕の心臓も、今日は水を打ったように落ち着いていた。無心で指を動かしながら、謎の全能感が身体を支配する。

いける、このままならいける。

だが意識はするな――

中盤の密度が濃い部分をどうにかやり過ぎ、アウトロの部分へと突入する。

グラフの伸びは同じくらい。ここで詰めなければ、もう追いつくことはできない。

追いつけるか？

いや、追うんじゃない。抜くんだ。

いつでも僕の目標だった、彼女から――

『Stage Cleared!!』

Full Combo!!

Target Score+4』

「――っ、っしやあ!!」

生まれて始めて、ゲームでガッツポーズなんてしてしまった。

スコアはほんの僅差で勝った。

そして意識していなかったが、なんと一度のミスもなくクリアしてしまっていた。

ヨハネも、この曲はフルコンボはしていない。

勝った。間違いない。僕の完全勝利だ。

結果画面をしつかりと写真におさめ、意気揚々と待ち椅子に座る。

これを見たら、彼女はどんな顔をするだろうか。

「人間のくせに！」と、悔しそうな顔をするのが目に浮かぶ。音楽ゲームプレイヤーは、自分のスコアが抜かれることを何よりもモチベーションとしているのだ。

そわそわと我ながら落ち着きの無い様子で彼女を待つ。

これでやつとヨハネの由来を知ることができる。

これでまた一步、彼女へと近付ける。

しかし、

いくら待っても、その日彼女がゲームセンターに現れることはなかった。

今日だけではない。

あれから何度も足を運んでも、ヨハネがああ場所に来ることはもうなかったのだ。



「この映画あんまり面白くなかったな……期待していただけに少し残念だったな」
「そうか？俺は結構好きだったけどな。お前は？」

「僕もあんまり……前が良かっただけに残念だったな」

この日、僕は学校の友達と一緒に映画を観に来ていた。賛否両論な映画の感想について意見を交わしながら、ご飯を食べようと吟味中だ。

結局、あの日から僕もゲームセンターにはほとんど行かなくなってしまう。月に一度や二度、時折思い出したかのように足を向ける。今日は映画を観に来たので、この建物には4階に用があり、今はこうして1階のフードコートで料理を待っている。

ここに来ると、思い出すのはやはり彼女のこと。

どうして突然来なくなってしまったのだろうか。

……いや、もともとそんな挨拶をわざわざするような間柄でもなかったということだ。

たかがゲームセンターで知り合っただけのコミュニティ、僕にプライベートの都合を説明する義務がどこにあるだろう。

名前すら知らない希薄な関係、ただそれだけのことだったのだ。

「——い、おい！あれって浦の星じゃね？」

思考の海に沈んでいた僕を、トレイを持った友人が肘で小突いて海底から引き上げる。顎で差した先には、大型のテレビがあった。

地元の数少ない憩いの場としても知られているこのスペースには、フードコートとショッピングの休憩所というふたつの顔がある。モニターにはケーブルテレビが引かれていて、地元の情報が一日中見られるようになっていた。

画面の中では、複数の女の子が映っていた。

服装は全て鮮やかな色で、肌の露出がやや多く、これは服装というよりも衣装と言ったほうが正しいのかもしれない。

これはまるで——

「アイドルみたいだな」

「アイドルみたいじゃなくて、本当にアイドルなんだよ。」

スクールアイドル、知らないの？」

僕が首を横に振ると、友人はやれやれと言った表情で教えてくれた。

「あのなあ……今時スクールアイドルも知らないなんざ、隠居してる世捨て人くらいなものだ。」

「いいか？ スクールアイドルってのはな、その学校独自で結成したグループで、有志によつて——」

申し訳ないが、友人の説明は後半から全く耳に入らなかつた。

『はい、それでは次の方、自己紹介をお願いします！』

『……ふつ、人間諸君、御機嫌よう。』

私はヨハネ。堕天使ヨハネ。

この度は私の美しさ、威光を地上の人間にも知らしめるために地に降り立ったの。

あなたも、私のリトルデーモンにな——』

『はい、1年の津島善子さんでしたー！』

この子達9人が、浦の星女学院スクールアイドル「Aqours」です！

それでは、一曲歌って頂きましょう！』

「よし、言うなあ！ 私はヨハネ！ ヨハネなんだつてばあー！」

「ほら、起きて！起きてっば！」

うわ、汗でドロドロじゃない！アイスの棒は捨ててないわ部屋は散らかってるわ、目を離すとすぐこれなんだから……」

「……うわ、いつのまにか寝てたのか……今何時？」

「18時！もう夕方よ！こんな暑いのによく扇風機だけで寝られるわね……」

「ごめんごめん。んで、何しに来たの？」

「生存確認！連絡しても繋がらないから何かあったんじゃないかって」

「心配してくれたんだ。ありがとう」

「ばっ、別に……」

ほら、夕飯作るからシャワー浴びてきなさい！

「……」緒に入ってくれる？」

「……」それはまた今度ね」

「はは、照れちゃってさ」

「うるさいうるさい！」

さっさと入ってこい！」

「はいはい。」

……あのさ。

「今度、久しぶりにゲームセンター行かない？」

ちっぽけな努力の結晶は、おっきなルビイとなつて

私たちの、学校がなくなる。

そんな決定事項を、職員室前の掲示板の前に立ち、眺める。

自分には関係ないなんて、そう思つていても、行きたくて入学した学校がなくなつてしまふなんて、正直かなり辛いものがあった。

やるせない思いを抱えて、私はひとり教室に戻る。

視線を右、左と交互に移してみると、ワイワイと話している生徒たちが目に入る。こんなに元気な学校なのに、どうして。

その光景のひとつひとつが、私のこの感情に拍車をかける。そんな時だった。

「スクール…アイドル」

私、黒澤ルビイはふとそんなチラシに視線を奪われる。

お昼休み、廊下の掲示板。いろんな人の声が行き交うのに、どうしてだろうか、そのチラシから視線を外すことが出来なかった。

———
スクールアイドルやりませんか？

そう、大きな可愛らしい文字で主張しているポスター。

そもそもスクールアイドルってなんだろう。

まずそんな基本的な疑問が頭に浮かぶ。いままでそんなワードすら聞いたことが無かったから、すごく新鮮な気持ちになったからかもしれない。

それでも、アイドル。細かいことはわからないけど、私はずっと憧れていた、アイドル。

その憧れに、手が届くかもしれない。

そう考えると、その場を動けなかった。

「何見てるの〜？ルビィちゃん」

「わわわわあ!!ま、ま、マルちゃん。。。び、ビックリさせないでよお・・・」

「別にビックリさせるつもりはなかったんだけどなあ」

ひよこつと私の横から顔を出したのは、同じ1年生の国木田花丸ちゃん。すごく可愛くて、愛嬌がある子なんだ。大切なお友達。

いまもこうして積極的に話しかけてくれるし、自分から話しかけるのが苦手な私には、すごくそれが嬉しいの。それだけじゃないんだけどね、マルちゃんの良いところは。

そんなマルちゃんは、何も言わない私のことを変に見つめながら、視線を奥のポスターに移す。

「スクールアイドル？ルビイちゃん、興味あるの？」

「え、えっ！そそそそそんなこと無いよお…！そ、それにい…ルビイには無理だよお…」

「ふふっ。ルビイちゃん嘘つくの、すごく下手だもんね。すぐわかるすら」

「うう…」

簡単に嘘を見抜かれたと思った時にはすでに、マルちゃんは、ポスターに近づいて詳しくその並んである文字を読み取っている。そこまで食い入るように見つめなくてもいいのに、なんて思ったけど恥ずかしさが残っていたからか、何も言えなかった。

正直に言えばマルちゃんの言う通り、興味はある。すごくある。だけどそれを実行出来るか、と言われれば私は首を横に振る。だってそんな自信は無いんだもの。しつこいようだけどね。

「ルビイちゃんならイケるズラ！ほら、ここに『誰でもOK！』って書いてるズラよ！」
「な、なんかバカにされてる…？あは、あはは…」

マルちゃん的には背中を押してるつもりなんだろうけど、周りから見ればそうは見えなかつたりする。事実、周りの人たちはクスクス笑ってる。

恥ずかしくなった私は顔を真っ赤にしてその場を離れる。マルちゃんは何でか理解していないみたいだったけど、素直に私の後について来た。

大人しく自分の教室に帰ってきた私は、席に着いてふう、と心を落ち着かせる。マルちゃんはいしゃがみこむ。机にまるで小動物のように手をちよこんと乗せて私を見つめてくる。

「大丈夫？」

「あはは… 大丈夫だよ…」

マルちゃんは私によく構ってくれるし、優しい。

でも優しいが故に、私のことを一番に考えてくれたりもしてくれるんだ。だから、マルちゃん自身が折れちゃいけないかって、不安になったりすることもあったりする。

そんなこととはつゆ知らず、よかったと微笑む彼女に、ついつい私も笑顔になってしまふ。

でも私が、強くないといけないのに。

ひとりでも、頑張れるって、証明したいのに。

そう思うと、心の底から笑えなくて。上っ面だけの笑顔になってしまうの。そんな自分が、ものすごく嫌だった。

昔からずっとそう。私だって考えることは考える。でもそれを相手に伝えたり、自らの意思表示することがすごく苦手だった。

だから、変わりたいと思った。

… きっかけ？

それこそたくさんある。お姉ちゃんから注意される時だって思ったし、学校生活の中でも自分から発表するクラスメイトを見て、『いいなあ』とか思ったりして。

「やってみてもいいと思うけどなあ」

「マルちゃんこそ可愛いからいいんじゃないかな…？」

私がふとそんなことを言うと、マルちゃんは少しだけ頬を赤く染める。照れているみたいで、その姿も可愛かった。

「あはは… マルにこそ無理ズラ。アイドルって人前に出て踊ったりするんだよね？… マルは大人しく本読んでた方が好きだから」

そう言うってマルちゃんは立ち上がる。時計をチラツと確認してたから、授業のことを気にしてるみたい。

「じゃあ席に戻るね」

すると私の予想通り、マルちゃんは自分の席に戻っていった。なんだろ、すごくあつけないな、なんて思っちゃった。

マルちゃんも、興味あつたりするのかな。

ふとそんな疑問が浮かぶ。でもあの時ポスターは見てたし、しかも結構まじまじと読んでたから可能性が無いわけでは無いと思う。

でもさつき自分でも言ってたように、マルちゃんは読書が好きな女の子。休み時間とかは図書室に籠ったりするような子。そんなマルちゃんが人前に出て踊ったりするのは、正直なところ想像出来なかった。

チャイムの音とともに、先生が教室の戸を開け教壇を登る。ズカズカと入ってくる感じに、少しだけ嫌悪感。

「じゃあ——」。黒澤さん、ここ読んで」

「ははは、はい……」

先生はそう言って私を指名する。

顔に出ちゃってたのかな、なんて思ったけど、素直に立ち上がって震える声を抑えながら読み上げる。

…… スクールアイドル、かあ。

でも気持ちは教科書なんかより、もつともつと先のことを考えていた。自分が、ステージで踊っている姿を。

☆

「ルビィちゃん！一緒帰ろ！」

「マルちゃん。うん、帰ろ」

その日の放課後、私が帰る準備をしているとマルちゃんがカバンを持って、なぜかうキウキしながら私の元にやってくる。そろそろと教室からクラスメイトたちが出て行く中で、私たちは向かい合っている。

あんまり長く待たせるのは申し訳ないから、少し急いで帰る支度をする。昼間の春の陽射しから暖かみを増した柔らかな光が窓の外から教室に射し込む。

こーやって見てみると、私たちがいま住んでいる内浦は、ものすごく綺麗なんだなと改めて感じる。すごく田舎ではあるけどね。

「お待たせ。帰ろっか」

「うんっ」

準備を終えた私は立ち上がって、マルちゃんと一緒に教室を出る。

下駄箱までの道、そしてそれからの帰り道、ふたりで他愛もない話をした。昨日のテレビの話とか、マルちゃんオススメの本の話とか。

そんなことでも、話してて楽しいのがマルちゃん。だから、私にとつてマルちゃんは親友なの。お友達に優劣を付けるわけではないけど、他のお友達よりも、ずっとずっと大切なお友達。

その時間はすごくあつという間で、分かれ道に差し掛かると、お互いの家の方向を向

く。

「それじゃあ、また明日ズラね！」

「うん。また明日」

そう言い合ってマルちゃんに背を向けると、後ろの方から「あつ！」と声が聞こえた。マルちゃんの声だったから振り返ってみると、何かを言い忘れてたみたいで少しだけ照れ笑いを浮かべていた。

「どうしたの？」

そう聞くとマルちゃんは、

「スクールアイドルの話、真剣に考えてみてもいいと思うんだ。ルビィちゃんは、可愛いから」

「そ、そんなことないよお・・・」

「マルでいいなら、いつでもお話を聞くから」

やっぱりマルちゃんは優しいなと思う。すごく。

よく私のことを見てくれてるし、何より言ってくれることがすごく嬉しい。

「・・・ありがとう、マルちゃん」

「えへへ」

もう一度照れ笑いを浮かべるマルちゃん。夕日に照らされるその笑顔は、同性の私か

ら見てもすごく可愛いなって思った。マルちゃんこそやってみたらいいのに、なんて。

「…… 帰り大丈夫？」

「うん。大丈夫だよ」

「もう少しだけ、お話ししない？」

「…… ふふっ。ルビイちゃんがワガママ言うの珍しいね。いいよ」

まだ別れたくなかった、そんな気分。

だから私は珍しくワガママをマルちゃんにぶつけてみた。

優しいマルちゃんだからそれを素直に受け入れてくれて。なんだか少し涙が零れそうになった。大げさとか、そんなことはなくて。恥ずかしくなって顔を背けてしまう。そんな私を見てマルちゃんは、私の頬つぺたをツンツンとつつきながらからかってくる。私たちの中では割と見慣れた光景だったりもする。

「…… マルちゃんは、どうして私の背中を押してくれるの？」

自分なりに真面目なトーンで彼女に問いかける。

すると彼女は私の声色を察してか、からかうのをやめて、「そうだなあ」と空を眺めながら考えている。

「…… 大切なお友達だから、っていう理由じゃダメかな？」

「それでも、背中を押す理由は無いんじゃないかな？」

「うーん、今日はやけに聞いてくるズラね」

うつすらと苦笑いを浮かべるマルちゃんに申し訳なさを感じながらも、それでも引かない自分に自分でも驚く。自分でも意外と頑固なところあるんだなと改めて実感したり、しなかつたり。

「ルビィちゃんがやりたいことは、素直に応援したいと思うよ」

「大切なお友達だから？」

「うん、それもあるすら」

マルちゃんはそう言ってまた空を見上げる。

そして、

「ルビィちゃんにやってほしいから」

「・・・ どうして？」

『やってほしい』

正直、予想外の答えが返ってきて少しだけドキツとする。なんて答えればいいのかわからなくて、素直に聞き返すしか出来なかった。

「だって、夢だったんでしょ？ アイドルが」

「う、うん・・・」

「その夢を叶えてほしいから。大切なお友達の夢は、マルにとっても夢だから」

… ほんとに優しいんだなって、改めて思った。

こんな私のことを、そこまで気がけてくれて、そんな優しさが夕日に沁みて、また涙が零れそうになる。

でも、泣いちやダメ。変わらなといけなから、いつまでも泣き虫じゃダメだから。

「マルちゃんも、やってみたらいいのに。スクールアイドル」

「あはは。マルには無理ずらよ。人前に出るの、あんまり得意じゃないし…」

お昼に聞いた時よりも、少しだけ照れているような気がした。

夕日に照らされてるからかもしれないけど、本当は興味があるんじゃないかって思ってた。

「ルビイだって苦手だよ」

「… それでもやりたいって思えるのはそれだけ想いが強いってことだよね」

「それは、そうだね」

確かにマルちゃんの言う通り、私自身がすごくアイドルへの憧れが強かった。

それだからか、不安はあるけどそれと同時に不思議と期待してる自分が居たのは。

「でも、」

私はひとつ息をついて、口を開く。

「そんな自分を変えてみたいんだ」

そう自分の中では力強く言うのと、マルちゃんは少し驚いた顔をする。

「ルビィちゃん何があつたずら？いつものルビィちゃんじゃないずら！」

「わわわわああ〜!!そんな肩揺らさないでよお〜!!!」

何を思ったのか、マルちゃんはぐらんぐらんと私の両肩を揺らす。

見た目は大人しそうなのに揺らす力が結構強くて視界が歪む。

私はそれこそ自分を見失っているマルちゃんを一生懸命制止して、再び向き合う。

「も、もうびつくりしたよ…。」

「ご、ごめんずら… ついつい…。」

お互い微妙に離れて少しだけ頭を下げる。

顔を上げてお互いを見つめると、変な距離感に思わず頬が緩んでしまう。

「ふふっ」

「あはは」

夕焼けをバックに、ふたりで声を出して笑う。

心地いい風が吹き抜ける。ほんのりと海の香りが漂う、綺麗な風。それに吹かれるマルちゃんの長い髪。海風にも負けないぐらい綺麗な香り。

「マルちゃんのおかげだよ。優しく背中押してくれたから、変わろうと思えた」

「…そんな何もしてないずらよ」

「してくれたの。こんなルビイのこと…可愛いって言ってくれたり…」
たぶん今の私はすごく顔が真っ赤になってると思う。

マルちゃんにお礼を言うことが恥ずかしんじやなくて、自分で思ってもいけないことだ
けど『可愛い』と口にしたことがすごく恥ずかしかった。

『そんなことじゃ、アイドルなんて出来ませんわ』

きつと私のお姉ちゃんはそう言うに違いない。そう言われれば、また何も言い返せないのがオチ。

だからそこから変えていけないといかないんだ。本当は。

それでも。

そう言われても、やってみたい。スクールアイドルを。

何かゾーンに入ったようにそんな感情が湧き出てくる。自分でも驚いてしまう。

いままでは、絶対に無理、出来ないと決めつけていたのに。

「そろそろ帰ろうか。暗くなる前に」

「そうだね。こうやってルビイちゃんと話せてよかったぞら」

「ルビイもだよ。話聞いてくれてありがとう」

そう言つて、お互い少しだけ距離を置く。

「それじゃ、今度こそまた明日ぞら！」

「うん、ばいばい」

その声とともに、お互いがお互いの道を歩き始める。

シーンと静まり返った気がして、さつきまで話していたからか、急にひとりになると寂しさというものがこみ上げてくる。

ああやって背中を押してくれるのも、優しいマルちゃんだから。押し方もマルちゃんらしいけど、あれも彼女が本当にやってみたらどうって思ってくれているのは間違いないかった。

「アイドル… かあ…」

ひとり夕焼けを背につぶやく。海からの潮風が私の鼻にツンと刺激を与える。もうすぐ海水浴の季節だな、なんて考えてしまう。

… 出来る、かな…

私に出来るかなんてわからない。正直いまでも出来るわけないと思ってる。

それでも。さつきよりは、やってみようかなんて思ってる自分が居た。

親友に、優しく背中を押されたから。そうされないと、私は動けないんだ。そう思うと、どうしてもやるせない気持ちになる。

それでも、それでも。

顔を少しだけあげて夕焼け空を眺める。カラスの鳴き声が空に響いて少し趣を感じ

る。

ふう、とひとつ息を吐いてもう一度歩き始める。結論が出たわけではないけれど、さつきよりも不思議と心が軽くなっていた。

★

「あ、あ、あ、あ、あの…！」

震える声で一生懸命呼びかけた。

後ろには親友のマルちゃん。そのマルちゃんも心配そうな顔で私を見守っている。

ここは放課後の学校。2年生の教室。目的はそう、決めたの。スクールアイドルをやってみると。

ポスターには「2年 高海千歌まで！」って書いてたから来てみたものの、どんな人か全く想像出来ずとりあえずはその教室にいる人に声をかけてみたということ。

正直、それだけで心臓が爆発しそうなくらい緊張していた。というより、いまでも緊張している。

高海千歌さんはいらっしやいますか、そんな旨をその人に伝えると、『はいちよつと待っててー』とすぐく呑気な返事をして『千歌ちゃん！お客さーん！』と呼びに行く。

当然、その人に注目がいくわけで、彼女の『お客さん』というワードに、教室中の目が私に向けられる。

「はう…。」

「ルビィちゃんしつかりするずら、大丈夫だからね」

それだけでもう恥ずかしい。顔が真っ赤になってうつぶいしてしまう。本当にアイドルなんて出来るのか、幸先が悪すぎて帰ろうかななんて思ったり。すると。

「あなたがお客さん？私に」

「は、は、は、は、はい…！えっと…えっと…！」

予想より早く高海千歌さんが私の前に現れて、わたわたしてしまふ。正直、頭の中は混乱していた。

だからか、

「あ、あ、あ、アイドルになりたいですっ!!」

つい、口走ってしまった。その場にいる全員、マルちゃんも含めて、ぼかんとした表情を浮かべている。

「ほ、本当に…!!」

「ほ、本当に…!!」

「ははははははいいいい〜！」

「やったよ！ヨウちゃん！本当に来たよ!!」

私の両手をしっかりと握つて、ぶんぶんと振る高海千歌さん。〃ヨウちゃん〃と名前を呼ぶと、高海千歌さんの後ろから『ほええ〜』なんて気の抜けた声が聞こえる。

「ほんとに来たんだ〜！」

「うん!!ポスター効果テキメンだね！」

ヨウちゃんさんは高海千歌さんと同じぐらいの髪の毛の長さ。でも少しボブヘアみたいな感じ。恥ずかしくて直視出来なかったから、あくまで雰囲気。

『へえ〜』と言いながら私に近づいてくるヨウちゃんさん。まじまじと私の容姿を眺める。そんなジロジロ見られると、私としてもどうすればいいのかわからず、顔を伏せるしか出来なかった。

「可愛いじゃーん！まさかこんな子がアイドルやりたいなんて言ってくれるなんて〜。君、1年生？」

「は、は、は、は、はいい...」

「あはは。そんな緊張しなくていいから」

クスクス笑うヨウちゃんさん。高海千歌さんとは違ったフランクさに、少しだけ緊張が緩む。

すると、ヨウちゃんさんは何かを思い出したかのように『あっ!』と声をあげる。

私、それに後ろにいるマルちゃんもその声に反応してヨウちゃんさんに視線を送る。

「まだ名前言つてなかったね。私は、渡辺曜。2年生。一応、スクールアイドルやってみようかななんて思ってる。そして…」

ヨウちゃんさん改め、渡辺曜さんは高海千歌さんに視線を送る。自己紹介しなさい的な合図だろうか。

それに気づいた高海千歌さんは、少し苦笑いを浮かべて私たちに向き合う。

「あはは。テンション上がっちゃって遅くなっちゃった。私は、高海千歌!よろしくね」

「…それだけ?千歌ちゃん」

「え、えっ、少なかったかな?えつとく…好きな食べ物のみかんで…えつとく…うーん」

「そういうことじゃなくて!アイドルやろうとしたきつかけとか」

「あ、ああ!そういうことかあ!あはは」

「…ふふっ」

そんなふたりの会話を聞いていると、自然と微笑んでしまった。その微笑みが聞こえたのか、ふたりは『おっ!』と顔を見合わせて、私に話しかける。

「笑った顔も可愛い!うん!私たちと一緒にアイドルやろうよ!」

そう言つて、手を差し出してくれる高海千歌さん。

こんな私を、受け入れてくれる。こんな私でも、一緒にやろうと言つてくれる。

どんな人かすらわかつてないはずなのに、優しく手を差し伸べてくれる。それだけで、涙が出そうになるぐらい嬉しかった。

「そう言えば、あなたのお名前は？」

渡辺曜さんが思い出したようにそう問いかけてくる。

確かに名乗つてなかつたなど、ちよつと失礼な気持ちになるけど、素直に名乗る。

「く、黒澤……ルビィです」

「ルビィちゃんかあ！可愛い名前〜」

「そ、そんなこと無いです……」

生徒会長の妹、と言うか迷つた。

でもここで言つたところでどうなるのか。そう考えると、自然と言葉を飲み込んだ。

「えつと。あなたは？」

「お、オラ？」

「そう、あなた」

渡辺曜さんはそう言つてマルちゃんの方を見つめる。

マルちゃんはまさか自分が聞かれると思つてなかつたのか、少しびっくりした表情を

浮かべながら口を開く。

「く、国木田花丸です。ルビィちゃんと同じ1年生……です」

「花丸ちゃんかあー。あなたもアイドルやるの？」

「えっ!? お、オラは……」

「あ、え、えつと……マルちゃんは付き添いだからそういうのじゃ……」

「あ、そうなんだ。あはは。ごめんごめん。勘違いしちゃったよ」

そう言つて笑う渡辺曜さん。だけど、マルちゃんは顔を少し赤くして何も言わなかった。私なりのフォローだったけど、なぜか黙り込んでしまった。

どうして、だろうか。考えすぎかな、なんて思ったけど、なぜか見過ごしていい気がしなかった。

☆

「よかつたずらね! これでルビィちゃんもスクールアイドルの一員ずら!」
「う、うん……」

その日の放課後。私とマルちゃんはいつものように帰り道を歩く。いつものように話しかけてくれるけど、どこかから元気に聞こえてしまう。優しい故に、変に気を遣わ

せているのだろうか、とまで考えてしまう。

でもそんな私の様子に、マルちゃんが気づかないわけがなく。

彼女は立ち止まって私の前に立つ。

「どうしたずら?」

「... な、なんでもないよ」

「嘘。すぐわかるずらよ」

そう言って私の前に立ちふさがるマルちゃん。

でもその通りだったから、否定することも出来なかった。当然、私のその反応を見て

マルちゃんは確信を得ることになる。

「どうしたの? スクールアイドルやれるんだよ?」

「... マルちゃんは」

正直、なんで言おうと思ったのかわからない。

でも、ここで言わないとずっと、ずっと後悔するかもしれないから。

だから、だから、

「マルちゃんは... ほんとはやりたいんじゃないの? アイドル」

「... なんて急にそんなことを」

「今日、千歌さんのところに行った時の様子が気になったから...」

「様子、かあ」

「うん…」

思い切つて自分が思ったことをマルちゃんに伝える。

すると思いのほか冷静な対応をされたことに、少しだけ肩透かしをくらつた気分になる。

「そんなこと、ないすら」

「本当？」

「ほんとう、ずら」

「…いまのマルちゃんこそ、嘘ついてる。すぐわかるもん」

声のトーン、雰囲気。それがいままでのマルちゃんとは全然違った。同い年でも、どこか大人っぽさを感じるその雰囲気は、昨日より少しだけ曇つたこの気候に変に合っていて。

マルちゃんは、少しだけ黙って話し始めた。

「オラには出来ないよ。やっぱり」

「…興味は、あるんだ」

「…」

何も言わなかつたけど、きつとそうなんだろう。そう確信を得ることが出来た。

きっと私と同じで、素直になれず、出来ないと決めつけているに違いない。

「あの…一緒にやってみない？」

「…出来ない。絶対…」

「ルビイには言ってくれたでしょ…？『出来る』って」

「それは…」

マルちゃんは何にも言わなかった。いや、言えなかったのかもしれない。

否定でもしてしまおうと、自分が言ってしまったことを否定することにもなるのだから。それが出来ないのを見ても、やっぱりマルちゃんは優しい。

「ルビイは、応援する。いや、応援したいんだよ」

「…うん。ありがとう」

ふう、とひとつ息を吐いて、マルちゃんは私に背を向けて歩き出す。

いきなりだったから、少し遅れて私も彼女の後に続く。

「…もう少し考えさせてほしい」

「…うん」

昨日はあれだけ盛り上がったのに、今日はそれだけで会話が終わってしまった。曇り空に呼応するような、ふたりの距離感。



それから私とマルちゃんは少し、どこかすれ違うようになった。

一緒に帰ることもなくなった。これは私が千歌さんたちのところに行つてこれからどうするか、とか部員集めはどうするか、とか。まだまだアイドルらしいことは一切してないけどそれが楽しかったりもしたから。

それでも、マルちゃんと少し離れた気がして、どこか心がざわつく自分が居たんだ。

マルちゃんと最後に帰った日から1週間ほど経つた朝8時。私たちは正門のところ部員募集のチラシを配っていた。私と千歌さん、そして曜さん。本人たちは『呼び捨てでいいよ』なんて言ってくれたけど、今の私にはそれは出来なかった。

極度の人見知りな私は当然ビラ配りなんて出来なかった。それでも、ビラを持って配ろうと考えているあたり、前よりは少しだけ強くなったんじゃないかななんて、余計なことを考えていると。

「あ、ルビィちゃん！花丸ちゃんだよ！行つておいで。ビラ配りの練習にもなるから」

「友達は練習台に使わないとね、ふふっ」

「そ、そんな練習台だなんて…」

登校してくるマルちゃんを見つけると、曜さんが冗談っぽくそんなことを言っただけ

ど、実際のところマルちゃんになら渡せる気がした。

この前話したことは忘れて、1人のスクールアイドルとしてマルちゃんを誘いたかった。そう考えると、自然とマルちゃんの元へと歩を進めていた。確実に、でも少し早歩きで。

マルちゃんはひとりで登校したみたい。それも好都合だった。

「あの… よ、よかったら、ど、どうぞっ」

「あっ…」

不思議と、手渡すときはマルちゃんのことをお友達と思うことはなかった。

なぜか、全く知らない人に手渡す感覚を覚えた。すごく変な感じなんだけど。

「… ありがとう」

チラシを受け取って何事もなかったように私の元を通り過ぎるマルちゃん。

残るのはあの時よりも少し甘く感じる髪の毛の香り。潮風がない分、余計に鼻をくすぐってくる。

マルちゃんの後ろ姿を見ると、ハツとなった自分が居て。

「ま、マルちゃん！」

「ルビィちゃん…？」

「ま、また後で…」

自分な中では大声で呼び止めたからか、マルちゃんは少し身構えていたようにも見えた。それでも、私が言ったことを理解すると、クスクスと笑って振り返ってくれた。

「当たり前すら！ルビィちゃんも頑張ってるね！」

久しぶりに交わした会話、だと思おう。

たったそれだけの会話でも、心がどこか満たされていく感覚。

気のせいかな、マルちゃんの雰囲気も少しだけ、ほんの少しだけ、柔らかくなったような気がしたんだ。

「…花丸ちゃんもやればいいのになあ」

「うん、すごく可愛いのに。ね、ルビィちゃん」

「…ルビィに出来ることは何だろう」

「ルビィちゃん？」

「あ、な、なんでもないです…」

「…ふふっ。そっか」

独り言を言った時に限って、曜さんに話しかけられてしまった。聞かれていないと信じて、私なりに誤魔化す。でも曜さんはニヤニヤしてる辺り、きつと聞かれちゃったな。どう思われたかわからないけど、なぜか安心した自分が居た。

ピラ配りから1時間ほど経ったころ、私たちは朝礼のために体育館へ集合していた。内容はいつも通り、理事長のお話、生徒会長であるお姉ちゃんの話。正直なところ、いつもと変わり映えしない展開に少し飽きていた。何か違ったことはないのか、と思っただ矢先。

「はい!!えつと〜!!ここぞでひとつ宣伝がありま〜す!!」

キーンと体育館に声が響き渡る。何事かと思い、視線を前に送ると、

「あ〜：：：！結構うるさかったみたいだね：：： あはは：：： ゴメンナサイ：：：」

「あはは」

前に出ていたのは、さつきまで一緒にピラ配りをしていた千歌さんと曜さんだった。

なぜふたりが前に出ているのか、と考えるといまいち意味が分からなかったけど、千歌さんが言った『宣伝』という言葉にピンと来た時には、もう、

「ルビィ〜ちゃ〜ん!!出ておいで〜!!」

「ふえつっつっつ?!?!」

自分でもわけのわからない声を上げてしまった。そうなれば、少しぎわっている体

育館とはいえ、自然と視線が私に集まる。

周りの視線がすべて私に向けられている。アイドルとしてはすごく嬉しいことだろうけど、今の私にとっては苦痛に近いものだった。こんなことでアイドルなんて出来るわけがないのに。こんなタイミングでも自己嫌悪に陥る自分に情けなさを感じる。

でも。今は、いつも私の背中を押してくれるマルちゃんは近くに居ない。

いつまでもマルちゃんに頼ってばかりなんて、出来ない。だから私は、変わらないといけないんだ。

何度も、何度も、何度も、自分に言い聞かせて。

そしてようやく、一步、また一步と、歩みを進める。

私が前に進むと、周りの人たちが少し道を開けてくれる感じがした。それはそれで恥ずかしかつたりする。だけど、ここで足を止めてしまう方が恥ずかしい。少し早歩きでふたりの元へ向かう。

「：： お疲れさま。よく頑張ったね」

「い、いえ：： ふわう：：」

曜さんはそうやって耳打ちをしてくれて、少しだけ落ち着きを取り戻しかに見えたけど、いざステージの上から全校生徒を見下ろすと、その微かな落ち着きもすぐ吹っ飛んでしまった。泣きたい：：。

「えーっ！ 私たちはスクールアイドルになるのであります！」

千歌さんは緊張という言葉を知らないのだろうか。いつも通り、というか人前に出た方がイキイキとしているようにも見える。

それから千歌さんはビラに書いてある言葉を、自分なりにアレンジして全校生徒と一緒にやってみないかと呼び掛けている。

その間、私は生きている心地がしなかったけれど、ふと先生やお姉ちゃん表情をみると、特に焦った様子や怒った様子も見せていなかった。だから公認なんだろう。なんで教えてくれなかったのかな。

いろいろ考えていると、目の前に1本のマイクが差し出された。

「…ふえっ？」

「それでは〜！新メンバーの黒澤ルビィちゃんから一言いただきます！」

…えっ。えっ…？

数秒間、思考が停止した。開いた口がふさがらない状態。視線だけで横のふたりを見ると、ふたりともえへへと微笑んでいる。笑い事じゃない、本当に笑い事じゃないのに…。

うつすらと背中汗が出てくる。いやうつすらどころじゃない。こんなに汗が出てきたのはいつぶりだろうと考えるぐらいには汗が止まらない。

それでも私の目の前にあるマイクは姿を消さない。曜さんは早く受け取れと言つてるように眉を少しぴくぴくさせている。

そんな表情を見てしまったら、自然と受け取つてしまうのが人間の性。

手汗がにじんでいる右手で受け取る。すでにマイクの電源は入っていて、何か話せば体育館中に私の声が響くはず。それだけでどこか恐ろしさを感じる。

「…ルビィちゃんが言いたいこと、言つて」

「い、言いたい、こと？」

「そう。今のルビィちゃんの素直な想いを言つていいよ。あとは千歌たちが何とかするかから」

体育館に響き渡らないように、私たちだけにしか聞こえない声で、千歌さんと曜さんはそう言つてくれる。

それでも言いたいことと言われても、どうすることも出来ないのが私。だから黙り込んでしまう。

「ルビィちゃん!!!」

「えっ…?」

突然響き渡る私の名前。隣に居るふたりでもない、かといって先生たちでもない。

じゃあ…誰なんだろう。浮足立った感覚のまま、声のした方へ視線を送ると、

「ま、マル… ちゃん…」

「が、頑張つて!!!」

両手でメガホンを作つて一生懸命声を出していたのは、親友のマルちゃんだった。少しの間だけど、疎遠になっていたから、それが予想外で驚いてしまった。

それでも恥ずかしいとか、そういうのは一切なくて、むしろ、すごく、すごく、嬉しかった。

心の底からのエールが、私の心の底に沈んでいく。

「…わ、わ、私は、く、黒澤、る、ルビイと言います… い、1年生です…」

すごく小声かつ震え声だったけど、マイクがそれを拾ってくれるおかげで何とか伝えることは出来ている。だけどすごく自分でもか細い声だなど思ったり。

マルちゃんの方に視線を送ると、祈るようにこちらを見つめていた。

…ふー。

心の中で大きく、ゆっくり溜息をつく。

深い海に潜るように、底の見えない海に、潜るように。

「…わ、私は、アイドルになるのが夢、でした。でも、私はすごく人見知りで、人前に出るのが苦手で、だから、絶対に出来ないと思っていました」

話しているうちに、自然と緊張が緩くなつていった。声が震えなくなつたし、自然と

姿勢もピンっと伸びている。今まで感じたことのない、気持ち。

言葉は止まらなかつた。

「でもそんな私の背中を押してくれたお友達が居ました。その子のおかげで、いま私はこの場に立っています。も、もし、いま悩んでいる人がいるのなら、わ、私たちと一緒に、スクールアイドルをやってみましょう…！よろしくお願い…！します…！」

言い切つた、そう思うと体の力が一気に抜ける。軽く一礼すると、

「えっ…」

パチパチパチとどこから始まったのかわからない拍手が、体育館中に響く。

大きく、天井が破れてしまいそうなその拍手は、すべて私に向けられたもの。こんな経験、今までなかつたから、ふわふわと浮いた感覚。雲の上にいるような、そんな感覚。

… 言つてよかつた。さつきまであんなにおびえていたのに、心の底からそう思えたんだ。

*

「… 今日はお疲れさま。オラ、感動したぞら」

「ふふつ。うん、ありがとう」

その日の帰り道、私は久しぶりにマルちゃんとふたりで帰っていた。

雲がほとんどない、綺麗な夕焼け空。久しぶりにこんな綺麗な空を見た気がして、少し心が軽くなる。

「マルちゃんもありがとう。また、助けられたね」

「そんなことないです。気が付いたら…勝手に言葉が出てて…」

照れながら、少し小さめの声でそう話すマルちゃん。何か返そうと思ったけど、マルちゃんの口元が少し動きかけていたから、言葉を飲み込んで彼女の言葉を待つ。

「…マルも、ルビィちゃんに勇気貰ったんだ」

「…そっか」

だったら、だったら。

「マルちゃん、私と一緒に、スクールアイドルやらない？」

「…うん」

ふふっ。

人ひとりの気持ちを、動かすことが出来たのかな。

そんなことを思うと、今まで感じたことがないぐらいに胸の高まって。

「…ありがとう」

そう、夕焼け空につぶやいた、遠い、春の日の思い出。

★★★

「懐かしいぞらね。久しぶりに聞くと」

「そうだよね。ふふっ」

「どうか！それ私出てきてないじゃない！何なのふたりして思い出に浸って！」

「よ、善子ちゃん…！式典中だから声は静かに…」

大切な式典中なのに、思わずマルちゃんと話し込んでしまった。

それも、懐かしい、すごく、懐かしい話を。

マルちゃんの隣に座っていた善子ちゃんはすごく退屈そうな顔をしていたけれど、時折くすつと微笑んでいたあたり、割と楽しんで聞いてたんだなど。

厳肅な空気の中、私たちがこんな話をするのは、客観的に見たらいけないことかもしれない。

だけど、これからの未来には、夢と希望がたくさん詰まってるから。

変に固くならず、先を見てほしいから。

「それじゃ、行ってくるね」

「うん！頑張ってずら」

「ふふっ。ヘマしないようにね」

「うん」

それは、私が証人になれるから。

「初めまして、皆さん」

自分はいつでも変えられるって。

「ようこそ、浦の星女学院へ。生徒会長、そして、スクールアイドルAqoursの、」

自分自身に勝つことは、出来るって。

「黒澤、ルビィです」

ちっちなルビィの、ちっちなハートが、大きな結晶となって、あなたたちの元に届きますように。

パンツを手に入れる為に梨子と花丸がテニスのお姫様になつてしまい多大な被害をもたらすお話

「千歌ちゃんのパンツが欲しい!」

高海家の旅館の一室。そこで4人でお茶をしていた時、梨子は高々と叫んだ。目の前のアホ(レズ)の発言に果南はゴミを見るかのような目で見下し、花丸は衝撃を受け、善子の茶柱だけが立ってなかった。

「いきなりどうしたの梨…」

「どうしたもこうしたも無いよ!千歌ちゃんのパンツですよ!!今、千歌ちゃんはルビィちゃんと一緒にお風呂に入っている…。この千載一遇のチャンス、求めるのが当然ですよね!!!」

鼻息を荒く立てながら果南に熱弁する梨子。正直全力で理解不能な果南。また衝撃を受ける花丸。そして2枚入りのせんべいが何故か1枚しか入ってなかった善子。

「花丸ちゃんだつてそうでしょ?! ルビィちゃんのパンツ、欲しいでしょ?!」
「ツ!?!」

花丸に三度^{みたび}衝撃が走る。欲しい……彼女のの中には、確かにその思いがあった。ルビィのパンツが欲しい、被りたい、嗅ぎたい、啜えたい! でも本当にそんなことしていいのか? 寺の娘がそんなことしていいのか? てかそれ以前に人としてまずどうなのか? 胸の内で葛藤する花丸……そんな彼女の肩に梨子は優しく手を置いた。

「梨子さん……?」

「花丸ちゃん、恐れることはないわ。好きな人のパンツが欲しい……それは当然思うことなのだから」

「当然のこと……? マル、変じゃない?」

いや、当然じゃねえよ。と心の中でツツコミを入れた果南。そして正座をしていた善子の足が痺れた。

梨子は花丸の肩に手を置き、衝撃の一言を言い放った……!

「男の子は男の子同士、女の子は女の子同士で恋愛すべきなのよ!!!」

その言葉は花丸に最大級の衝撃を与えた。そうか……女の子を好きになっても良いんだ……。自分は間違ってたんだと。友の……梨子の熱い言葉は彼女に新たななる一方を踏み出させた。

いや、お前らがやろうとしていることはそもそも恋愛じゃねえだろ、と思う果南。突如乱入して来た猫に痺れた足を猫パンチされ続けている善子。

固い握手をした後、梨子と花丸は胸を張って歩き出した。目指すは脱衣所……パンツを求め、2人の熱い友情の旅（ここから脱衣所までの約9メートル間限定）が始まる！

果南は今までのことを見なかったことにし、善子は（いろいろあって）泣いた。

脱衣所を目指す2人。その顔は迷いを振り切っており、一直線に目的の場所にへと堂々と歩いている。これからやろうとしていることは犯罪行為だが気にしちやいけな
い。

だが、そんな2人の前に立ち塞がる2つの影があった。

「曜ちゃん…ダイヤさん……」

それは曜とダイヤの2人。何故かテニスラケットを持った2人はそのラケットを梨子と花丸の2人に向けた。

聴きました
「盗聴わよ、ルビイと千歌さんのパンツを手に入れるつもりですって？」

「悪けど、そんなことはさせないよ」

なんかルビを振られている単語が聞き捨てならない物のような気がするが、今はそんなことよりも目の前の2人をなんとかしなくては先には進めない。相手はラケットを持つている……ならば、梨子と花丸がやることは1つしかない…。

「始めましょうか……テニスを！」

「いくずら……！」

これまた亜空間からテニスラケットを取り出した2人。因みに彼女達がいる廊下の横幅は人3人が並らんで通れる程度の広さ。こんなところでテニスなんかやったら危険

なことは間違いない。そもそも室内でテニスなんてダメ、絶対。だが、4人はお構いな
しに何処からかテニスボールを取り出して握り臨戦態勢に入った。全員がボール持っ
ていることから、コイツら絶対にルールを理解していない。

「オーケー！審判はこのマリーにお任せY O！」

これまた何処からか湧いて出てきた鞠莉。いきなりネットの代わりとか言って容赦
なく廊下に鉄板をぶっ刺した。もう完全にテニスじゃない。

「始めますわよ………^{テニス}戦争を!!!」

高々と宣言したダイヤ。そして開戦したテニスっぽい何か。まずは曜が梨子の顔面
目掛けて迷わず訳のわからない破壊力を込めたパワーショットをぶっ放した。

「千歌ちゃんのパンツは曜ちゃんのものだあああああああアツ!!!」

「そうはいきません!!!」

自分に向かって来たボールに左手で持っていたボールを当てて受け止める梨子。ラケット使えよ、完全に反則だろ、どんか筋力だよ、などといういろいろ言いたいことがあるがツツコミ不在のこの場ではそんな言葉はなく、鞠莉が「ファンタステイック！」と言って興奮するだけである。

「花丸ちゃん！」

「任せるすらああああッ!!!」

花丸がダイヤ目掛けてボールを打つ。不規則な軌道を描きながらボールはダイヤにへと向かっていった！

「甘いですわ……！」

だが、ダイヤは自分が持っていたボールを打って花丸のボールに見事ぶつけてしまった！押し合うテニスボール……そして花丸のボールが弾かれ、ダイヤのボールが彼女にへと襲いかかる！

「え、ずらあ!？」

「花丸ちゃん…きやああ!？」

ラケットで受け止めようとしたが、その力に勝てず背後に飛んでしまった花丸。それに気を取られた梨子も曜のボールに押し負けて転んでしまった。

「ふう…その程度ですか？」

「そんなんじや、千歌ちゃん達のパンツを手に入れる資格なんてないよ」

「あの2人のパンツは私達が手に入れる(ますわ)!!!」

ラケットを突き付けてそう言い放つ曜&ダイヤ。とどのつまりこの2人も変態なのだ。

「や、やっぱりオラには無理なのかなあ…?」

ルビイのパンツを手に入れようなんて自分には無謀だった…そう思い自己嫌悪に陥る花丸。もうダメだと諦めそうになった、その時だった……。

「そんなことないッ!!」

「梨子さん……?」

「思い出して!今まで私達が、この日の為にしてきた努力を!」

「えっ?」

いや、そんなことしてませんけど?と思う花丸だが梨子は構わずに語り始めた。

「雨の日も風の日も、雪の日、日照りの日も決してラケットを振ることを止めず!!断崖絶壁を登り、荒れ狂う海を泳ぎ、立ち塞がる何匹もの猛獣達をこのラケットとボールで打ち倒してきた!!!その努力を忘れたの!?!」

してません。一切記憶にございませんと目で訴えるが梨子には届かず。

「私達なら、必ずパンツを手に入れられる!!!だから、諦めちゃダメ!!!」

努力どころは置いて、まあ何とかかなりそうな気はしてきた。梨子の叱咤とかよ

ダイヤが曜達の方に気を取られた隙に、花丸が彼女に向かってボールを打つ。ボールは謎原理によって巨大化していきダイヤの身体を吹き飛ばした！

「何ですと…?!きやあツ?!」

「ダイヤさ……うわあツ!」

集中力が途切れてしまった曜も飛ばされてしまいダイヤの元にへと転がる。それを見た梨子と花丸は互いに見合つて頷き横に並ぶ。

「ダイヤさん、曜ちゃん。私達は勝つ……勝つてパンツを手に入れる!!!」

「テニス最後まで立っていた者が勝者……これで決めるずらツ!!!」

同時に高く（40センチくらい）跳んだ2人はラケットを思いつきり振るつた。そして放たれたのは圧縮された空気弾。原理など知らん。それはダイヤ、曜にへと襲い掛かり彼女達をぶつ飛ばすついでに廊下を破壊した。

「一本！Winner！梨子&マルよおーッ！！」

「やった…！やったずらあ！！」

「うん…うん！やったね、マルちゃん！！」

審判つぱく居た鞠莉の宣言により、梨子&花丸ペアの勝利が決まってしまった。2人は抱き合つて喜び、涙を流していた。

「ふふっ…負けましたわ」

「そうだね、完敗だね…」

敗北し倒れているダイヤ&曜ペア。しかしその胸の内はなんだか清々しい。全力で向かっていったのだから後悔などないのだろう。彼女達にはパンツを手に入れる資格がある…：：：そう感じた2人は全てをあの2人に託すことに決めたのだ。

パンツを巡る戦いは最後まで諦めず、仲間との友情と自分達の努力を信じた者達の勝利によって幕を閉じた。

「な、何これ……?」

「さあ……?」

そしてその現場に鉢合わせてしまったお風呂上がりの千歌とルビイ。廊下は割れるは抉れているは鉄板刺さっているは、ダイヤと曜はムカつくくらい清々しい顔で寝転がっているは梨子と花丸は泣きながら抱き合っているは鞠莉は踊っているは、最早意味がわからない。驚異的頭痛が千歌とルビイを襲う。

その後、梨子、花丸、ダイヤ、曜、鞠莉は旅館の支配人からこっ酷く怒られ、結局パ
ンツは手に入れられなかったとき。めでたしめでたし。

「めでたくない(ずら)!!!!」